

林中原 I 遺跡 XII

長野原町埋蔵文化財調査報告
第50集

林中原 I 遺跡 XII

—個人専用住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

二〇一三年

2023

群馬県吾妻郡長野原町教育委員会

群馬県吾妻郡長野原町教育委員会

はやし なか はら いち い せき
林中原 I 遺跡 XII

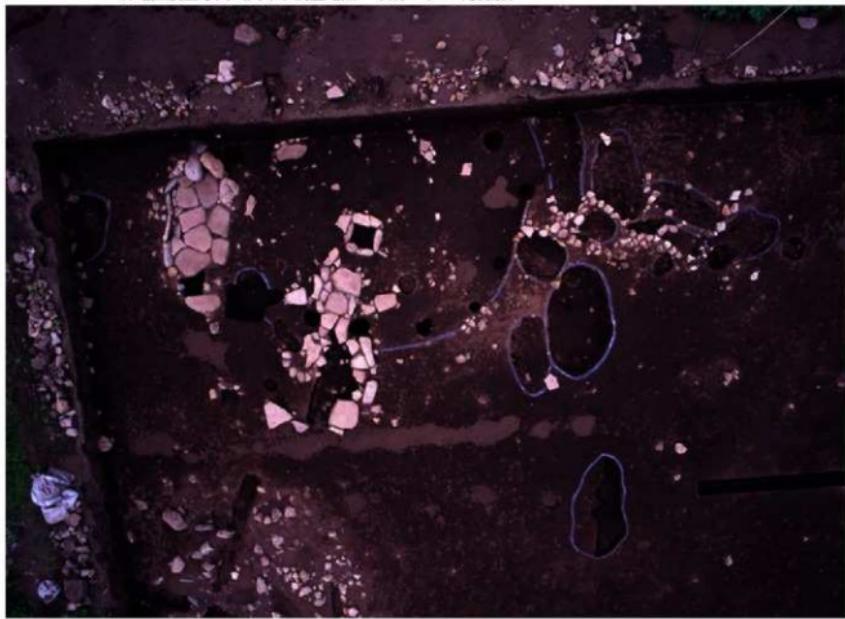
—個人専用住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2023

群馬県吾妻郡長野原町教育委員会



1. 林地区航空写真（矢印が調査地点 平成8年10月撮影） 国土交通省八ッ場ダム工事事務所提供



2. 柄鏡形敷石住居と配石遺構群（南真上から）

3. S01 出土福田類型注口土器 第13圖8：第13圖9：第14圖10



序 文

長野原町内には、縄文時代中期後半の拠点集落である長野原一本松遺跡・横壁中村遺跡や天明3年の浅間山の大爆発により発生した泥流被災状況を伝える東宮遺跡・小林家屋敷跡に代表されるように、多数の貴重な遺跡の存在が知られています。

教育委員会では、文化財保護事業の一環として、町の貴重な文化遺産である遺跡を保護するとともに、失われていく遺跡の記録保存に努めています。

林中原Ⅰ遺跡はこれまでの発掘調査で、縄文時代中期後半から後期前半の拠点集落や中近世の林城跡があることが知られています。今回報告する第12次調査は、個人専用住宅建設に伴う調査であります。調査面積は僅かでしたが、縄文時代後期前葉の住居跡と土坑・配石遺構・焼土が発見され、拠点集落の一様相を把握することができました。本書が町民の皆様をはじめ多くの方々に活用され、郷土長野原の歩んできた道のりを知る一助となれば幸いです。

最後に、調査にあたって各方面から多大なるご指導・ご協力をいただき厚く御礼申し上げます。

令和5年3月

長野原町教育委員会
教育長 小林敦子

例　　言

1. 本書は、群馬県吾妻郡長野原町大字林字中原に所在する林中原1遺跡（12次）の発掘調査報告書である。
2. 調査は個人専用住宅建設に伴う事前調査として、原因者の委託を受けた長野原町教育委員会が実施した。
3. 発掘調査から調査報告書作成に至るまでの調査事業費は、文化財補助事業として、国宝重要文化財等保存・活用事業費補助金、群馬県文化財保存活用事業費補助金、町費が充てられた。
4. 調査は発掘調査を平成19年4月17日から同年6月28日迄、整理調査及び報告書作成を平成20年4月1日から令和5年2月28日迄の期間実施した。
5. 本遺跡の出土遺物ならびに図面・写真は全て長野原町教育委員会が保管している。
6. 本書は富田孝彦が編集し、執筆は富田・向出治恵で分担した。各作業分担は以下の通りである。
　　編集：富田　　執筆：向出（第3章第6節、第5章第1節）・富田（第4章・付編を除く左記以外）
　　遺構・遺物写真撮影：富田・坂井・向出
　　遺物実測・トレース：富田・柿本・坂井・向出　　図版および写真図版作成：向出
7. 本書中の遺跡名は調査が數次にわたっている場合はそれを識別するために遺跡名の最後にロー マ数字を表記してある。同一遺跡内の別地点と解釈していただきたい。

例）林中原遺跡 XII （遺跡名）（第12次）

8. 調査において以下の項目の一部を委託した。
　　表土掘削・埋め戻し：東光建設株式会社
　　測　量：（株）測 研
　　出土土器実測：（株）歴史の杜
　　出土剥片石器実測・トレース：（株）歴史の杜
　　注口土器修復：（株）文化財ユニオン
　　樹種同定・放射性炭素年代測定：（株）パレオ・ラボ
9. 本書における石器の石質鑑定は飯島静男氏（群馬地質研究会）に依頼した。
10. 発掘調査、整理調査及び報告書作成にあたり、次の方々、団体から御指導・御協力を賜った。（五十音順敬称略）
　　秋田かな子・麻生敏隆・飯島静男・飯森康広・石田　真・小川卓也・小野和之・金子拓男・黒澤照弘・佐々木由香・佐藤雅一・菅谷通保・鈴木徳雄・閔　俊明・高林真人・千葉博之・土肥　孝・中沢　悟・福田貴之・藤巻幸男・向出博之・山口逸弘・吉田智哉
　　群馬県・群馬県教育委員会・（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

11. 調査組織は次の通りである。

平成19年4月～平成26年3月

　　調査組織 教育長　　黒岩文夫

　　教育課長　　樋口　正（～平成21年3月）

　　山口伸行（平成21年4月～平成22年3月）・市村　敏（平成22年4月～）

　　社会教育 GL　白石光男

　　〃 副 GL　中村　剛（平成19年4月～平成22年3月）

　　富田孝彦（平成22年4月～）

主　　任	富田孝彦（～平成22年3月）
調査参加者	市村丑松・市村勝美・市村宗一・市村春二・岡部加代子・小出庫雄（平成19年度） 柿本六美・佐々木忍・佐藤久美子・坂井春栄・向出治恵
平成26年4月～5月	
調査組織 教育長	黒岩文夫（～平成26年4月29日）
教育課長	市村 敏（平成26年4月30日～平成26年5月31日 教育長職務代行者兼務）
教育課補佐	白石光男
文化財係長	富田孝彦
調査参加者	柿本六美・坂井春栄・向出治恵
平成26年6月～平成27年3月	
調査組織 教育課長	矢野今朝治（平成26年6月1日～平成27年3月31日 教育長職務代行者兼務）
教育課補佐	白石光男
文化財係長	富田孝彦
調査参加者	柿本六美・坂井春栄・向出治恵
平成27年4月～令和5年3月	
調査組織 教育長	市村隆宏（～令和3年3月31日） 小林敦子（令和3年4月1日～）
教育課長	矢野今朝治（～平成30年3月31日） 佐藤 忍（平成30年4月1日～令和4年3月31日） 萩原喜隆（令和4年4月1日～）
教育課補佐	富田孝彦（文化財係長兼務 平成30年4月1日～ 文化財保護対策室長） 市川勇気（社会教育係兼務 ～平成30年12月31日） 細川剛史（地域おこし協力隊 平成29年4月1日～令和元年6月30日） 古澤勝幸（文化財専門員 令和2年4月1日～令和3年3月31日） (やんば天明泥流ミュージアム館長 令和3年4月1日～)
文化財係	田中秀行（学校給食係兼務令和2年4月1日～） 高田靖之（子ども子育て支援室兼務 ～令和3年3月31日） 高橋人夢（令和2年4月1日～）
調査参加者	柿本六美（～令和3年3月31日）・坂井春栄（～令和4年3月31日）・向出治恵 藤野麻子（令和元年8月1日～）・萩原一美（令和3年4月1日～） 篠原芳江（令和4年4月1日～）

凡　　例

1. 本書で使用した地図は1:2500「長野原都市計画図」(長野原町1994)、1:25000「長野原」(国土地理院1997)である。
2. 掛図の方位は磁北を示す。
3. 掛図の縮尺については下記の通りであり、各掛図中に示してある。

遺構：住居	・・・	1/60	土坑・配石・焼土	・・・	1/30				
遺物：	復元土器	・・・	1/4	土器片・礫石器類	・・・	1/3	石皿	・・・	1/5
石鑿・石錐・錢貨					・・・	1/1	石鑿・石錐以外の剥片石器類・土製品	・・・	1/2
4. 遺構の略号については以下の通りである。 SI：住居 SK：土坑 SS：配石遺構
5. 掛図に図示した遺物は、観察表にその内容を記してある。観察表における復元土器の法量は左側から器高、中央が口径、右側が底径を表し、計測数値は推定値を含む。() 内の数値は現存値、< >内の数値は復元値を表す。
6. 土器の色調に関しては、「新版標準土色帖1995年後期版」(編・著小山正忠・竹原秀雄、監修農林水産省農林水産技術会議事務局、色票監修財團法人日本色彩研究所)の色名を参考にした。観察表において外面／内面の順で記した。
7. 掛図中のスクリーントーン・記号は以下の通りである。

遺構・土層図



遺物



● 土器

△ 石器

1/8 展開図

繩文

※土器における欠損部に関しては点描で表現している。

断面塗りつぶしは須恵器・灰釉陶器・陶磁器を示している。

目 次

卷頭図版	
序 文	
例 言	
凡 例	
第1章 調査概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	1
第2章 遺跡の立地と環境	5
第1節 遺跡の位置	5
第2節 周辺の遺跡	5
第3節 既応の調査	15
第4節 基本層序	19
第3章 検出された遺構と遺物	25
第1節 概 要	25
第2節 竪穴住居跡	25
第3節 土 坑	40
第4節 配石遺構	56
第5節 焼土遺構	74
第6節 遺構外出土遺物	75
第4章 自然科学分析	107
第1節 出土炭化材の樹種同定	107
第2節 放射性炭素年代測定	109
第5章 調査の成果と課題	112
第1節 遺構・遺物の分布と遺構間接合について	112
第2節 「福田類型」注口土器について	116
付編 注口土器の修復工程	132
出土遺物観察表	
写真図版	
報告書抄録	

挿 図 目 次

第1図	道路周辺の河岸段丘面分布図 (1/35,000)	6
第2図	道路の位置と周辺の道路 (1/25,000)	7
第3図	林中原1道路埋立調査地点位置図 (1/2,500)	16
第4図	基本土層 (1/20)	19
第5図	林中原1道路埋立調査区全体図 (1/180)	24
第6図	SI01 実測図 (1/60)	26
第7図	SI01 掘り方実測図 (1/60)	27
第8図	SI01 考略実測図 (1/30)	27
第9図	SI01 遺物出土状況図1 <全体> (1/60)	28
第10図	SI01 遺物出土状況図2 <深鉢・浅鉢> (1/60)	29
第11図	SI01 遺物出土状況図3 <注口器> (1/60)	30
第12図	SI01 遺物出土状況図4 <石器> (1/60)	31
第13図	SI01 出土遺物実測図1 (1/4)	32
第14図	SI01 出土遺物実測図2 (1/4)	33
第15図	SI01 出土遺物実測図3 (1/4・1/3)	34
第16図	SI01 出土遺物実測図4 (1/3)	35
第17図	SI01 出土遺物実測図5 (1/1・1/2・1/3)	36
第18図	SI01 出土遺物分布図6 (1/3・1/4・1/2)	37
第19図	SI01 出土遺物分布図7 (1/5)	38
第20図	SI02 実測図 (1/30)	39
第21図	SI02 出土遺物実測図 (1/3)	39
第22図	SK01 実測図 (1/30)	40
第23図	SK01 出土遺物実測図 (1/3)	40
第24図	SK02 実測図 (1/30)	41
第25図	SK02 出土遺物実測図 (1/4・1/3)	41
第26図	SK02 出土遺物実測図 2 (1/3・1/4)	42
第27図	SK03 実測図 (1/30)	43
第28図	SK03 出土遺物実測図 (1/4)	43
第29図	SK04 実測図 (1/30)・出土遺物実測図 (1/4)	44
第30図	SK05 実測図 (1/30)・出土遺物実測図 (1/3)	44
第31図	SK06 実測図 (1/30)	45
第32図	SK07 実測図 (1/30)	45
第33図	SK07 出土遺物実測図 (1/4・1/3・1/1)	46
第34図	SK08 実測図 (1/30)	47
第35図	SK08 出土遺物実測図 (1/4・1/3)	47
第36図	SK09 実測図 (1/30)・出土遺物実測図 (1/3)	48
第37図	SK10 実測図 (1/30)	48
第38図	SK10 出土遺物実測図 (1/3)	49
第39図	SK11 実測図 (1/30)	49
第40図	SK11 出土遺物実測図 (1/4)	49
第41図	SK11 出土遺物実測図 2 (1/4・1/3)	50
第42図	SK12 実測図 (1/30)	50
第43図	SK12 出土遺物実測図 1 (1/4・1/3)	51
第44図	SK12 出土遺物実測図 2 (1/3)	52
第45図	SK13 実測図 (1/30)	52
第46図	SK13 出土遺物実測図 (1/4・1/3)	53
第47図	SK14 実測図 (1/30)	
出土遺物実測図1 (1/3・1/1)		53
第48図	SK14 出土遺物実測図 2 (1/3)	54
第49図	SK15 実測図 (1/30)	54
第50図	SK15 出土遺物実測図 (1/4・1/3・1/2)	55
第51図	SS01 実測図 (1/30)	56
第52図	SS01 下部道構実測図 (1/30)	57
第53図	SS01 出土遺物実測図 1 (1/4・1/3・1/2)	58
第54図	SS01 出土遺物実測図 2 (1/4・1/3)	59
第55図	SS02 実測図 (1/30)	59
第56図	SS02 出土遺物実測図 1 (1/4・1/3)	60
第57図	SS02 出土遺物実測図 2 (1/3)	61
第58図	SS03 実測図 (1/30)・ 出土遺物実測図 1 (1/4・1/3)	61
第59図	SS03 出土遺物実測図 2 (1/3・1/1)	62
第60図	SS04 実測図 (1/30)	62
第61図	SS04 出土遺物実測図 1 (1/4)	63
第62図	SS04 出土遺物実測図 2 (1/4・1/3)	64
第63図	SS05 実測図 (1/30)・出土遺物実測図 (1/3)	65
第64図	SS06 実測図 (1/30)	65
第65図	SS06 出土遺物実測図 (1/4・1/3)	66
第66図	SS07 実測図 (1/30)	67
第67図	SS07 出土遺物実測図 (1/4・1/3)	67
第68図	SS08 実測図 (1/30)	68
第69図	SS08 出土遺物実測図 1 (1/4)	68
第70図	SS08 出土遺物実測図 2 (1/3・1/2)	69
第71図	SS09 実測図 (1/30)	69
第72図	SS09 出土遺物実測図 1 (1/4・1/3・1/2)	70
第73図	SS09 出土遺物実測図 2 (1/3・1/4)	71
第74図	SS10 実測図 (1/30)	71
第75図	SS10 出土遺物実測図 1 (1/4・1/3)	72
第76図	SS10 出土遺物実測図 2 (1/4)	73
第77図	焼上道構出土遺物実測図 (1/3・1/1)	74
第78図	道構外道構出土遺物実測図 1 (1/3・1/4)	78
第79図	道構外道構出土遺物実測図 2 (1/4・1/3)	79
第80図	道構外道構出土遺物実測図 3 (1/4)	80
第81図	道構外道構出土遺物実測図 (1/3)	81
第82図	道構外道構出土遺物実測図 5 (1/3・1/4)	82
第83図	道構外道構出土遺物実測図 6 (1/3)	83
第84図	道構外道構出土遺物実測図 7 (1/3・1/4)	84
第85図	道構外道構出土遺物実測図 (1/4・1/3)	85
第86図	道構外道構出土遺物実測図 9 (1/4)	86
第87図	道構外道構出土遺物実測図 10 (1/4)	87
第88図	道構外道構出土遺物実測図 11 (1/3)	88
第89図	道構外道構出土遺物実測図 12 (1/3)	89
第90図	道構外道構出土遺物実測図 13 (1/3・1/4)	90
第91図	道構外道構出土遺物実測図 14 (1/3・1/4)	91
第92図	道構外道構出土遺物実測図 15 (1/4)	92

第 93 図 道構外道構出土遺物実測図 16 (1/4・1/3)	93
第 94 図 道構外道構出土遺物実測図 17 (1/4・1/3・1/2)	94
第 95 図 道構外道構出土遺物実測図 18 (1/2・1/1)	95
第 96 図 道構外道構出土遺物実測図 19 (1/1)	96
第 97 図 道構外道構出土遺物実測図 20 (1/1)	97
第 98 図 道構外道構出土遺物実測図 21 (1/2)	98
第 99 図 道構外道構出土遺物実測図 22 (1/2・1/3)	99
第 100 図 道構外道構出土遺物実測図 23 (1/3・1/2)	100
第 101 図 道構外道構出土遺物実測図 24 (1/2・1/3)	101
第 102 図 道構外道構出土遺物実測図 25 (1/3・1/5)	102
第 103 図 道構外道構出土遺物実測図 26 (1/4)	103
第 104 図 道構外道構出土遺物実測図 27 (1/4)	104
第 105 図 道構外道構出土遺物実測図 28 (1/4・1/3)	105
第 106 図 道構外道構出土遺物実測図 29 (1/2・1/1)	106
第 107 図 出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真	108
第 108 図 縮年較正結果	110
第 109 図 林中原 I 遺跡周出土遺物分布図 (1/200)	113
第 110 図 時期別・遺物出土状況図	114
第 111 図 林中原 I 遺跡分布図 (1/500)	115
第 112 図 関連資料 (1/6)	119
第 113 図 吾妻川中流域における「福田類型」印口土器 出土標本位置図 (1/100,000)	123
第 114 図 道路・道構ごとの割合	123
第 115 図 1. 林中原 I 遺跡①	125
第 116 図 1. 林中原 I 遺跡②・2. 上原 IV 遺跡①	126
第 117 図 2. 上原 IV 遺跡②・3. 東宮遺跡①	127
第 118 図 3. 東宮遺跡③・4. 石川原遺跡①	128
第 119 図 4. 石川原遺跡②・5. 横壁中村遺跡①	129
第 120 図 5. 横壁中村道路②	130
第 121 図 6. 長野原一本松道路・7. 坂井道路 8. 古屋敷道路	131
第 122 図 印口土器修復工程 1	132
第 123 図 印口土器修復工程 2	133
第 124 図 印口土器修復工程 3	134

挿 表 目 次

第 1 表 周辺の遺跡	8
第 2 表 林中原 I 遺跡既往調査一覧	17
第 3 表 SI01 柱穴計測表	25
第 4 表 出土炭化材の樹種同定結果	107
第 5 表 测定試料および処理	110
第 6 表 放射性炭素年代測定および縮年較正の結果	110
第 7 表 道構間接合状況	115
第 8 表 吾妻川中流域における「福田類型」印口土器 出土遺跡一覧	124
第 9 表 林中原 I 遺跡周出土遺物観察表	135

図 版 目 次

P L 1	1. 調査区遠景① (東から)
P L 2	1. 調査区遠景② (南から)
P L 3	1. 調査区全景 (真上仰から) 2. 調査区北側近景 (東から) 3. 調査区西側近景 (南東から) 4. 調査区西側近景 (南から) 5. 調査区北東隅近景 (南西から)
P L 4	1. SI01 (南西から) 2. SI01 南ベルト (南東から) 3. SI01 北ベルト (南東から) 4. SI01 西ベルト (南西から) 5. SI01 東ベルト (南西から)
P L 5	1. SI01 振り方 (南西から) 2. SI01 振り方南ベルト (南東から) 3. SI01 振り方北ベルト (南東から) 4. SI01 振り方西ベルト (南西から) 5. SI01 振り方東ベルト (南西から)
P L 6	1. SI01 仰跡 (南東から) 2. SI01 仰跡半截状況 (南東から) 3. SI01 遺物出土状況 <第 13 図 8> 4. SI01 遺物出土状況 <第 13 図 1・第 15 図 17 > (南から)
P L 7	5. SI01 遺物出土状況 <第 15 図 11 > 6. SI01 遺物出土状況 <第 17 図 46 > 7. SI02 (南から) 8. SI02 仰跡 (南から)
P L 8	1. SI02 仰跡半截状況 (南から) 2. SI02 仰跡掘り方 (南から) 3. SK01 (東から) 4. SK02 ① (南から) 5. SK02 ② (北から) 6. SK02 半截状況 (南から) 7. SK03 (南から) 8. SK03 检出状況 (南から)
P L 9	1. SK03 半截状況 (南から) 2. SK03 检出状況 <第 28 図 1 > 検設状況 (南から) 3. SK04・06 (東から) 4. SK04 (北から) 5. SK05 (東から) 6. SK05 半截状況 (東から) 7. SK06 (北から) 8. SK07 (南から)

2. SK08 (南から)
 3. SK08 半截状況 (東から)
 4. SK09 (南東から)
 5. SK09 半截状況 (南東から)
 6. SK10 (東から)
 7. SK10 半截状況 (東から)
 8. SK11 (南東から)
- P L 10 1. SK11 半截状況 (南東から)
 2. SK12 (東から)
 3. SK12 半截状況 (東から)
 4. SK13 (南東から)
 5. SK13 半截状況 (南東から)
 6. SK14 (南東から)
 7. SK14 半截状況 (南東から)
 8. SK15 (南から)
- P L 11 1. SK15 壊壊<第 50 図 1>埋設状況① (南から)
 2. SK15 壊壊<第 50 図 1>埋設状況② (南から)
 3. SK15 半截状況 (南から)
 4. SS01 (南から)
- P L 12 1. SS01 條出状況 (南東から)
 2. SS01 上部遺構半截状況 (東から)
 3. SS01 下部遺構條出状況 (南から)
 4. SS01 下部遺構東西断ち割り状況 (南から)
 5. SS01 下部遺構南北側断ち割り状況 (東から)
 6. SS01 下部遺構北側断ち割り状況 (東から)
 7. SS01 下部遺構 (南から)
 8. SS01 下部遺構半截状況 (東から)
- P L 13 1. SS01 遺物出土状況<第 53 図 1>
 2. SS02 (南から)
 3. SS02 斷ち割り状況 (西から)
 4. SS03 (南から)
 5. SS03 断ち割り状況 (南から)
 6. SS04 (北から)
 7. SS04 断ち割り状況 (北から)
 8. SS04 遺物出土状況<第 62 図 10>
- P L 14 1. SS02 ~ SS10 條出状況 (南から)
 2. SS02 ~ SS10 條出状況 (南から)
- P L 15 1. SS05 (南から)
 2. SS05 断ち割り状況 (南から)
 3. SS06 (南東から)
 4. SS06 断ち割り状況 (南西から)
 5. SS06 遺物出土状況<第 65 図 1>
 6. SS07 (南東から)
 7. SS07 断ち割り状況 (西から)
 8. SS08 (南西から)
- P L 16 1. SS08 ~ SS10 條出状況 (南から)
 2. SS09 (南から)
 3. SS10 (南から)
 4. SS10 遺物出土状況<全体> (南から)
 5. SS10 遺物出土状況<第 28 図 2>
- P L 17 1. 谷部セクション (南から)
 2. 調査区西側集石 (南東から)
 3. 調査区南側遺物出土状況 (南から)
 4. 道構外遺物出土状況<第 78 図 6>
 5. 道構外遺物出土状況<第 87 図 83 >
6. 道構外遺物出土状況<第 85 図 70 他>
 7. 道構外遺物出土状況<第 85 図 64>
 8. 道構外遺物出土状況<第 93 図 143>
- P L 18 1. 道構外遺物出土状況<第 86 図 78>
 2. 道構外遺物出土状況<第 86 図 78 他>
 3. 道構外遺物出土状況<第 102 図 270>
 4. 道構外遺物出土状況<第 102 図 271>
 5. SS01 遺物出土状況<第 54 図 21>
 6. 道構外遺物出土状況<第 106 図 288>
 7. 道構外遺物出土状況<第 105 図 282>
 8. 道構外遺物出土状況<第 105 図 283>
- P L 19 1. 道構外遺物出土状況<第 106 図 290>
 2. 道構外遺物出土状況<第 106 図 291>
 3. 道構外遺物出土状況<第 106 図 292>
 4. 調査風景① (東から)
 5. 調査風景② (南東から)
 6. 調査風景③ (東から)
 7. 調査風景④ (東から)
 8. 調査風景⑤ (東から)
- P L 20 S01 出土遺物①
 P L 21 S01 出土遺物②
 P L 22 S01 出土遺物③
 P L 23 S01 出土遺物④
 P L 24 S01 出土遺物⑤
 P L 25 S02・SK01・SK02 出土遺物
 P L 26 SK03 ~ SK08 ①出土遺物
 P L 27 SK08 ②~ SK12 ①出土遺物
 P L 28 SK12 ②・SK15 ①出土遺物
 P L 29 SK15 ②・SS01 出土遺物
 P L 30 SS02・SS03 出土遺物
 P L 31 SS04 出土遺物
 P L 32 SS05 ~ SS07 出土遺物
 P L 33 SS08・SS09 ①出土遺物
 P L 34 SS09 ②・SS10 出土遺物
 P L 35 2 ~ 4 号焼土・道構外③出土遺物
 P L 36 道構外出土遺物②
 P L 37 道構外出土遺物③
 P L 38 道構外出土遺物④
 P L 39 道構外出土遺物⑤
 P L 40 道構外出土遺物⑥
 P L 41 道構外出土遺物⑦
 P L 42 道構外出土遺物⑧
 P L 43 道構外出土遺物⑨
 P L 44 道構外出土遺物⑩
 P L 45 道構外出土遺物⑪
 P L 46 道構外出土遺物⑫
 P L 47 道構外出土遺物⑬
 P L 48 道構外出土遺物⑭
 P L 49 道構外出土遺物⑮
 P L 50 道構外出土遺物⑯
 P L 51 道構外出土遺物⑰

第1章 調査概要

第1節 調査に至る経緯

平成19年3月上旬に施主より個人専用住宅建設の計画が示され、埋蔵文化財の取り扱いについて、長野原町教育委員会教育課社会教育グループに照会があった。対象地は周知の包蔵地「林中原Ⅰ遺跡（№45）」の範囲に含まれていることから試掘確認調査の必要がある旨を説明し、調査実施で合意を得た。文化財保護法第93条第1項の規定により、同年3月14日付けで施主より町教育委員会へ関係書類（「発掘届」・「開発に伴う文化財調査願書」）が提出された。同年4月11日に町教育委員会文化財担当の立会いのもと、対象地内の住宅建設予定範囲に試掘坑（トレーナー）を設定して、遺構の有無および土層の堆積状況の確認を行った。その結果、表土下60～70cmで多量の縄文土器と石器を伴う縄文時代後期の敷石住居および配石遺構が検出されたので、造成前に発掘調査（記録保存）する必要があると判断し、その旨を開発事業主である施主に伝えた。協議の結果、町道林線の拡幅に伴う住宅移転であり、北側から南側への緩斜面地の南側を基準として北側を削平する計画となっていたことから工事計画の変更が困難であるため、継続して発掘調査を実施することになった。5月9日付け長教社第72号で町教育委員会を経由して施主より群馬県教育委員会教育長へ「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。

第2節 調査の方法と経過

1. 発掘調査

（1）表土除去

表土除去は重機（バックフォー）を使用して行った。確認調査で調査区北側は表土から60cm、南側では70cm程度で遺物が出土することが判明していたので、そのことを念頭に表土から遺構確認面まで少しづつ掘り下げていった。遺物の出土が確認されるまでを重機で、それ以下は人力で除去した。重機のバケットの爪に鉄板を装着して遺構を傷つけないように配慮した。

（2）遺構確認

遺構確認は上述の表土除去後に人力で行った。土坑等は確認面での覆土の識別に努め、平面形を確定していく。確認面が黒色土中ということもあり作業は困難な側面もあった。

（3）遺構発掘及び遺物の取り上げ

遺構の発掘作業は、遺構の平面形を確定した上で土層観察用のベルトを設定し、遺構内の覆土の除去に着手した。住居跡の場合は長軸方向とその中心から長軸に対して直交方向に十字にベルトを設定し、土坑・配石遺構の場合は長軸に沿って半裁して土層の観察を行った。

遺物の取り上げに関しては、単独と思われる破片は上層・下層・床面直上ごとに、個体もしくは遺物の集中している箇所は出土位置図（ドット図）を作成の上、取り上げ作業を行った。遺物出土位置図は1/10のスケールで作成し、標高値の記録を一点ずつ行った。

（4）実測図の作成及び遺構の写真撮影

実測図は土層堆積状況図、遺物出土位置図及び完掘状況遺構平面図を作成した。土層堆積状況図は遺物出土位置図と同様に1/20のスケールで作成した。完掘状況遺構平面図は光波測距儀を用いて行った。完掘遺構の変化点を三次元記録し、その場でパソコン・コンピューターにより現地での詳細な観察の上で結線し作成した。また、土層堆積状況図及び遺物出土状況（位置）図のポイントの位置も完掘状況遺構平面図作成時に記録した。測定したデータは公共座標値に変換後、加工・編集を行いCD-R等に保管した。

遺構の記録写真は土層断面、遺物出土状況、完掘状況の順で行った。カメラは一眼レフを用い、モノクロとカラースライドの2種類のフィルムを使用した。フィルムサイズはいずれも35mmである。またデジタルカメラも併用して撮影した。

2. 自然科学分析

遺跡の性格や内容をより具現化するために発掘調査の成果に基づき、自然科学的手法を用いて以下の2項目を実施した。

（1）出土炭化材樹種同定

柄鏡形敷石住居のSI01、土器埋設土坑のSK15、調査区中央の包含層からそれぞれ炭化材が出土している。住居で使用されていた建築部材や燃料材を含む当時の木材利用の樹種を同定することを目的とする。

（2）放射性炭素年代測定

樹種同定した炭化材を加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を実施した。これにより住居内で使用された土器群や埋設された土器の相対編年と算出された暦年代との関係を確認することを目的とする。

3. 調査経過

（1）発掘調査

発掘調査は平成19年4月17日から同年6月28日にわたって実施された。

- 4月11日 表土掘削1/3終了。縄文後期前葉塙之内式。ビニール袋6袋分。蜂の巣石。
- 4月12日 表土掘削1/2終了。縄文後期前葉塙之内式。調査区南側は中期後半。
- 4月13日 表土掘削3/4終了。調査区西側抜張。
- 4月16日 表土掘削4/5終了。調査区西側抜張。明日は雨天のため中止。
- 4月18日 表土掘削90%終了。調査区北側は敷石住居3軒くらいか。
- 4月19日 表土掘削95%終了。縄文後期前葉塙之内式。調査区南側は中期後半。
- 4月20日 表土掘削終了。縄文後期前葉塙之内式。調査区南側は中期後半。調査区北側は敷石住居・配石遺構か。南東隅を深掘りしたが地山確認できず。谷地部か。
- 4月23日 配石遺構群。畑耕作痕の除去。
- 4月24日 配石遺構群。畑耕作痕の除去。遺物ドット上げ（№1～500）、掘り下げ。県文化課（右島氏・松田氏・田村氏）来跡。
- 4月25日 調査区北側配石遺構群掘り下げ、遺構精査。
- 4月26日 調査区北側配石遺構群掘り下げ、遺構精査。
- 4月27日 調査区北側配石遺構群掘り下げ、遺構精査。遺物ドット上げ（№501～947）。北側西半分平面図作成。
- 5月1日 調査区北側写真清掃。雨天のため午前中で終了。

- 5月 2日 調査区北側写真清掃。写真撮影。
- 5月 7日 調査区北側遺物上げ（№948～1337）。平面図作成。調査区中央掘り下げ。午後、林宮原遺跡の立会調査。
- 5月 8日 調査区北側、調査区中央西側掘り下げ。捲乱除去。事業団（諸田氏）来跡。
- 5月 9日 調査区中央西半分写真清掃・平面図作成。調査区南西側掘り下げ。事業団（山口氏・松村氏）来跡。
- 5月10日 調査区中央西半分写真清掃・平面図作成。調査区南西側・中央東側掘り下げ。雷雨のため3時で終了。
- 5月11日 調査区南西側・中央東側掘り下げ。遺物上げ（№1338～1771）。事業団（藤巻氏）来跡。
- 5月14日 調査区南西側・中央東側掘り下げ。遺物上げ（№1772～2009）。調査区北側西部・中央、中央西側掘り下げ。
- 5月15日 調査区北側西部・中央、中央西側掘り下げ。写真清掃。
- 5月16日 調査区北側西部・中央、中央西側掘り下げ。写真清掃・写真撮影。遺物上げ（№2010～2372）。事業団（藤巻氏・石田氏）来跡。
- 5月18日 調査区北側中央サブトレ。SI01掘り下げ。配石1（SS01）検出。
- 5月21日 SI01掘り下げ。配石1（SS01）半截、セクション写真撮影。調査区北側中央（SI02？）掘り下げ。
- 5月22日 SI01セクション図作成。配石1（SS01）セクション図作成。平面図は途中。遺物上げ（№2373～2438）。調査区北側中央（SI02？）掘り下げ。
- 5月23日 SI01平面図作成、ベルト除去。配石1（SS01）完掘、写真清掃。平面図作成は明日。調査区北側中央（SI02？）ab写真清掃、写真・遺物上げ（№2439～2537）調査区北側中央（SI02？）cd掘り下げ、住居ではなく配石遺構群であることが判明。SK01完掘写真、平面図・セクション図作成。
- 5月24日 SI01炉半截、写真撮影。配石1（SS01）完掘写真撮影、平面図・エレベーション図作成。調査区北側中央掘り下げ、遺物上げ（№2538～2661）。調査区北側東部掘り下げ。事業団（藤巻氏・黒澤氏）来跡。
- 5月28日 SI01柱穴精査・掘り下げ、炉セクション図作成。調査区北側中央・東部掘り下げ、疊平面図追加。調査区北側 central a 配石遺構群写真撮影。
- 5月29日 SI01柱穴精査・掘り下げ。調査区北側中央・東部掘り下げ。午前、応桑小社会科学習（体験発掘）。
- 5月30日 SI01柱穴精査・掘り下げ。調査区北側中央 abcd・東部 abcd・中央東部 ab 掘り下げ、中央西部疊群断ち割り、遺物上げ（～№2780）。（株）ラング（横山氏）来跡。
- 5月31日 SI01柱穴精査・掘り下げ。調査区北側中央 abcd・東部 abcd・中央東部 ab 掘り下げ。中央西部疊群断ち割り。SK02半截、配石遺構群半截。
- 6月 1日 SI01炉跡完掘、写真撮影、柄部周辺精査。配石1（SS01）南側半截、調査区北側中央 ab、配石2（SS02）～配石7（SS07）セクション写真撮影。東部 cd、SK02半截、セクション写真撮影。SK03埋蔵確認。
- 6月 4日 調査区中央・南側掘り下げ。
- 6月 5日 調査区中央・南側掘り下げ。SK04掘り下げ（平安陥し穴か）。SI01炉跡・柱穴平面図作成。SK02セクション図作成。SK03平面図作成。配石2（SS02）～配石5（SS05）セクション図作成。
- 6月 6日 調査区南側掘り下げ。SK04・05セクション写真撮影・平面図作成。SK06半截・セクション写真撮影。SK03完掘写真撮影、平面図作成。配石7（SS07）セクション図作成。
- 6月 7日 調査区南側中央・東部遺物出土状況写真撮影。SK03半截・写真撮影。SK05完掘途中。配石2（SS07）～配石5（SS05）・配石7（SS07）完掘・写真撮影。明日遺物上げから。事業団（諸田氏他1名・藤巻氏・中東氏・田村氏）来跡。
- 6月 8日 調査区遺物上げ（№2781～3119）。SI01柱穴平面図付け足し。SK05完掘写真撮影。雨天のため午前中のみ。
- 6月11日 調査区ベルト外し。調査区北側中央・東部・中央中央・東部・南側中央掘り下げ。SK02完掘。
- 6月12日 調査区北側中央・東部・中央中央・南側中央掘り下げ。SK02完掘写真撮影・平面図作成。SK03セクション図作成。SK06セクション図・平面図作成。配石2（SS02）～配石7（SS07）平面図作成。配石6（SS06）セクション図作成。配石8・9（SS08・09）半截。遺物上げ（№3120～3176）。
- 6月13日 調査区中央中央・南側中央掘り下げ。配石6（SS06）セクション写真撮影・完掘。配石8（SS08）～配石10（SS10）半截・セクション写真撮影。調査区中央中央焼土部分サブトレ。
- 6月14日 調査区南側西部・南側中央ベルト外し、掘り下げ。南側東部掘り下げ。雨天のため午前中で終了。

- 6月15日 調査区南側拡張部・南側西部・南側中央・南側東部掘り下げ。SK03セクション写真撮影、セクション図作成、完掘写真撮影、平面図作成。配石8 (SS08)～配石10 (SS10) セクション図作成・完掘写真撮影、平面図作成。遺物上げ (No3177～3204)。事業団（巾所長）、県水源地域（加藤氏他1名）来跡。
- 6月18日 調査区北側東部・中央東部・南側中央・南側東部掘り下げ。配石10 (SS10) 完掘写真撮影。焼土半截。各地部・南側中央・東部サブトレ途中。6月20日午後に空撮予定。
- 6月19日 焼土坑 (SK07・08) 半截写真撮影。谷地部・南側中央・東部サブトレ。全体清掃（北側遺構群まで）。明日午後に空撮予定。
- 6月20日 全体清掃。ラジヘリによる空撮。焼土坑 (SK07・08) セクション図作成。調査区サブトレ位置追加。配石1 (SS01)・SI01セクション図に石断面付け足し。調査区南側掘り下げ。（株）渕潤（水谷氏他2名）来跡。
- 6月21日 焼土坑 (SK08) 完掘写真撮影。SK09・10半截・写真撮影。配石1 (SS01)・SI01遺物上げ、掘り方途中。
- 6月25日 SK07完掘写真撮影。SK09・10完掘写真撮影。SK11・12半截写真撮影。SK13半截途中。配石1 (SS01)・SI01掘り方途中。谷部掘り下げ。
- 6月26日 SK07完掘写真撮影。SK09・10平面図作成。SK11・12セクション図作成、写真撮影、平面図作成、完掘。SK13・14セクション図作成・写真撮影。配石1 (SS01) 掘り方完掘写真撮影、平面図作成、下部遺構掘り下げ。SI01掘り方途中、セクション図作成。遺物上げ (No3205～3228)。事業団（藤巻氏）来跡。
- 6月27日 SK13・14完掘写真撮影。SK09・10平面図作成。配石1 (SS01) 下部遺構セクション写真撮影、図面作成。SI01掘り方セクション写真撮影・ベルト除去。配石11 (SS11) セクション図作成、写真撮影、平面図作成。SK15（埋甕）半截途中。調査区南側中央・東部掘り下げ。
- 6月28日 SK13・14完掘写真撮影。SK09・10平面図作成。配石1 (SS01) 下部遺構完掘写真撮影、平面図作成。SI01掘り方完掘写真撮影・平面図作成。配石11 (SS11 : SI02炉か) 完掘写真撮影。SK15（埋甕）セクション図作成、完掘写真撮影、平面図作成。調査区南側中央・東部掘り下げ。焼土坑群写真撮影。調査区コンタ追加。撤収。

（2）整理調査・報告書作成

整理調査は平成20年4月1日～令和2年2月28日にわたって実施された。発掘調査によって得られた遺物はテンパコで60箱、現場で作成した図面類は73枚であった。整理調査は担当の他に作業員4名という体制であった。作業は複数遺跡の整理と併行して行われた。

遺物洗浄・注記作業は併行して進められ、平成20年4月1日～6月11日、その後は発掘調査時の雨天日を利用して平成21年1月7日までの間実施した。

遺物の接合作業は最小限のものを注記作業と併行して実施し、分類・カウント作業を平成21年1月9日～8月23日まで、Qテックスによる復元作業を平成25年12月24日～平成26年3月20日までの間実施した。

遺物の実測・トレスは平成26年8月1日～12月27日、平成30年5月10日～5月24日まで大きく2回に分けて実施し、追加実測やトレス修正は令和3年3月10日から調査や事業の合間に実施した。

遺物写真撮影・遺物実測図版のデジタル編集は令和3年3月24日～令和4年1月9日までの間実施した。

遺構図版・写真図版のデジタル編集は平成25年4月9日～4月26日、平成30年4月6日～5月31日、令和4年6月10日～7月7日まで、併せて執筆作業は令和4年7月下旬～令和5年1月下旬にかけてを行い、併せて保管用に資料・遺物の整理をして2月28日に全ての作業を完結した。

注口土器の修復業務は平成22年8月12日～10月20日まで（株）文化財ユニオンに委託して実施した。修復した2個体は同年11月3日の長野原町文化祭にて展示した。

剥片石器類・打製石器類等の実測・トレス業務は平成23年2月1日～3月25日まで、復元土器の実測業務は平成30年12月10日～平成31年3月8日まで（株）歴史の杜に委託して実施した。

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 遺跡の位置

林中原I遺跡が所在する長野原町は群馬県北西部にある吾妻郡域の南西隅に位置し、東は吾妻郡東吾妻町(旧吾妻町)・高崎市倉渕町(旧倉渕村)、北は吾妻郡草津町・同郡中之条町(旧六合村)、西は吾妻郡嬬恋村と接し、南は浅間高原を経て長野県北佐久郡軽井沢町と県境をなす。本町は高間・白根の両山系と大洞山系とに挟まれた吾妻川流域地帯の北部と、高原地帯の南部とに大別され、高原地帯を除きほとんどが河川・溪沢に向かう山岳傾斜地帯である。

町の北西には草津白根山(標高2,170m)、南西には浅間山(標高2,568m)が位置する。町域も北部は高間山(標高1,341.7m)や王城山(標高1,123.2m)、吾妻川より南に丸岩(標高1,124m)や菅峰(標高1,473.5m)など、南部は南東から南にかけて浅間隠山(標高1,756.7m)、鷹巣山(標高1,431.4m)、鼻曲山(標高1,655m)など、周囲を1,000m~1,800m級の険しい山々で囲まれている。

長野原町の河川は長野県境の鳥居峠付近(標高1,362m)を水源とする吾妻川が東流し、それに万座川や熊川・白砂川など主に両岸の山地から発する諸支流が注ぎ、渋川市街地付近で利根川右岸に合流する。町域は吾妻川の中流にあたりが、かつて酸性を帯びた水質をもつ支流の流入により、中流より下流にかけて魚類の生息に適さない状態であった。しかし石灰投による中和処理が開始されて以来、水質の改善が行われている。

吾妻川两岸は大字長野原付近でやや幅が広く、河岸段丘が発達する(第1図)。この段丘面は最上位・上位・中位・下位の4段階で形成されている。これら段丘面とその上位の丘陵上に縄文時代~平安時代にかけての遺跡が多く見つかっており、現在でも住宅地や田畠として利用されている。これらの段丘は約21,000年前に浅間山から噴出した応桑泥流堆積物が侵食されて形成されており、その上を覆っている関東ローム層中には約11,000年前に噴出した浅間・草津黄色軽石層(As-YPk)が堆積しているのが認められる。現在の吾妻川からの比高差は最上位段丘面で約80~90m、上位段丘で約60~65m、中位段丘で30m前後、下位段丘で約10~15mを測る。大字川原湯から東では川幅が狭まり峡谷をなし、吾妻渓谷を形成している。

長野原町が含まれる浅間山周辺地域は、気候的には太平洋側の気候区に入るが、高地であることから寒冷な中央高地型の気候がみられる。しかし吾妻川沿いの標高600mの谷底から、最高点の浅間隠山の1,756mまでと起伏に富んでおり、地理的条件も変化が大きいため、地区ごとに気候・気象に変化が見られる。降水量も地形により変化するが、年間降水量は関東平野各地域とほぼ等しい。降水量の年変化は日本海側と異なり冬季に少なく夏季に多い。

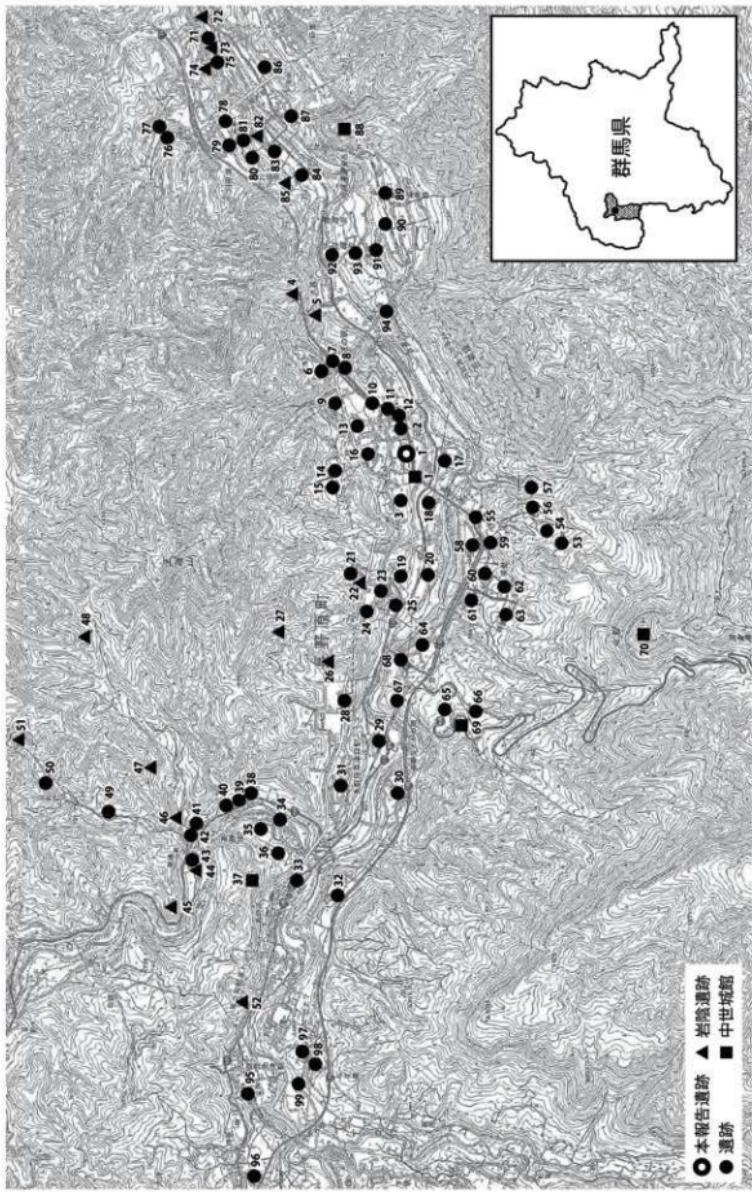
今回報告する林中原I遺跡は町域北部の吾妻川流域帶にあり、吾妻川左岸の上位段丘上に立地している。調査地点の標高は628mである。

第2節 周辺の遺跡

長野原町における遺跡の調査は、昭和29年に行われた勘場木遺跡の調査を始めとして、昭和38・47・48年には群馬県による分布調査が行われ、昭和53年には石烟I岩陰遺跡が発掘調査された。本町における遺跡分布状況は昭和48年に群馬県教育委員会刊行の『群馬県遺跡地図』に依っていたが詳細な遺跡の分布の把握は不十分であった。その後、町教育委員会は県教育委員会文化財保護課の指導のもと、昭和62年度から3ヶ

第1図 運勢周辺の河岸段丘面分布図 (1/35,000)





第2図 遺跡の位置と周辺の道路 (1/25,000)

第1表 周辺の遺跡（遺跡番号は第2図と対応）

No.	遺跡名	町名	開拓年	調査年	調査内容	記述
1	林中原Ⅰ遺跡	45 集落跡	鶴文・平生・中世・近世	本遺跡、昭和 37 年度（群大）、平成 14～22・30・31 年度（町）、平成 16～19・21～22・29 年度調査（事）。鶴文中期後半～後期の柱立建物群。鶴文前期後半住居・土坑、中世の「林中原」、駒穴状構造、区画溝、柱立柱建物群。	文献2,12,14,18～22,21,31,143,185,188～190,197,213,223,224,272,273 田中原Ⅰ遺跡	
2	林中原Ⅱ遺跡	46 集落跡	鶴文・平生・平安・近世	平成 16～20・21～22・29 年度調査（事）。鶴文中期後半～中期前半、柱立柱建物群。再び墓場、中期前半柱立跡 4 輪。中世柱立柱建物群。	文献2,12～17,20,22,23,31,156,157,160,163,186,190,191,215,231 田中原Ⅱ遺跡	
3	林宮原遺跡	48 集落跡	鶴文・古墳・平安・中世	平成 14～16・18～20・24 年度調査（事）。鶴文 24・27 年度調査（事）。鶴文中期後半～後期柱立跡。古墳後期丘陵頂 1 輪。平安住居跡、土坑、中世柱立柱建物群。	文献2,12,14～16,18,19,21,24,146,191,194,197「荒道跡地図」 No.3127「宮原遺跡（神社前遺跡）」	
4	久森沢Ⅰ遺跡群	53 その他	不明	平陰遺跡、岩陰 3 ヵ所にわたる。	文献2	
5	久森沢Ⅱ遺跡群	54 その他	不明	平陰遺跡。	文献2	
6	立馬Ⅰ遺跡	37 集落跡	鶴文・古墳・平安・中世	平成 13・14・17 年度調査（事）。鶴文早期平丘跡、包囲柱遺物等。斬削跡、柱立柱建物、平安住居跡、廻転柱、中期前半柱立跡、覆石遺跡。平安住居跡のほか、鶴文～平安の廻転柱跡。	文献2,116,186	
7	立馬Ⅱ遺跡	213 集落跡	鶴文・古墳・平安	平成 14 年度調査（事）。鶴文中期後半～後平丘跡 11 輪。鶴文早期南北廻転柱遺物群。鶴文・平安隣接 6 处多數。	文献113,211	
8	立馬Ⅲ遺跡	215 集落跡	鶴文・平安	平成 19 年度調査（事）。鶴文早期を中心とする集落跡。鶴文初期 5 輪、鶴文中期南北廻転柱構造 2 基のほか集石、土坑など。平安住居跡、廻転穴多數。中世の土坑、溝。	文献128,188,213	
9	花畠遺跡	205 集落跡	鶴文・平安	平成 10 年～12 年度調査（事）。平安住居跡の他、廻転穴多數検出。	文献2,107	
10	東原Ⅰ遺跡	38 敷布地	鶴文・平安・近世	平成 17・18・24・26 年度調査（事）。鶴文 20 年度調査（事）。鶴文中期後半～中期前半の廻転 6 輪、土坑、平安住居跡。	文献2,17,18,28,32,135,189	
11	東原Ⅱ遺跡	39 敷布地	鶴文	平成 20・30 年度調査（事）。鶴文後期土器片、廻転石片出土。	文献2,135,189,224	
12	東原Ⅲ遺跡	40 敷布地	平安・近世	平成 15・18 年度調査（事）。平成 20・21 年度調査（事）。鶴文早期～後期の住居跡、廻転柱、中期前半柱立跡、ビット被付。	文献2,14,18,135,189,190	
13	上原Ⅰ遺跡	41 集落跡	鶴文・平安・近世	平成 18・23・24 年度調査（事）。平成 9・24 年度調査（事）。鶴文早期～中期前半柱立跡。中期前半～中期後半柱立跡。廻転柱、中期前半柱立跡。廻転柱の廻転跡、農具、石斧、鉄鋤頭。	文献2,18,26,31,107,114,161,191	
14	上原Ⅱ遺跡	42 敷布地	平安	平成 18・23 年度調査（事）。平成 16 年度調査（事）。鶴文中期前半穴道構造。從土遺跡、土坑。平安住居跡。	文献2,18,31,185	
15	上原Ⅲ遺跡	43 集落跡	鶴文・平生・平安	平成 18・23 年度調査（事）。平成 25・27 年度調査（事）。鶴文中期後半柱立跡。平安中期土器片、住居跡、廻転柱、廻転穴など。	文献2,18,31,146,150,192,194	
16	上原Ⅳ遺跡	44 敷布地	鶴文・近世	平成 14・18・20・24 年度調査（事）。平成 15・17・21 年度調査（事）。鶴文中期後半柱立跡。廻転柱、中期前半柱立跡。廻転柱石脚跡、廻転柱、中期前半柱立跡。古墳前中期住居跡、廻転柱、中期前半住居跡。平安住居跡、廻転穴など。	文献2,12,18,20,31,121,139,190	
17	下田遺跡	47 集落跡	鶴文・平安・その他 中世・近世	平成 6・7・9・15・25・26・28・31 年度調査（事）。鶴文時代の柱立柱建物。廻転柱、中期前半の廻転柱跡。天明記流で埋没した家屋、廻転穴など。	文献2,107,152,192,193,195～197,222～224「佐賀跡地図」 No.3128下原下（下）「下田」	
18	下原遺跡	204 集落跡	鶴文・平生・その他 古墳・平安・中世	平成 12・13・15・16・19・20 年度調査（事）。鶴文時代の柱立柱建物跡。古墳時代の柱立柱建物跡。古墳中期柱立跡。平安住居跡、中世の廻転柱。中世の廻転跡 3 ヵ所など。	文献2,107,108,117,161,185,196,197,222～224	
19	中郷Ⅰ遺跡	49 敷布地	鶴文・平安・中世・近世	平成 18・23・28・29 年度調査（事）。平成 11・29 年度調査（事）。鶴文中期後半柱立跡。平安住居跡、中世の土器類など。	文献2,18,31,34,109,162,196,197 田中郷遺跡	
20	中郷Ⅱ遺跡	203 その他	鶴文・近世	平成 11～13・15～28・30 年度調査（事）。平安住居跡、天明記流で埋没した廻転柱跡。おひなさんと考えられる廻転柱。	文献2,108,195,196,222～224	
21	二沢遺跡	52 片山・中郷・近世	その他	平成 12 年度調査（事）。中郷の石脚跡による追跡跡（旧大蔵院跡）。廻転柱遺物跡。近世の廻転柱。	文献2,14,1 田中郷廻転室跡	
22	園内廻転柱跡	55 その他	不明	平陰遺跡。園内廻転柱の堂宇と石仏群。	文献2	
23	施木Ⅰ遺跡	50 敷布地	鶴文・平安	平成 10・21 年度調査（事）。平安住居跡、カマド廻転・土坑、廻転石、江戸戸壁建物跡など。	文献2,139,190	
24	施木Ⅱ遺跡	51 集落跡	鶴文・平安・中世	平成 12 年度調査（事）。中郷の石脚跡による追跡跡（旧大蔵院跡）。廻転柱建物跡。天明記流で埋没した廻転柱跡。中世の柱立柱建物群。	文献2,10,122,129,185,186,206,208,211	
25	施木Ⅲ遺跡	202 敷布地	鶴文・平生・平安・中世	平成 10 年度調査（事）。廻転柱跡。廻転柱前後、廻転柱跡。秀生中期の住居跡。	文献107	
26	御嶽山Ⅱ遺跡	57 その他	不明	平陰遺跡。	文献2	
27	舞ヶ峯Ⅱ遺跡	56 その他	鶴文	平陰遺跡。廻転柱出土。	文献2	
28	神津遺跡	62 集落跡	鶴文・平安・その他 近世	平成 21 年度調査（事）。平成 8・9・14・17・18 年度調査（事）。鶴文中期住居跡、土坑、廻転穴。古代柱可能性のある廻転柱。	文献2,23,121,186	
29	尾坂遺跡	201 集落跡	鶴文・近世	平成 23・26 年度調査（事）。平成 6・7・11・18～23・26・28～30 年度調査（事）。廻転柱跡。廻転柱中期後半住居跡後廻転柱跡。秀生中期の住居跡。	文献1,07,148,150,168,187～193,195,196,212,216,223,224	
30	久々戸遺跡	200 集落跡	鶴文・平生・その他 近世	平成 19 年度調査（事）。平成 9～12・14・15・27・28 年度調査（事）。鶴文中期後半柱立柱建物跡。秀生時代中期前半の柱立柱ねじ土坑。廻転柱で埋没した廻転柱跡、廻転柱、廻転柱土器類。	文献19,47,108,109,150,194,195,202,222,230,246	
31	長野原一・本松遺跡	63 集落跡	鶴文・平生・古墳・平安・中世	平成 22 年度調査（事）。平成 6～20 年度調査（事）。鶴文中期後半～中期前半柱立柱建物跡。平安住居跡、中世柱立柱建物跡など。	文献1,2,20,23,106,120,123,127,130,140,142,185,186,188,189,198,211 田中郷遺跡	
32	向原遺跡	75 集落	鶴文・平生・平安	平成 5・19 年度調査（事）。	文献6,19	
33	町遺跡	219 集落跡	鶴文・近世	平成 23～25・30 年度調査（事）。天明記流で埋没した廻転・生產跡。	文献32,37,145,191,224	
34	船木Ⅰ遺跡	72 集落跡	鶴文・平安・近世・その他 近代	平成 16・22・24・25（実）年。近世廻転建物、人頭彌、溝、ヤックラ、復旧溝。近世ガーター構造台石構。	文献2,16,23,28,29,32,38,63	
35	船木Ⅱ遺跡	73 敷布地	鶴文・平安	廻転石、廻転柱跡。平成 26 年度調査（事）。	文献2,32,38	
36	船木Ⅲ遺跡	74 敷布地	鶴文	石蹲・石獅子跡。	文献2	
37	長野原城跡	85 城郭跡	鶴文・平安・中世	平成 23 年度調査（事）。天明記流下の廻転跡。	文献2,28,38,40,41,43,46,47,55,143,215	
38	東日南Ⅰ遺跡	64 敷布地	鶴文	平陰遺跡。	文献2	
39	東日南Ⅱ遺跡	65 敷布地	鶴文	平成 24・25 年度調査（事）。チャート採集。	文献2,28,29,32,38,63	
40	東日南Ⅲ遺跡	66 敷布地	鶴文	石臼採集。	文献2	
41	日南Ⅰ遺跡	67 敷布地	鶴文・平安	石臼採集。	文献2	
42	日南Ⅱ遺跡	68 敷布地	鶴文	石臼採集。	文献2	
43	日南Ⅲ遺跡	69 敷布地	鶴文・平安	石臼採集。	文献2	

No.	遺跡名	形態	種別	時代	調査	参考
44	貝塚古墳群	82	その他 不明	平成 2 号所にわたる。		文献2
45	池内古墳群	81	その他 磨文・弥生	平成 4 号所にわたる。		文献2
46	廻原以北古墳群	80	その他 磨文・弥生	平成 26 ~ 31 年度調査(国学院大学)。平成 6 号所にわたる。		文献2,53,169~174
47	ダツノ山遺跡	79	その他 不明			文献2
48	御舟古墳	78	その他 不明			文献2
49	火打花丘遺跡	70	散布地 磨文			文献2
50	火打花丘遺跡	71	散布地	石神出土。		文献2
51	仙下古墳	76	その他 不明			文献2
52	西平野原跡	83	その他 不明	平成 2 号所にわたる。		文献2
53	上野 I 遺跡	21	集落跡	闕文・平安	平成 29 ~ 30 年度調査(町)。平安時代の住居跡、廻し穴など。	文献2,36
54	上野 II 遺跡	22	集落跡	闕文・平安	平成 29 ~ 30 年度調査(町)。闇文中刷の住居跡、平安時代の住居跡、廻し穴など。	文献2,36
55	横瀬河原 I 遺跡	23	集落跡	闕文・弥生・世紀	平成 6 ~ 7 年度調査(事)。闇文中刷敷地。櫛形尖頭器 1 点表土。平安時代の住居跡、廻し穴。	文献2,107,187「乱遺跡地図」No.3318#横瀬河原遺跡(東平道跡)
56	横瀬河原 II 遺跡	223	その他 平安	平成 29 ~ 30 年度調査(町)。平安時代の廻し穴。		文献36
57	横瀬河原 III 遺跡	224	その他 平安	平成 29 ~ 30 年度調査(町)。平安時代の住居跡、廻し穴、五重の石垣など。		文献36
58	横瀬中村遺跡	24	集落跡	闕文・弥生・世紀	平成 8 ~ 18 ~ 30 年度調査(事)。闇文中刷後半～後期を中心とした廻点集落跡。平安住居跡も含めて 250 点以上を検出。中近世孤立柱建物跡、礎石建物、土壌跡、塚など多様続出。	文献2,108,110,112,115,119,124,125,131~134,137,141,144,185,186,203 ~ 205,211,224「上野豊臣跡」
59	山船 I 遺跡	26	散布地	闕文・平安	平成 28 ~ 29 年度調査(町)。磨製石斧。石礫、石棒などの石器類。	文献1,23,36「山船跡地図」No.3118
60	山船 II 遺跡	28	散布地	平安・近世	平安時の心臓部。	文献2
61	山船 III 遺跡	29	集落跡	闕文・弥生・世紀	平成 16 ~ 17 ~ 29 ~ 31 年度調査(町)。平成 10 ~ 15 ~ 18 ~ 20 年度調査(事)。文献2,16,17,36,107,121,187「山船跡地図」	文献2
62	山船 IV 遺跡	30	集落跡	闕文・平安	平成 19 ~ 29 年度調査(町)。闇文中刷後半の住居跡、土坑など。	文献2,17,36
63	山船 V 遺跡	225	散布地	闕文	平成 30 年度調査(町)。水道遺構、闇文中刷の土坑跡。	文献2
64	西久保 I 遺跡	31	集落跡	闕文・弥生・世紀	平成 6 ~ 10 ~ 12 ~ 29 年度調査(事)。闇文中刷木棟の敷石住居跡、水道遺構など。	文献2,107,165,196,197,223
65	西久保 II 遺跡	32	その他 平安	平成 29 年度調査(町)。平安時代の廻し穴。		文献2
66	西久保 III 遺跡	33	散布地 不明			文献2
67	西久保 IV 遺跡	216	その他 磨文・平安・近世	平成 17 ~ 26 年度調査(町)。平成 12 ~ 21 ~ 23 ~ 30 ~ 31 年度調査(事)。闇文中刷前葉立柱建物跡、平安時代住居跡、天明配流下の廻跡、泥道の大環を確認。遺跡、溝、円形平坦地。	文献32,139,190,192	
68	西久保 V 遺跡	222	集落跡	闕文・弥生・世紀	平成 27 年度調査(町)。平成 28 ~ 29 年度調査(事)。天明配流下の水田跡。	文献33,165,195 ~ 197,222,223「西久保 I 遺跡」
69	細沢城跡	35	城郭跡	旧石器・世紀	闇文中刷前葉立柱建物跡。	文献1,5,43,48,52
70	丸岩城跡	34	城郭跡	世紀	遺跡、溝、円形平坦地。	文献1,43,48
71	石畠遺跡	210	散布地	闕文・弥生・世紀	平成 4 ~ 10 ~ 29 ~ 31 年度調査(事)。天明配流下の廻。天明配流下の廻。文献2,107,196,223「西久保 I 遺跡」	文献2
72	石畠 I 遺跡	9	墓	闕文・平安・世紀	和銅 53 年度調査(事)。平成 29 ~ 31 年度調査(事)。闇文草創期～夷期の土器群。人骨など。天明配流下で埋設した廻跡、道など。	文献2,196,223
73	石畠 II 遺跡	10	その他 不明		伝院遺跡。	文献2
74	二社平野跡	11	その他 不明		伝院遺跡。	文献2
75	二社平遺跡	209	散布地	闕文・弥生・世紀	平成 8 ~ 10 ~ 28 ~ 29 年度調査(事)。弥生後期土器群。天明配流下の廻。	文献44,138,139,195 ~ 197,222,223
76	温井 I 遺跡	1	散布地	闕文・平安	闇文後期散布地。	文献2
77	温井 II 遺跡	2	散布地	闕文	闇文中刷散布地。	文献5
78	三井 I 遺跡	3	集落跡	闕文・弥生・世紀	平成 20 ~ 26 年度調査(町)、平成 10 ~ 16 ~ 17 ~ 24 ~ 25 ~ 30 年度調査(事)。文献2,27,32,107,118,185,186,191,192,224「三井 I 遺跡」	文献2
79	三井 II 遺跡	4	集落跡	闕文・平安	平成 16 ~ 20 年度調査(町)。闇草跡跡～前中期の土器、石器多量。圓立柱建物跡 7 点を含む。合計 10 点。	文献2,118,185
80	上ノ平 I 遺跡	5	集落跡	闕文・平安・世紀・近世・近代	平成 18 ~ 19 ~ 29 年度調査(事)。闇文中刷中葉～後期初期住居跡、廻し穴、五重の圓立柱建物などを検出。朝令十二段の「古御家室」が出土。佐藤永宝の土作は本件を含む境内で 3 例ある。	文献2,126,149,155,187,188,195,212,222
81	上ノ平 II 遺跡	6	散布地	闕文・平安	闇文・平安時代の廻。	文献2
82	二ツ塚 I 遺跡	12	その他 近世		平成 28 年度(事)。伝院遺跡。百舌鳥中葉以前の墓地跡、墓字・石碑群。	文献2,195,222
83	東宮遺跡	208	集落跡	闕文・近世	平成 12 年度調査(事)。平成 7 ~ 9 ~ 19 ~ 21 ~ 26 ~ 31 年度調査(事)。闇文中刷～後期の大規模集落。天明配流下の廻。建物跡、廻跡など。	文献2,107,136,137,181,153,188 ~ 190,193 ~ 197,214,222 ~ 227,232,234,237,239,243,245
84	西宮遺跡	7	集落跡	平安・近世	平成 20 ~ 26 ~ 31 年度調査(事)。天明配流下の廻。建物跡と付属建物。表面配列 5 区画以上。復旧率 10 数%。ヤッカラ、小屋など。	文献2,154,189,193 ~ 197,214,222 ~ 224,227,233,234,243
85	西宮古跡	13	その他 近世		平成 26 年度調査(事)。伝院遺跡。石造物を掘るための廻。陶磁器。	文献2,154「トドリヤ」の記載あり。
86	下原川遺跡	217	集落跡	闕文・弥生・平安・中世・近世	平成 27 ~ 29 ~ 31 年度調査(事)。闇文中刷の土器。平安時代の住居跡、石器多量。	文献1,38,159,194 ~ 196,222,223,229
87	西ノ上遺跡	212	その他 近世		平成 18 ~ 27 年度調査(事)。平成 14 ~ 27 ~ 29 ~ 30 年度調査(事)。天明文文献 18,32,109,164,194,196,197,223「西ノ上遺跡」	文献2,17
88	金花山鈴跡	207	城郭跡	中世	平成 12 年度調査(事)・(事)。廻切などを確認。明治期の「川原湯真向」に文献15「トリダヤ」の記載あり。	文献15
89	川原湯中ノ上遺跡	16	散布地	闕文	平成 19 年度調査(事)。チャート出土。	文献2,19「旧中原ノ上遺跡」
90	川原湯中ノ原ノ上遺跡	18	散布地	闕文	平成 17 年度調査(町)。	文献2,17「旧中原ノ上遺跡」
91	川原湯中原ノ上遺跡	19	集落跡	闕文・平安・近世	平成 28 年度調査(事)。闇文中刷後半住居跡・廻跡、平安の廻し穴。	文献2,157,195,222「旧中原ノ上遺跡」
92	前原遺跡	210	その他 近世		平成 29 年度調査(事)。天明配流下の廻。	文献196,197,223

No.	遺跡名	地點	種類	時代	参考文献
93	石川原遺跡	17 集落跡	縄文・平安、 その他の 中世・近世	平成20・25～31年度調査（事）。縄文中期～晩期の大規模集落跡。後期 の配石、水場遺構など。大明治後半の埋蔵。	文献2.158.194～197.214, 222～224.228.235.243 北人遺跡（No.20）と統合
94	川原湯勝沼遺跡	206 散布地	縄文・平安、 その他 近世	平成9・15・16・28・30・31年度調査（事）。縄文晩期の埋蔵2基。平 安住居跡3軒。大明治後半の埋蔵。	文献107.111.166.185.195.197, 210.222
95	小林家屋敷跡	211 城館跡	近世	平成14～30年複数回調査（町）。大明治後半の解体、礎石建物、土蔵、石垣など。文献11～13.36	
96	坪井遺跡	86 集落跡	縄文・平安	平成3・10・13・24・26・29年複数回調査（町）。縄文前期前頭花崗下 層1式・塙田式1式、中期後半の複数の集落跡。平安時代集落。	文献4.8.10～12.26.28.32.36
97	長野I遺跡	126 集落跡	平安	平成15年度調査（町）。平安時代の住居跡・土坑。	文献14
98	長野II遺跡	127 集落跡	縄文・平安	平成2・3・21・28・30年複数回調査（町）。縄文時代の住居跡・土坑。平安 時代の竹刷跡。	文献4.12.22.33
99	旧新井村跡	143 村落跡	近世	昭和55年度調査（町）。大明治後半に埋没した村落。戸敷跡や田舎水池などを 検出。南側台地上に墓地が残る。	文献2.49.51.54.62.66.93.98

年かけて、全町を対象とした遺跡詳細分布調査を実施し、199の遺跡包蔵地を確認した⁽¹⁾。また平成6年度から八ッ場ダム建設事業に関連した工事用進入路や水没地域の工事に対応して（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団が継続して調査を実施し、新たな包蔵地の発見や遺跡名の変更などの必要性から平成14年3月と平成16年4月に遺跡地図の改訂を実施した。その後も小さな変更を繰り返しているが、令和4年12月現在で226の包蔵地（指定史跡等を含む）が把握されている⁽²⁾。

本遺跡群の位置する吾妻川流域地帯の東部地区はダム関連事業と直結している地域で、先述した（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団（平成24年4月に公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に名称変更）が常時数カ所の発掘調査を継続して実施してきた地域である。町教育委員会でも本地域でこれまで生活再建事業として水源地域対策特別措置法（以下、水特法）および利根川・荒川水源地域対策基金（以下、基金）関連事業を実施してきたが、ダム本体の完成間近である令和2年9月末ですべての発掘調査が完了した⁽³⁾。

本遺跡群を含む吾妻流域地帯東部地区には多くの遺跡が分布している（第2図・第1表）。遺跡は基本的に吾妻川とその支流沿いの河岸段丘上に占地しているが近年丘陵上にも遺跡が発見されはじめ、これまで空白だった時期を埋める遺構も検出されている。ここでは調査を実施した遺跡を中心に当該地域の遺跡を概観したい。

（1）旧石器時代

これまでのところ長野原町では旧石器時代の遺跡は確認されていない。吾妻川流域は前述した応桑泥流やAs-YPkが厚く堆積しており、それより下位の発掘調査が困難な状況がある。遺構外の遺物としては柳沢城跡（69）で細石器文化に伴うと考えられる珪質真岩製のスクレイバーが1点出土している。吾妻郡内においても旧石器時代遺跡は高山村に所在する新田西沢遺跡⁽⁴⁾でしか確認されていないというのが現状である。

このことは長野県側の浅間山麓でも同様で、厚く堆積した火山噴出物により旧石器時代の発掘調査は困難である。長野県側の浅間山麓付近で発掘調査されている旧石器時代遺跡は、いずれも千曲川を挟み浅間山麓の対岸側で確認されている。

（2）縄文時代

縄文時代になると遺跡数も膨大となる。吾妻川及びその支流沿岸の下位段丘面は低調だが主として中・上・最上位河岸段丘および丘陵部に集落が展開する。

①草創期～早期

現在のところ、長野原町で人々の生活が確認されているのは草創期末～早期初頭からである。該期の遺跡として石畳1岩陰（72）がある。昭和53年に群馬県教育委員会により一部調査され、中期を除く草創期～晩期の土器片・獣骨・人骨などが出土している。特に草創期～早期の土器片には表裏縄文・燃糸文・押型文が認められる。平成26年度から國學院大学により学術調査が実施されている居家以岩陰群（46）でも草創期～晩期の土器片・石器・獣骨・人骨が出土している。平成28年度～令和4年度の調査では岩陰部の灰層中から遺

存状態の良い早期中葉の埋葬人骨が20体以上確認されており、その数は今後も増えるだろう⁽⁵⁾。また横壁勝沼Ⅰ遺跡（55）では草創期の楕形尖頭器が表採されている。近年、丘陵での調査機会も増え、榎木Ⅱ遺跡（24）、立馬Ⅰ遺跡（6）、立馬Ⅲ遺跡（8）で早期の集落が検出されている。榎木Ⅱ遺跡では早期前半撫糸文期の住居跡が31軒検出され、遺構外で表裏繩文・押型文・沈線文・条痕文土器片も出土している。該期の住居跡検出数では県はもとより全国的にも有数である。また立馬Ⅰ遺跡では撫糸文期の住居跡の他、沈線文（田戸下層式）期の住居跡も検出され、遺構外では押型文・条痕文をはじめ晩期までの土器片が連続と出土している。立馬Ⅲ遺跡では子母口式や稻荷台式、沈線文土器などの住居跡が検出されている。さらに同時期の遺物は、調査事例の多い東部地区に偏っており、三平Ⅰ遺跡（78）、三平Ⅱ遺跡（79）、花畠遺跡（9）、中棚Ⅰ遺跡（19）、幸神遺跡（28）、横壁中村遺跡（58）、山根Ⅲ遺跡（61）、長野原一本松遺跡（31）、西部地区では坪井遺跡（96）で確認されているのみである。それまでの岩陰での生活から早期前半撫糸文期になると丘陵上のオープンサイトでの集落に移行していくようである。また石畑Ⅰ岩陰に代表される岩陰遺跡は丘陵部の自然に迫り出した岩場を利用して居住・墓域とするものであるため、県内では分布・遺跡数ともに限定される。吾妻川流域はそのほとんどが河川や溪流に沿う山岳傾斜地帯であることから岩陰遺跡の立地する条件を満たしているといえよう。岩陰遺跡は長野原町域で21遺跡34ヶ所確認されており、その大半がこの東部地区に集中している。この岩陰遺跡の多さは本町の原始古代の大きな特徴の一つである。

②前期

前期の遺跡も少ないが漸増の傾向にある。立地は丘陵上が多いが、河岸段丘へも集落が広がる傾向が見受けられる。前期前半の遺跡は東部地区より西部地区で顕著であったが近年の調査で東部地区的該期の状況が明らかとなってきている。坪井遺跡では前期初頭（花積下層Ⅰ式期）の住居跡と土坑が検出され、土坑内で花積下層Ⅰ式と長野県で主張的な塙田式との共伴が初めて確認された。平成30年度に調査した赤羽根遺跡では、当該期の石器製作工房Ⅰ軒と土坑4基が検出されている⁽⁶⁾。暮坪遺跡では前期前葉（二ッ木式期）の住居跡⁽⁷⁾、長歛Ⅱ遺跡（98）では前期前葉（岡山式期）の土坑と前期前葉（黒浜式期）の住居跡土坑が検出されている。東部地区では上原Ⅰ遺跡（13）で前期初頭の住居跡が15軒検出され、花積下層Ⅰ式土器が主体で塙田式土器が共伴するかたちで追認されている。榎木Ⅱ遺跡で前期前葉（黒浜式期）の住居跡が検出されている他、横壁中村遺跡では埋没河道で少量の破片が認められている。前期後半は本遺跡のほか榎木Ⅱ遺跡、三平Ⅰ遺跡で前期後葉（諸磯式期）の住居跡や土坑、川原湯勝沼遺跡（94）で前期末葉の土坑が検出されている以外は遺構外の出土である。

③中期

中期の遺跡は他時期に比して最も多く、中期前半は県内でも極めて限られた検出事例で少ないが、丘陵上あるいは最上位段丘に占地しているようである。後半になると河岸段丘の平場を中心として積極的な居住区域を展開している。中期前半の集落は近年東部地区的丘陵上あるいは最上位段丘に立地する遺跡で発見されている。中期初頭（五領ヶ台式期）の遺跡は榎木Ⅱ遺跡で住居跡3軒、上原Ⅱ遺跡（14）で屋外焼土遺構を伴う竪穴状遺構が3基・土坑21基、上原Ⅳ遺跡（16）で土坑1基が確認されている。中期前葉（阿玉台式期）の遺跡は立馬Ⅱ遺跡（7）で五領ヶ台式期～阿玉台式期の住居跡11軒・土坑100基ほど、本遺跡で住居跡が1軒、幸神遺跡で土坑が検出されている。横壁中村遺跡では中期中葉（勝坂式期）の住居跡、西久保Ⅰ遺跡（64）では同時期の土坑が確認されている。中期中葉（焼町類型期）の遺跡は幸神遺跡で焼町土器の深鉢を軸体土器とした住居跡、林中原Ⅱ遺跡（2）と横壁中村遺跡で焼町土器を主体とする住居跡がそれぞれ1軒ずつ確認されている他、上ノ平Ⅰ遺跡（80）では同時期の住居跡が12軒検出された。平成30年度に町営横壁土地改良事業の工事中に中期前半の水場遺構が発見され、山根Ⅴ遺跡（63）を追加した。全国的にみても古手の

水場遺構である。西部地区では観奈遺跡⁽⁸⁾で中期前半の土坑8基、クヌギⅡ遺跡⁽⁹⁾で中期中葉の埋設土器が検出されているのみで、山岸Ⅱ遺跡⁽¹⁰⁾で少量の破片が認められたくらいである。中期後半になると列石を作り抛点集落が吾妻川流域地帯に分布を広げて出現する。長野原一本松遺跡、横壁中村遺跡を筆頭として近年の調査により本遺跡、林中原Ⅱ遺跡、東宮遺跡(83)、石川原遺跡(93)が新たに加わり、西部地区では坪井遺跡に代表される。遺跡を大規模に調査している前6者に共通するのは中期後半に引き続き、後期前半(～加曾利B式期)まで継続して集落が営まれていることである。また坪井遺跡は前2者に比して規模は小さいが、弧状石列1基、住居跡19軒(拡張住居含む)、土坑49基が検出されている。土器は大きく4系統(①加曾利E式土器<北関東系>、②曾利・唐草文系土器<信州系>、③「郷土」式土器<①と②の融合型式>、④柄倉Ⅱ式土器<越後系>)が認められ、特に③の「郷土」式土器が該期の主体となる時期であり、環濠開山地域に分布し、小文化圏を形成していることが最近分かってきている。この坪井遺跡出土土器の傾向は前6者出土土器、さらに県指定史跡「勘場木石器時代住居跡」⁽¹¹⁾出土土器にも看取される。その他、向原遺跡(32)では中期末～後期初頭の敷石住居跡が検出されており、立地から抛点集落のひとつになる可能性が高い。最近の調査では尾坂遺跡(29)で中期後半の住居跡が6軒検出されており、うち3軒が敷石住居と確認され、敷石住居出現期の可能性がある。尾坂遺跡の対岸に位置する久々戸遺跡(30)でも中期末の遺存状態が良好な敷石住居が検出され、町では平成30年度に住民総合センターエントランス床下へ移築保存を実施した。

④後期

後期の遺跡は規模は縮小するものの吾妻川流域の比較的広い範囲に分布する。上記の中期後半の遺跡の他、西部地区では本町で初めて敷石住居跡を検出したクヌギⅡ遺跡、向原遺跡、滝原Ⅲ遺跡⁽¹²⁾、古屋敷遺跡⁽¹³⁾、東部地区では本遺跡を含む上ノ平Ⅰ遺跡、上原Ⅳ遺跡、石川原遺跡に代表される。後期初頭(称名寺式期)～後期中葉(加曾利B式期)までの敷石住居跡、掘立柱建物跡は長野原一本松遺跡、横壁中村遺跡で多く検出されている。長野原一本松遺跡では壁に板材の痕跡を残し、方形周縁を明瞭に残す柄鏡形敷石住居跡が確認されている。また横壁中村遺跡では主軸全長9mにも及ぶ大形の柄鏡形敷石住居跡や配石墓群が検出されている。その他、林中原Ⅰ遺跡、上原Ⅳ遺跡、上ノ平Ⅰ遺跡でも後期初頭～前葉(称名寺式期～堀之内式期)の敷石住居跡等が検出されている。後期後葉(高井東式期)の住居跡は横壁中村遺跡で3軒、久々戸遺跡で土坑が検出されているのみである。石川原遺跡では後期後半～晩期前半の住居跡、配石遺構、水場遺構が多数検出されている。後期終末(安行1・2式期)に関しては横壁中村遺跡や立馬Ⅰ遺跡で土器片が出土しているがいずれも遺構外である。

⑤晚期

晩期に関してはこれまで石畳Ⅰ岩陰で土器片が出土している他、横壁中村遺跡で晩期末葉(千網式併行)の包含層が確認されているだけであった。遺構の検出は晩期前半は前述の石川原遺跡で確認されてきているものの、依然少なく、後半(特に末葉～弥生中期)に関しては最近の調査で増えつつある。立馬Ⅰ遺跡では晩期末葉の住居跡1軒、横壁中村遺跡では晩期末葉の住居跡2軒、埋甕1基、上原Ⅳ遺跡・西ノ上遺跡(87)では土坑1基が検出されている。立馬Ⅰ遺跡では南信松本盆地に分布する女鳥羽川式土器が出土している。さらに川原湯勝沼遺跡からは該期の上坑が数基検出され、その中の1基は壺棺再葬墓であることが判明している。同一土坑に2個体が埋置されており、ひとつが中沢氏のいう「氷式突堤壺」⁽¹⁴⁾の上半部が逆位に、もう一方は浮線文系の半精製壺が正位の状態で出土している。この壺棺再葬墓は東日本でも最古級として注目されよう。その他、遺構外ではあるが久々戸遺跡で氷式土器の浅鉢、向原遺跡で大洞A'式まで遡ると考えられる土器片も確認されている。

(3) 弥生時代

弥生時代の遺跡は分布調査の時点で後期に属する3遺跡のみであったが、縄文時代晚期末葉から弥生中期前半までの資料が増えてきている。遺跡は丘陵上あるいは最上位段丘に立地する傾向が強く、縄文時代早期や中期前半と共通しているようである。東部地区では上野Ⅱ遺跡(54)、長野原一本松遺跡で中期前半までと考えられる土坑1基、横壁中村遺跡では埋甕(再葬墓か)1基が検出され、東海地方に分布する樺王式土器の甕が出土している。下原遺跡(18)では集石遺構から中期前半を中心とした遺物が認められた。林中原Ⅱ遺跡では中期前半と考えられる住居跡4軒の他、前期末に遡る土坑墓(再葬墓か)、尾坂遺跡でも前期末の再葬墓と思われる土坑や完形土器2個体を出土する土坑、貯藏穴など、上原Ⅰ遺跡では前期末の短頭甕を納めた土坑、三平Ⅰ遺跡では前期末～中期前半の土坑が数基検出されている。西部地区では遺物出土量が少なく時期が判然としないものが多いが、坪井遺跡で中期初頭と考えられる住居跡1軒、土坑が5基、向原遺跡では前期に遡るものも含めて中期前半までの土坑が7基検出されている。遺構外では外輪原Ⅰ遺跡⁽¹⁵⁾、上ノ平遺跡⁽¹⁶⁾で中期前半までの資料が比較的まとまっている。中期後半に関しては、立馬Ⅰ遺跡で住居跡2軒と土器棺墓2基を含む土坑が数基、後期に関しては、石畳遺跡(71)で土坑1基が確認されているのみである。分布調査時に居家に岩陰群、寺久保遺跡⁽¹⁷⁾、新田原Ⅰ遺跡⁽¹⁸⁾で土器片が表採されている他、立馬Ⅰ遺跡では遺構外で、二社平遺跡(75)周辺で後期～古墳時代前期に比定される土器片が表採されている。

(4) 古墳時代

これまで遺構外では他時期の遺物に混入するかたちで5世紀後半の土器片は坪井遺跡、長野原一本松遺跡、二社平遺跡などで確認してきたが、長野原町で古墳時代の集落として把握されている遺跡は皆無であった。平成15年度に最上位段丘面に立地する林宮原遺跡(3)で5世紀末～6世紀初頭の住居跡が1軒検出されたのが初例である。これに続いて平成16年度の調査で川原湯勝沼遺跡で焼土を伴う土坑から同時期の土師器と遺構外で劍形模造品、下原遺跡で同時期の住居跡1軒の他、土師器(片)がまとめて出土している。最近の調査では上原Ⅳ遺跡でも5世紀後半～6世紀初頭の住居跡が2軒検出されている。これらは吾妻川に直面した最上位・中位段丘面の自然流路あるいはその周辺で出土していることから水に関連した祭祀遺構の可能性が高い。これら4遺跡で検出された遺構は時期的にはほぼ合致しており注目される。さらに上原Ⅰ遺跡で前期と考えられる住居跡からS字状口縁台付甕や坩形土器が出土し、中期の高杯を包含する土坑も検出され、これまで空白であった時期の遺構検出事例が徐々にではあるが大規模調査の成果として増えてきている。

また昭和13年に刊行された『上毛古墳綜覧』によれば、大津地区的「鉄塚」、与喜屋地区的「五輪塚」が前方後円墳と報告されている。また昭和11年刊行の『群馬県吾妻郡誌』では林地区的「御塚」が古墳とされ、合計3基が古墳とされている。「五輪塚」は現況で畑としてならされているが、「鉄塚」と「御塚」は円形の形状を保ち、現在は墓地として利用されている。その他、「てつか（てづか）」や林地区中棚にある「砂塚」に関しては『長野原町誌』で「宮内地区的「てづか」は鉄塚の訛音ではあるまいか。鉄塚の地名には城跡や屋敷跡などに多いといわれ、砂塚との対照がおもしろい」とあり、古墳という認識ではないが同じ林地区に少なくとも「塚」と付くものが3基あるということが注目される。いずれも古墳とするには根拠が薄く、今後の調査に期待したい。

(5) 奈良・平安時代

奈良時代に該当する遺跡は分布調査時の羽根尾Ⅱ遺跡⁽¹⁹⁾のみで増えていない。これに対して平安時代の遺跡の分布は町内全域に及んでおり、縄文時代とともに本町で原始古代の中心をなす時期である。調査した遺跡を挙げれば、西部地区では、坪井遺跡、向原遺跡、長畠Ⅰ遺跡(97)、長畠Ⅱ遺跡、山岸Ⅱ遺跡、東部地区では東宮遺跡、上ノ平Ⅰ遺跡、三平Ⅰ遺跡、下湯原遺跡(86)、西ノ上遺跡、石川原遺跡、川原湯勝沼遺跡、立

馬Ⅰ遺跡、東原Ⅰ遺跡（10）、榆木Ⅰ遺跡（23）、榆木Ⅱ遺跡、花畠遺跡、下原遺跡、中棚Ⅰ遺跡、上原Ⅰ遺跡、上原Ⅲ遺跡（15）、上原Ⅳ遺跡、林宮原遺跡、横壁勝沼Ⅰ遺跡、横壁勝沼Ⅲ遺跡（57）、山根Ⅲ遺跡、山根Ⅳ遺跡（62）、上野Ⅰ遺跡（53）、上野Ⅱ遺跡、横壁中村遺跡、長野原一本松遺跡、尾坂遺跡などから住居跡や掘立柱建物跡、陥し穴などが検出され、該期集落として把握されている。この中で榆木Ⅱ遺跡では9世紀後半～10世紀前半の住居跡が38軒、竪穴遺構3基が検出され、「長」・「三家」の墨書き土器と刻字「称」をもつ石製紡錘車、上ノ平Ⅰ遺跡では住居跡が20軒検出され、県内2例目となる皇朝十二銭「貞觀永宝」が出土しており注目される。この他、上原Ⅲ遺跡では鍛冶工房跡1軒・住居跡11軒・焼土遺構6基・窓穴29基など、中棚Ⅰ遺跡では住居跡4軒が検出され、そのうち全容が判明した2軒は一辺が6mを超える大形住居であった。このうちの1軒からは「赤」の墨書きが大量に出土しておりその性格が注目される。

（6）中世

吾妻流域地帯には中世城館跡が点在している。その立地は当時の道との関連性が強く、分岐点の丘陵上など交通の要衝に多い。西から羽根尾城跡⁽²⁰⁾、長野原城跡（37）、丸岩城跡（70）、柳沢城跡、金花山砦跡（88）などがあり、その他に林城跡（1）、林の烽火台などといわれている箇所も存在する。これらはいずれも山城である。この中で丸岩城は「丸屋の要害」として『加沢記』にも記され、節理の発達した岩山の山頂に立地している。この丸岩城跡の北西麓に里城としての柳沢城跡が位置し、山城部と丘城部から成る本城を構えている。この柳沢城跡の一部が発掘調査されており、郭跡・堀切・土居・礎石建物・腰曲輪・石組遺構・溝・柵列などが検出されている。遺物のほとんどが礎石建物から出土しておりかつ豊富である。陶器・鉄製品・銅製品・石臼などが出土しており、特に陶器類は常滑系大甕・古瀬戸三耳壺・古瀬戸菊皿・珠洲系陶器甕の他、輸入陶磁器である景德鎮窯梅瓶などが準完形で出土している。また最近の調査で林中原Ⅰ遺跡範囲内に林城跡が確認され、その範囲や構造が明らかになりつつある。金花山砦跡は明治期の絵図『川原湯真図』に「トリデアト」の記載があったことから平成12年度に町教委と事業団で踏査して堀切などを確認した。

近年は河岸段丘面の遺跡でも該期の遺構が検出されはじめており、集落として把握されるようになっていく。それらを例挙すると立馬Ⅰ遺跡、林宮原遺跡、榆木Ⅱ遺跡、二反沢遺跡（21）、下原遺跡、横壁中村遺跡、西久保Ⅰ遺跡、長野原一本松遺跡、尾坂遺跡となる。このうち、横壁中村遺跡と下原遺跡では石垣で区画された屋敷跡がそれぞれ1棟、長野原一本松遺跡では掘立柱建物群と竪穴状遺構、榆木Ⅱ遺跡でも掘立柱建物群、二反沢遺跡では区画跡のほか羽口や鉄滓など鍛冶関連遺構などが検出されており注目される。

（7）近世

長野原町は浅間火山・白根火山の麓に位置し、古くから度重なる火山災害を被っていることが地層からも窺える。浅間火山の主な噴火活動を概観すれば、すでに9万年前には黒斑山は活動をはじめており、2.4～2.1万年前に黒斑山崩壊を伴う噴火活動があった。その時発生した泥流は、応桑泥流・中之条泥流・前橋泥流と確認された地点ごとに異なる名称で呼ばれている。その後は仏岩火山の活動期で浅間一板鼻黄色軽石（As-YP）降下をもたらした。1万年前頃から前掛山の活動が始まり、その噴火により縄文時代中期の浅間D軽石（As-D）、4世紀の浅間C軽石（As-C）、天仁元（1108）年の浅間B軽石（As-B）、天明3（1783）年の浅間A軽石（As-A）という4つの大きなテフラがもたらされた。これらは、浅間山の活動史を如実に物語る証であり、群馬県内の考古年代の指標にもなっている。の中でも天明3（1783）年の噴火は軽石降下後に襲った泥流（兼原火砕流）により吾妻川・利根川流域沿いの町村に甚大な被害をもたらし、有史以来の記録的火山災害として知られている。この泥流によって埋没した嬬恋村の旧鎌原村が昭和54年から調査され、「延命寺觀音堂の石段」、「十日ノ崖」など天明の大噴火における被災遺跡として注目を集めたが⁽²¹⁾、翌年に本町でも山間地域若者定住環境整備モデル事業として陸上自衛隊によるグランド造成中に日待供養塔・石臼・農具などが

出土し、旧新井村跡（99）の痕跡が確認された。平成14年度には町立中央小学校の屋内体育馆・プールの新築に伴って、当時の分限者小林助右衛門屋敷の一部が発見され、石垣・土蔵・礎石建物跡が調査されている（95）。また平成16年度には長野原市街地における下水道工事で建築部材・薬缶・鉄釜・石臼の他、「青面金剛塔」が泥流中から出土しており、旧長野原村が壊滅的状況であった一端を垣間見る発見があった⁽²²⁾。さらに平成20年度に草木原遺跡⁽²³⁾、平成23年度に小滝Ⅱ遺跡⁽²⁴⁾で天明泥流に埋没した烟跡が検出され、立石村・羽根尾村の被災状況も確認された。

近年、ダム関連工事に伴う発掘調査により、これまで認識されていなかった下位・中位段丘で泥流に埋もれた遺跡が相次いで発見された。それらを列挙すると、町遺跡（33）、長野原城跡、嶋木Ⅰ遺跡（34）、東貝瀬Ⅲ遺跡（40）、下田遺跡（17）、下原遺跡、中棚Ⅱ遺跡（20）、西宮遺跡（84）、東宮遺跡、石川原遺跡、石畠遺跡、西ノ上遺跡、川原湯勝沼遺跡、横壁勝沼Ⅰ遺跡、横壁中村遺跡、西久保Ⅳ遺跡（67）、西久保Ⅴ遺跡（68）、尾坂遺跡、久々戸遺跡などがある。これらの遺跡では主として烟跡・ヤックラ・道・石垣・溝・井戸・覆屋構造物などが検出されている。現時点での成果として天明泥流に埋まった烟景観の復原や「ツカ」や平坦面から推定される「単位烟」の構造、さらには泥流とその逆級化構造のメカニズムなどに関して詳細な検討がなされている。また東宮遺跡、西宮遺跡、石川原遺跡、町遺跡、尾坂遺跡、下田遺跡などでは民家跡も検出されている。特に東宮遺跡は泥流に埋没した川原畠村を面向して調査した貴重な発見である。建物跡が14棟のほか畠20区画・道3条・溝6条・石垣10基・集石1基・土坑8基を検出した。通常遺存しない建築部材や漆器など植物遺存体の検出例が多く、当時の川原畠村の景観復原はもとより、近世建築学、民俗学など多角的な分析に寄与する部分が大きいと考えられる。さらに隣接する西宮遺跡では埋没烟とともに南北方向に10数本の復旧溝が検出され、被災後の復旧の痕跡が本町ではじめて確認された。

また推定される泥流到達範囲外でも該期の遺構・遺物は確認されている。林中原Ⅱ遺跡、上原Ⅳ遺跡、二反沢遺跡、榎木Ⅰ遺跡、幸神遺跡、長野原一本松遺跡が該当する。このうち上原Ⅳ遺跡では溝（旧河川流路）を検出しているがそこから下駄や曲物の底・農具・石鉢・陶磁器など生活道具が出土している。

第3節 既往の調査

今回の調査は林中原Ⅰ遺跡の第12次調査にあたる。本遺跡は長野原町教育委員会だけで令和4年12月現在で18次にわたる調査が実施されている。その中には試掘確認調査・立会調査により本発掘調査に至らなかつたものも多く含んでいるが、この数字はここ数年で本遺跡内で開発が集中して行われてきたことを如実に物語っている。また町教委に先駆けて群馬大学史学研究室による学術調査や近年ではハッサム工事関連で公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団がA～E地点の調査が実施されている（第3図・第2表）。

先述したとおり、本遺跡での最初の発掘調査は昭和37年11月23日～26日まで群馬大学史学研究室により実施された⁽²⁵⁾。詳細は不明であるが縄文時代中期の住居跡を1軒調査したという。遺物は同研究室に保管されている。

第1次調査は平成14年度に個人専用住宅に先立って実施された。トレント調査により遺構・遺物を検出するには至らなかった。対象地は谷地で泥炭層を基盤としていることが確認された。

第2次～第4次調査は平成15年度に個人専用住宅に先立って実施された。第2次調査ではトレント調査により遺構・遺物を検出するには至らなかった。第3次調査では北側の町道拡幅のため住宅を移動する計画が出されたため、開発事業主と協議して確認調査を実施することで合意を得ていたが、その後設計変更で盛土対応（現況から1m）することになり現状保存されることになった。第4次調査では、縄文時代後期前葉住居跡1軒、配石遺構2基、石組遺構1基が検出された。住居内覆土には大量の遺物がブロック状で出土し、いわゆる「土器捨て場」の様相を呈していた。配石遺構は確認面からの深さが一般なものと比較しており掘立柱



第3図 林中原Ⅰ遺跡既往調査地点位置図（1/2,500）

建物跡の可能性が高い。また石組遺構としたものも出土炭化材の放射性炭素年代測定が中期後半に帰属することや板石の組み方から判断して炉跡の可能性が高く、調査区全体が中期後半の住居跡であったことが推測された。遺物は住居内廐棄遺物に準完形遺物が多く、当該地域の堀之内2式中段階を把握できる土器群であった。中でも“釣手付き注口土器”は類例に乏しく貴重な発見であった。

第5次調査は平成16年度に個人専用住宅建設に先立って実施された。トレンチ調査により遺構は検出されなかつたが縄文時代中期後半の土器片が出土している。

第6次～第8次調査は平成17年度に実施された。第6次調査は個人専用住宅建設に先立って実施され、トレンチ調査により縄文時代中期後半の包含層が確認されたが、顕著な遺構は検出されなかつた。第7次調査は町道林線拡幅工事（水特法事業）に先立って実施され、縄文時代後期前葉住居跡1軒、中期後半～後期前葉土

第2表 林中原I遺跡既往調査一覧

番号	調査年度	調査機関	原図種類	調査面積 (開拓面積)	概要	備考
0	昭和37年度	群馬大学	学術調査	?m ² (-)	縄文中期住居1	文献66
1	平成14年度	群野原町教育委員会	個人専用住宅 試掘調査	10m ² (288m ²)	遺構なし	文献12.202
2	平成15年度	"	個人専用住宅 確認調査	52m ² (489m ²)	遺構なし	
3	"	"	個人専用住宅 立会調査	-m ² (2684.26m ²)	現状保存	文献14.203
4	"	"	個人専用住宅 本調査	59.8m ² (675.42m ²)	縄文後期敷石住居1、配石遺構2。石 圓墳構1(住居跡?)	
5	平成16年度	"	個人専用住宅 確認調査	28m ² (734.69m ²)	縄文包含層	文献16.204
6	平成17年度	"	個人専用住宅 確認調査	59m ² (647m ²)	縄文中期包含層	文献17.205
7	"	"	町道林縫拡幅 本調査	500m ² (749.52m ²)	縄文住居1・土坑11基	文献17.45.205 水特法
8	"	"	個人専用住宅 確認調査	15m ² (528m ²)	縄文前期後半包含層	文献17.205
9	平成18年度	"	園芸施設(3地区) 本調査	190m ² (1820m ²)	縄文時代後期前葉住居2、配石遺構24	文献18.206.272
10	"	"	園芸施設(4地区) 確認調査	42m ² (789m ²)	縄文時代包含層	文献18.206.272 水特法
11	"	"	土地改良事業 確認調査	436m ² (2541m ²)	縄文中期後半～後期包含層・後期初頭 住居・中近世溝状遺構1基他	文献18.36.206 水特法
	平成25年度	"	土地改良事業 本調査	4013m ² (4865m ²)	(縄文) 中期土坑1・中期～後期土坑 60・ビット70・土坑(貯藏穴)6 (平安) 亂石穴5 (中近世) 挿立柱建物跡7・柱列1・基 1・地下式土坑1・土坑78・ビット594・ 溝跡12・平面1面1・水場遺構1 (近代) 墓土遺構2 (時期不明) 土坑2・谷地形1	文献29.36.213 水特法
12	平成19年度	"	個人専用住宅 本調査	480m ² (555m ²)	縄文初期前葉住居2・配石遺構10・土 坑15(平安土坑含む)・中期後半包含層 1・插立柱建物跡1	文献19.207 本報告
13	"	"	個人専用住宅 確認調査	78m ² (564.22m ²)	縄文後期初頭～前葉包含層	文献19.207
14	"	"	町道林縫拡幅 本調査	165m ² (760m ²)	縄文中期後半～末住居2・土坑15	文献19.45.207 水特法
15	平成20年度	"	町営住宅 本調査	535m ² (1291m ²)	縄文中期未住居1・後期初頭～前葉住 居3・配石遺構22・土坑4	文献20.208.273
16	"	"	町道林縫拡幅 本調査	340m ² (825m ²)	縄文中期未～後期前葉包含層・埋没河 道・土坑11	文献20.45.208 水特法
17	平成21年度	"	個人専用住宅 確認調査	19m ² (205m ²)	縄文中期未～後期前葉包含層	文献22.209
18	平成30年度 ・令和元年度	"	町営住宅 確認調査・本調査		縄文時代後期前葉遺物集中1・土坑29・文献39.217.218 溝状遺構1	水特法
A	平成16年度 (財)群馬県埋蔵文化財調査 事業団	町道拡幅 本調査	1415m ² (1415m ²)	時期不明土坑8 柏川テラフ		文献107.204
B	平成19年度	"	国道付替・町道敷設 本調査	9874m ² (9874m ²)	(縄文) 前期前半住居3・中期前半 住居1・土坑8・陥れ穴13・ビット 20 (中世) 插立柱建物61・窓穴状遺 構3・土坑217・瓶7・溝17・ビット 1434・墓6・石垣5・ため池2・橋2	文献150.208. 209.210.235, 238
C	平成20年度	"	国道付替 本調査	618m ² (618m ²)	(縄文) 土坑7 (中世) 土坑3・土取穴1・ビット17・ 墓1・道1 (近世) 破石建物1・土坑3・土取穴 10・溝2・墓3・石垣2・焼土6・道 1	
D	平成21年度	"	町道敷設 本調査	1954m ² (1982m ²)	(縄文) 前期後葉住居1 (中近世) 插立柱建物・溝・土坑	
E	平成30年度 (公財)群馬県埋蔵文化財調 査事業団	町道敷設 本調査	711m ² (711m ²)	(縄文) 早期前葉・後期前葉土坑21 (中近世) 插立柱建物群	文献 177.219.247	

坑11基が検出された。第8次調査は個人専用住宅建設に先立って実施され、トレンチ調査により縄文時代前期後半の包含層が確認されたが、顕著な遺構は検出されなかった。

第9次～第11次調査は平成18年度に実施された。第9・10次調査は林地区園芸施設整備事業（水特法事業）に先立って実施された。第9次調査では縄文時代後期前葉住居跡2軒、配石遺構24基が検出された。うち1軒からは炉体土器2個体をはじめ、堀之内1式新段階の良好な資料が得られた。第10次調査はトレンチ調査により縄文時代中期後半の包含層が確認されたが、顕著な遺構は検出されなかった。第11次調査は町営林土地改良事業（水特法事業）の事業採択前の埋蔵文化財の取り扱いを決定するための確認調査を実施した。本遺跡全体で農道や水路が計画されている箇所を中心にトレンチ7本を設定し調査した。その結果、遺構は判然としないものの縄文時代中期後半～後期前葉包含層や中近世の溝（堀）などが検出された。その後、平成25年度に本調査が実施され、後述する（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団によって明らかにされた林城跡の域の広がりを確認する調査となった。

第13次・第14次調査は平成19年度に実施された。第13次調査は個人専用住宅建設に先立って実施された。第14次調査は町道林線拡幅工事（水特法事業）に先立って実施され、縄文時代中期後半～末住居跡2軒、土坑15基が検出された。

第15次・第16次調査は平成20年度に実施された。第15次調査は町営住宅建設に先立って実施され、縄文時代中期後半住居跡1軒、後期初頭～後期前葉住居跡3軒、配石遺構22基、土坑4基が検出された。中期後半住居はいわゆる土器捨て場の様相を呈しており、完形土器・準完形土器が多く出土した。第16次調査は町道林線拡幅工事（水特法事業）に先立って実施され、縄文時代中期後半～後期前葉包含層、土坑11基のほか埋没河道が検出された。

第17次調査は平成21年度に個人専用住宅建設に先立って実施された。トレンチ調査により遺構は検出されなかったが縄文時代中期末～後期前葉包含層が検出された。

第18次調査は平成31年度（令和元年度）に町営団地造成（水特法事業）に伴い実施された。縄文後期の遺物集中箇所1箇所、土坑29基、溝状遺構1条が検出された。出土遺物に関しては、縄文後期前葉堀之内1式期のものが大部分を占めるが、遺構外出土遺物の中には前期前半・後半、中期中葉、後期初頭の遺物も混在する。特に前期後半の諸磯b式併行の北白川下層II式期の深鉢が出土しており、西日本との交流を示す資料といえる。

この他に第3図におけるA～E地点は（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団により発掘調査が実施された箇所である。

A地点は平成16年度に林地区工事用進入路建設工事に先立って実施された。拡幅部分の調査1415m²であったが、近～現代を含む時期不明の土坑8基と縄文土器、陶磁器片等の遺物が発見された。他に浅間山起源の青灰色を中心とする厚さ3cm程度の火山灰（浅間一粒川テフラ）の一次堆積層が確認された。

B地点は平成19年度に国道145号線及び町道新設工事に先立って実施された。縄文時代の遺構は前期前半住居跡3軒、中期前半住居跡1軒、土坑30基弱、陥れ穴13基が検出された。また調査区の西側長さ100mは中世城郭「林城」にあたり、堀7条と区画された生活面（郭）7か所（第I郭～第VII郭）を発見した。第III郭では中世から近世の掘立柱建物跡7棟を含むピット・土坑群を検出した。第III郭の西を区画する堀では土橋と木橋が発見され土橋の南壁には石垣が5段程度積まれていた。さらに第III郭と第V郭の間には水場遺構のため池2基が発見され、石垣と板材による土留めを伴っていた。調査区東側では一辺60m規模の中世屋敷が発見され、掘立柱建物跡は39棟認定されている。竪穴遺構は3基検出され、うち1基は柱穴を持つ建物で、方形の炉にはほぼ完形の内耳鍋が据えられていた。炉の北側床面には2つ折りにされた半円形の紙片（漆紙文書）も発見された。

C地点は平成20年度に国道145号線新設工事に先立って実施された。縄文時代の遺構は前期土坑7基が検

出された。中世は林城第Ⅰ・Ⅱ郭を調査した。第Ⅰ郭では整地盛土層が確認され、その下で土坑2基とピット13基が検出された。土坑1基からは馬歯上下と頸の一部が出土した。またピットの配列から掘立柱建物跡が想定された。第Ⅱ郭は近世以降の改変が著しくピット4基の検出に留まった。第Ⅱ郭南側では近世礎石建物跡が、北側では土取穴が6基重複して検出された。うち1基からはほぼ全身骨格の馬骨4頭分が出土している。建物跡下位には江戸時代の土坑墓、建物と重複して永楽錢を伴い炭を多く混入する土坑が検出された。

D地点は平成21年度に町道新設工事及び国道取り付け工事に先立って実施された。縄文時代の遺構は調査区西端で前期後半（諸磯式期）の住居跡1軒、竪穴遺構1基、土坑2基が検出された。中世は竪穴遺構2基、礎石建物跡2棟、掘立柱建物跡9棟、溝7条、土坑48基、ピット609基が検出され、林城の第Ⅶ郭の範囲が北側に広がっていることが確認された。

E地点は平成30年度にハッカ場バイパス南に接する取付道路部分の建設工事に伴い実施された。隣接するB区および町11次調査でも検出された中世屋敷の一画に属する掘立柱建物群を調査し、系統付けた建物の変遷が検討された。第2面からは、縄文時代早期後葉・後期前葉の土坑が21基検出された。

第4節 基本層序

本遺跡の基本層序は第5図のA地点で確認した。発掘調査での所見と併せると以下のようになる。

第I層 暗褐色土

いわゆる表土で、畑の耕作土である。締まりは上位が弱く、下位はやや強い。

第II層 暗褐色土

粘性なし締まりややなし、ローム粒・軽石粒を含む。

第III層 暗褐色土層

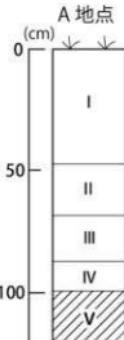
縄文時代中期後半～後期前葉にかけての包含層である。粘性なし締まりややなし、ローム粒・軽石粒を少量含み、川砂を含む。

第IV層 明褐色土

いわゆる漸移層でローム粒・軽石粒を多く含み、締まりはやや強い。

第V層 黄褐色土

いわゆる関東ローム層でスコリアを少量含んでいる。粘性・締まりとともに強い。



第4図 基本土層（1/20）

註

1. 文獻2。
2. 主に下位・中位段丘で発見された天明泥流に埋もれた遺跡を追加・範囲拡張した他、遺跡名の変更を実施した。その改訂版の詳細については「マッピングぐんま 遺跡・文化財」(<http://www2.wagmap.jp/pref/gunma/top/select.asp?npr=dtp-86/pl=3>)で参照願いたい。本書では第2表および本章にできるだけ最新情報を取り扱った。
3. 整理調査・報告書作成業務は令和5年1月まで実施された。
4. (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2004 「新田西沢遺跡 新田平林遺跡」
5. 前庭部においても2mにもおおよぶ厚さの灰層が検出されており、隈骨や押型文土器が出土している。今後は半地下部の灰層との関係の解明が注目される。また平成30年度、考古学研究室によりリサーチデザインを示した遺跡のパンフレットが作成された。
6. 文獻1・2・33・34・41。
7. 文獻2・9・10。
8. 文獻2・34・35・47。

9. 文献2・3・102・109・224。
10. 文献2・25・28。
11. 文献1・2・48・51・54・56・59・62・67・95・224。
12. 文献2・7・82・109・224。
13. 文献2・20・109。
14. 中引道彦 1998「水1式」の編分と構造に関する試論』「長野県小諸市水道跡発掘調査資料叢書」第三冊 水道跡発掘調査資料叢書刊行会
15. 文献1・2・14・16・49・77・78・112。以下田道跡。
16. 1・2・28・49。与喜屋に所在する。
17. 文献2。
18. 文献2。
19. 文献2。
20. 文献1・2・49・50・52・55。
21. 鳩恋村教育委員会 1981『諏原道路跡発掘調査概報』茂間山噴火による埋没村落の研究』
1994『埋没村落 諏原道路跡発掘調査概報(よみがえる延命寺)』
その他文献58・59・65・72など。
22. 文献46。なお、「背面金剛塔」は寺林寺参道に安置してある。
23. 文献1・2・17・20・49。
24. 文献26。
25. 文献66。

参考文献（第1・2表の文献番号に対応）

番号

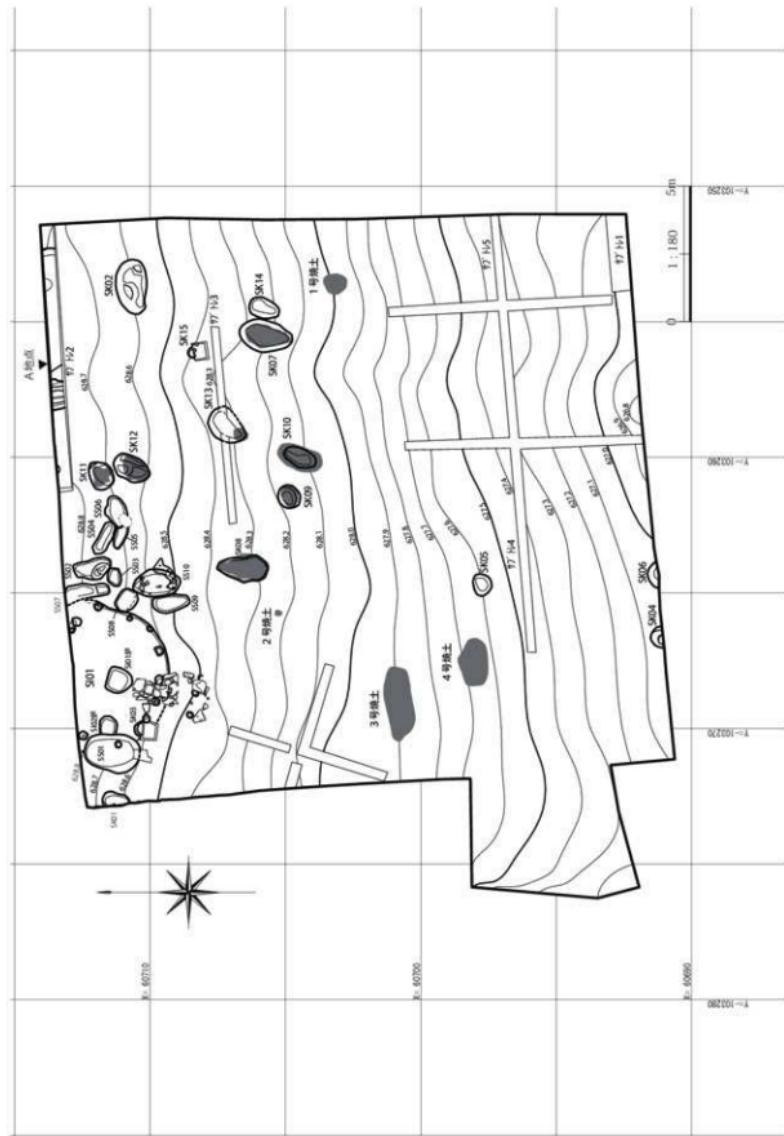
- 1 長野原町 1976 「長野原町誌」上巻
- 2 長野原町教育委員会 1990 「長野原町の道路一町内道路詳細分布調査」長野原町埋蔵文化財調査報告第1集
- 3 長野原町教育委員会 1990 「解説」長野原町埋蔵文化財調査報告第2集
- 4 長野原町教育委員会 1992 「[林中Ⅱ遺跡・井戸跡] 長野原町埋蔵文化財調査報告第3集
- 5 長野原町教育委員会 1995 「柳沢跡」長野原町埋蔵文化財調査報告第4集
- 6 長野原町教育委員会 1996 「[諏原遺跡] 長野原町埋蔵文化財調査報告第5集
- 7 長野原町教育委員会 1998 「[諏原遺跡] 上野原町埋蔵文化財調査報告第6集
- 8 長野原町教育委員会 2000 「[井戸跡] 上野原町埋蔵文化財調査報告第7集
- 9 長野原町教育委員会 2001 「[坪井遺跡] 長野原町埋蔵文化財調査報告第8集
- 10 長野原町教育委員会 2002 「[内藤遺跡] 上野原町埋蔵文化財調査報告第9集
- 11 長野原町教育委員会 2003 「[内藤遺跡Ⅱ] 上野原町埋蔵文化財調査報告第10集
- 12 長野原町教育委員会 2003 「[内藤遺跡Ⅲ] 上野原町埋蔵文化財調査報告第11集
- 13 長野原町教育委員会 2005 「[小林家代敷跡] 長野原町埋蔵文化財調査報告第12集
- 14 長野原町教育委員会 2004 「[内藤遺跡] 上野原町埋蔵文化財調査報告第13集
- 15 長野原町教育委員会 2004 「[林宮原跡] 長野原町埋蔵文化財調査報告第14集
- 16 長野原町教育委員会 2005 「[内藤遺跡] 上野原町埋蔵文化財調査報告第15集
- 17 長野原町教育委員会 2006 「[内藤遺跡] 上野原町埋蔵文化財調査報告第16集
- 18 長野原町教育委員会 2008 「[内藤遺跡Ⅳ] 上野原町埋蔵文化財調査報告第17集
- 19 長野原町教育委員会 2009 「[内藤遺跡] 上野原町埋蔵文化財調査報告第18集
- 20 長野原町教育委員会 2010 「[内藤遺跡] 上野原町埋蔵文化財調査報告第19集
- 21 長野原町教育委員会 2010 「[林中Ⅰ・遺跡Ⅴ] 長野原町埋蔵文化財調査報告第20集
- 22 長野原町教育委員会 2011 「[内藤跡Ⅵ] 上野原町埋蔵文化財調査報告第21集
- 23 長野原町教育委員会 2012 「[内藤跡Ⅶ] 長野原町埋蔵文化財調査報告第22集
- 24 長野原町教育委員会 2012 「[林宮原跡] 長野原町埋蔵文化財調査報告第23集
- 25 熊本電力伊馬支社・長野原町教育委員会 2013 「[内藤Ⅱ遺跡] 長野原町埋蔵文化財調査報告第24集
- 26 長野原町教育委員会 2013 「[内藤跡Ⅷ] 長野原町埋蔵文化財調査報告第25集
- 27 長野原町教育委員会 2013 「[三平Ⅰ遺跡] 上野原町埋蔵文化財調査報告第26集
- 28 長野原町教育委員会 2013 「[内藤跡Ⅸ] 長野原町埋蔵文化財調査報告第27集
- 29 長野原町教育委員会 2014 「[内藤跡Ⅹ] 長野原町埋蔵文化財調査報告第28集
- 30 柳川京電力伊馬支社・長野原町教育委員会 2014 「[諏原IV道路] 長野原町埋蔵文化財調査報告第29集
- 31 長野原町教育委員会 2015 「[林地] [内藤跡] 長野原町埋蔵文化財調査報告第30集
- 32 長野原町教育委員会 2016 「[内藤跡Ⅺ] 長野原町埋蔵文化財調査報告第31集
- 33 長野原町教育委員会 2017 「[内藤跡Ⅻ] 長野原町埋蔵文化財調査報告第32集
- 34 長野原町教育委員会 2018 「[内藤跡ⅩV] 長野原町埋蔵文化財調査報告第33集
- 35 長野原町教育委員会 2018 「[福元跡] 長野原町埋蔵文化財調査報告第34集
- 36 長野原町教育委員会 2019 「[内藤跡ⅩVI] 長野原町埋蔵文化財調査報告第35集
- 37 長野原町教育委員会 2019 「[長野原跡] [遺跡群] 長野原町埋蔵文化財調査報告第36集
- 38 長野原町教育委員会 2019 「[長野原跡] [遺跡群] (2)」長野原町埋蔵文化財調査報告第37集
- 39 長野原町教育委員会 2020 「[内藤跡] [X]」長野原町埋蔵文化財調査報告第38集
- 40 長野原町教育委員会 2020 「[横堀跡] [遺跡群]」長野原町埋蔵文化財調査報告第39集
- 41 沙留發治作会社・長野原町教育委員会 2020 「赤井川遺跡」長野原町埋蔵文化財調査報告第40集
- 42 長野原町教育委員会 2020 「[山根遺跡] [X]」長野原町埋蔵文化財調査報告第41集
- 43 長野原町教育委員会 2020 「[林中Ⅰ・遺跡] [X]」長野原町埋蔵文化財調査報告第42集
- 44 長野原町教育委員会 2020 「尾坂遺跡」長野原町埋蔵文化財調査報告第43集

- 45 長野原町教育委員会 2020 「林地区遺跡群（2）」長野原町埋蔵文化財調査報告第 44 集
- 46 長野原町教育委員会 2020 「古都御陵調査結果」長野原町埋蔵文化財調査報告第 45 集
- 47 長野原町教育委員会 2021 「内遺跡群（2）」長野原町埋蔵文化財調査報告第 46 集
- 48 長野原町教育委員会 2021 「郡馬根抵定史跡 勝場木石道時代住居跡」保存移築事業報告書
- 49 小山富治郎編 1936 「古賀郡史」古賀教育学会
- 50 山崎一・山川武夫 1972 「古賀郡風景史」
- 51 瑠野新一 1972 「豊島県佐喜郡長野原町（前馬祖遺跡史跡）勝場木道跡」
- 52 山崎一 1978 「豊島祖の城址の研究」下巻
- 53 市 隆之 1979 「石張道遺跡」上野原町教育委員会・高崎鉄道管理局
- 54 郡馬祖 1988 「郡馬祖史」資料編 1
- 55 郡馬祖教育委員会 1988 「郡馬祖の中世城跡図鑑」
- 56 長野原町教育委員会 1989 「長野原町の文化」
- 57 長野原町 1993 「長野原町の自然」ハッガムダム湖不定地及び関連地域文化財調査報告書
- 58 郡馬祖立歴史博物館 1995 第 52 回の画展「天明の魔境抜け」
- 59 上野新編 1999 「郡馬祖跡大解説」
- 60 望郷野原文化資料館 2000 第 30 回企画展「利根川流域の欄文草創期」
- 61 かみつけの博物館 2000 第 16 回特別展「縄にいてて考る」
- 62 郡馬祖教育委員会 2001 「郡馬の歴史（原始時代編）」
- 63 望郷野原文化資料館 2004 第 39 回企画展「底の突いた土器」
- 64 郡馬祖立歴史博物館 2004 第 77 回企画展「新見考古遺跡展 郡馬駿賀情報」石室の入り口を通り抜けると…」
- 65 望郷文ミージアム 2004 「深間山大廻」
- 66 那須大学教育学部 2004 「那須古在地博士 調査収集考古植物調査資料日録」雄山閣
- 67 (財) 郡馬文編 2005 「郡馬の遺跡 2 紀元時代」
- 68 (財) 郡馬文編 2005 「郡馬の遺跡 7 中世～近代」
- 69 かみつけの博物館 2007 第 16 回別展「江戸時代、浅間山大噴火」
- 70 斎田昌平 2007 「日本の美術第 495 編 文化・江戸・草創期・早朝」至文堂
- 71 小林達雄編 2008 「駿賀町出土土器」
- 72 関 俊明 2010 「浅間山大噴火の爪痕～明神浅間山災害遺跡～」新星社
- 73 (公財)郡馬文編 2013 「自然災害と考古学」
- 74 宮坂武男 2013 「伝説をぐる城跡の山城と館」上野原「霞光出版」
- 75 郡馬祖教育委員会 2013 「郡馬祖の栽培植物－本文－『表記版』」
- 76 関 俊明・浦山康彦 1999 「天明～3 年浅間災害に関する地域的研究」『研究紀要 16』(財) 郡馬文
- 77 白石光洋・山口造弘 1999 「外輪線＝道跡群（その構成層と土器）」『郡馬考古手稿 9』郡馬土器類会
- 78 富田幸彦 2000 「外輪線（1）跡跡山下の歩道跡」『郡馬考古手稿 10』郡馬土器類会
- 79 桐生秀雄 2000 「天系統の土器について－例称「郡馬式土器」成立の可能性」『小諸市内 3：三子塚遺跡群、三田原遺跡群、弓下道跡、石神遺跡群、郡上遺跡、東山遺跡、西山遺跡、深間遺跡』本編より「信濃古墳帶御所文化財発掘調査報告書第 17 号」(財) 郡馬文
- 80 谷藤保津・伊藤耕二・今井信一 2002 「郡馬郡出土の土器と石器装飾貝具集」『研究紀要 20』(財) 郡馬文
- 81 関根慎二 2003 「豊島村における利根川式土器の地盤」第 16 回講演セミナー「中期後半の再検討」隠岐セミナーの会
- 82 石田直 2004 「郡馬祖北西部における古の引びき窯の構築技術をめぐって—二野原町の事例を中心として—」『研究紀要 22』(財) 郡馬文
- 83 関 俊明 2005 「天明三年浅間山大噴火災害遺跡の調査と研究」『日本歴史』吉川弘文館
- 84 関 俊明 2006 「天明災害はどう対応したか」「くまん史研究会」24 郡馬祖立文書館
- 85 中央防災会議 2006 「1783 年大噴火開拓火災報告書」内閣府
- 86 藤巻京吾 2007 「鶴文時代の里の内宿施設について横里中村遺跡「研究紀要 25」(財) 郡馬文
- 87 谷藤保津 2007 「加賀式の土器の系譜を引く「郡馬群一開東門における後期初頭の様相」」『第 20 回鶴文セミナー』中期終末から後期初頭の再検討「隠岐セミナーの会
- 88 関根慎二 2008 「浅間山を越す萬葉文」『研究紀要 26』(財) 郡馬文
- 89 山口造弘 2009 「ノア平野記 31 号引出地出土土器の再検討」『研究紀要 27』(財) 郡馬文
- 90 藤巻京吾 2009 「ハッガムダム建設地における調査遺跡－直立の成形法による土器物語－」『研究紀要 27』(財) 郡馬文
- 91 黒澤照弘・大西祐弘 2009 「筑紫の「郡馬式」郡馬町内外の後半のにおける生産と流通」『第 19 回九州陶磁研究会 江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通』開催・東北・北海道
- 92 山口造弘 2010 「中部地方における朝鮮経由輸入紋章土器の編年－ハッガムダム建設跡出土資料の位置付け－」『研究紀要 28』(財) 郡馬文
- 93 藤巻本淳 2010 「中部地方における朝鮮経由輸入紋章土器の編年－ハッガムダム建設跡出土資料の位置付け－」『研究紀要 28』(財) 郡馬文
- 94 鈴木健雄 2010 「中部地方における朝鮮経由輸入紋章土器の編年－ハッガムダム建設跡出土資料の位置付け－」『研究紀要 28』(財) 郡馬文
- 95 山口造弘 2013 「佐喜山中城における土器種別分析と加賀式古墳群を中心として」『研究紀要 31』(公財) 郡馬文
- 96 黒澤照弘 2013 「天明一年 8 月 5 日の様相」『江戸遺跡研究会報第 133』江戸遺跡研究会
- 97 黒澤照弘 2013 「天明三年浅間山大噴火災害（東宮遺跡）」『江戸遺跡研究会報第 134』江戸遺跡研究会
- 98 黒澤照弘 2013 「東宮遺跡における天明三年新嘗八日五日の根付一調成果から推察する天明災害被災の状況－」『研究紀要 31』(公財) 郡馬文
- 99 伊藤美香・小原奈々・黒澤照弘 2013 「天明三年浅間山大噴火災害の遺跡について」『研究紀要 31』(公財) 郡馬文
- 100 大堀昌彦 2014 「天明三年浅間山大噴火災害の遺跡について」『研究紀要 31』(公財) 郡馬文
- 101 山口造弘 2015 「佐喜山中流域における「郷土式」の一様相と報告書『長野原一本松遺跡（6）』を中心として」『研究紀要 33』(公財) 郡馬文
- 102 小川卓也・井田忠志・河川知則 2015 「北陸東海地域における初期加工工場の様相」『第 28 回鶴文セミナー』鶴文後期土器研究の現状と課題「隠岐セミナーの会
- 103 望郷文編・楢崎慎一郎・伊登健 2016 「那須郡中村山遺跡（中村山遺跡）の近傍と同地域に於ける天明崩壊的研究」『研究紀要 34』(公財) 郡馬文
- 104 山口造弘 2016 「御所古跡紅葉谷曲隣壁土器について「柳原壁」の證明－「地祇考古学」地域考古学研究会
- 105 大堀昌彦 2016 「天明三年浅間山大噴火下土の守隨跡」『韻馬文化 327』郡馬祖地城文化研究協議会
- 106 藤巻京吾・佐々木登健 2016 「天明初年の考古学的検討－郡馬祖地城に於いて－」『郡馬文 327』郡馬祖地城文化研究協議会
- 107 谷藤保津・谷巻京吾 2017 「郡馬祖出土土器の種類、石器、石力集成－鶴文時代初期前中期(1)－」『研究紀要 35』(公財) 郡馬文
- 108 石野茂 2017 「「家屋型」集落の構造－郡馬祖地城中村遺跡を中心とした分析－」『鶴文時代 28：幾何文代文化研究会
- 109 谷藤保津・伊藤耕二・鈴木弘人郎 2018 「那須郡中村山の鶴文時代遺跡」『ぐまな地域文化』第 51 号(一部)郡馬地域文化振興会
- 110 山口造弘 2018 「ハッガムダム地域の鶴文時代遺跡」『ぐまな地域文化』第 51 号(一部)郡馬地域文化振興会
- 112 大木紳一 2019 「郡馬祖北外部川山流域の後期勢力遺跡について」『研究紀要 37』(公財) 郡馬文
- 113 (財) 郡馬文・国交省 2003 「長野原一本松遺跡」ハッガムダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第 1 集
- 114 (財) 郡馬文・国交省 2003 「ハッガムダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第 2 集
- 115 (財) 郡馬文・国交省 2003 「日々戸遺跡、中村山遺跡、上原遺跡、横里中村遺跡」ハッガムダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第 3 集
- 116 (財) 郡馬文・国交省 2003 「日々戸遺跡（2）、中村山遺跡（2）、西ノ口遺跡、奥原中村遺跡」ハッガムダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第 4 集
- 117 (財) 郡馬文・国交省 2003 「7400m 中村山遺跡（2）」ハッガムダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第 5 集
- 118 (財) 郡馬文・国交省 2005 「田園山形曲隣壁遺跡（2）」ハッガムダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第 6 集
- 119 (財) 郡馬文・国交省 2006 「6400m 中村山遺跡（3）」ハッガムダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第 7 集
- 120 (財) 郡馬文・国交省 2006 「7400m 中村山遺跡（4）」ハッガムダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第 8 集
- 121 (財) 郡馬文・国交省 2006 「7400m B 遺跡、廣石 A 遺跡、二沢遺跡」ハッガムダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第 9 集
- 122 (財) 郡馬文・国交省 2006 「櫛原中村遺跡（4）」ハッガムダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第 10 集

- 123 (財) 郡理文・國交省 2006 「立原一本松跡」八ヶ岳ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第11集
- 124 (財) 郡理文・國交省 2007 「立原一本松跡」八ヶ岳ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第12集
- 125 (財) 郡理文・國交省 2007 「立原一本松跡」八ヶ岳ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第13集
- 126 (財) 郡理文・國交省 2007 「立原一本松跡」(5) 八ヶ岳ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第14集
- 127 (財) 郡理文・國交省 2008 「立原一本松跡」(1) 原野遺跡(2) 八ヶ岳ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第15集
- 128 (財) 郡理文・國交省 2008 「立原一本松跡」(3) 原野遺跡(4) 八ヶ岳ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第17集
- 129 (財) 郡理文・國交省 2008 「立原一本松跡」(1) 八ヶ岳ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第18集
- 130 (財) 郡理文・國交省 2008 「立原一本松跡」(3) 八ヶ岳ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第19集
- 131 (財) 郡理文・國交省 2008 「立原一本松跡」(6) 八ヶ岳ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第20集
- 132 (財) 郡理文・國交省 2008 「立原一本松跡」(7) 八ヶ岳ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第22集
- 133 (財) 郡理文・國交省 2008 「立原一本松跡」(1) 八ヶ岳ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第23集
- 134 (財) 郡理文・國交省 2008 「立原一本松跡」(4) 八ヶ岳ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第24集
- 135 (財) 郡理文・國交省 2009 「立原一本松跡」(2) 八ヶ岳ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第26集
- 136 (財) 郡理文・國交省 2009 「立原一本松跡」(2) 八ヶ岳ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第27集
- 137 (財) 郡理文・國交省 2009 「立原一本松跡」(5) 八ヶ岳ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第28集
- 138 (財) 郡理文・國交省 2009 「立原一本松跡」(8) 八ヶ岳ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第29集
- 139 (財) 郡理文・國交省 2009 「立原一本松跡」(9) 八ヶ岳ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第30集
- 140 (財) 郡理文・國交省 2010 「立原一本松跡」(10) 八ヶ岳ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第33集
- 141 (財) 郡理文・國交省 2010 「立原一本松跡」(11) 八ヶ岳ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第34集
- 142 (財) 郡理文・國交省 2010 「立原一本松跡」(2) 八ヶ岳ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第35集
- 143 (財) 郡理文・國交省 2011 「立原一本松跡」(1) 八ヶ岳ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第36集
- 144 (財) 郡理文・國交省 2012 「立原一本松跡」(2) 八ヶ岳ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第37集
- 145 (財) 郡理文・國交省 2012 「立原一本松跡」(2) 八ヶ岳ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第38集
- 146 (財) 郡理文・國交省 2012 「立原一本松跡」(2) 八ヶ岳ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第39集
- 147 (財) 郡理文・國交省 2013 「立原一本松跡」(6) 八ヶ岳ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第40集
- 148 (公財) 郡理文・國交省 2013 「立原一本松跡」(13) 八ヶ岳ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第41集
- 149 (公財) 郡理文・國交省 2014 「立原一本松跡」(14) 八ヶ岳ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第42集
- 150 (公財) 郡理文・國交省 2014 「立原一本松跡」(15) 八ヶ岳ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第43集
- 151 (公財) 郡理文・國交省 2014 「立原一本松跡」(14) 八ヶ岳ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第44集
- 152 (公財) 郡理文・國交省 2015 「立原一本松跡」(1) 八ヶ岳ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第45集
- 153 (公財) 郡理文・國交省 2015 「立原一本松跡」(1) 原野遺跡(1) 野原遺跡(2) 八ヶ岳ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第46集
- 154 (公財) 郡理文・國交省 2016 「立原一本松跡」(2) 八ヶ岳ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第47集
- 155 (公財) 郡理文・國交省 2016 「立原一本松跡」(2) 八ヶ岳ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第48集
- 156 (公財) 郡理文・國交省 2017 「立原一本松跡」(2) 八ヶ岳ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第49集
- 157 (公財) 郡理文・國交省 2017 「立原一本松跡」(2) 八ヶ岳ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第50集
- 158 (公財) 郡理文・國交省 2017 「立原一本松跡」(3) 八ヶ岳ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第51集
- 159 (公財) 郡理文・國交省 2017 「立原一本松跡」(3) 八ヶ岳ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第52集
- 160 (公財) 郡理文・國交省 2018 「立原一本松跡」(4) 八ヶ岳ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第53集
- 161 (公財) 郡理文・國交省 2018 「立原一本松跡」(1) 西宮遺跡(2) 八ヶ岳ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第54集
- 162 (公財) 郡理文・國交省 2018 「立原一本松跡」(3) (2) 八ヶ岳ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第55集
- 163 (公財) 郡理文・國交省 2018 「立原一本松跡」(3) 八ヶ岳ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第56集
- 164 (公財) 郡理文・國交省 2018 「立原一本松跡」(4) 八ヶ岳ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第57集
- 165 (公財) 郡理文・國交省 2018 「立原一本松跡」(5) 八ヶ岳ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第58集
- 166 (公財) 郡理文・國交省 2018 「立原一本松跡」(1) 八ヶ岳ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第59集
- 167 (公財) 郡理文・國交省 2018 「立原一本松跡」(2) 八ヶ岳ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第60集
- 168 (公財) 郡理文・國交省 2019 「立原一本松跡」(3) 八ヶ岳ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第61集
- 169 (公財) 郡理文・國交省 2019 「立原一本松跡」(4) 八ヶ岳ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第62集
- 170 (公財) 郡理文・國交省 2019 「立原一本松跡」(5) 八ヶ岳ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第63集
- 171 (公財) 郡理文・國交省 2019 「立原一本松跡」(2) 八ヶ岳ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第64集
- 172 (公財) 郡理文・國交省 2019 「立原一本松跡」(2) 西久保遺跡(2) 八ヶ岳ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第65集
- 173 (公財) 郡理文・國交省 2019 「立原一本松跡」(3) 八ヶ岳ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第66集
- 174 (公財) 郡理文・國交省 2020 「立原一本松跡」(2) 八ヶ岳ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第67集
- 175 (公財) 郡理文・國交省 2020 「立原一本松跡」(3) 八ヶ岳ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第68集
- 176 (公財) 郡理文・國交省 2020 「立原一本松跡」(2) 八ヶ岳ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第69集
- 177 (公財) 郡理文・國交省 2020 「立原一本松跡」(2) (2) 八ヶ岳ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第70集
- 178 (公財) 郡理文・國交省 2020 「立原一本松跡」(2) (2) 八ヶ岳ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第71集
- 179 (公財) 郡理文・國交省 2020 「立原一本松跡」(3) (2) 八ヶ岳ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第72集
- 180 (公財) 郡理文・國交省 2021 「立原一本松跡」(1) 八ヶ岳ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第73集
- 181 (公財) 郡理文・國交省 2021 「立原一本松跡」(5) 三笠宮跡(2) 八ヶ岳ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第74集
- 182 (公財) 郡理文・國交省 2021 「二社平遺跡・石道遺跡・石塚1号墳」八ヶ岳ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第75集
- 183 (公財) 郡理文・國交省 2021 「立原一本松跡」(6) 八ヶ岳ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第76集
- 184 (公財) 郡理文・國交省 2021 「立原一本松跡」(7) 八ヶ岳ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第77集
- 185 (公財) 郡理文・國交省 2021 「立原一本松跡」(4) 八ヶ岳ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第78集
- 186 (財) 郡理文 1998 「野原野原寺跡・野原野原寺跡・野原野原寺跡・野原野原寺跡」(財) 郡理文調査報告書 第240号
- 187 郡理文・(公財) 郡理文 2012 「立原一本松跡」社会資本整備連合会事業会員(財团法人山梨県植物園)長野草津町立考古学発掘監修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(公財) 郡理文調査報告書 第546集
- 188 國學院大學文部學考古學研究室 2017 「群馬縣吾妻郡長野原町野原家以降遺跡」2014年度発掘調査報告書 國學院大學文部學考古學實習報告 第53集
- 189 國學院大學文部學考古學研究室 2020 「群馬縣吾妻郡長野原町野原家以降遺跡」第2次、第3次発掘調査報告書 國學院大學文部學考古學實習報告 第56集
- 190 國學院大學文部學考古學研究室 2015-2019「地説明会資料「城原以降遺跡発掘調査(第2次~第6次調査)」
- 191 古川康浩 2019 「豊島佐佐木以降遺跡における縄文期人の発掘調査」(日本考古學協会第85回年會 研究發表要旨)
- 192 近藤 翔 2019 「東家以降遺跡出土の縄文期人骨」(日本考古學協会第85回年會 研究發表要旨)
- 193 宮崎 繩 2019 「東家以降遺跡の縄文早期人骨における同体分析」(日本考古學協会第85回年會 研究發表要旨)
- 194 舟橋信太郎・水野文哉 2019 「ミコンドリアDNAからみた住居以降遺跡出土人骨の遺伝的系統」(日本考古學協会第85回年會研究發表要旨)
- 195 (財) 郡理文 1995 「年報14」
- 196 (財) 郡理文 1996 「年報15」
- 197 (財) 郡理文 1997 「年報16」
- 198 (財) 郡理文 1998 「年報17」
- 199 (財) 郡理文 1999 「年報18」
- 200 (財) 郡理文 2000 「年報19」
- 201 (財) 郡理文 2001 「年報20」

- 202 (財) 郡理文 2002 「年報 21」
 203 (財) 郡理文 2003 「年報 22」
 204 (財) 郡理文 2004 「年報 23」
 205 (財) 郡理文 2005 「年報 24」
 206 (財) 郡理文 2006 「年報 25」
 207 (財) 郡理文 2007 「年報 26」
 208 (財) 郡理文 2008 「年報 27」
 209 (財) 郡理文 2009 「年報 28」
 210 (財) 郡理文 2010 「年報 29」
 211 (財) 郡理文 2011 「年報 30」
 212 (財) 郡理文 2012 「年報 31」
 213 (公財) 郡理文 2013 「年報 32」
 214 (公財) 郡理文 2014 「年報 33」
 215 (公財) 郡理文 2015 「年報 34」
 216 (公財) 郡理文 2016 「年報 35」
 217 (公財) 郡理文 2017 「年報 36」
 218 (公財) 郡理文 2018 「年報 37」
 219 (公財) 郡理文 2019 「年報 38」
 220 (公財) 郡理文 2020 「年報 39」
 221 (財) 郡理文 1995 「道跡は今 第 1 号」
 222 (財) 郡理文 1996 「道跡は今 第 2 号」
 223 (財) 郡理文 1996 「道跡は今 第 3 号」
 224 (財) 郡理文 1997 「道跡は今 第 4 号」
 225 (財) 郡理文 1997 「道跡は今 第 5 号」
 226 (財) 郡理文 1998 「道跡は今 第 6 号」
 227 (財) 郡理文 1998 「道跡は今 第 7 号」
 228 (財) 郡理文 2000 「道跡は今 第 8 号」
 229 (財) 郡理文 2000 「道跡は今 第 9 号」
 230 (財) 郡理文 2001 「道跡は今 第 10 号」
 231 (財) 郡理文 2003 「道跡は今 第 11 号」
 232 (財) 郡理文 2003 「道跡は今 第 12 号」
 233 (財) 郡理文 2004 「道跡は今 第 13 号」
 234 (財) 郡理文 2004 「道跡は今 第 14 号」
 235 (財) 郡理文 2007 「道跡は今 第 15 号」
 236 (財) 郡理文 2008 「道跡は今 第 16 号」
 237 (財) 郡理文 2009 「道跡は今 第 17 号」
 238 (財) 郡理文 2010 「道跡は今 第 18 号」
 239 (財) 郡理文 2011 「道跡は今 第 19 号」
 240 (財) 郡理文 2012 「道跡は今 第 20 号」
 241 (財) 郡理文 2013 「道跡は今 第 21 号」
 242 (財) 郡理文 2014 「道跡は今 第 22 号」
 243 (財) 郡理文 2015 「道跡は今 第 23 号」
 244 (財) 郡理文 2016 「道跡は今 第 24 号」
 245 (財) 郡理文 2017 「道跡は今 第 25 号」
 246 (財) 郡理文 2018 「道跡は今 第 26 号」
 247 (財) 郡理文 2019 「道跡は今 第 27 号」
 248 羽原正洋 2008 「人明尼山に呑まれた星教の謎—長野原町東宮遺跡—」『埋文郡馬 47』(公財) 郡理文
 249 般闘一郎 2012 「東宮遺跡—ハッカで発掘された江戸時代—」『埋文郡馬 56』(公財) 郡理文
 250 別嶋泰一・中沢 信 2015 「東宮遺跡・西宮遺跡—を現した江戸時代の川原宿村—」『埋文郡馬 59』(公財) 郡理文
 251 別嶋泰一・中沢敏也 2015 「石川原遺跡—見えてきた江戸時代の川原宿村—」『埋文郡馬 60』(公財) 郡理文
 252 中山 信 2016 「下ノ湯原遺跡—天明元年泥流の煙突下に隠していた江戸時代の石住往跡—」『埋文郡馬 61』(公財) 郡理文
 253 田代 俊明・小林茂夫 2016 「久々の道跡—天明元年泥流の煙突下に隠していた江戸時代の石住往跡—」『埋文郡馬 61』(公財) 郡理文
 254 山口道弘 2016 「東宮遺跡—坂を現した江戸時代前の東宮集落—」『埋文郡馬 62』(公財) 郡理文
 255 石川 勇・鶴田野正洋 2017 「東宮遺跡—坂を現した江戸時代前の東宮集落—」『埋文郡馬 62』(公財) 郡理文
 256 宮下 真・石川 勇・間 義要・鶴田野正洋 2017 「東宮遺跡—坂を現した江戸時代前の東宮集落—」『埋文郡馬 63』(公財) 郡理文
 257 (公財) 郡理文 2015 平成 27 年度調査泥跡発表会「東宮遺跡・坂を現した江戸時代の泥跡」
 258 (公財) 郡理文 2016 平成 28 年度調査泥跡発表会「挖掘されたハッカ場の軌跡」
 259 (公財) 郡理文・長野原町教育委員会 2018 平成 30 年度調査泥跡発表会「挖掘されたハッカ場の軌跡」
 260 (公財) 郡理文 2012 平成 24 年度最新情報報第 1 号「東宮遺跡—ハッカ場で発掘された江戸時代」
 261 (公財) 郡理文 2016 平成 28 年度最新情報報第 1 号「古代地域の構文化・古事記の心」
 262 (公財) 郡理文 2017 平成 29 年度最新情報報第 1 号「よみがえった江戸時代の村—天明三年伐闇配流下の発掘調査から」
 263 (公財) 郡理文 2018 平成 29 年度最新情報報第 3 号「一万年づく穀文化—穀文クッキーからおつきこみまで—」
 264 (公財) 郡理文 2019 平成 30 年度最新情報報第 3 号「古代の装身具」
 265 (公財) 郡理文 2019 和合元年度最新情報報第 1 号「八ヶ郷の雛文時代」
 266 (公財) 郡理文 2019 和合元年度最新情報報第 2 号「江戸時代の天明泥流に被災した村」
 267 佐島栄治 2016 埋蔵文化財講座「天明二年の地城社会—綿原の発展からハッカ場ダメまで—」
 268 黒澤弘 2014 埋蔵文化財講座「天明の火間山噴火—その時、東宮遺跡の人々はどうしたか?」
 269 山口道弘 2016 埋蔵文化財講座「久々戸門跡横山の敷石住居」
 270 般森康広 2016 埋蔵文化財講座「発掘された郡馬の城」
 271 田代 俊明 2016 埋蔵文化財講座「江戸・江戸家一・天明二年の塗垣絆け前日の風景—」
 272 長野原町教育委員会 2022 「林中郡馬 I 遺跡Ⅹ」長野原町埋蔵文化財調査報告第 48 集
 273 長野原町教育委員会 2022 「林中郡馬 I 遺跡Ⅺ」長野原町埋蔵文化財調査報告第 49 集

第5図 林中原遺跡刈全体図 (1/180)



第3章 検出された遺構と遺物

第1節 概要

今回の発掘調査は林中原Ⅰ遺跡の第12次調査にあたる。検出された遺構は竪穴住居（敷石住居）2軒、配石遺構10基、土坑16基、焼土4ヶ所である。出土した遺物の種類は、土器、土製品、石器、土師器、陶磁器で、その数量はテンバコ60箱を数えた。調査地点は林中原Ⅰ遺跡の中央やや北寄りに位置し、第16次調査の調査地点と隣接する。また、第4・9・15次調査の調査地点とも近い距離にある。調査区内には2本の谷地（押手沢によって開削された自然流路か）が南北に走っており、遺構はその間の微高地である北西隅に集中して検出された。遺物は遺構周辺はもちろんだが、調査区全域で出土しており、調査区北側では縄文時代後期前葉、調査区南側では中期後半の遺物が出土する傾向が看取された。

調査段階では配石遺構（SI01）としていた炉跡を住居跡（SI02）として報告する。

第2節 竪穴住居跡

SI01（第6～19図／PL 4～6・20～24）

位置 調査区北西。

重複関係 SI02・SS01・SK03と重複し、SI02・SK03を切り、SS01に切られる。また、SS07・SS08と隣接する。

遺存状況 北側の1/4が調査区外に延びているが、全体的に遺存状態は良好。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

平面形態と規模 平面形は主体部の床面範囲が長軸を副軸に不整梢円形を呈し、規模は主体部の主軸検出部が369cm、推定で約495cm、副軸は570cm、確認面からの深さは北側で最深16cmを測る。張り出し部は長さ約189cm、幅約168cmを測る。床面積は主体部の検出部が16.3m²、復元で21.5m²、張り出し部は3.1m²で、合計24.6m²を測る。

主軸方向 N-16°-W。

床面 ほぼ水平である。

壁・壁溝 ほぼ垂直に立ち上がる。壁高は北壁で30cmを測る。壁溝は認められない。

柱穴 全体でP1～P13が検出されている。壁に沿って配置されているP1～P10までが主柱穴で、P12・P13は柄部の柱穴である。平面形は円形～梢円形を基調とする。それぞれの規模を第3表に示す。

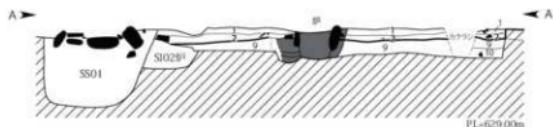
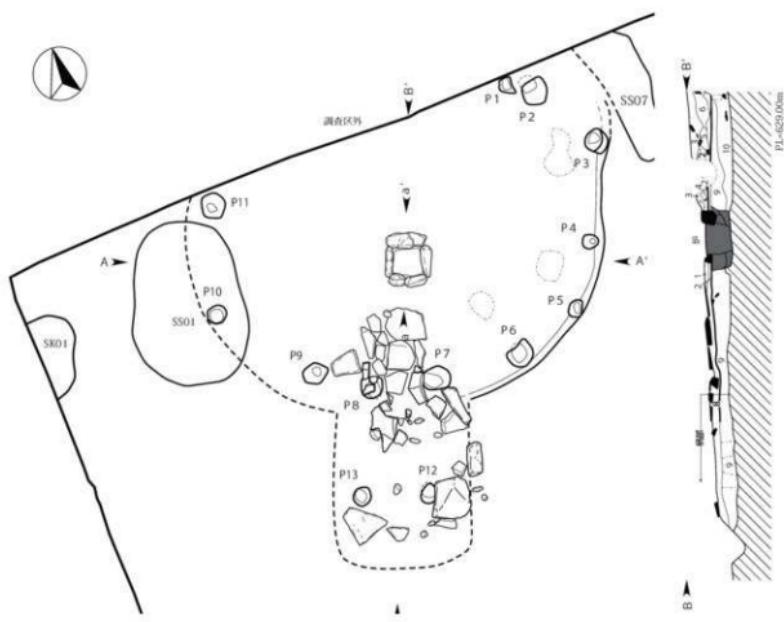
第3表 SI01柱穴計測表

	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12	P13
長軸長(cm)	24	36	32	20	22	36	36	30	32	24	34	24	25
短軸長(cm)	20	32	28	18	18	32	29	28	26	22	32	22	22
深さ(cm)	11	50	73	25	62	52	7	65	62	54	48	52	52

炉跡 石圓炉である。主体部の中央やや南寄りに位置する。平面形は方形を呈し、20～50cm大の礫を一辺約50cmの方形に区画している。この石には石皿が2点（第19図64・65）転用されていた。

その他の施設 なし。

遺物検出状況 住居内の炉跡や柱穴周りで床面よりやや浮いた1層と2層の境界で出土が目立った。



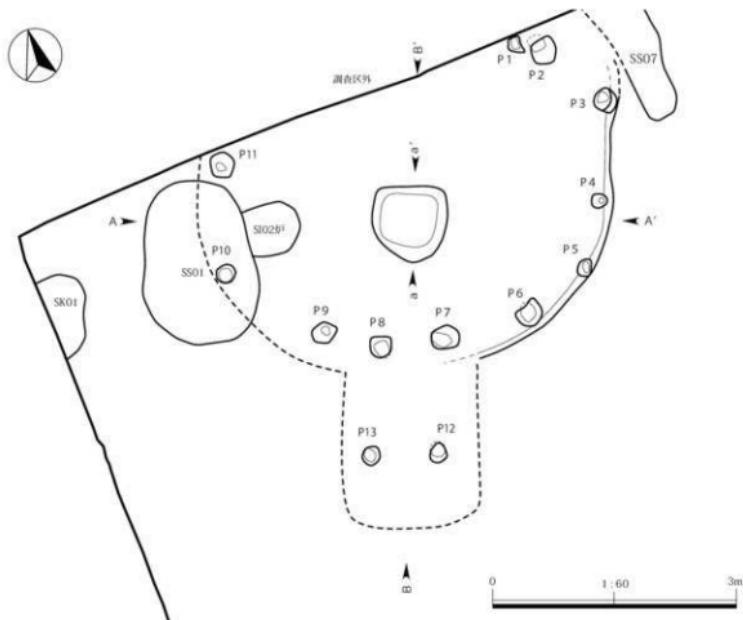
SI01上層説明

AA'-BB'

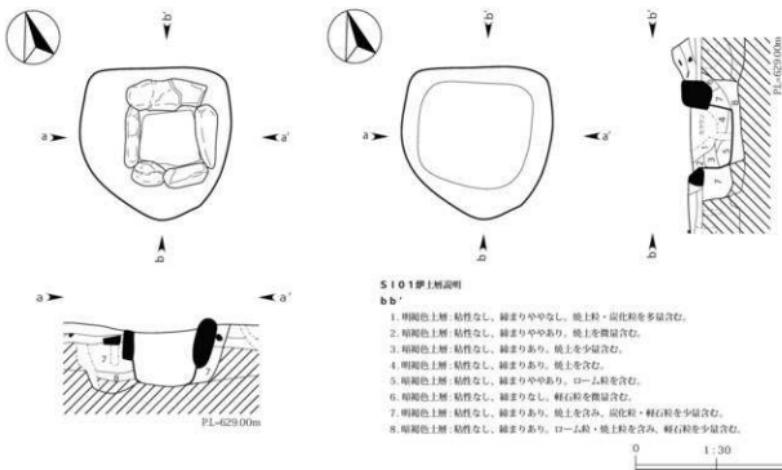
1. 明褐色土層・粘性なし。縫まりあり。軽石粉・地上粉・炭化材を含む。
2. 明褐色土層・粘性なし。縫まりあり。軽石粉・地上粉を少量含み、炭化材を含む。
3. 明褐色土層・粘性なし。縫まりややあり。軽石粉を含む。
4. 明褐色土層・粘性なし。縫まりあり。軽石粉を少量含み、植生殻を多量含む。
5. 明褐色土層・粘性なし。縫まりややあり。軽石粉・地上粉を微量含む。
6. 明褐色土層・粘性なし。縫まりややあり。軽石粉を含み、地上粉を少額含む。
7. 明褐色土層・粘性なし。縫まりややあり。軽石粉を含む。
8. 明褐色土層・粘性なし。縫まりややあり。軽石粉を含み、炭化材を少量含む。
9. 明褐色土層・粘性なし。縫まりややあり。軽石粉を少量含む。
10. 明褐色土層・粘性なし。縫まりあり。軽石粉・ローム粉を少量含む。

0 1:60 3m

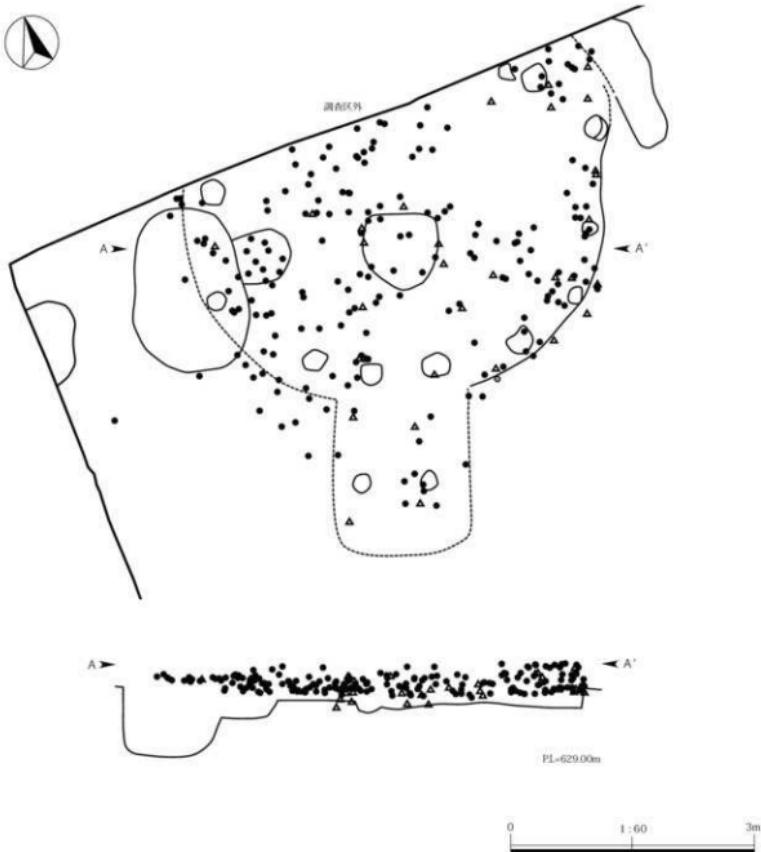
第6図 SI01 実測図 (1/60)



第7図 SI01 掘り方実測図 (1/60)



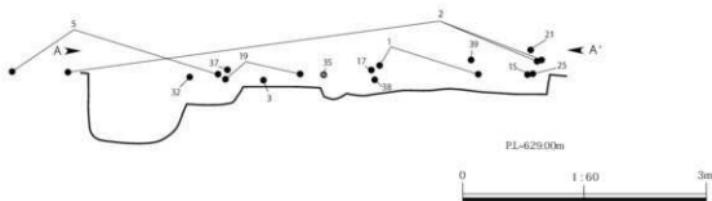
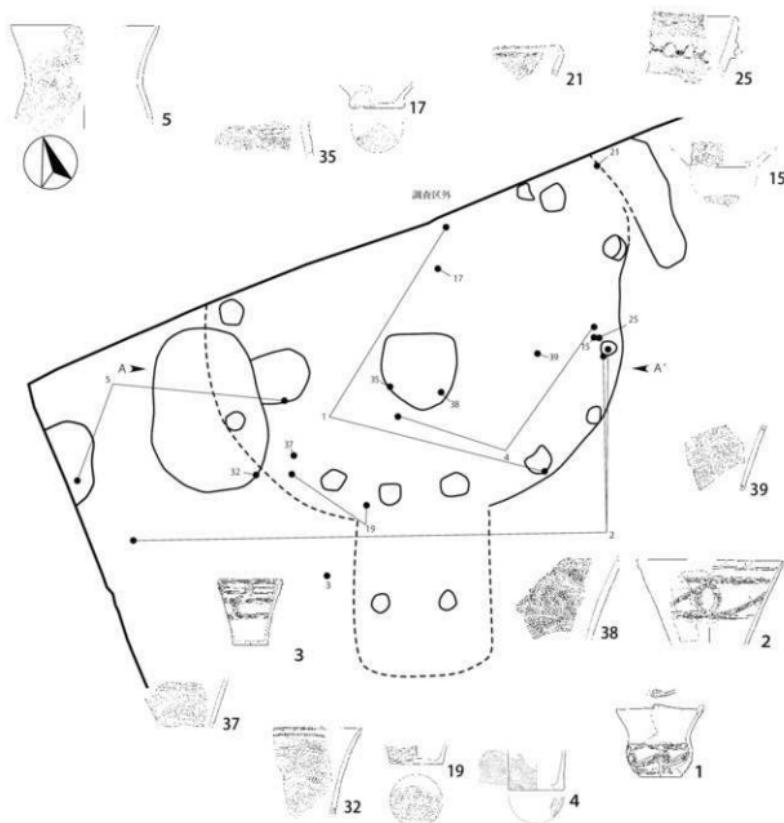
第8図 SI01 炉跡実測図 (1/30)



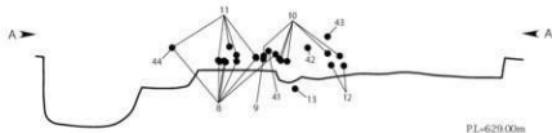
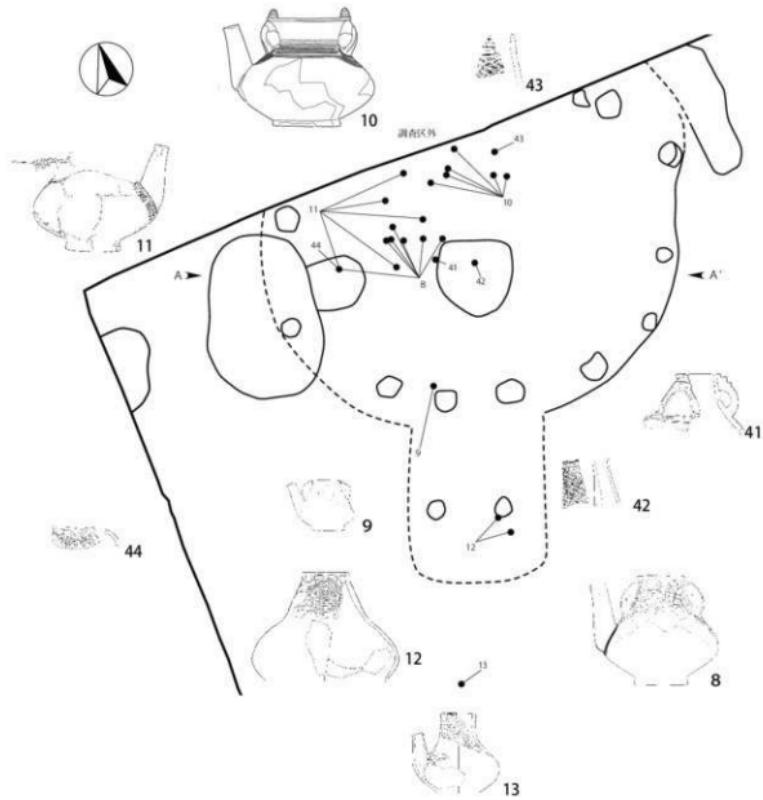
第9図 SI01 遺物出土状況図1<全体> (1/60)

遺物 総出土量は土器片(個体・土製品含む)1,451点(35,594g)、石器(剥片含む)190点(77,061.7g)である。そのうち土器45点(復元土器19点、破片土器26点)、石器20点(うち剥片石器類4点、礫石器類14点、磨製石斧1点、軽石製品1点)を図示し得た。石器組成器は、剥片石器類48点(石鏃1点、石鏃未成品1点、石匙未成品1点、石核1点、剥片44点)、打製石斧類15点(打製石斧1点、打製石斧未成品1点、削器1点、剥片12点)、礫石器類123点(磨石97点、敲石4点、磨石+敲石4点、磨石+凹石+敲石1点、石皿2点、多孔石2点、台石1点)磨製石斧1点、軽石製品1点である。

備考 本住居跡は出土遺物から縄文時代後期前葉(堀之内2式期中段階後半)に帰属するものと考えられる。

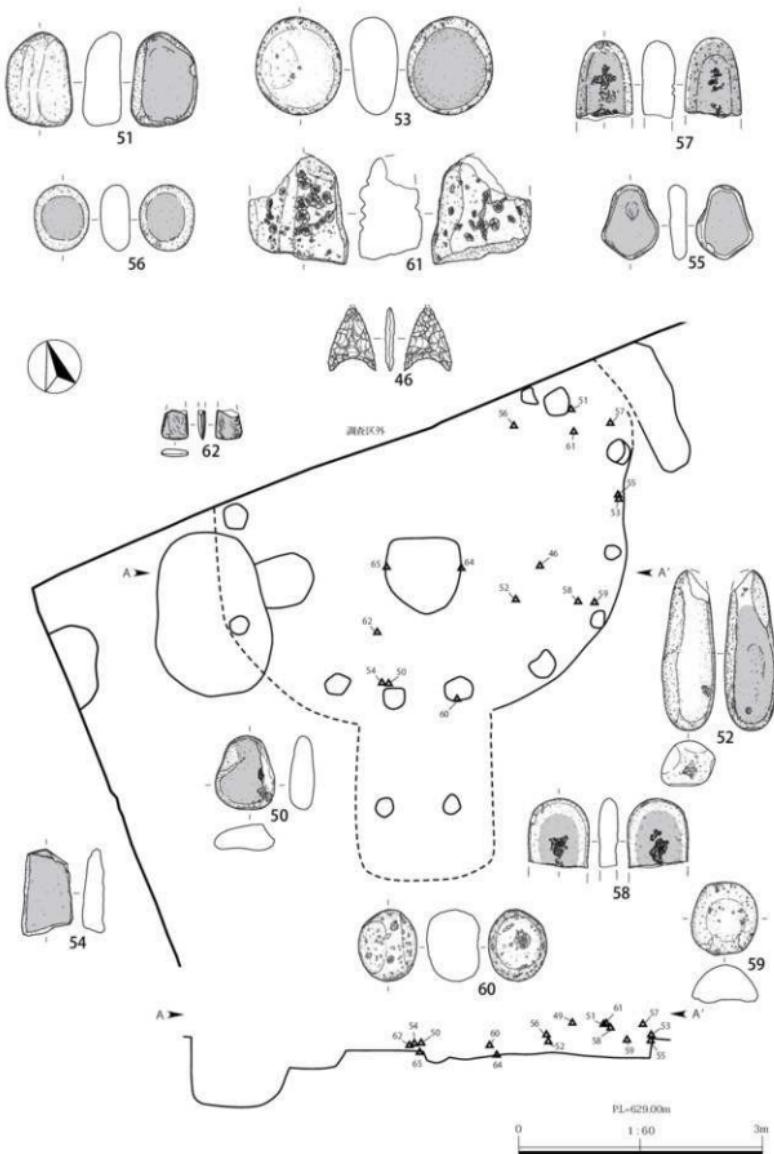


第10図 SI01遺物出土状況図2 <深鉢・浅鉢> (1/60)

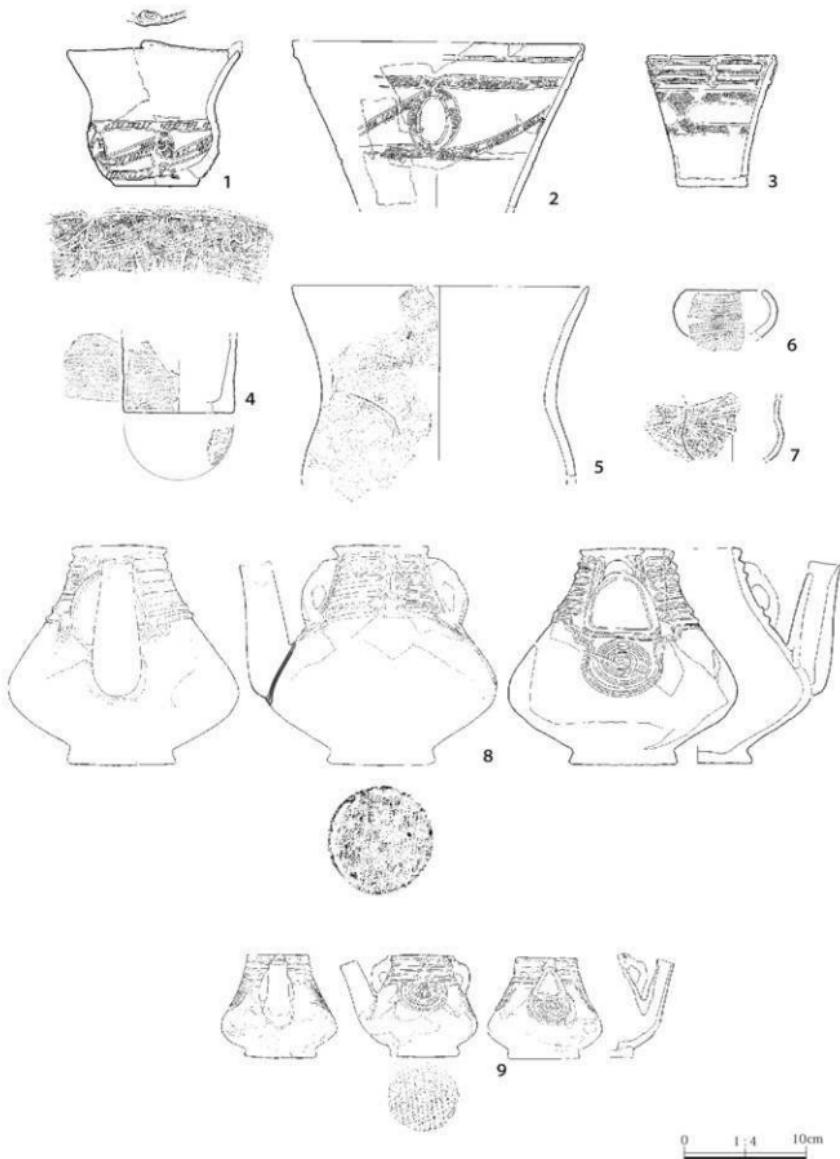


PL-629.00m
0 1:60 3m

第 11 図 S101 遺物出土状況図 3 <注口土器> (1/60)



第12図 SI01遺物出土状況図4<石器>(1/60)

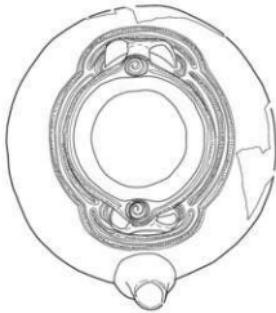
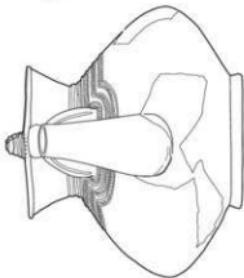
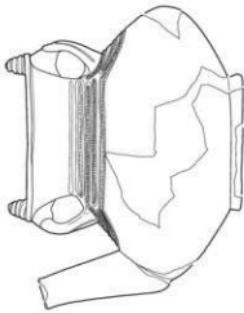
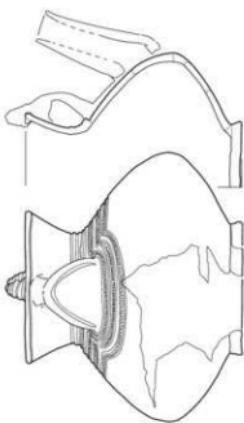


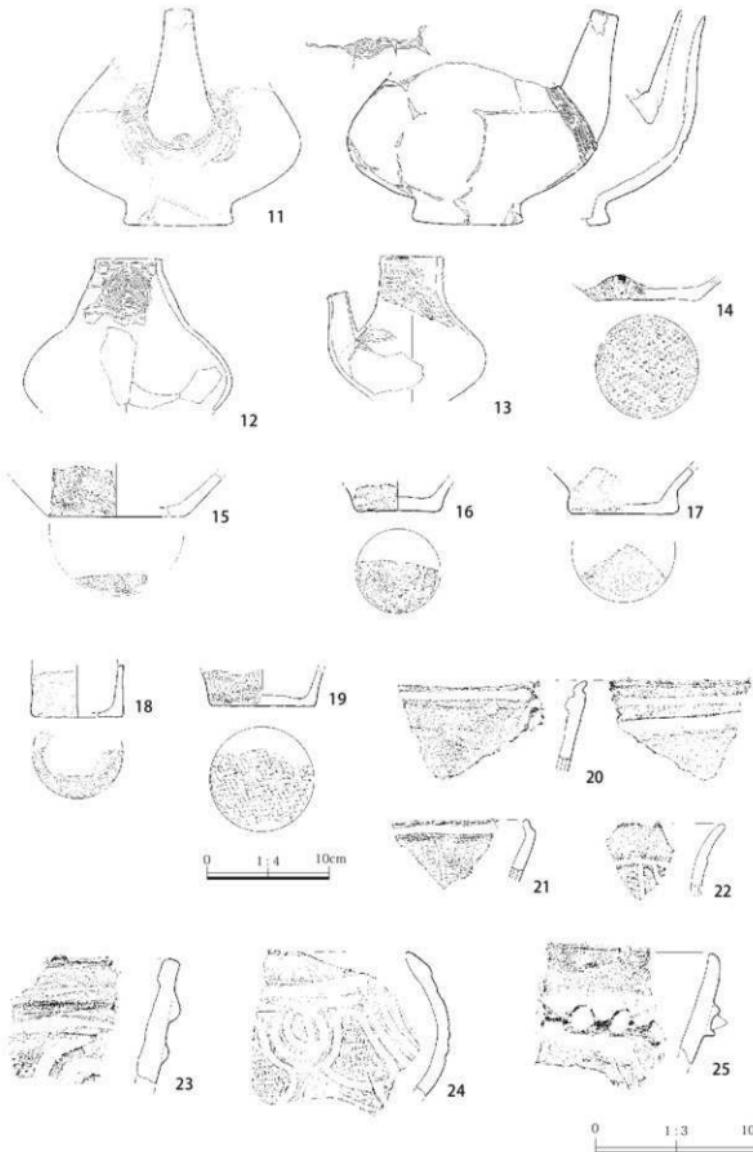
第13図 SI01出土遺物実測図1 (1/4)

0 1 : 4 10cm

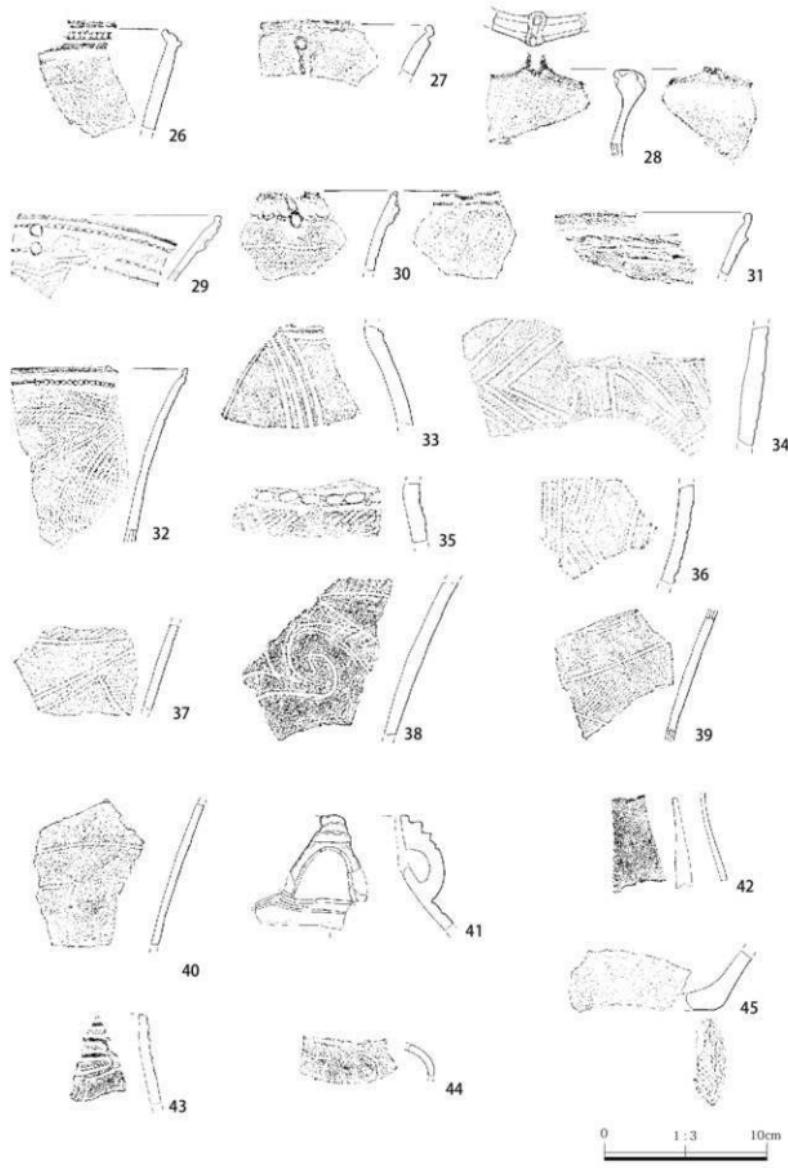
第14図 S101出土遺物実測図2 (1/4)

10

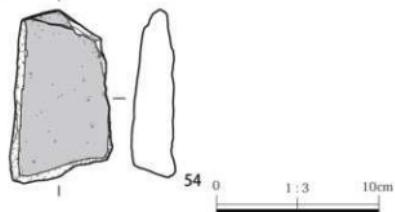
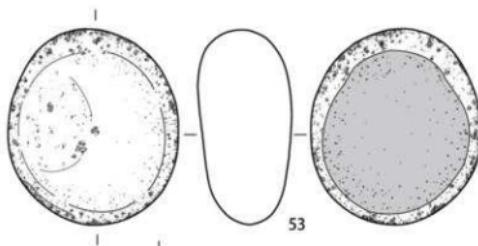
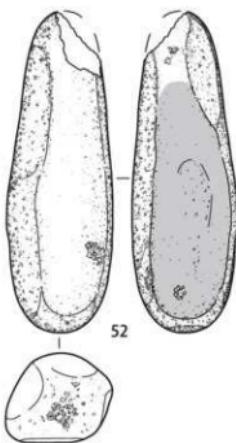
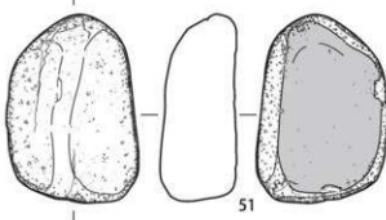
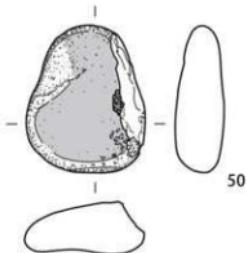
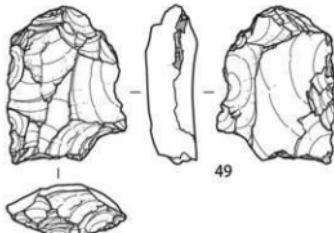
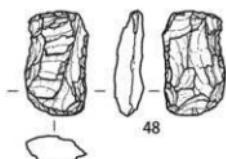
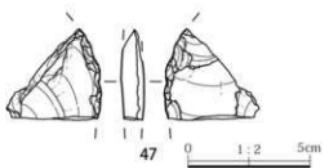
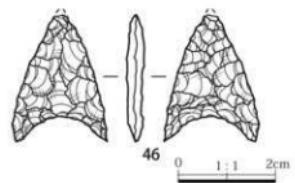




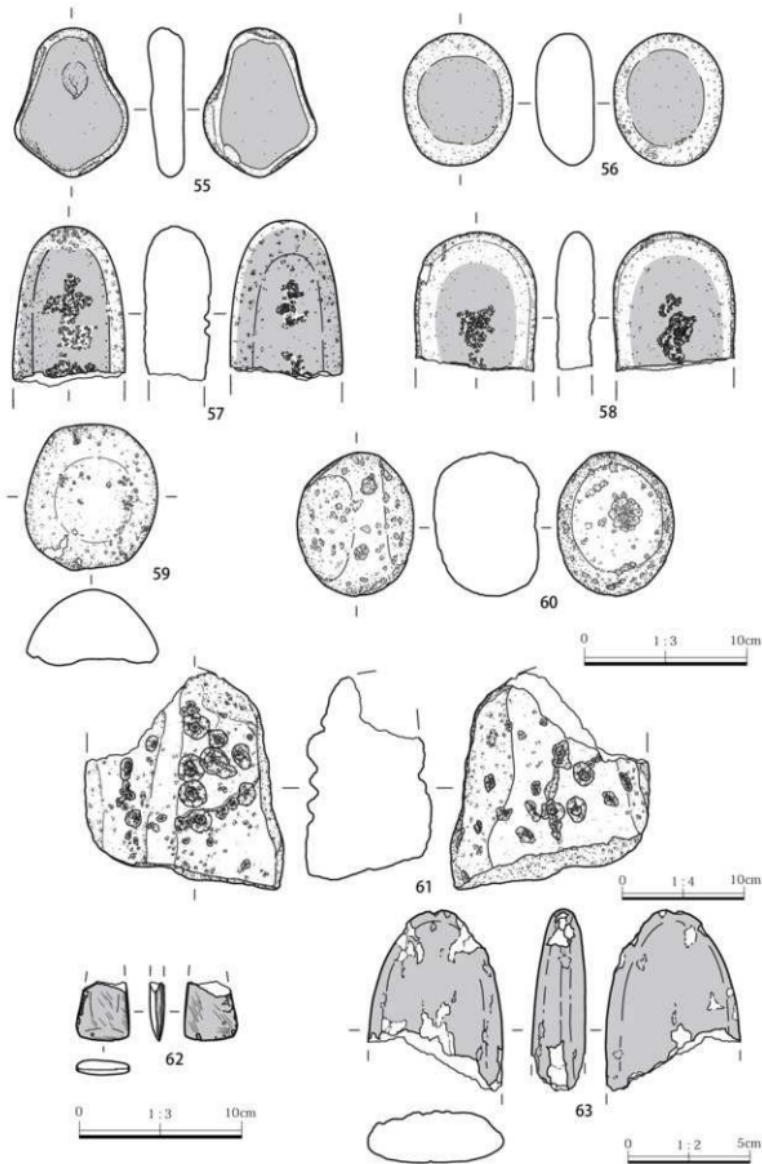
第15図 S101出土遺物実測図3 (1/4・1/3)



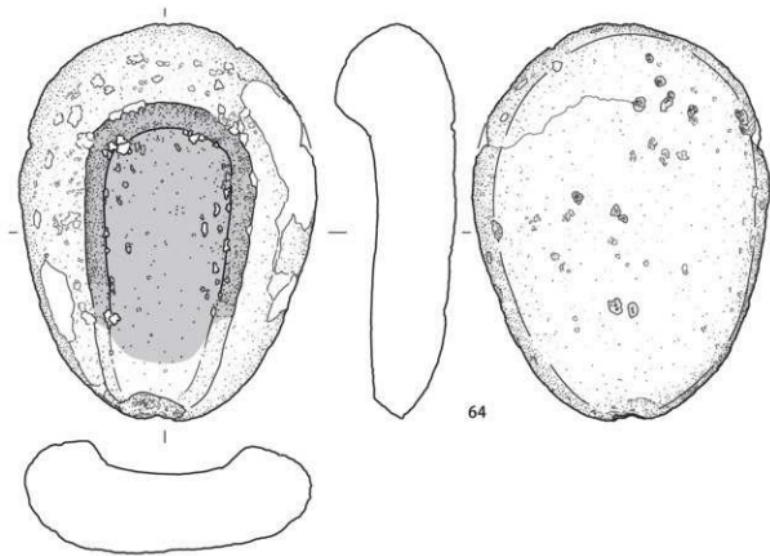
第16図 SI01出土遺物実測図4 (1/3)



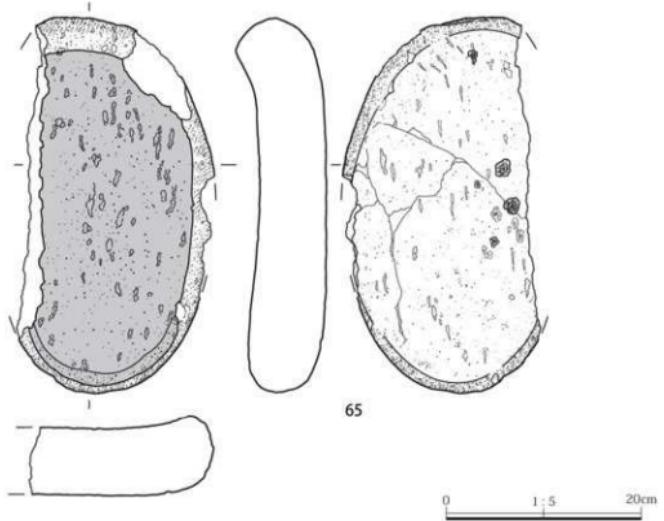
第17図 SI01出土遺物実測図 5 (1/1・1/2・1/3)



第18図 SI01出土遺物実測図6 (1/3・1/4・1/2)



64



65

0 1:5 20cm

第19図 SI01出土遺物実測図7 (1/5)

SI02 (第 20・21 図／PL 6・7・25)

位置 調査区北西。

重複関係 SI01, SS01 と重複し、これらに切られる。また、SK01, SK03 も本住居と重複すると考えられるが、新旧関係は不明である。

遺存状況 遺存状況は非常に悪く、炉のみが検出された。

覆土 暗褐色土を基調とし、レンズ状堆積を示している。

平面形態と規模 不明である。

主軸方向 N-2°-E。

床面 不明。

壁・壁溝 不明。

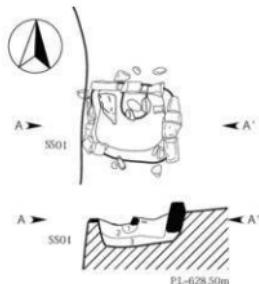
柱穴 不明。

炉跡 石圓炉である。平面形は方形を呈し、10～20cm 大の小角礫を一辺約 60cm の方形に区画している。規模は、長軸 69cm、短軸 63cm、深さは 18cm 以上である。

その他の施設 なし。

遺物 総出土量は土器片 72 点 (1,004g)、石器 (剥片含む) 6 点 (408.5g) である。そのうち土器 7 点を図示し得た。石器組成器は、剥片石器類剥片 2 点、打製石斧類剥片 2 点、礫石器類磨石 2 点である。

備考 本住居跡は炉内から出土した遺物から、縄文時代後期前葉（堀之内 1 式新段階～堀之内 2 式期中段階）に帰属するものと考えられる。

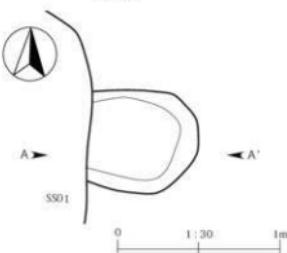


SI02 堀跡土層説明

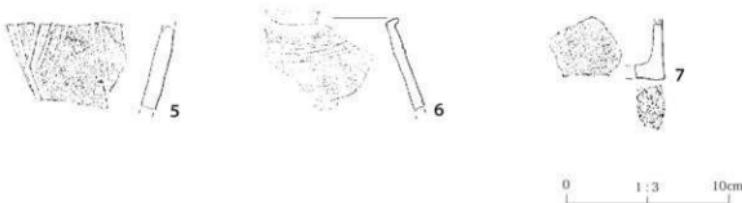
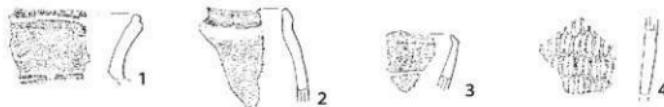
AA'

1. 暗褐色土層：粘性なし、締まりあり。炭化粒を含む。
2. 明褐色土層：粘性なし、締まりややあり。絆石粒・ロームブロックを含む。埴上を微弱含む。
3. 暗褐色土層：粘性なし、締まりあり。埴上粒・絆石粒を含む。

掘り方



第 20 図 SI02 実測図 (1/30)



第 21 図 SI02 出土遺物実測図 (1/3)

第3節 土 坑

SK01 (第22・23図／PL 7・25)

位置 調査区北西隅。

重複関係 SiO₂の範囲内と想定されるが、SiO₂の遺存状態が悪いため切り合いは不明。

遺存状態 良好。

覆土 暗褐色土を基調としている。

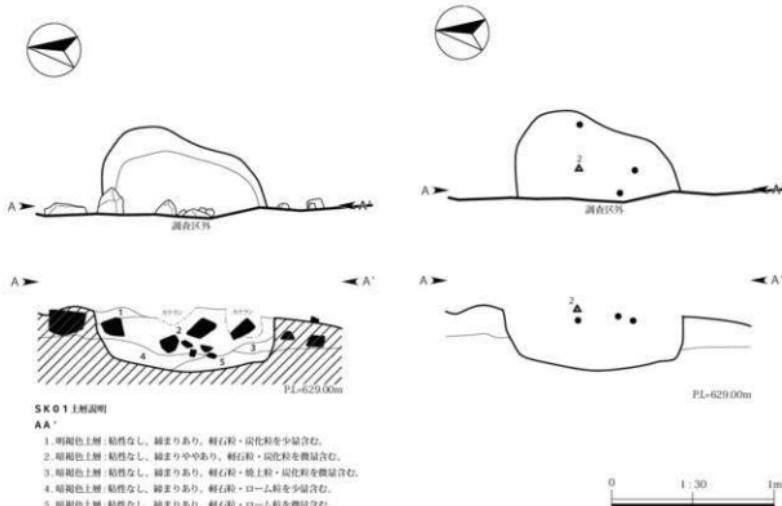
平面形と規模 平面形は不整梢円形を呈する。規模は長軸105cm以上、短軸55.5cm以上、深さ40cmを測る。

主軸方位 N-9.5°-E。

壁面 北側はほぼ垂直に、南側はやや外傾して立ち上がる。

底面 平坦である。

遺物 総出土量は縄文土器23点(347g) 石器(剥片を含む)5点(886.2g)である。そのうち 土器1点、石器1点を図示し得た。石器組成は、剥片石器類剥片2点、礫石器類磨石3点である。



第 22 図 SK01 実測図 (1/30)



第 23 図 SK01 出土遺物実測図 (1/3)

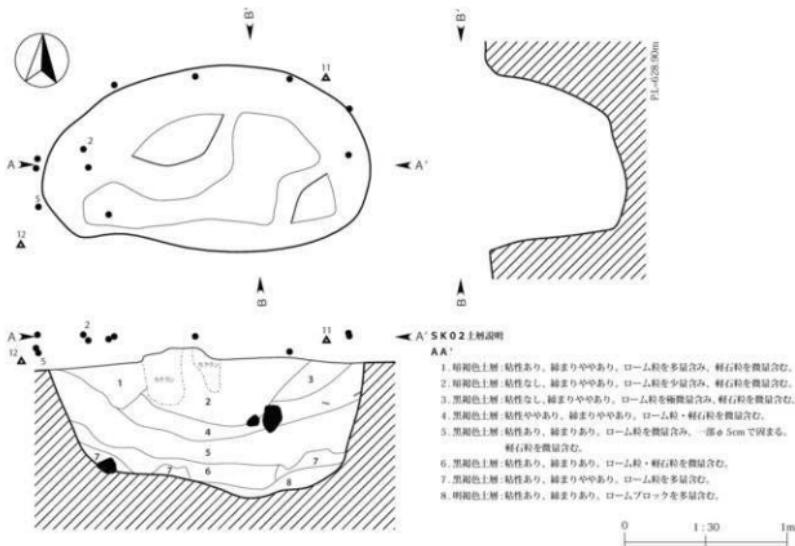
SK02 (第24~26図／P L 7・25・26)

位置 調査区北東。

重複関係 なし。

遺存状態 良好。

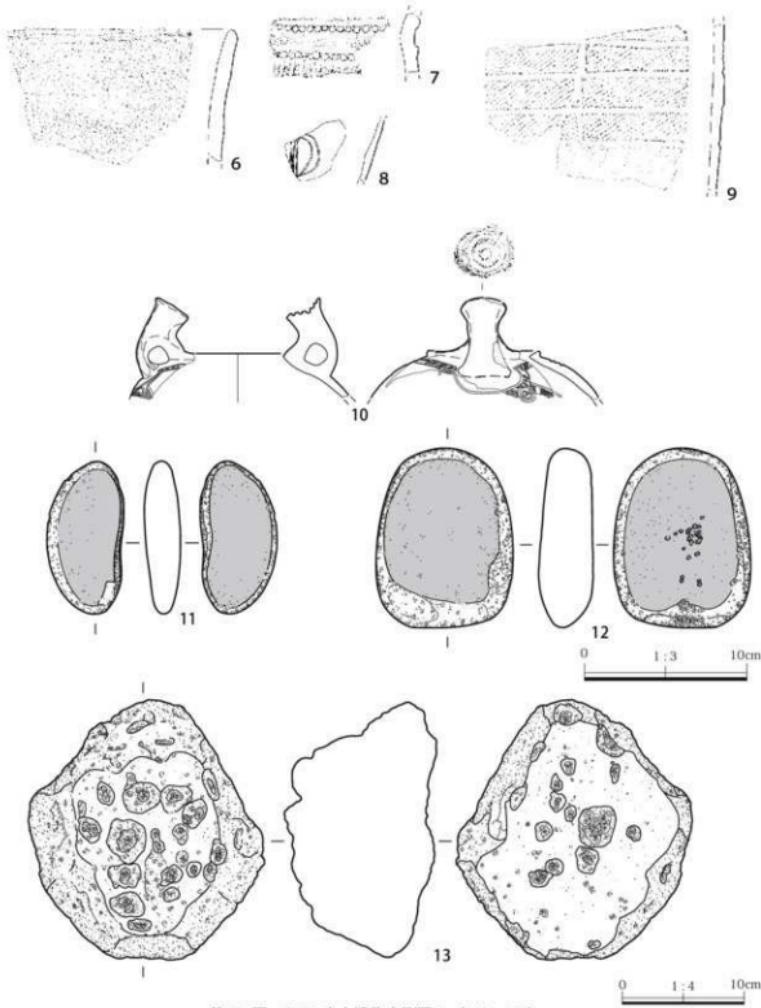
覆土 黒褐色土を基調とし、自然堆積を示している。



第24図 SK02 実測図 (1/30)



第25図 SK02 出土遺物実測図 1 (1/4・1/3)



第26図 SK02出土遺物実測図2 (1/3・1/4)

平面形と規模 平面形は不整円形を呈し、規模は長軸203.3cm、短軸115.5cm、確認面からの深さ87cmを測る。

主軸方位 N-83°-E。

壁面 外傾して立ち上がっている。

底面 やや凸凹している。

遺物 総出土量は土器198点(3,232g)、石器(剥片を含む)6点(5,906.5g)である。そのうち縄文土器10点、石器3点を図示し得た。石器組成は、打製石斧類剥片1点、礫石器類5点(磨石4点、多孔石1点)であ

る。

備考 本土坑は出土遺物より、縄文時代後期前半（堀之内2式中段階～加曾利B1式）に帰属すると考えられる。

SK03 (第27・28図／PL 7・8・26)

位置 調査区北西。

重複関係 SI01と重複し、これに切られる。また、SI02の範囲内に位置し、これにも切られていると考えられる。

遺存状態 覆土の上部が攪乱である。また、東側の一部をSI01のP9に切られ、半截した際に南半分が消失しているが概ね良好。

覆土 暗褐色土を基調としている。

平面形と規模 平面形は円形を呈する。規模は長軸51.5cm以上、短軸55.5cm以上、確認面からの深さ46cmを測る。

主軸方位 N-1°-E。

壁面 ほぼ直立に立ち上がっている。埋甕の部分で段が付いて、穴が広がっている。

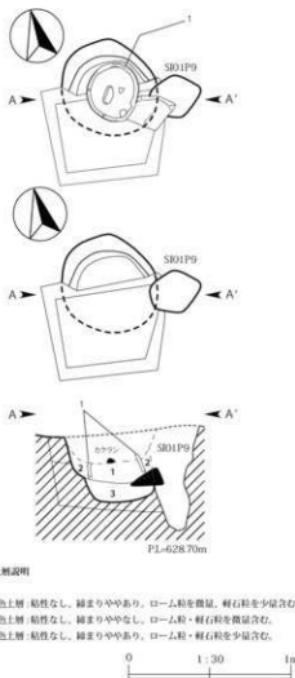
底面 凹状を呈している。

遺物出土状況 土坑中央、底面から15cmほど浮いた位置に、口縁を下にして縄文土器の深鉢（第28図1）が設置されていた。口縁から頸部が残存している。体下半部はSI01構築により攪乱を受けた際に消失したと考えられる。また、第28図2の深鉢は、SS10、SI02炉内からも破片が出土して

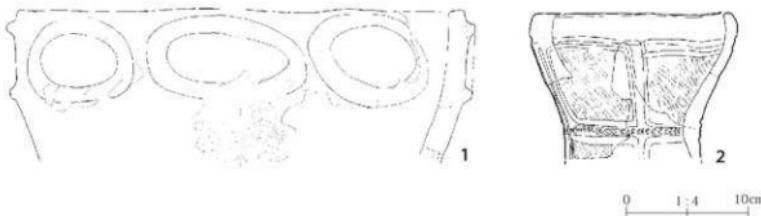
おり、SI01構築時の排土がSS10周辺に廃棄された様子が窺える。

遺物 総出土量は、土器80点（1,788g）、石器（剥片を含む）4点（267.7g）である。このうち、埋甕として使用されていた縄文土器2点を図示し得た。石器組成は、剥片石器類剥片1点、礫石器類磨石1点、軽石2点である。このうち、磨石と軽石は埋甕内から出土した。

備考 本土坑は出土した埋甕から縄文時代中期後葉（加曾利E3式新段階）に帰属すると考えられる。



第27図 SK03 実測図 (1/30)



第28図 SK03 出土遺物実測図 (1/4)

SK04 (第29図／PL 8・26)

位置 調査区南西。

重複関係 なし。

遺存状態 南側が調査区外に伸びるが、概ね良好。

覆土 黒褐色を基調としている。

平面形と規模 平面形は長楕円形を呈すると推測される。規模は長軸81cm以上、短軸46.5cm以上、確認面からの深さ82cmを測る。

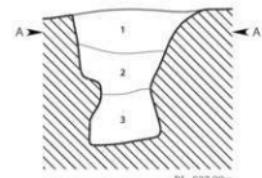
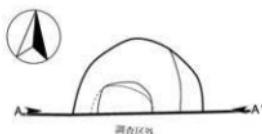
主軸方位 N-67°-E。

壁面 穴の下部は内傾して立ち上がり、中ほどから東側は外傾して立ち上がり、西側は垂直に立ち上がる。

底面 平面形は長方形と推測され、平坦である。

遺物 総出土量は、土器10点(47g)である。そのうち須恵器1点を図示した。

備考 出土遺物や形状から、平安時代以降の陥し穴と考えられる。



SK04上層説明

A-A'

1. 黒褐色土層：粘性なし、締まりややなし。軽石粉を少量含む。
2. 黒褐色土層：粘性なし、締まりややあり。ローム粉・軽石粉を少量含む。
3. 黒褐色土層：粘性なし、締まりあり。ローム粉・軽石粉を含む。

0 1:30 1m



第29図 SK04実測図(1/30)・出土遺物実測図(1/4)

SK05 (第30図／PL 8・26)

位置 調査区南側中央。

重複関係 なし。

遺存状態 良好である。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

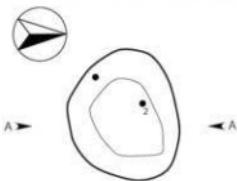
平面形と規模 平面形は不整楕円形を呈する。規模は長軸81.8cm、短軸66.8cm、確認面からの深さ38cmを測る。

主軸方位 N-78.5°-E。

壁面 外傾して立ち上がっている。

底面 平坦である。

遺物 総出土量は土器8点(112g)である。そのうち2点を図示した。



SK05上層説明

A-A'

1. 暗褐色土層：粘性なし、締まりなし。ローム粉・軽石粉を微量含む。
2. 暗褐色土層：粘性なし、締まりややあり。ローム粉・軽石粉を少量含む。
3. 暗褐色土層：粘性なし、締まりあり。ローム粉・軽石粉を含む。
4. 暗褐色土層：粘性なし、締まりあり。軽石粉を微量含む。

0 1:30 1m



第30図 SK05実測図(1/30)・出土遺物実測図(1/3)

SK06 (第31図／PL 8)

位置 調査区南西側。

重複関係 なし。

遺存状態 南側半分以上が調査区外に伸びるが概ね良好。

覆土 單層である。

平面形と規模 平面形は長楕円形を呈すると推測される。規模は長軸43.5cm以上、短軸100.5cm以上、確認面からの深さ79cmを測る。

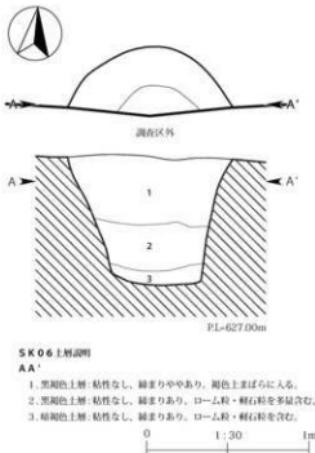
主軸方位 N-84°-E。

壁面 外傾して立ち上がっている。

底面 平坦である。

遺物 総出土量は土器12点(137g)であるが、流れ込みと考えられる。

備考 形状から平安時代以降の陥し穴と考えられる。



第31図 SK06 実測図 (1/30)

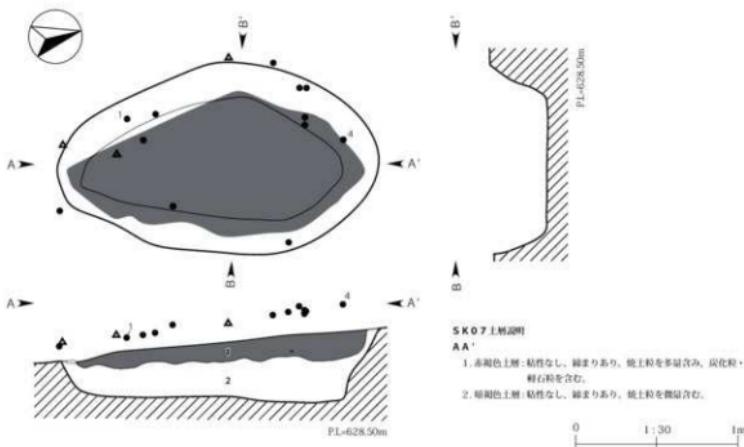
SK07 (第32・33図／PL 8・9・26)

位置 調査区東側中央。

重複関係 なし。

遺存状態 良好。

覆土 焼土の下は単層である。



第32図 SK07 実測図 (1/30)

平面形と規模 平面形は梢円形を呈する。規模は長軸198.8cm、短軸118.5cm、確認面からの深さ39cmを測る。

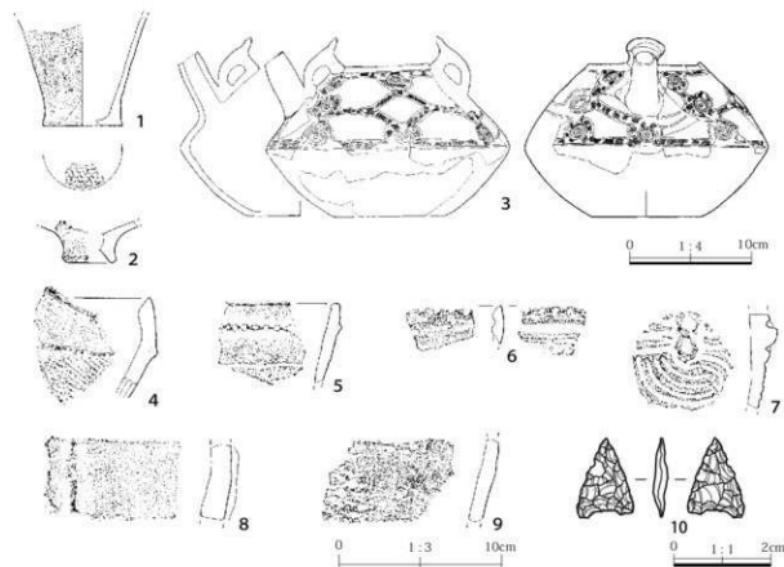
主軸方位 N-11°-E。

壁面 外傾して立ち上がっている。

底面 ほぼ平坦である。

遺物 総出土量は、土器157点（1,610g）、石器（剥片を含む）16点（506.6g）である。そのうち、縄文土器9点、石器1点を図示した。石器組成は、剥片石器類13点（石鏃1点、剥片12点）、打製石斧類剥片2点、砾石器類1点である。

備考 本土坑は出土遺物から、縄文時代後期前葉（堀之内2式中段階前半）に帰属すると考えられる。



第33図 SK07出土遺物実測図 (1/4・1/3・1/1)

SK08 (第34・35図／P L 9・26・27)

位置 調査区北側中央。

重複関係 なし。

遺存状態 良好。

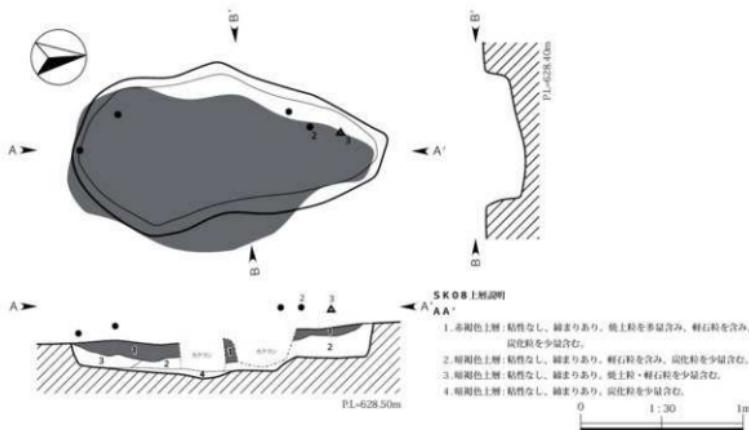
覆土 焼土の下は単層で、暗褐色土を基調としている。

平面形と規模 平面形は不整梢円形を呈する。規模は長軸189cm、短軸94.5cm、確認面からの深さ31cmを測る。

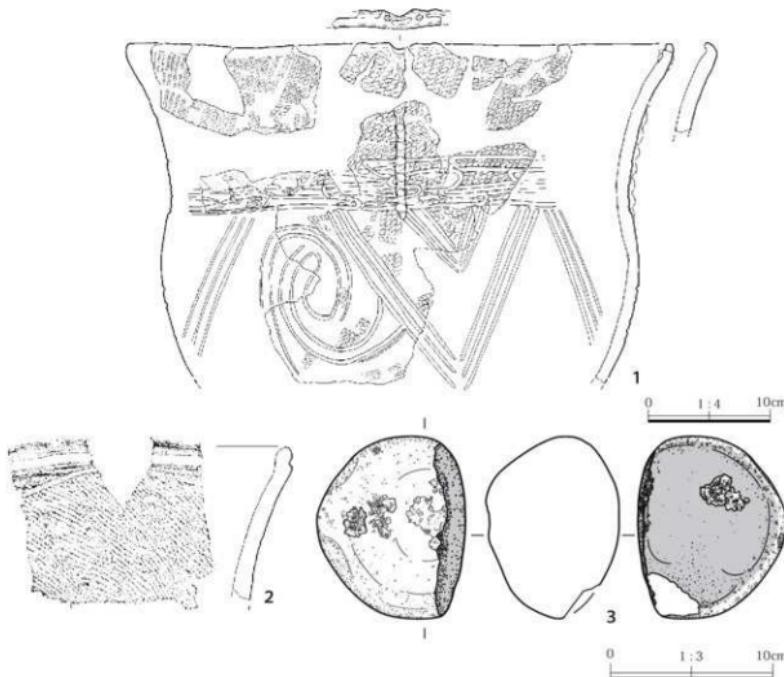
主軸方位 真北。

壁面 垂直に立ち上がっている。

底面 やや凸凹している。



第34図 SK08 実測図 (1/30)



第35図 SK08 出土遺物実測図 (1/4・1/3)

遺物出土状況 遺物は土坑を中心に周辺からも出土しており、土坑外の点上げ遺物とも接合している。

遺物 総出土量は土器9点(352g)、礫石器類磨石+敲石1点無(1080g)である。そのうち縄文土器2点、石器1点を図示し得た。

備考 本土坑は出土遺物から、縄文時代後期前葉(塙之内1式新段階)に帰属すると考えられる。

SK09 (第36図／PL 9・27)

位置 調査区中央。

重複関係 なし。

遺存状態 良好。

覆土 焼土下は暗褐色土を基調としている。

平面形と規模 平面形は円形を呈する。規模は長軸90cm、

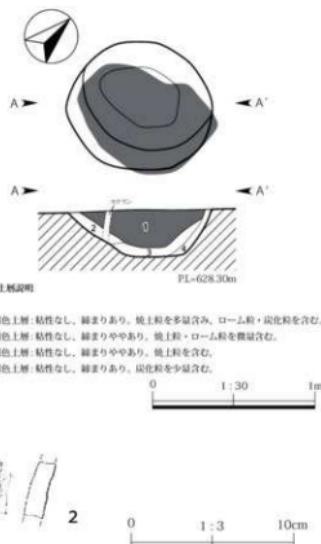
短軸79.5cm、確認面からの深さ30cmを測る。

主軸方位 N-43°-E。

壁面 外傾して立ち上がっている。

底面 平坦である。

遺物 総出土量は、土器5点(110g)である。そのうち、縄文土器2点を図示し得た。



第36図 SK09 実測図(1/30)・出土遺物実測図(1/3)

SK10 (第37・38図／PL 9・27)

位置 調査区中央。

重複関係 なし。

遺存状態 良好。

覆土 焼土の下は単層で、暗褐色土を基調としている。

平面形と規模 平面形は円形を呈する。規模は長軸124.5

cm、短軸69.8cm、確認面からの深さ25cmを測る。

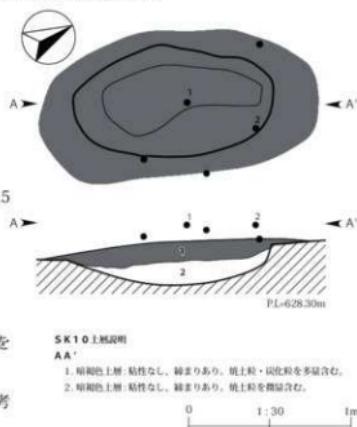
主軸方位 N-22°-W。

壁面 外傾して立ち上がっている。

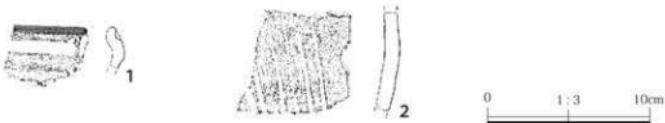
底面 凹状を呈している。

遺物 総出土量は土器6点(71g)である。そのうち2点を図示し得た。

備考 本土坑は出土遺物から、縄文時代後期に帰属すると考えられる。



第37図 SK10 実測図(1/30)



第38図 SK10出土遺物実測図 (1/3)

SK11 (第39~41図／PL 9・10・27)

位置 調査区北側中央。

重複関係 なし。

遺存状態 良好。

覆土 暗褐色土層の中に焼土が堆積している。

平面形と規模 平面形は不整円形を呈する。規模は長軸

111cm、短軸90cm、確認面からの深さ28cmを測る。

主軸方位 N-45°-E。

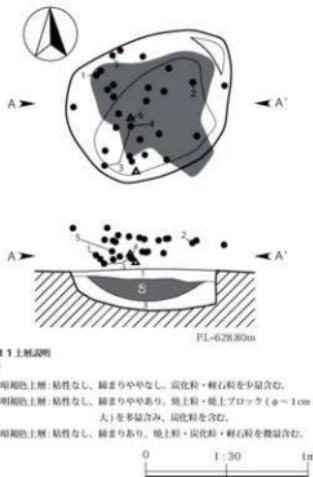
壁面 東側は垂直に、西側は外傾して立ち上がっている。

底面 凹状を呈している。

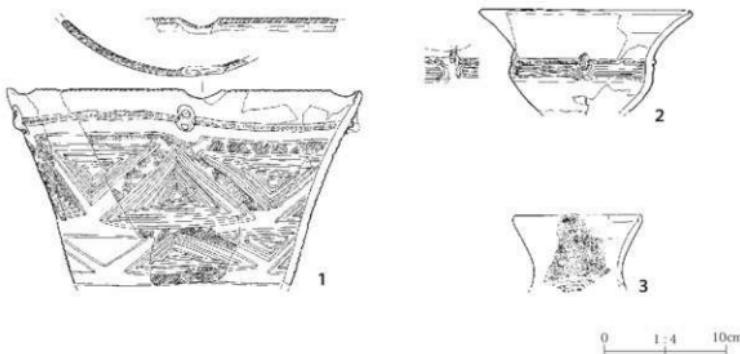
遺物出土状況 多くの土器片が土坑上に散布されており、遺構外の破片とも接合した。

遺物 総出土量は、土器100点(2,829g)、石器(剥片を含む)3点(438.9g)である。そのうち縄文土器6点、石器1点を図示し得た。石器組成は、剥片石器類剥片1点、礫石器類磨石2点である。

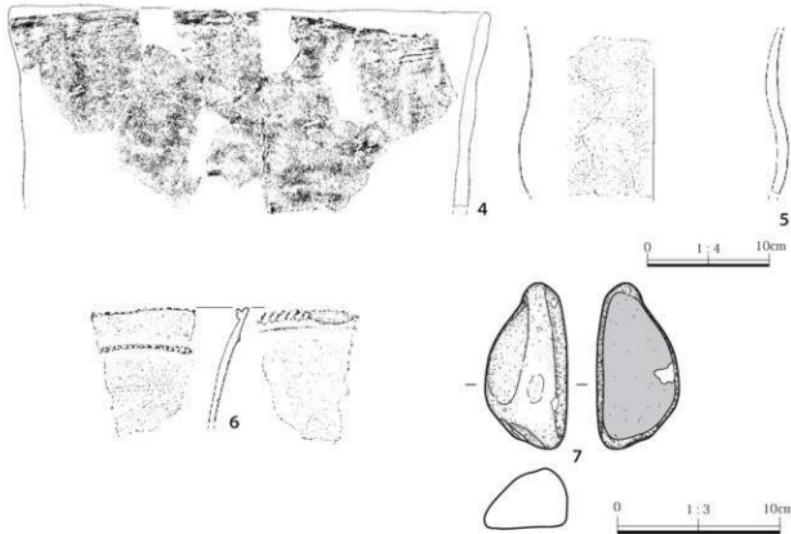
備考 本土坑は出土遺物から、縄文時代後期前葉(堀之内2式古段階後半～中段階前半)に帰属すると考えられる。



第39図 SK11出土遺物 (1/30)



第40図 SK11出土遺物実測図 1 (1/4)



第41図 SK11出土遺物実測図2 (1/4・1/3)

SK12 (第42~44図／P L 10・27・28)

位置 調査区西側中央。

重複関係 なし。

遺存状態 良好。

覆土 焼土下は暗褐色土を基調とする。

平面形と規模 平面形は不整梢円形を呈する。規模は長軸139.5cm、短軸91.5cm、確認面からの深さ19cmを測る。

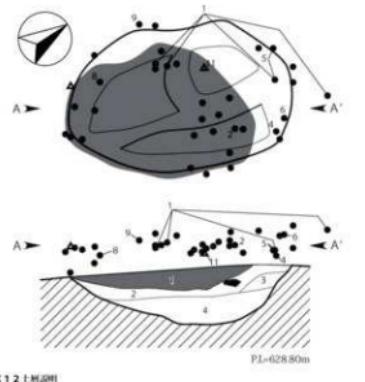
主軸方位 N-17.5°-E。

壁面 外傾して立ち上がっている。

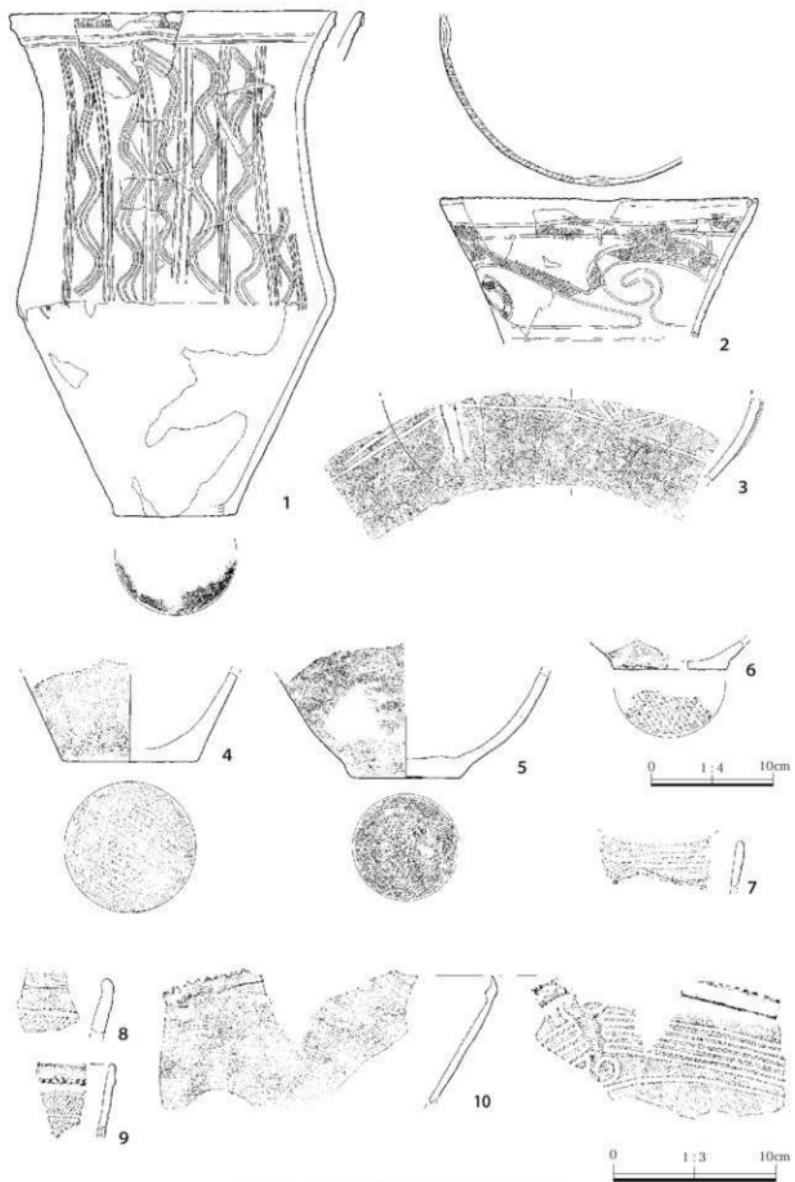
底面 凹状を呈している。

遺物 総出土量は、土器88点(4,053g)、石器(剥片を含む)2点(580g)である。そのうち、縄文土器10点、石器1点を図示し得た。石器組成は、打製石斧類剥片1点、礫石器類磨石十敲石1点である。

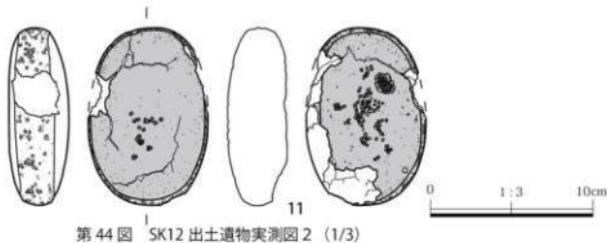
備考 本土坑は出土遺物より、縄文時代後期前葉(堀之内2式中段階)に帰属すると考えられる。



第42図 SK12実測図 (1/30)



第43図 SK12出土遺物実測図1 (1/4・1/3)



SK13 (第45・46図／PL 10・28)

位置 調査区北側中央。

重複関係 なし。

遺存状態 良好。

覆土 焼土下は暗褐色土を基調とする。

平面形と規模 平面形は不整円形を呈する。規模は長軸153cm、短軸112.5cm以上、確認面からの深さ47cmを測る。

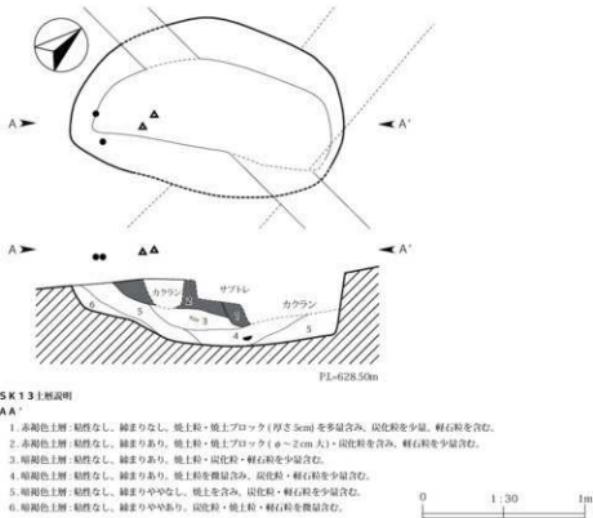
主軸方位 N-52°-W。

壁面 外傾して立ち上がっている。

底面 南西側に緩やかな段が付いていた皿状を呈している。

遺物 総出土量は、土器42点(1,146g)、打製石斧類剥片1点(32g)である。そのうち、縄文土器2点を図示し得た。

備考 本土坑は出土遺物より、縄文時代後期初頭(称名寺I式)に帰属すると考えられる。

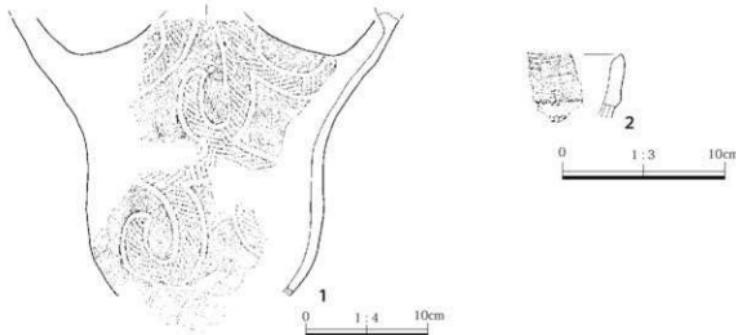


SK13上層実測図

A-A'

1. 暗褐色土層：粘性なし。純まりなし。焼土粒・焼土ブロック(厚さ5cm)を多量含み。炭化粒を少量。軽石粒を含む。
2. 暗褐色土層：粘性なし。純まりあり。焼土粒・焼土ブロック(φ～2cm大)。炭化粒を含み。軽石粒を少量含む。
3. 暗褐色土層：粘性なし。純まりあり。焼土粒を微量含み。炭化粒・軽石粒を少量含む。
4. 暗褐色土層：粘性なし。純まりあり。焼土粒を微量含み。炭化粒・軽石粒を少量含む。
5. 暗褐色土層：粘性なし。純まりややなし。焼土を含み。炭化粒・軽石粒を少量含む。
6. 暗褐色土層：粘性なし。純まりややあり。炭化粒・焼土粒・軽石粒を微量含む。

第45図 SK13実測図 (1/30)



第46図 SK13出土遺物実測図 (1/4・1/3)

SK14 (第47・48図／PL 10・28)

位置 調査区東側中央。

重複関係 なし。

遺存状態 良好。

覆土 焼土以外は暗褐色を基調としている。焼土(5・6層)が堆積した後、再び掘り込まれている。(1・2層)

平面形と規模 平面形は不整円形を呈する。規模は長軸115.5cm、短軸72cm、確認面からの深さ29cmを測る。

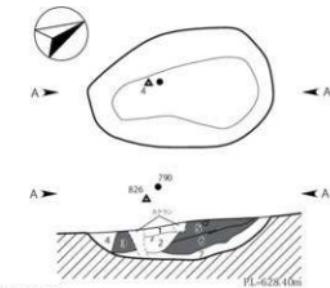
主軸方位 N-27.5° E。

壁面 外傾して立ち上がっている。

底面 凹状を呈している。

遺物 総出土量は縄文土器片35点(432g)、石器(剥片を含む)6点(1,198.4g)である。そのうち縄文土器2点、石器2点を図示し得た。石器組成は、剥片石器類2点(石錐1点、剥片1点)、打製石斧類剥片1点、礫石器類3点(磨石2点、凹石1点)である。

備考 本土坑は出土遺物より、縄文時代後期前半(加曾利B1式)に帰属すると考えられる。

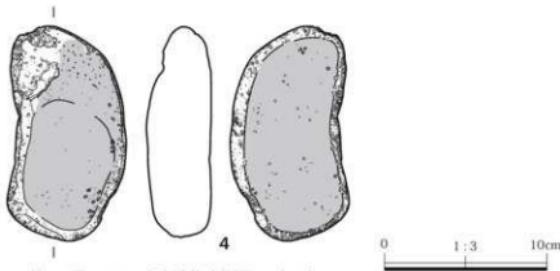


SK14上層説明
A-A'

1. 布糊色上層: 構造なし。縄まりあり。燒土・軽石粒を微量含む。
2. 布糊色上層: 構造なし。縄まりあり。燒土・炭化物・軽石粒を少量含む。
3. 赤褐色上層: 構造なし。縄まりあり。燒土を多量含む。
4. 布糊色上層: 構造なし。縄まりややなし。軽石粒を微量含む。
5. 赤褐色上層: 構造なし。縄まりややなし。燒土・炭化物を含み、軽石粒を少量含む。
6. 赤褐色上層: 構造なし。縄まりややなし。その90%が燒土からなる。炭化物・軽石粒を少量含み、上部片を含む。
7. 布糊色上層: 構造なし。縄まりややあり。燒土・軽石粒・炭化物を微量含む。



第47図 SK14実測図 (1/30)・出土遺物実測図 1 (1/3・1/1)



第48図 SK14出土実測図2 (1/3)

SK15 (第49・50図／PL 10・11・28・29)

位置 調査区北西側。

重複関係 なし。

遺存状態 概ね良好。

覆土 単層である。

平面形と規模 平面形は円形を呈する。規模は長軸42cm以上、短軸39cm以上、確認面からの深さ32cmを測る。

主軸方位 N-15°-E。

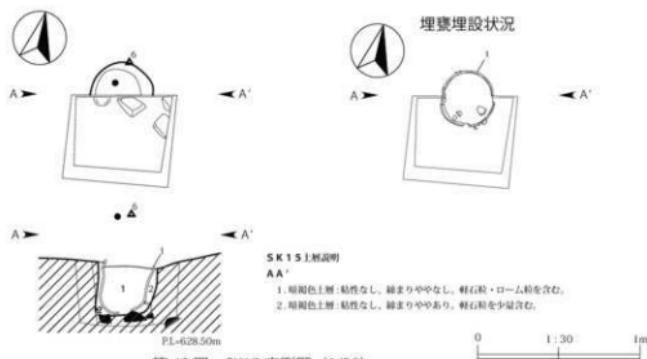
壁面 西側は内傾し、東側は外傾して立ち上がっている。

底面 凹状を呈している。

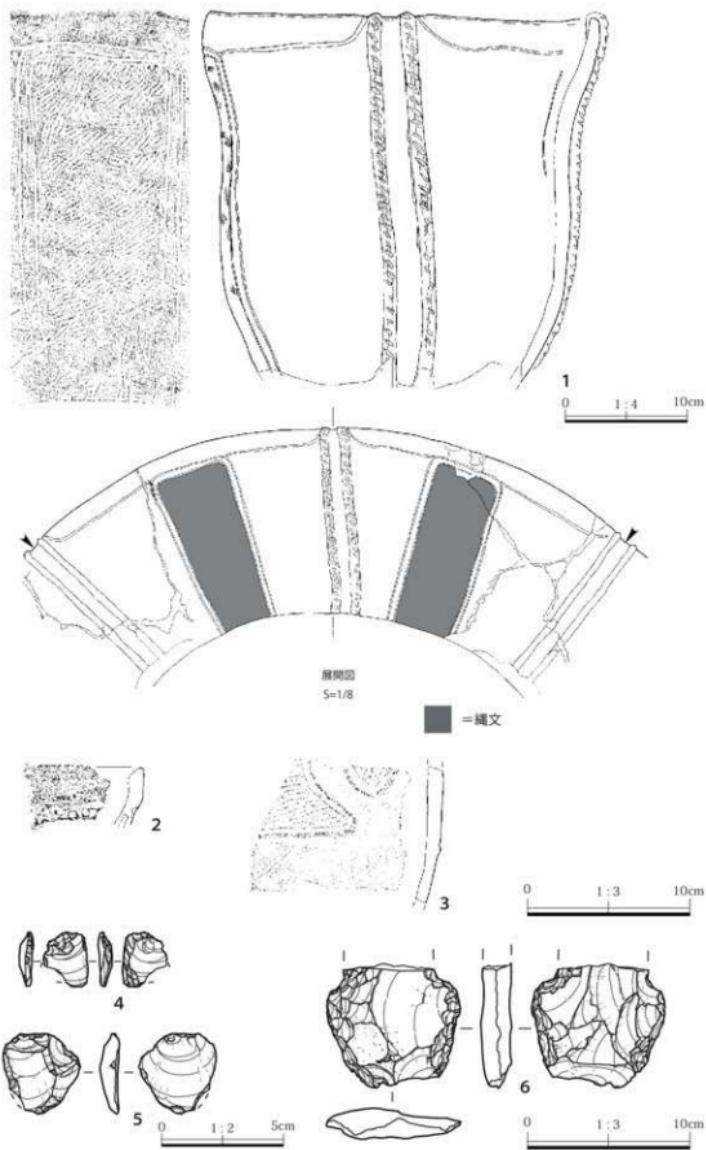
遺物出土状況 土器埋設構造である。称名寺式併行の深鉢（第50図1）が口縁を上に埋められていた。また、本土坑から出土した称名寺I式破片（第50図3）は、調査区南中央の点上げ遺物と同一個体であることが判明している。同一個体が発見された場所は調査区を南北に縱断する谷地形の下流にあたる。

遺物 総出土量は、土器66点(994g)、石器(剥片を含む)20個(443.8g)である。そのうち、縄文土器3点、石器3点を図示し得た。石器組成は、剥片石器類11点(二次加工のある剥片1点、剥片10点)、打製石斧類9点(打製石斧未成品1点、加工痕のある剥片1点、剥片7点)である。

備考 本土坑は出土遺物から、縄文時代後期初頭（称名寺I式）に帰属すると考えられる。



第49図 SK15実測図 (1/30)



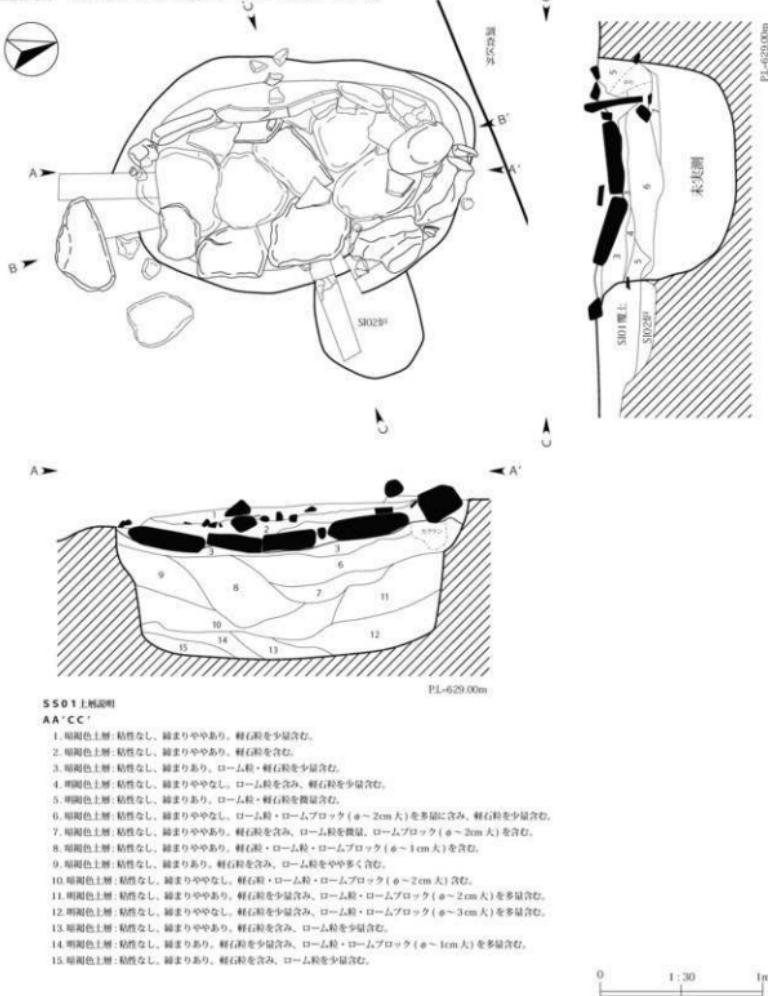
第50図 SK15出土遺物実測図 (1/4・1/3・1/2)

第4節 配石遺構

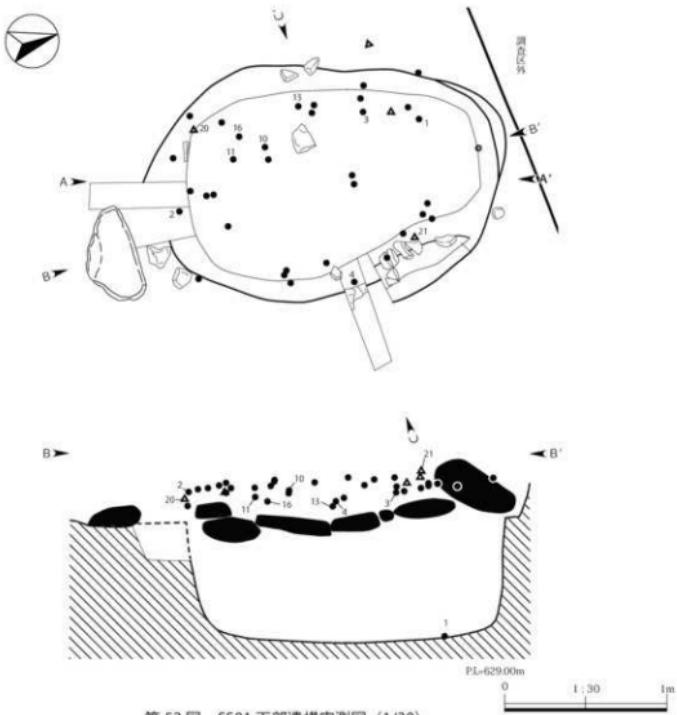
SS01 (第51~54図／P L 11~13・29)

位置 調査区北西。

重複関係 SI01、SI02と重複し、これらを切っている。



第51図 SS01実測図 (1/30)



第52図 SS01下部遺構実測図 (1/30)

遺存状況 良好。

覆土 暗褐色土を基調としている。

主軸方位 N-5°-W。

配石の状況 45~60cm 大の板状の河原石を長楕円形の範囲に敷き詰め、その周りを凹石や大型自然礫、板状の河原石を立てたもので囲っている。

下部遺構の平面形と規模 平面形は不整楕円形を呈する。規模は長軸207cm、短軸144.8cm、深さ69cmを測る。

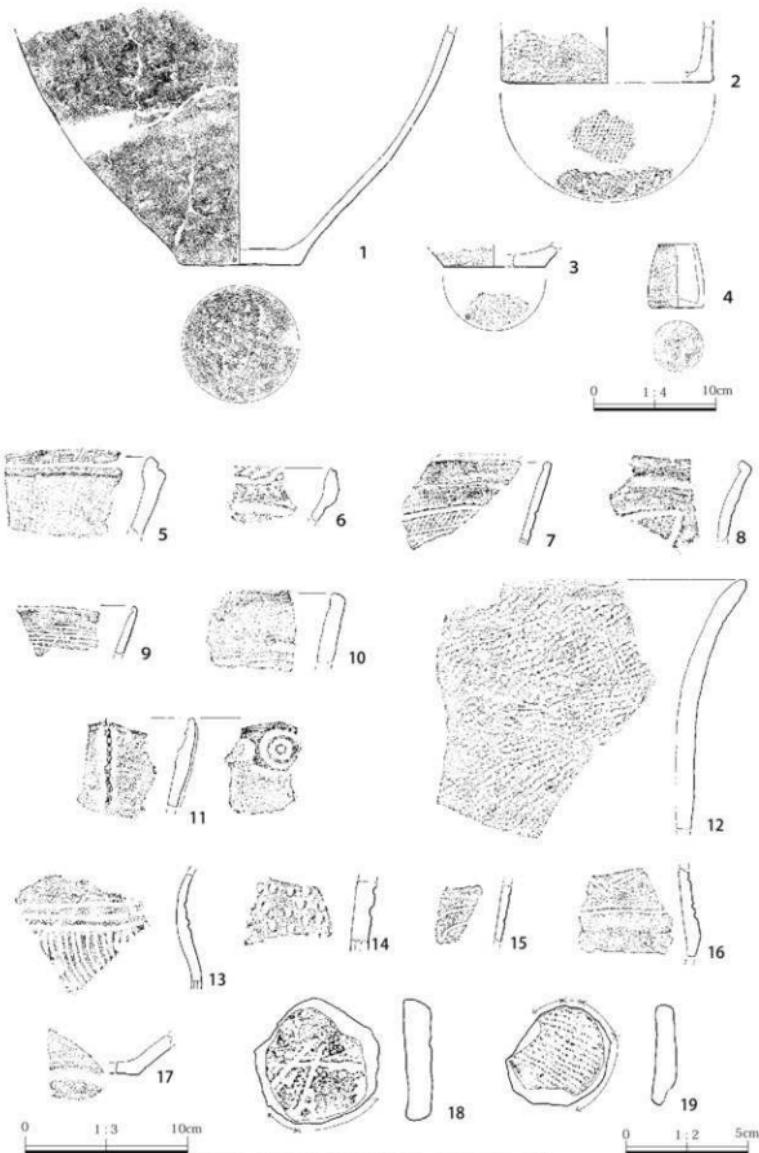
壁面 ほぼ垂直に立ち上がっている。

底面 平坦である。

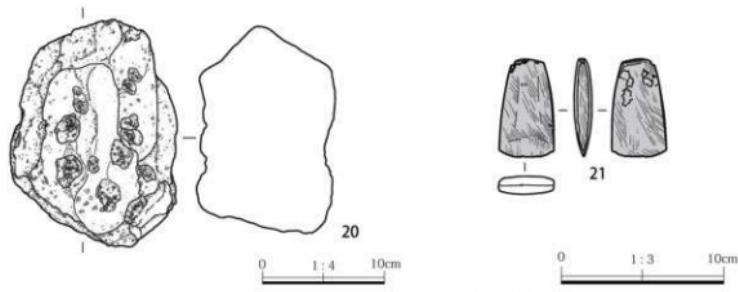
遺物の出土状況 下部遺構の底面からは第53図1の土器が正位で出土している。

遺物 総出土量は土器片158点 (3.249g) (うち土製円板4点)、石器 (剝片を含む) 30点 (9.136.9g) である。そのうち縄文土器19点、石器2点を図示し得た。石器組成は、剝片石器類9点 (未成品1点、剝片8点)、打製石斧類剝片4点、礫石器類16点 (磨石6点、磨石+凹石1点、多孔石1点、礫8点)、磨製石斧1点である。

備考 本配石は出土遺物から、縄文時代後期前葉～中葉（堀之内2式～加曾利B1式）に帰属すると考えられる。



第53図 SS01出土遺物実測図1 (1/4・1/3・1/2)



第54図 SS01出土遺物実測図2 (1/4・1/3)

SS02 (第55~57図／PL 13・14・30)

位置 調査区北側中央。

重複関係 なし。SS03・04・06・07と隣接する。

遺存状態 良好。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

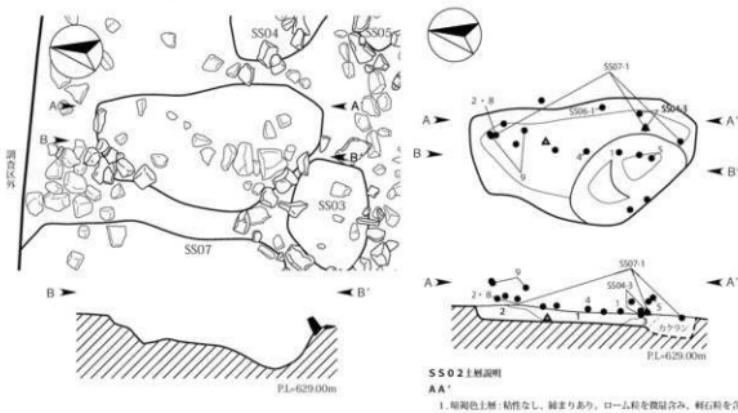
主軸方位 N-4°-W。

配石の状況 5~20cm 大の礫が疎らに集積されている。下部遺構の掘り込みの北側と南西側に特に集積されている。

下部遺構の平面形と規模 平面形は不整椭円形を呈する。規模は長軸139.5cm、短軸79.5cm、確認面からの深さ33cmを測る。

壁面 外傾して立ち上がっている。

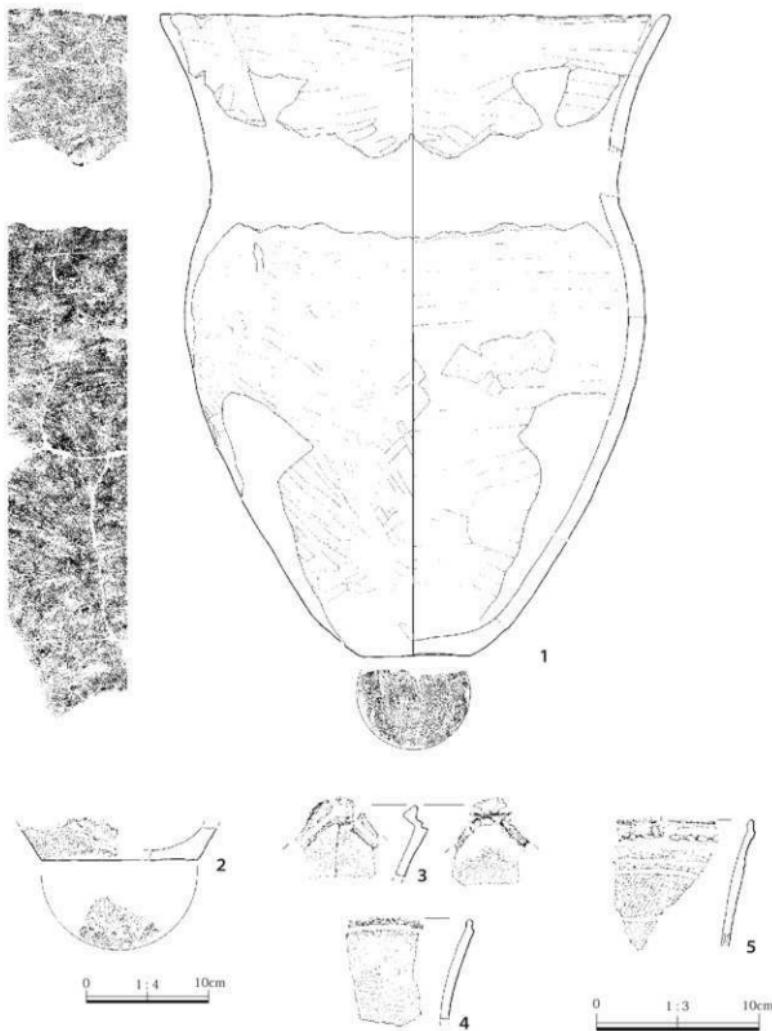
底面 概ね平坦で、北西隅が深く掘り込まれている。



第55図 SS02実測図 (1/30)

遺物 総出土量は、土器209点(5.298g)、石器(剥片を含む)4点(342.4g)である。そのうち縄文土器9点を図示し得た。石器組成は、剥片石器類剥片2点、打製石斧類剥片1点、礫石器類磨石1点である。

備考 本配石は出土遺物から、縄文時代後期前葉(堀之内2式古段階後半)に帰属すると考えられる。



第56図 SS02 出土遺物実測図1 (1/4・1/3)



第57図 SS02出土遺物実測図2 (1/3)

SS03 (第58・59図／PL 13・14・30)

位置 調査区北側中央。

重複関係 なし。SS02・07・08・10と隣接する。

遺存状態 良好。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

主軸方位 N-65°-E。

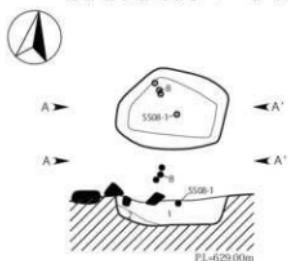
配石の状況 5~15cm 大の礫が疎らに集積されている。

下部遺構の平面形と規模 平面形は不整梢円形を呈する。規模は長軸72cm、短軸52.5cm、確認面からの深さ19cmを測る。

壁面 ほぼ垂直に立ち上がっている。

底面 概ね平坦で、北西隅が深く掘り込まれている。

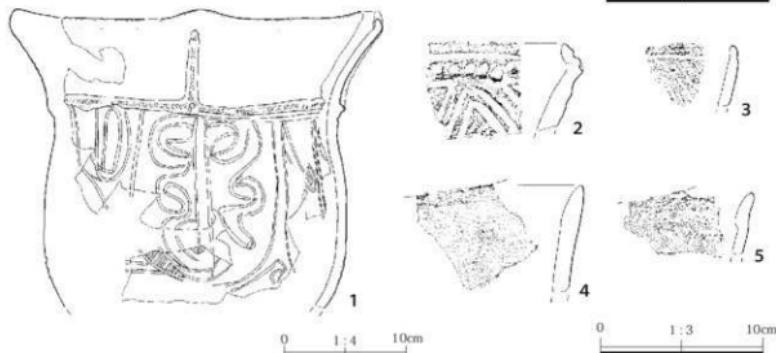
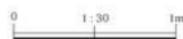
遺物 総出土量は、土器60点(820g)、石器(剥片を含む)9点(161.1g)である。そのうち縄文土器10点、石器1点を図示し得た。石器組成は、剥片石器類3点(石鏃1点、剥片2点)、打製石斧類3点、礫石器類磨石1点である。



SS03上解説

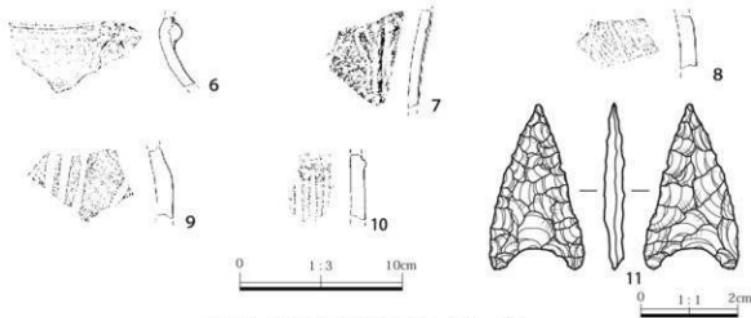
AA'

- 1.暗褐色土層・粘性なし、締まりやあり。ローム層を微混含み。軽石粉を少量含む。
- 2.暗褐色土層・粘性なし、締まりあり。ローム層・軽石粉を含む。



第58図 SS03実測図(1/30)・出土遺物実測図1(1/4・1/3)

備考 本配石は出土遺物から、縄文時代後期前葉（堀之内1式新段階）に帰属すると考えられる。



第59図 SS03出土遺物実測図2 (1/3・1/1)

SS04 (第60~62図／PL 13・14・31)

位置 調査区北側中央。

重複関係 なし。SS02・05・06と隣接する。

遺存状態 良好。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を呈している。

主軸方位 N-64°-W。

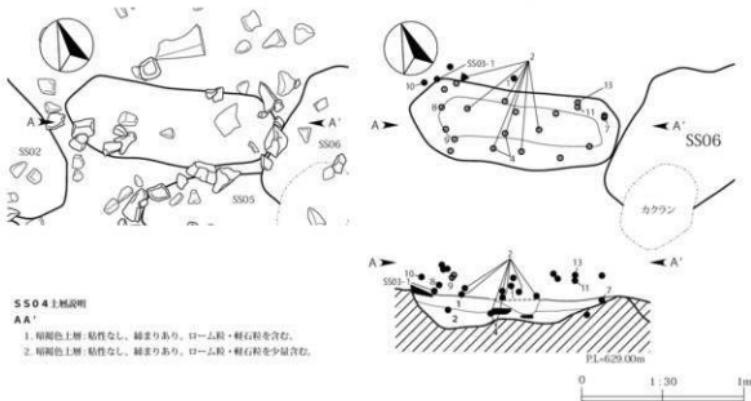
配石の状況 5~20cm 大の蝶が疎らに集積されている。

下部遺構の平面形と規模 平面形は不整椭円形を呈する。規模は長軸130.5cm、短軸48cm、確認面からの深さ20cmを測る。

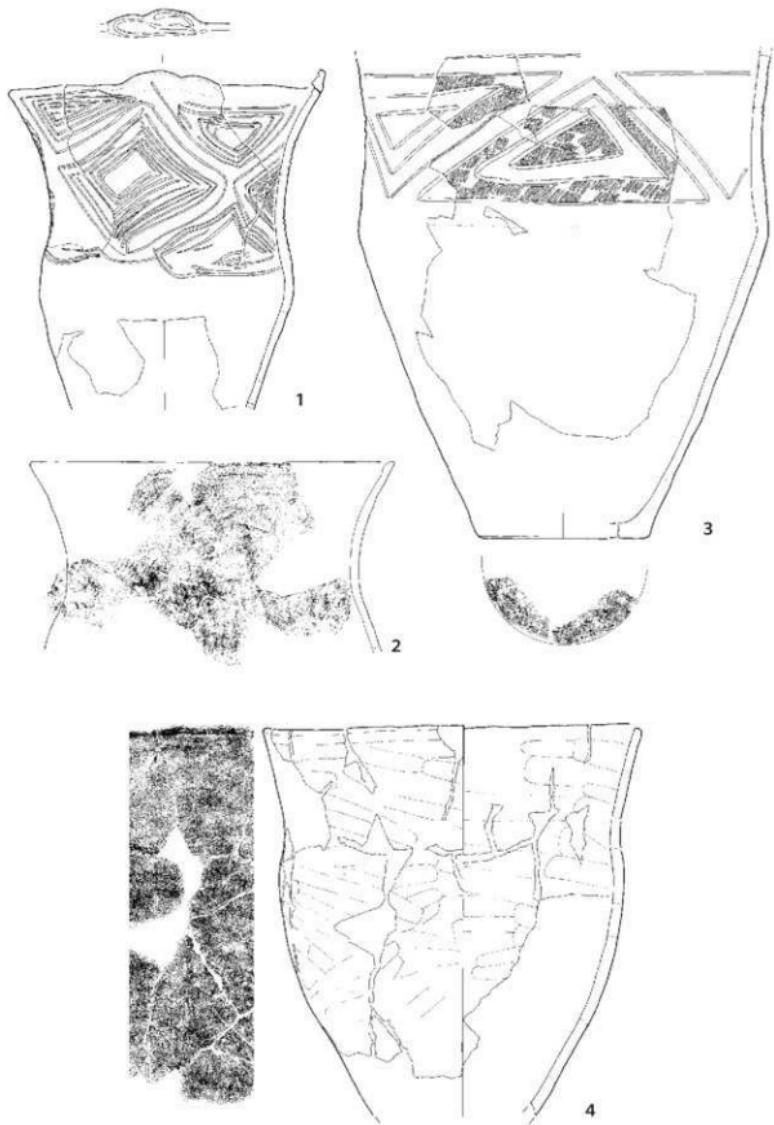
壁面 外傾して立ち上がっている。

底面 凸凹している。

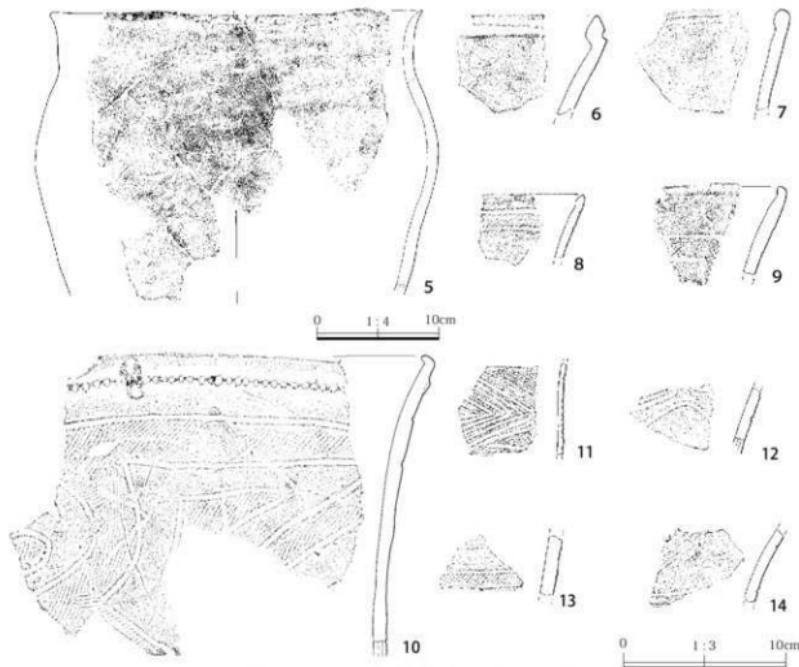
遺物 総出土量は、土器129点(2,655g)、石器(剥片を含む) 2点(617.6g)である。そのうち縄文土器



第60図 SS04実測図 (1/30)



第61図 SS04出土遺物実測図1 (1/4)



第62図 SS04出土遺物実測図2 (1/4・1/3)

14点を図示し得た。石器組成は、剥片石器類剥片1点、礫石器類磨+敲+凹凸石1点である。

備考 本配石は出土遺物から、縄文時代後期前葉（堀之内2式古段階後半）に帰属すると考えられる。

SS05 (第63図／PL 14・15・32)

位置 調査区北側中央。

重複関係 SS06と重複し、これに切られる。またSS04と隣接する。

遺存状態 北東側をSS06に切られ、攪乱を受けている。

覆土 暗褐色土を基調とし、単層である。

主軸方位 N-76°-W。

配石の状況 5~20cm 大の礫が疎らに集積されている。

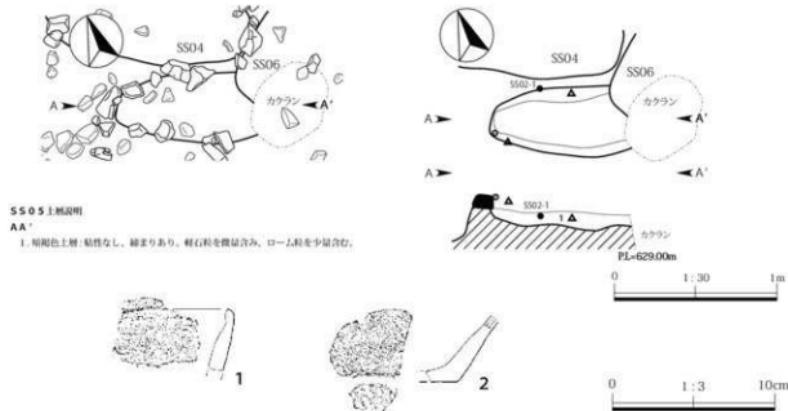
下部遺構の平面形と規模 平面形は不整橢円形を呈する。規模は長軸78cm以上、短軸43.5cm、確認面からの深さ12cmを測る。

壁面 外傾して立ち上がっている。

底面 やや凸凹している。

遺物 総出土量は、土器11点(275g)、石器(剥片を含む)2点(2,707.8g)である。そのうち縄文土器2点を図示し得た。石器組成は、打製石斧類剥片1点、礫石器類多孔石1点である。

備考 本配石は出土遺物から、縄文時代後期前葉（堀之内2式）に帰属すると考えられる。



第 63 図 SS05 実測図 (1/30)・出土遺物実測図 (1/3)

SS06 (第64・65図／PL 14・15・32)

位置 調査区北側中央。

重複関係 SS05と重複し、これを切る。また、SS04と隣接する。

遺存状態 北東側をSS04に切られ、攪乱を受けている。

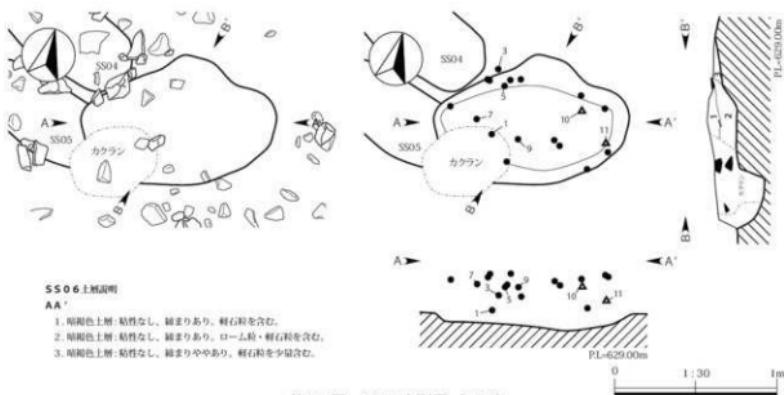
覆土 暗褐色土を基調としている。

主軸方位 N-74°-E。

配石の状況 5~20cm 大の礫が疎らに集積されている。

下部遺構の平面形と規模 平面形は不整梢円形を呈する。規模は長軸121.5cm、短軸81cm、確認面からの深さ22cmを測る。

壁面 外傾して立ち上がっている。



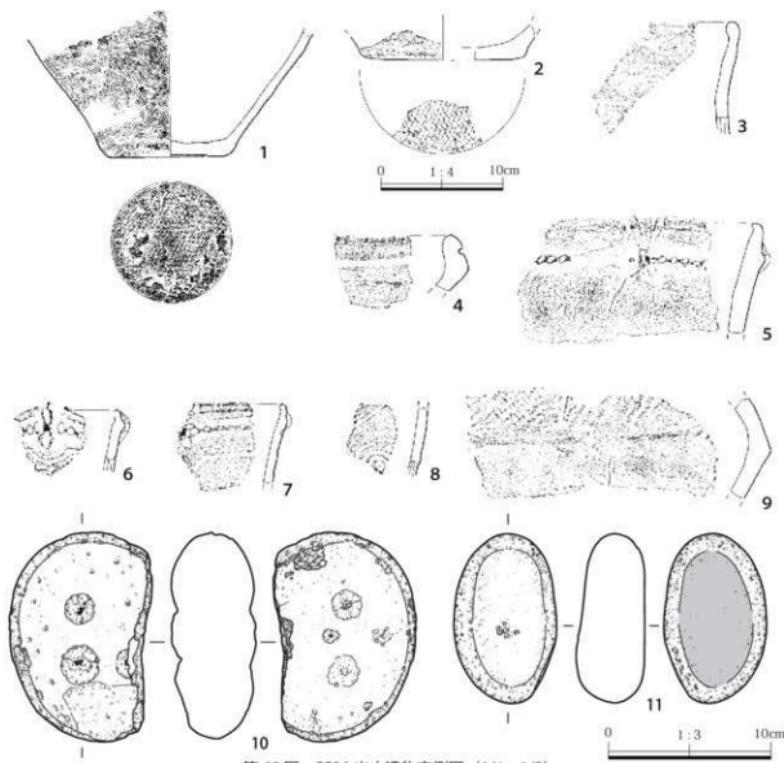
第 64 図 SS06 実測図 (1/30)

底面 やや凸凹している。

遺物出土状況 底面付近から第65図1が逆位で出土している。

遺物 総出土量は、土器58点(1,429g)、石器(剥片を含む)4点(1,541g)である。そのうち縄文土器9点、石器2点を図示し得た。石器組成は、打製石斧類剥片2点、礫石器類磨石+凹石2点である。

備考 本配石は出土遺物から、縄文時代後期前葉(堀之内2式中段階前半)に帰属すると考えられる。



第65図 SS06 出土遺物実測図 (1/4・1/3)

SS07 (第66・67図／PL 14・15・32)

位置 調査区北側中央。

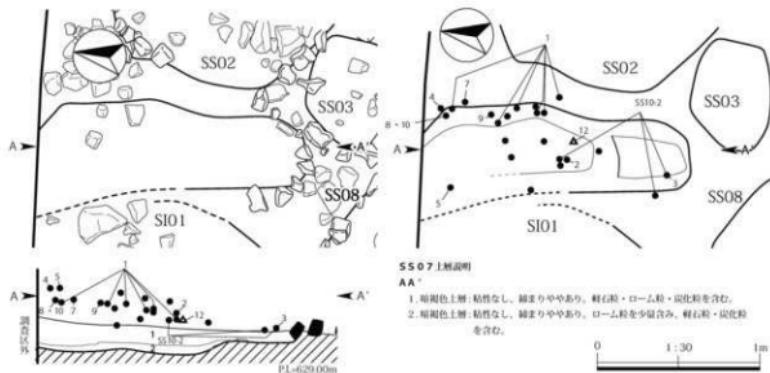
重複関係 SI01と重複し、これを切る。

遺存状態 北側が調査区外に伸びている。SI01との隣接部分がやや不明瞭になっている。

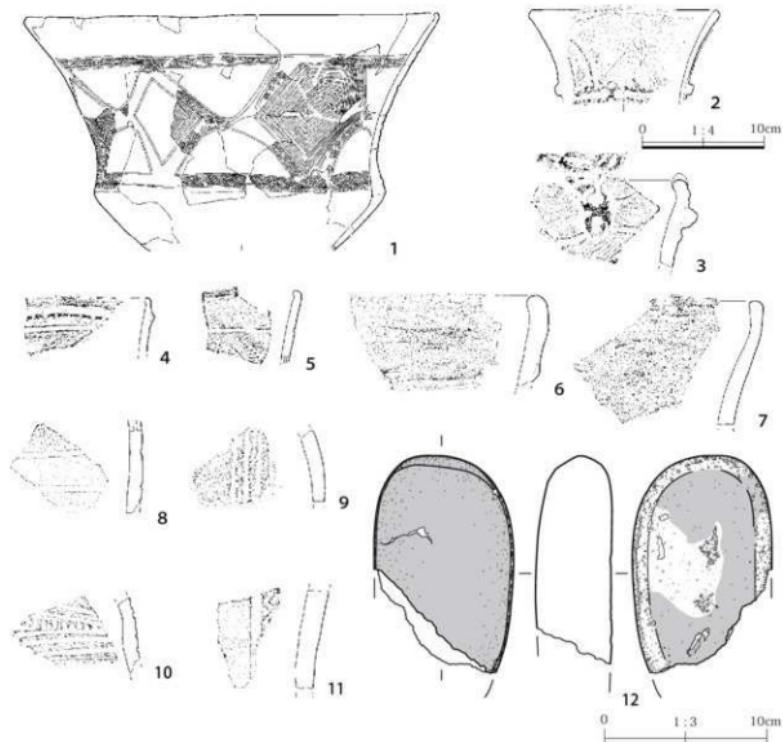
覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

主軸方位 N-1°-W。

配石の状況 5~20cm 大の砾が南端を縁取るように配置されている。



第66図 SS07 実測図 (1/30)



第67図 SS07 出土遺物実測図 (1/4・1/3)

下部遺構の平面形と規模 平面形は不整橢円形を呈する。規模は長軸166cm以上、短軸69cm、確認面からの深さ17cmを測る。

壁面 段になって立ち上がっている。

底面 やや凸凹している。

遺物 総出土量は、土器66点(1,910g)、縄石器類磨石1点(790g)である。そのうち縄文土器11点、石器1点を図示し得た。

備考 本配石は出土遺物から、縄文時代後期前葉(堀之内2式古段階後半～中段階前半)に帰属すると考えられる。

SS08(第69・70図／PL 14～16・33)

位置 調査区北側中央。

重複関係 なし。SI01、SS03、SS10と隣接している。

遺存状態 良好。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

主軸方位 N-28°-W。

配石の状況 5～20cm 大の礫が疎らに集積されている。

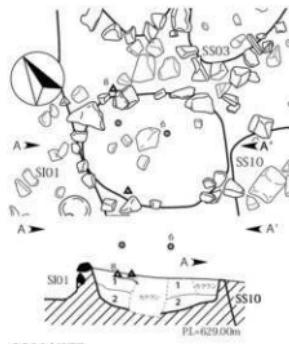
下部遺構の平面形と規模 平面形は不整橢円形を呈する。規模は長軸90cm以上、短軸76.5cm、確認面からの深さ34.5cmを測る。

壁面 外傾して立ち上がっている。

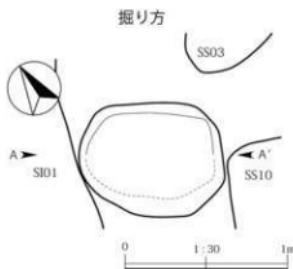
底面 やや凸凹している。

遺物 総出土量は、土器27点(811g)、土製品1点(19.2g)、縄石器類磨石2点(1,010g)である。そのうち縄文土器5点、土製品1点、石器2点を図示し得た。

備考 本配石は出土遺物から、縄文時代後期前葉(堀之内2式古段階)に帰属すると考えられる。



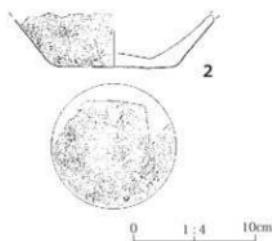
SS08(上層剖面)
AA'
1. 布糊色土層：粘性なし、緑まりあり。ローム粒・軽石粒・炭化
植物含む。
2. 布糊色土層：粘性なし、緑まりややあり。ローム粒を微量含み、
軽石粒を少量含む。



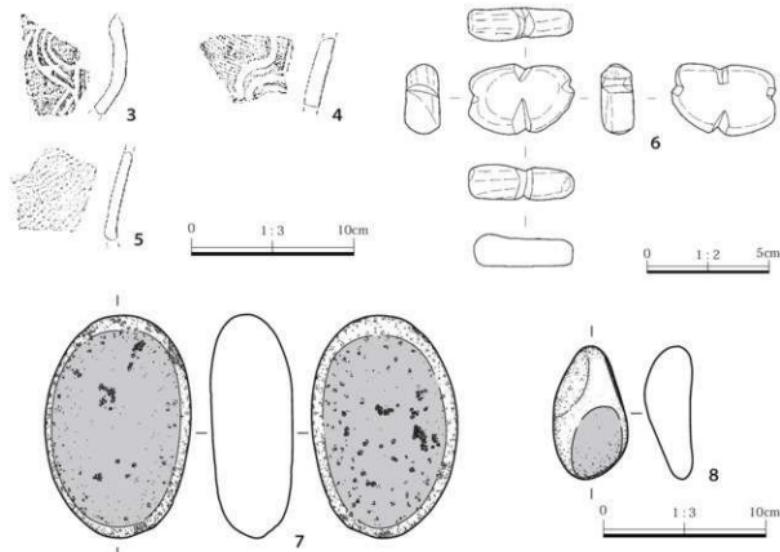
第68図 SS08実測図(1/30)



第69図 SS08出土遺物実測図1(1/4)



0 1:4 10cm



第70図 SS08出土遺物実測図2 (1/3・1/2)

SS09 (第71~73図／PL 14・16・33・34)

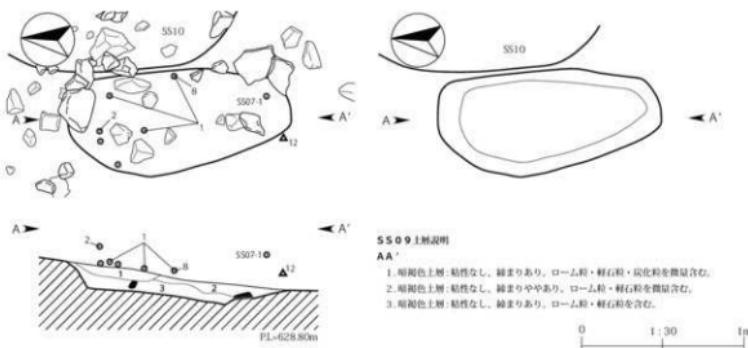
位置 調査区北側中央。

重複関係 なし。SS10と隣接する。

遺存状態 良好。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

主軸方位 N-1.5°-E。



第71図 SS09実測図 (1/30)

配石の状況 北端と南端に30cm台の板状礫が配置され、全体に5~20cm 大の礫が疎らに集積されている。

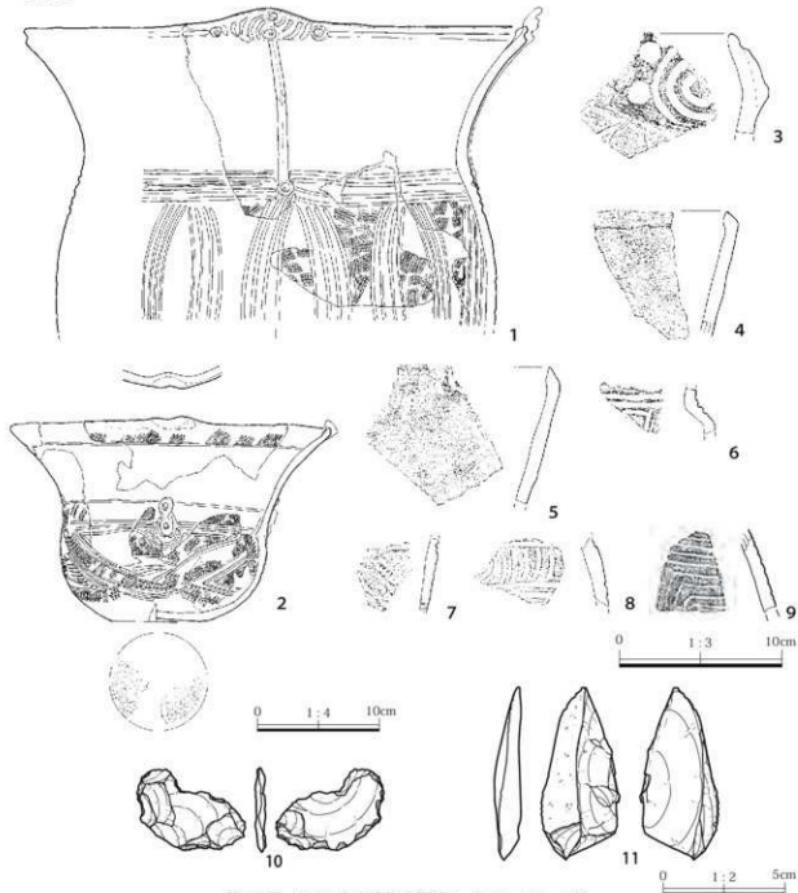
下部遺構の平面形と規模 平面形は不整梢円形を呈する。規模は長軸139.5cm、短軸66cm、確認面からの深さ23cmを測る。

壁面 外傾して立ち上がっている。

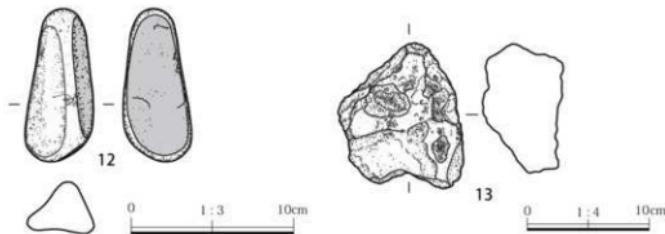
底面 やや凸凹している。

遺物 総出土量は、土器47点(937g)、石器(剥片を含む)4点(651.6g)である。そのうち縄文土器9点、石器4点を図示し得た。このうち第72図4と5は同一個体で、5はSK11付近から出土した。石器組成は、剥片石器類2点(石匙1点、剥片1点)、打製石斧類削器1点、礫石器類多孔石1点である。

備考 本配石は出土遺物から、縄文時代後期前葉(堀之内1式新段階~堀之内2式古段階)に帰属すると考えられる。



第72図 SS09出土遺物実測図1 (1/4・1/3・1/2)



第73図 SS09 出土遺物実測図2 (1/3・1/4)

SS10 (第74~76図／PL 14・16・34)

位置 調査区北側中央。

重複関係 なし。SS08・09と隣接する。

遺存状態 良好。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を呈している。

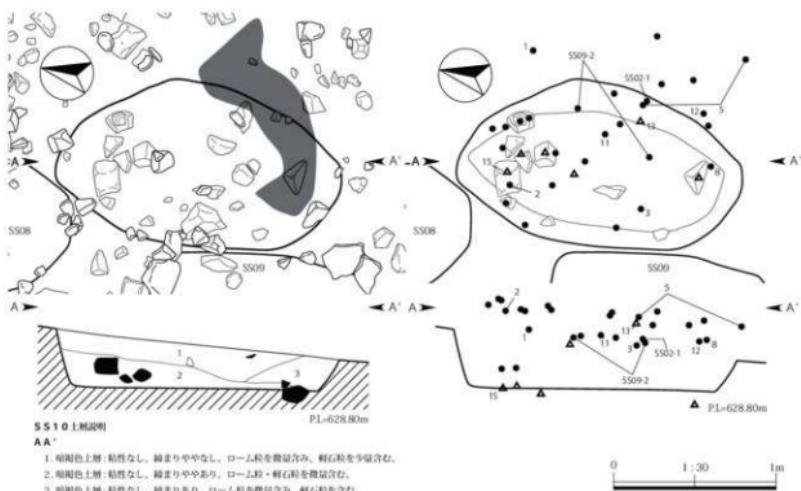
主軸方位 N-8.5°-E。

配石の状況 5~30cm 大の砾が疎らに集積されている。下部遺構両端底部に設置されていた砾は、多孔石や石棒である。

下部遺構の平面形と規模 平面形はやや歪な梢円形を呈する。規模は長軸175.5cm、短軸102cm、確認面からの深さ39cmを測る。

壁面 外傾して立ち上がっている。

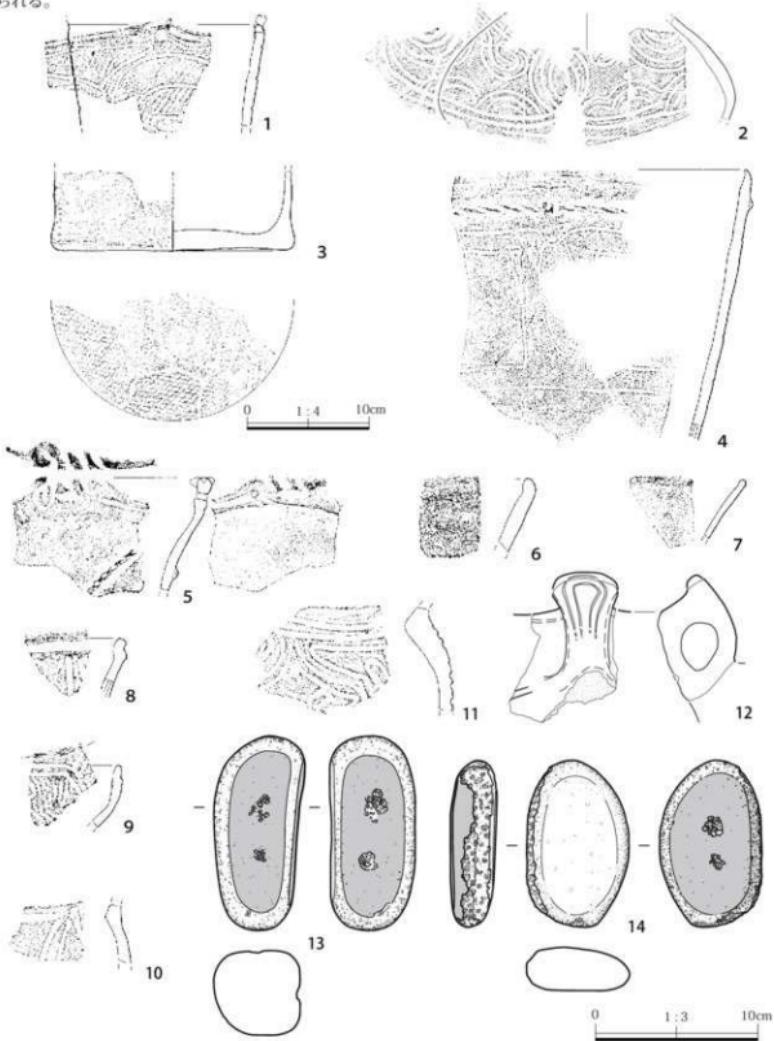
底面 平坦である。



第74図 SS10 実測図 (1/30)

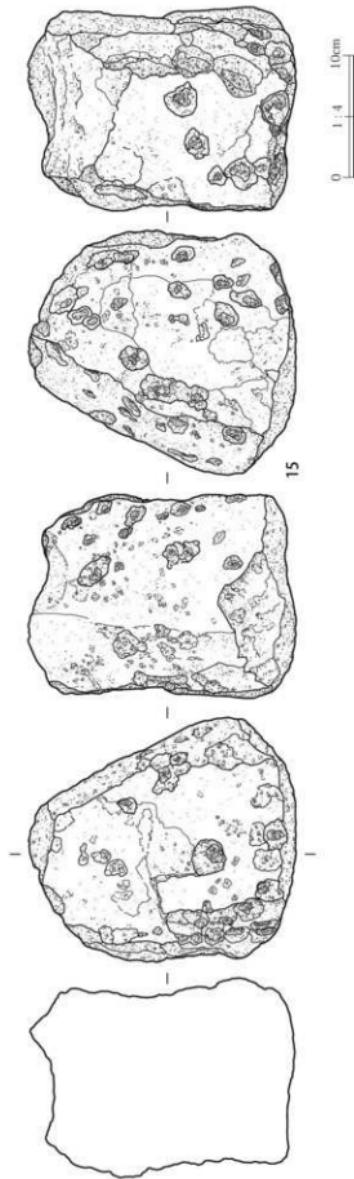
遺物 総出土量は、土器133点(3,292g)、石器(剥片を含む)9点(17,041.3g)である。そのうち縄文土器12点、石器3点を図示した。石器組成は、剥片石器類剥片2点、礫石器類6点(磨石2点、磨+四十敲石1点、多孔石3点)、石棒1点である。

備考 本配石は出土遺物から、縄文時代後期前葉(塙之内1式新段階~塙之内2式古段階)に帰属すると考えられる。



第75図 SS10出土遺物実測図1 (1/4・1/3)

第76図 SS10出土遺物実測図2 (1/4)



第5節 焼土遺構

1号焼土

位置 調査区東側中央。 重複関係 なし。 遺存状態 良好。 主軸方位 N-15°-E。

平面形と規模 平面形は不整橍円形を呈する。規模は長軸90cm、短軸80cmを測る。

遺物 総出土量は繩文土器2点(57g)であるが、図示し得なかった。

2号焼土 (第77図／P L 35)

位置 調査区西側中央。 重複関係 なし。 遺存状態 良好。 主軸方位 N-30°-W。

平面形と規模 平面形は不整形を呈する。規模は長軸30cm、短軸25cmを測る。

遺物 総出土量は砾石器類磨石1点(226g)で、これを図示し得た。

3号焼土 (第77図／P L 35)

位置 調査区西側中央。 重複関係 なし。 遺存状態 良好。 主軸方位 N-84.5°-E。

平面形と規模 平面形は不整橍円形を呈する。規模は長軸280cm、短軸105cmを測る。

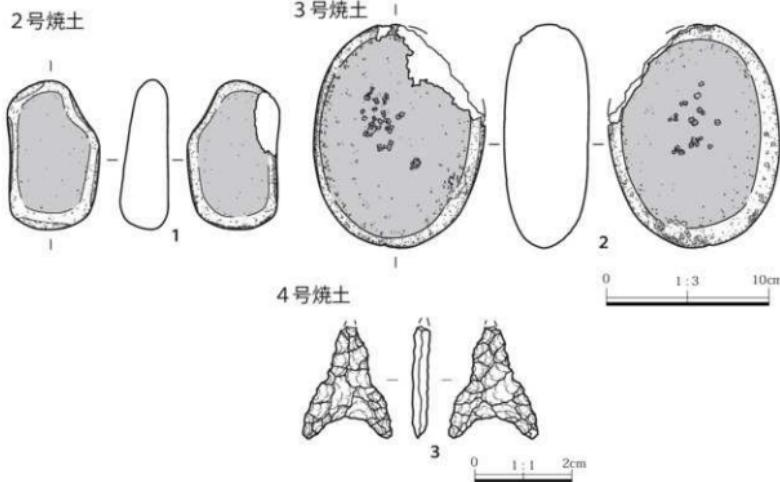
遺物 総出土量は繩文土器1点(12g)、石器3点(1750.4g)で、このうち石器1点を図示し得た。石器組成は打製石斧類剥片1点、砾石器類磨石2点である。

4号焼土 (第77図／P L 35)

位置 調査区西側中央。 重複関係 なし。 遺存状態 良好。 主軸方位 N-81°-W。

平面形と規模 平面形は不整橍円形を呈する。規模は長軸180cm、短軸115cmを測る。

遺物 総出土量は土器2点(70g)、剥片石器類石鐵1点(0.6g)である。このうち石鐵1点を図示し得た。



第77図 焼土遺構出土遺物 (1/3・1/1)

第6節 遺構外出土遺物

ここでは調査区表土および確認面出土遺物、遺構内の流れ込み遺物を一括して取り扱う。遺構外出土遺物は縄文時代前期から近世に至るまで認められ、今回遺構が検出されなかった時期のものも含んでいる。

遺構外出土遺物の総出土量は、土器片24,430点(462,890g)、石器(剥片を含む)1410点(644,153.9g)、陶磁器類49点(533g)である。そのうち、土器155点、陶磁器9点、土製品20点、金属製品を1点、石器を112点図示し得た。石器組成は剥片石器類653点(石鏃35点、石鏃未成品7点、石錐9点、石錐未成品2点、石匙4点、削器2点、楔形石器1点、器種不明製品1点、器種不明未成品3点。剥片585点、石核4点)、打製石斧類252点(打製石斧9点、未成品7点、削器10点、剥片213点、原石1点、石核・石材3点)、礫石器類487点(磨石285点、敲石111点、凹石3点、磨石+敲石7点、磨石+凹石4点、敲石+多孔石1点、磨石+凹石+敲石2点、石皿5点、石皿+多孔石2点、石皿未成品1点、多孔石89点、台石12点、砥石4点、加工痕のある礫1点、礫60点)、磨製石斧類6点、軽石製品3点(容器状1点、棒状1点、破片1点)、石棒2点、玉類1点、块状耳飾1点、綠泥片岩製品(岩偶?)1点、綠泥片岩破片2点、綠色片岩破片1点である。

1. 土 器 (第78~94図／PL35~44)

以下の5群に大別する。

第I群 縄文時代前期の土器を一括する。(第78図1)

胎土に纖維を含む土器である。羽状縄文を有する。

第II群 縄文時代中期の土器を一括する。

第1群 中期中葉

曾利式・唐草文系(第78図2・3)

2は交叉刺突文を施した橋状把手、3は半裁竹簡文を施した体部破片である。

第2群 中期後葉(第78~79図4~11)

a群 鄭土式(第78図4・5)

体部文様が沈線により描かれる。

b群 加曾利E3式(第78~79図6~10)

6は調査区東側中央で横倒して潰れた状態で出土した。口縁部に渦巻文や長梢円、体部に磨り消しの無文帯を持つ一群である。

c群 大木系(第79図11)

かなり破損しているが「双翼状突起」である。大木8b~9a式併行と考えられるが、体部が残存していないため詳細は不明である。

第3群 中期末

加曾利E4式(第79~82図12~30)

口縁から頸部にかけてU字状やV字状の蛇行沈線や降帶を有するもの(12~14)、同心円や渦巻文を有するもの(15~17・22)、玉抱文を有するもの(18・19・24)、口縁部に無文帯を持つもの(20・21)などバリエーションに富む。

第III群 縄文時代後期の土器を一括する。

第1群 後期初頭

称名寺式(第82~84図31~61)

53・54は称名寺II式、それ以外は称名寺I式に帰属すると考えられ、未実測遺物を含めても、本調査区では称名寺I式の遺物が大多数を占める。57は隣の調査区(HNI-16)から同一個体が出土している。

35・59は注口土器で、どちらも千鳥竈類型（鈴木1992）に属すると考えられる。35は称名寺式中段階以前、59は称名寺式新段階以降の所産であろう。

第2群 後期前葉

a群 堀之内1式（第85図62～71）

深鉢は①頭部にくびれを持ち口縁にかけて開くタイプ（63～66・68・69）と、②くびれを持たないバケツ型のタイプ（62・67・70）に分けられる。71は注口土器で、蕃神台類型でも堀之内1式に属する古いタイプである。

b群 堀之内2式（第86～90図72～126）

深鉢は①頭部にくびれを持つタイプ（72～74・87～89・103～105）、②バケツ型（75～77、79～82・90～101・107・108・110・111）に加え、③体下半部で膨らむタイプ（78・83～84・106・109）が加わる。①のタイプの中でも72は堀之内1式と2式の過渡期にある土器と考えられる。73・87～89は頭部の8字突起と口縁までを8字を連続させた隆帶で繋いだり、体部が極端に小さくなるなどの変化がみられる。104は同心円を縦文帯で繋ぐ文様で、注口土器の文様（85・119・121～123）と共に通する。

②・③は、体上部の文様は重三角や重菱形など充填したもの（75～77・90・91）、幾何学文を入れ子状にしたもの（78～84・92・105～108）、幾何学文の内部が無文になるもの（93～95・109）、文様が横に展開してゆくもの（96・97）、内側の文様が発達してくるもの（98～102）、石神文様が施文されるもの（98・112）、交差する沈線が描かれるもの（110・111）がある。

注口土器は蕃神台類型（鈴木1992・2000）（85・86・113・114・119～123）、福田類型（秋田2006）（115）、椎塚類型（秋田2006）（116・117・124～126）と、様々な時期や類型のものが出土した。124は石神文様が描かれている。

c群 加曾利B1式（第90・91図127～138）

区切文や内面に数条の沈線を有する土器。135～138は注口土器で、136は瓢型の器形に、浅鉢などの内面模様が外側に描かれているタイプと考えられる。137は加曾利B1式古段階から中段階にかけて、138は新段階と考えられる。

d群 粗製土器（第91～93図139～144）

e群 底部（第93・94図145～151）

第3群 後期後葉（第94図152）

高井東式の突起の一部と考えた。

第IV群 弥生時代の土器を一括する。（第94図153～155）

全て弥生時代中期前半に比定される。

第V群 中近世の遺物を一括する。（第94図156～164）

156～164は陶磁器。

2. 土製品（第94・95図／PL44・45）

165～179は土製円板で、大きさはさまざまであるが、穿孔されているものはなかった。

180～184は土製輪軸で、180～183はオツタノハ製のものを模していると考えられる。184は前述の物よりも傾きが急で分厚く表面に条線が施文されている。

3. 金属製品（第95図185／PL45）

一点のみで、銅錢（寛永通宝）である。

4. 石 器（第96～106図／PL45～51）

(1) 剥片石器類

- a. 石鑿（第96・97図 186～222）

平基三角（186）、平基長形（187・188）、凹基三角（189～194）、凹基長形（195～217）、凸基長形（218）、破損して基部がわからないもの（219・220）、未成品（221・222）に分類される。

- b. 石錐（第97図 223～228）

- c. 石匙（第98図 229）

- d. 削器（第98図 230）

- e. 剥片（第98図 231～238）

このうち、232～234はRetachedflである。

- f. 石核（第98・99図 239～242）

(2) 打製石斧類

- a. 打製石斧（第99・100図 243～253）

平形（243～246）、平バチ型（247～252）、平分銅形（253）に分類される。

- b. 削器（第100・101図 254～260）

- c. 楔形石器（第101図 261）

(3) 磨石器類

- a. 磨石（第101図 262～264）

- b. 磨石+敲石（第101図 266）

- c. 磨石+凹石（第101～102図 265・268）

- d. 磨石+凹石+敲石（第102図 267）

- e. 石皿（第102図 269～271）

- f. 多孔石（第103～105図 272～281）

(4) 磨製石斧類

- a. 磨製石斧（第105図 282～284）

- b. 磨製石斧から削器へ転用品（第105図 285）

(5) その他の石器類

- a. 軽石製品（第106図 286・287）

286は容器状、287は棒状である。

- b. 石棒（第106図 288・289）

- c. 緑泥片岩製品（第106図 290）

平梢円形。岩偶か。

- d. 塊状耳飾（第106図 291）

- e. 玉（第106図 292）

- f. 用途不明チャート製品（第106図 293）

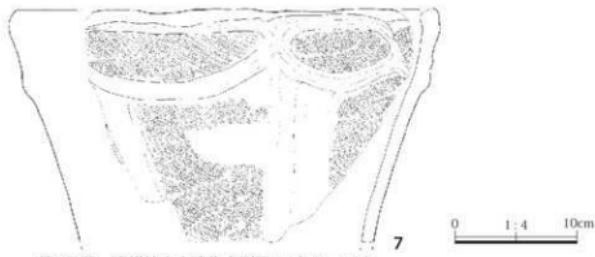
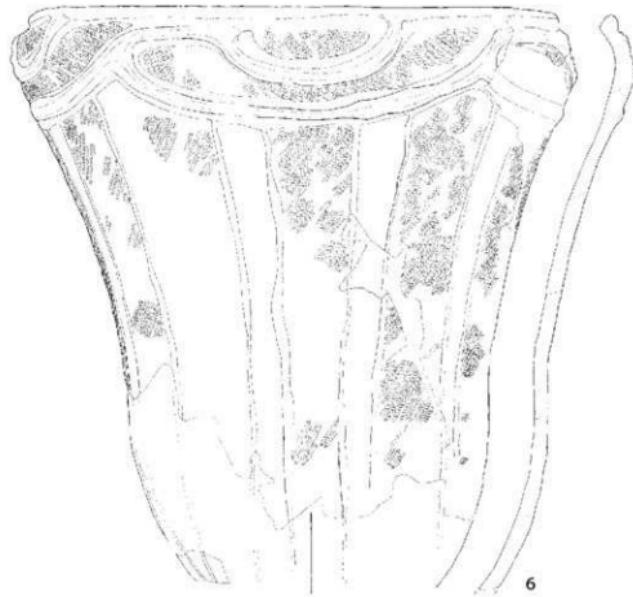
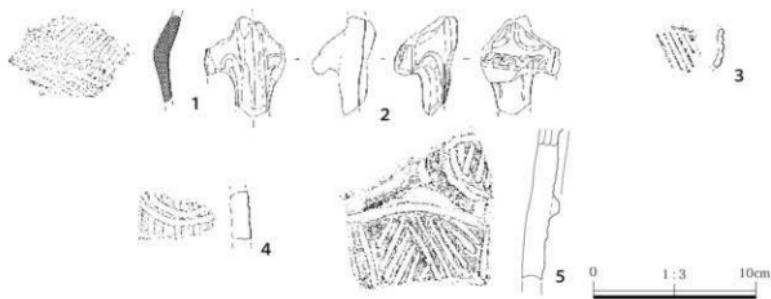
極小型の磨石の可能性がある。

引用・参考文献

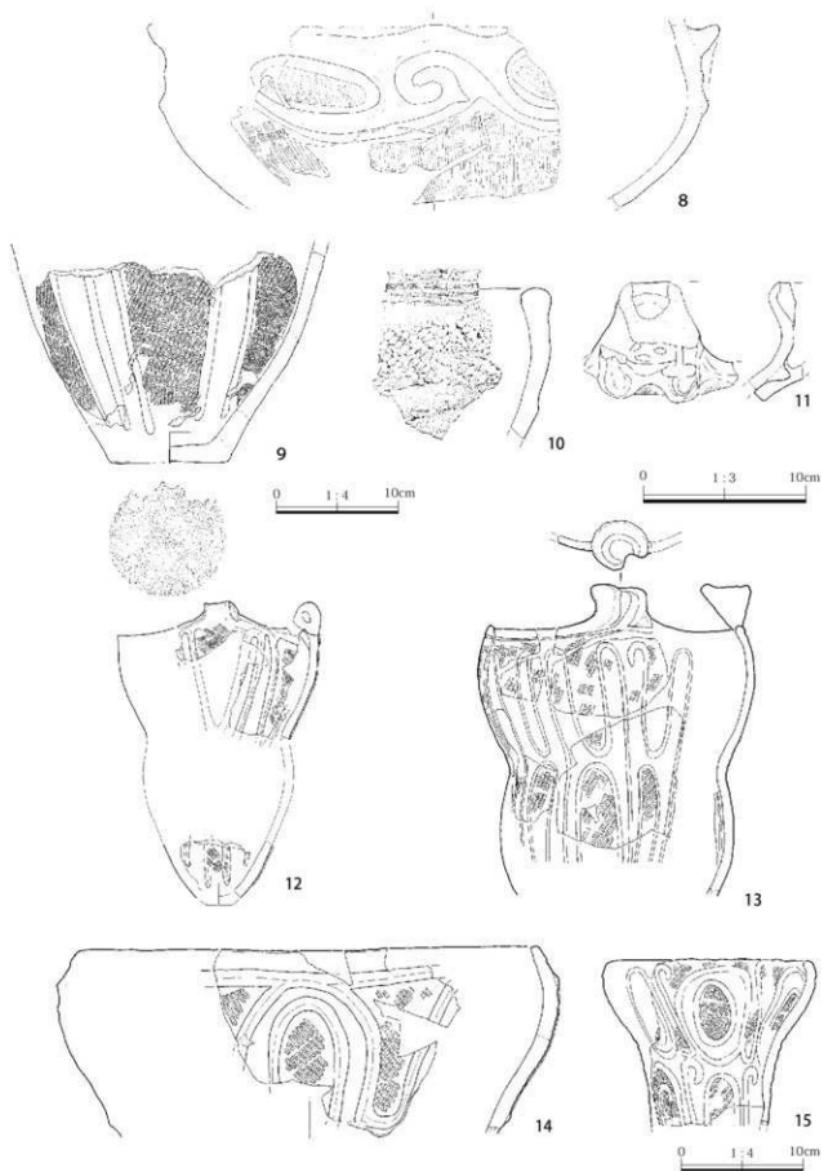
秋田かな子 2006「関東地方後期前・中葉にみる土器文化の展開—型式の変化と維持をめぐって—」『縄紋社会をめぐるシンポジウムN—土器型式をめぐる諸問題—予稿集』縄紋社会研究会・早稲田大学先史考古学研究所

路本他雄 1992「縄文後期注上式土器の成立」『縄文時代』第3号 縄文時代文化研究会

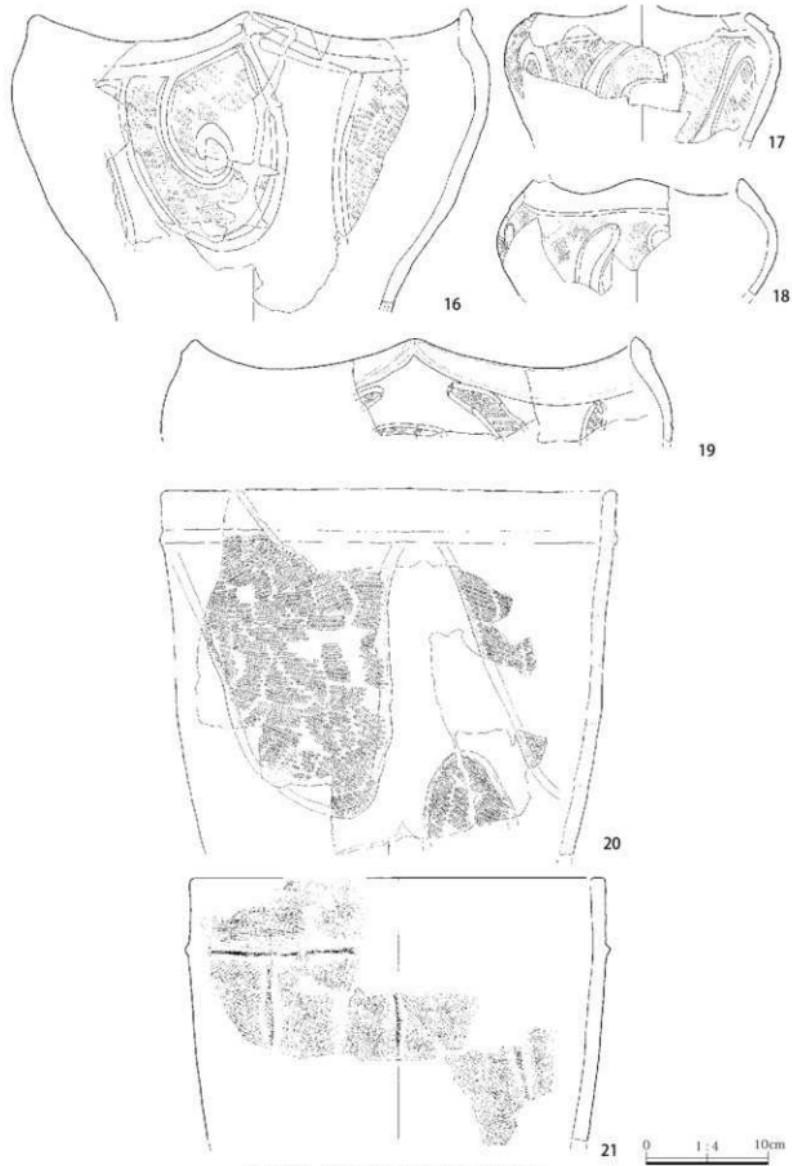
2000「称名寺式土器」・「廬之内式土器」『縄文時代』第10号 縄文時代文化研究会



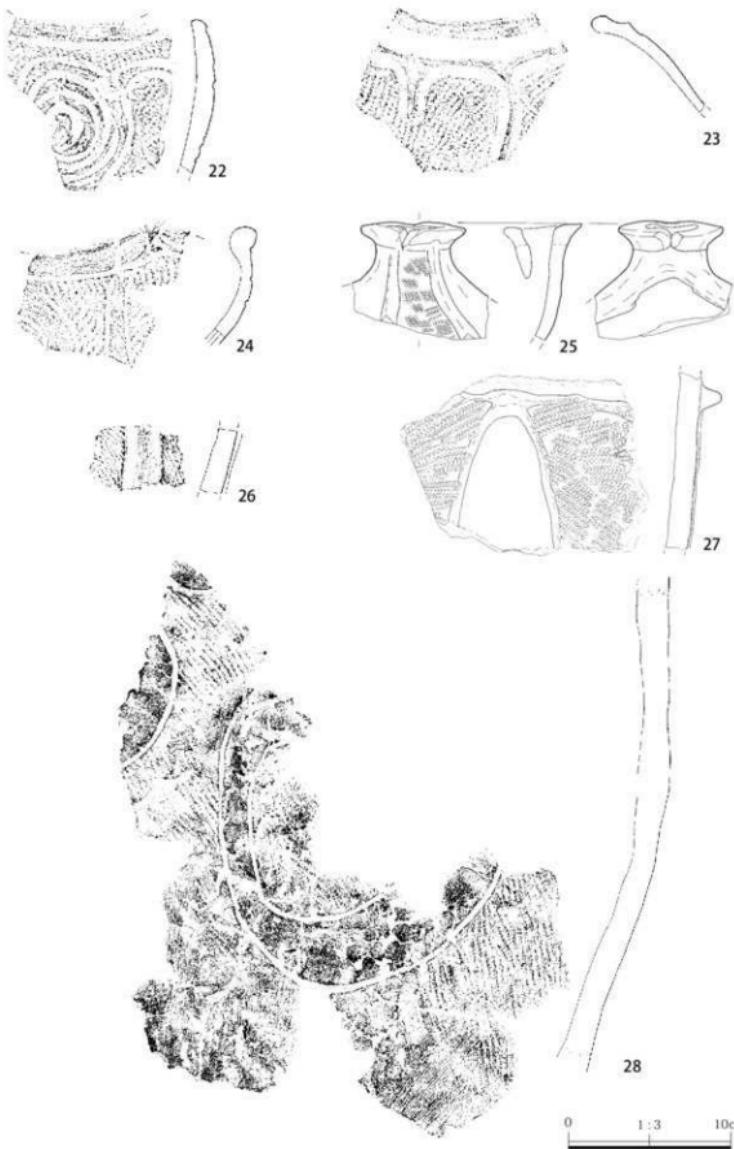
第78図 遺構外出土遺物実測図1 (1/3・1/4)



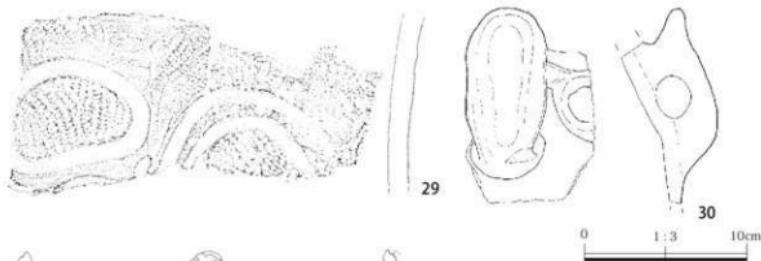
第79図 遺構外出土遺物実測図2 (1/4・1/3)



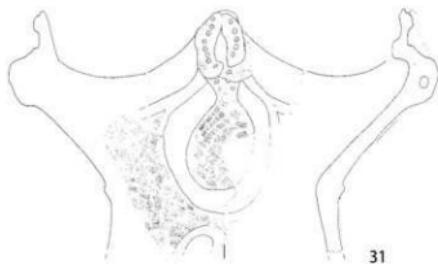
第 80 図 遺構外出土遺物実測図 3 (1/4)



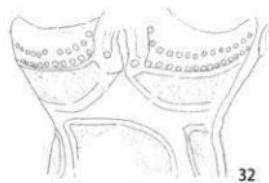
第 81 図 遺構外出土遺物実測図 4 (1/3)



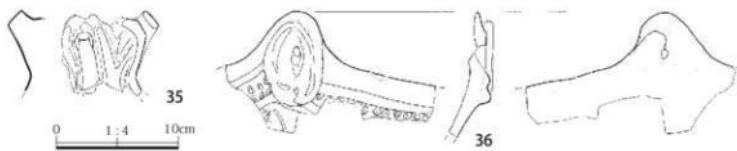
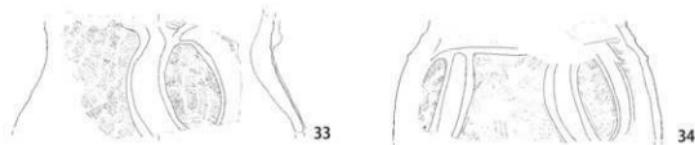
0 1:3 10cm



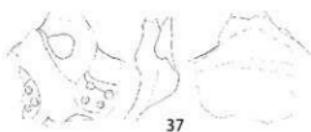
31



32

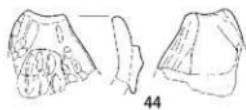
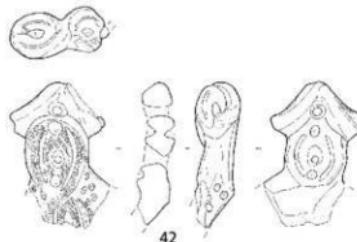
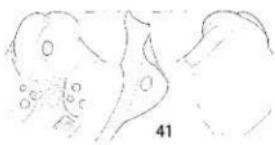
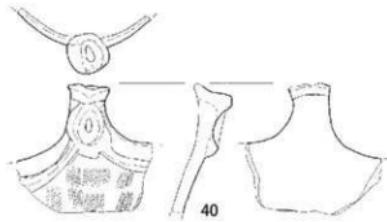
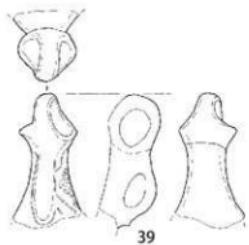


0 1:4 10cm



0 1:3 10cm

第82図 遺構外出土遺物実測図5 (1/3・1/4)



44



45



46



47



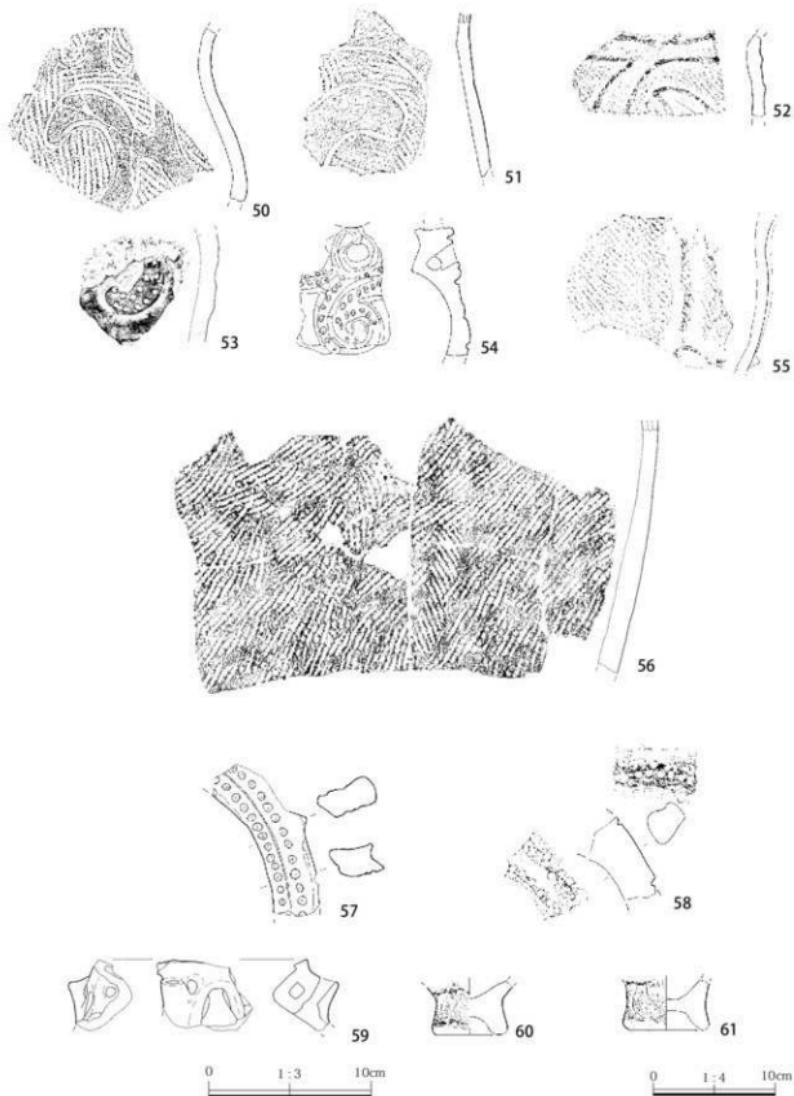
48



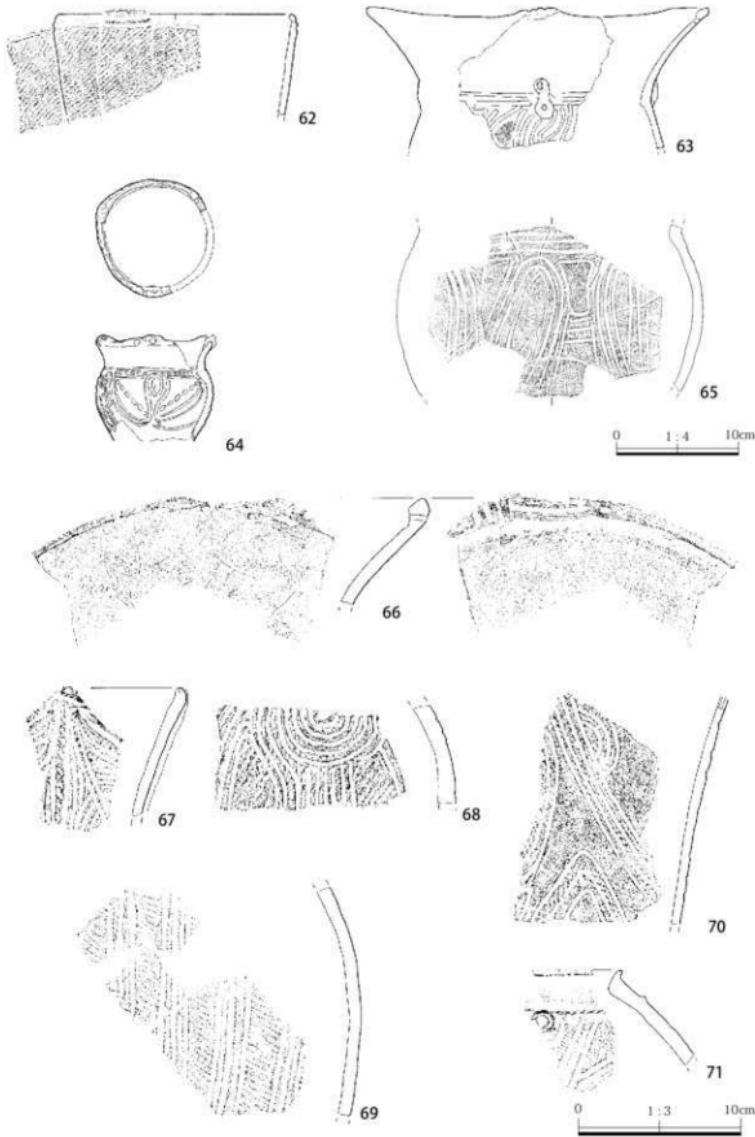
49

0 1:3 10cm

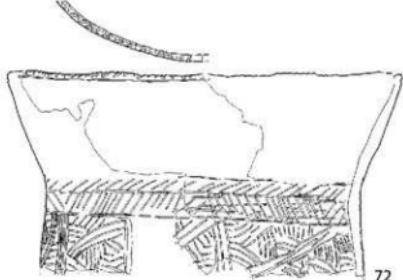
第83図 遺構外出土遺物実測図6 (1/3)



第 84 図 遺構外出土遺物実測図 7 (1/3・1/4)



第85図 遺構外出土遺物実測図8 (1/4・1/3)



72



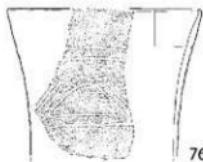
73



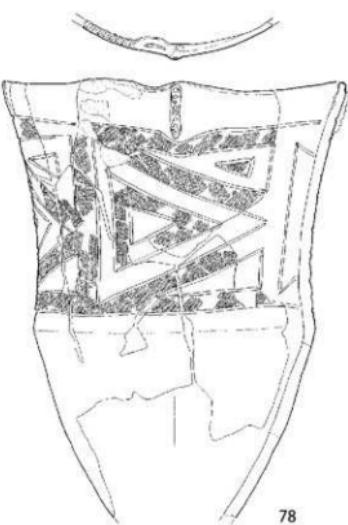
74



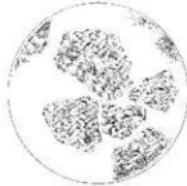
75



76



77



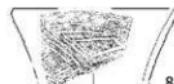
第 86 図 遺構外出土遺物実測図 9 (1/4)



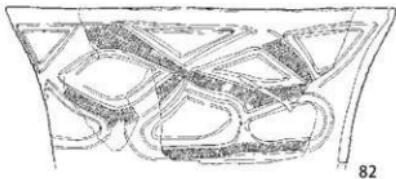
79



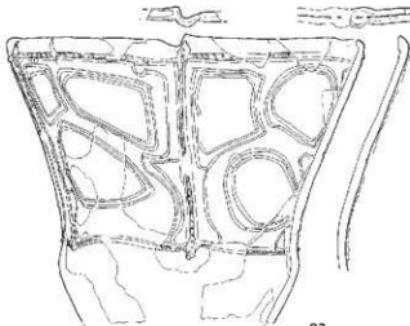
80



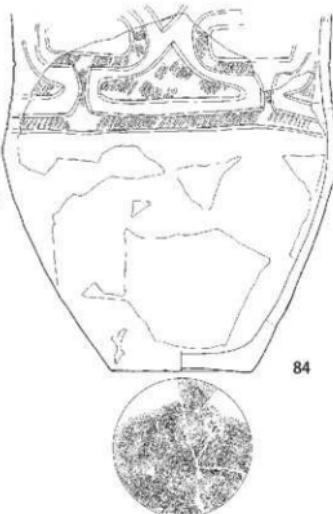
81



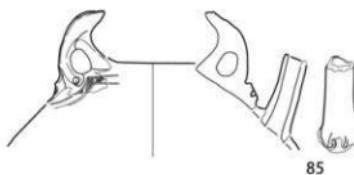
82



83



84



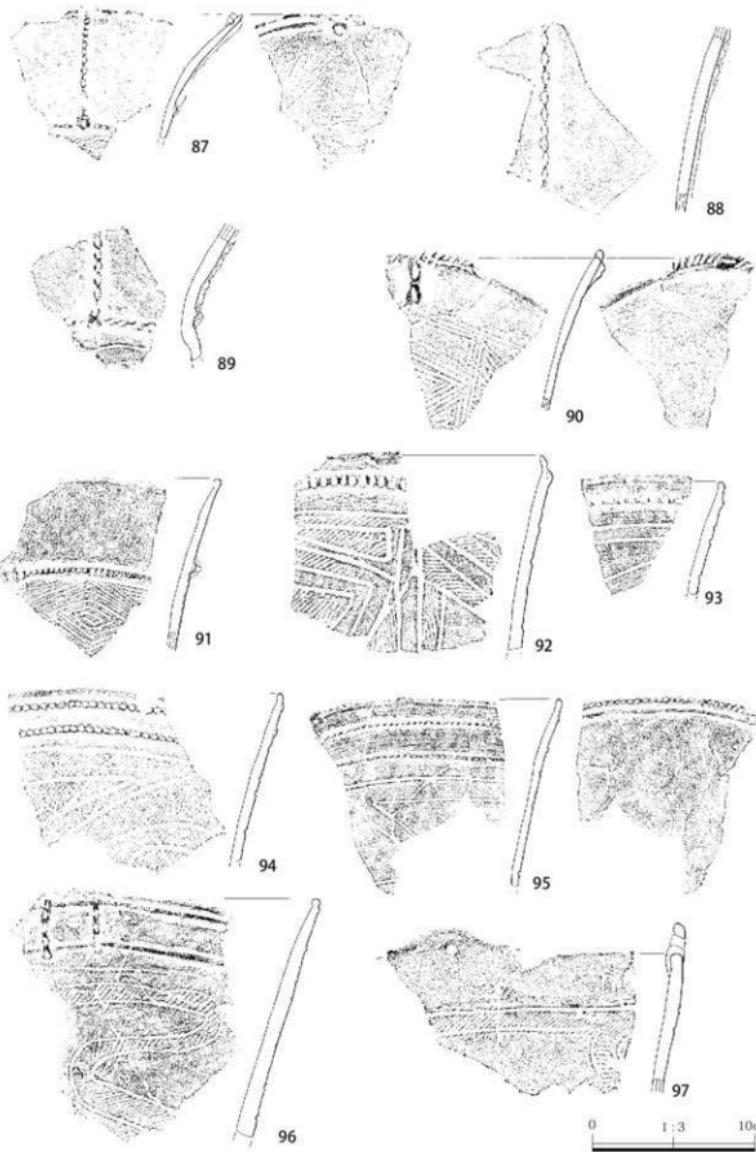
85



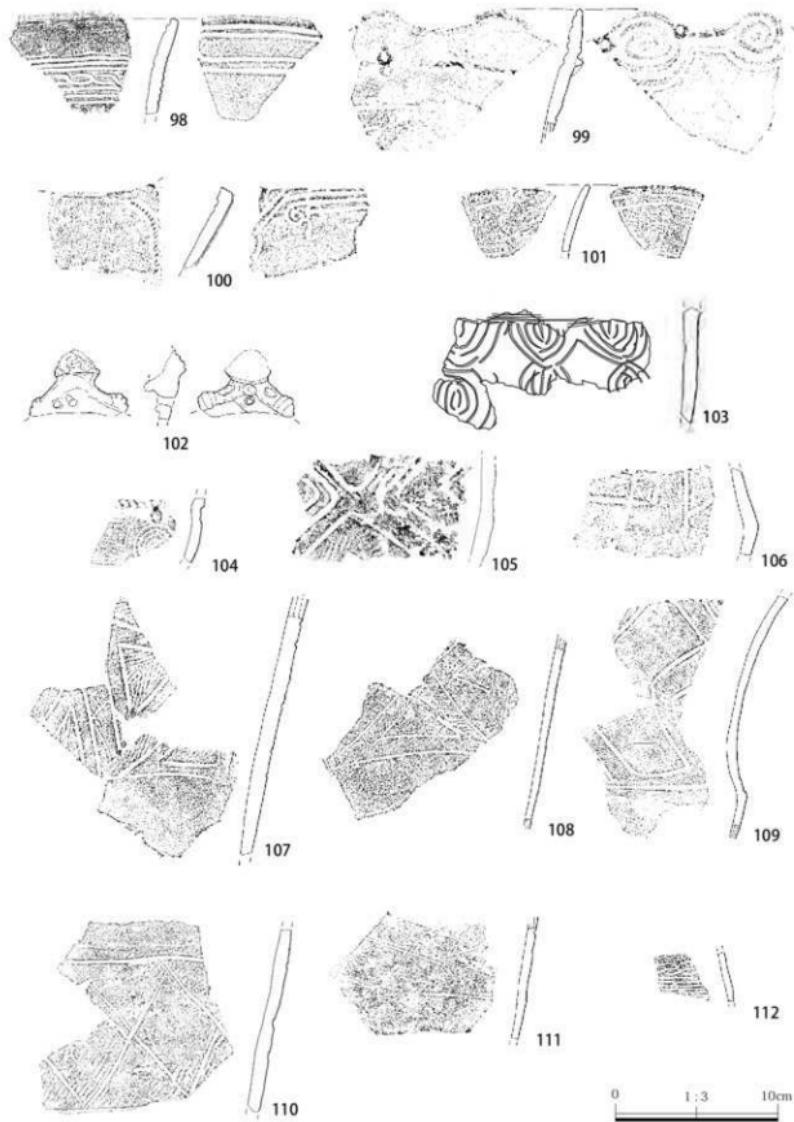
86

0 1:4 10cm

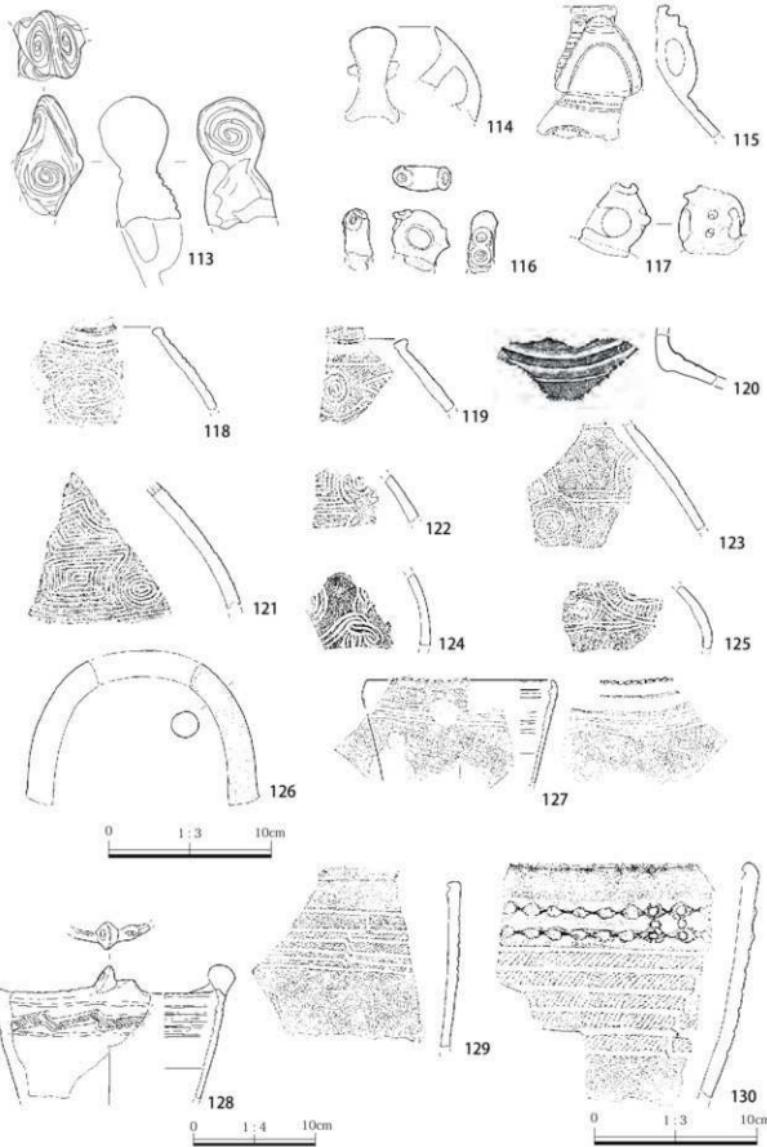
第 87 図 遺構外出土遺物実測図 10 (1/4)



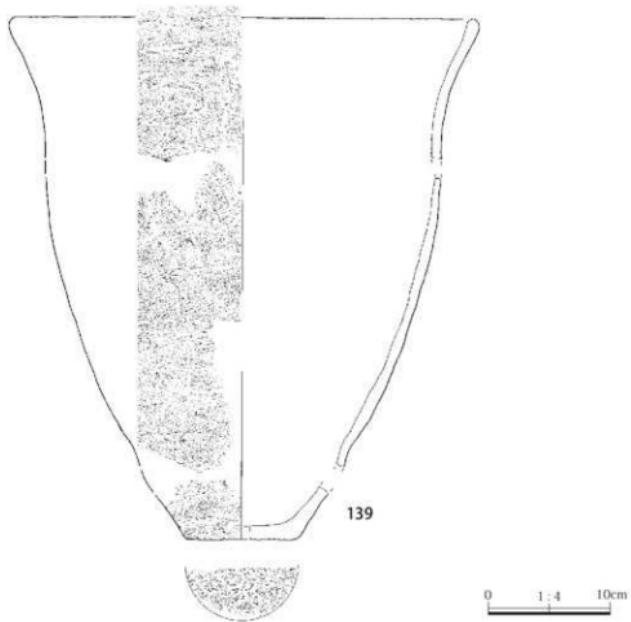
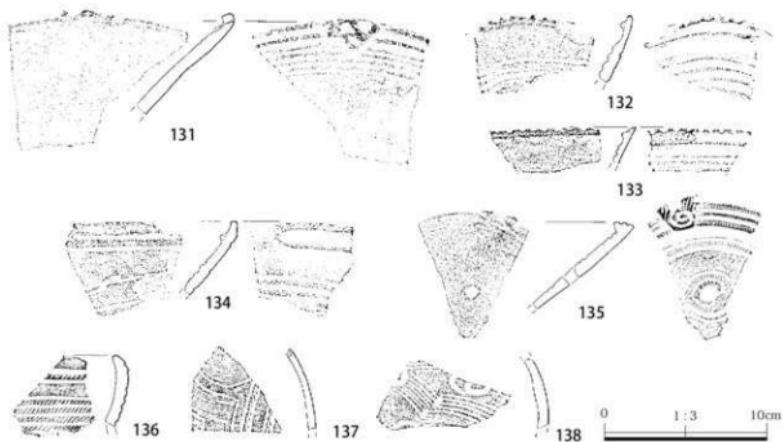
第88図 遺構外出土遺物実測図 11 (1/3)



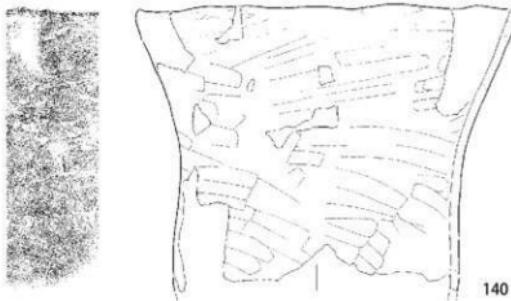
第89図 遺構外出土遺物実測図 12 (1/3)



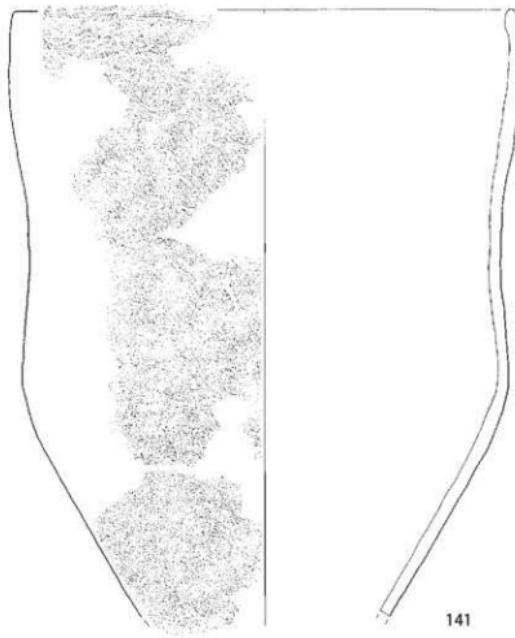
第90図 遺構外出土遺物実測図13 (1/3・1/4)



第91図 遺構外出土遺物実測図 14 (1/3・1/4)



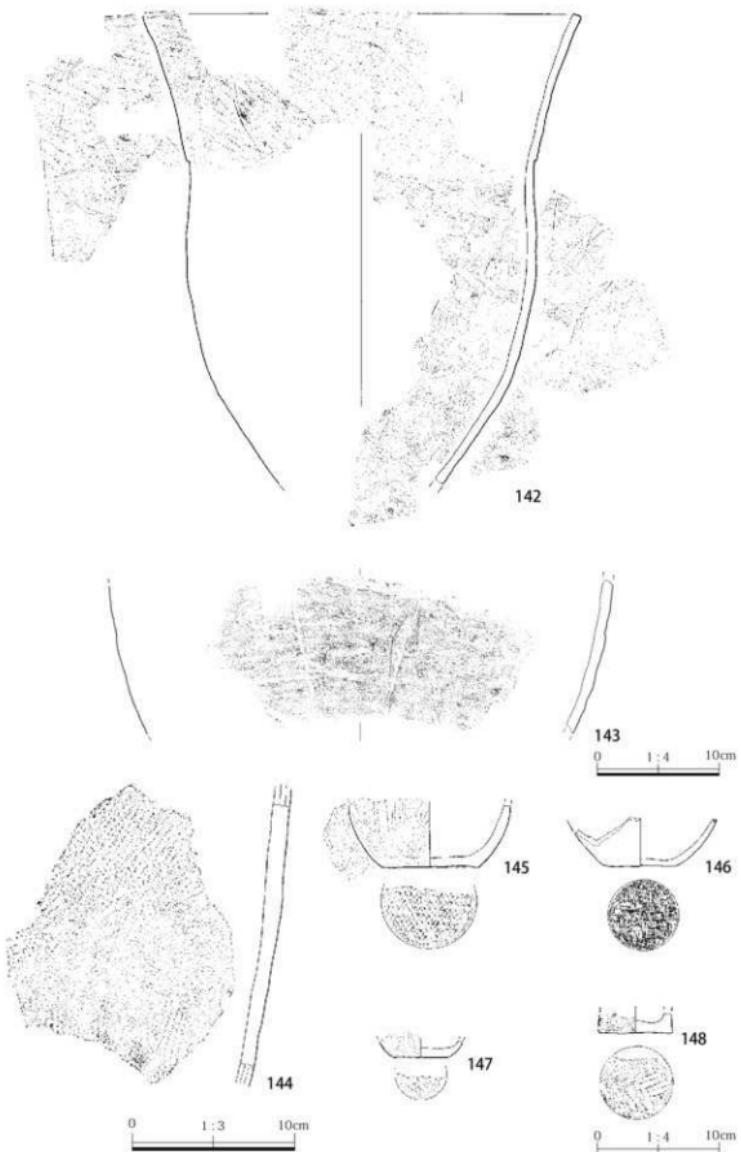
140



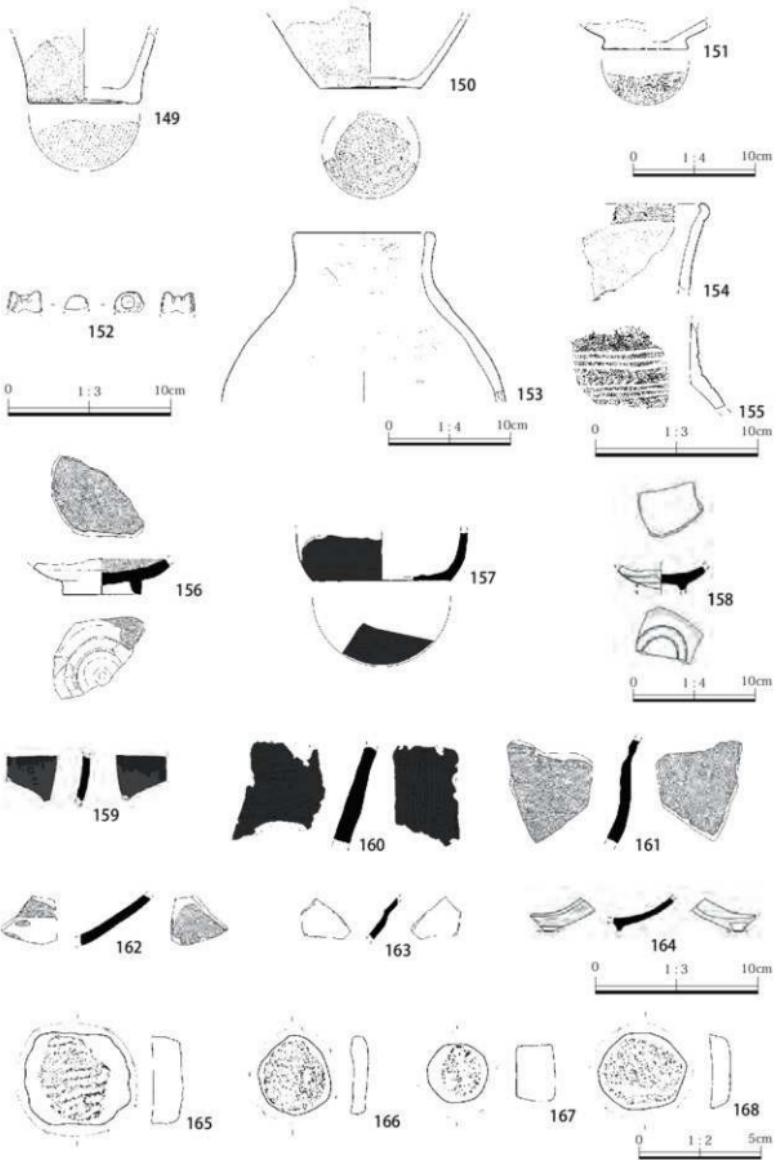
141

0 1 : 4 10cm

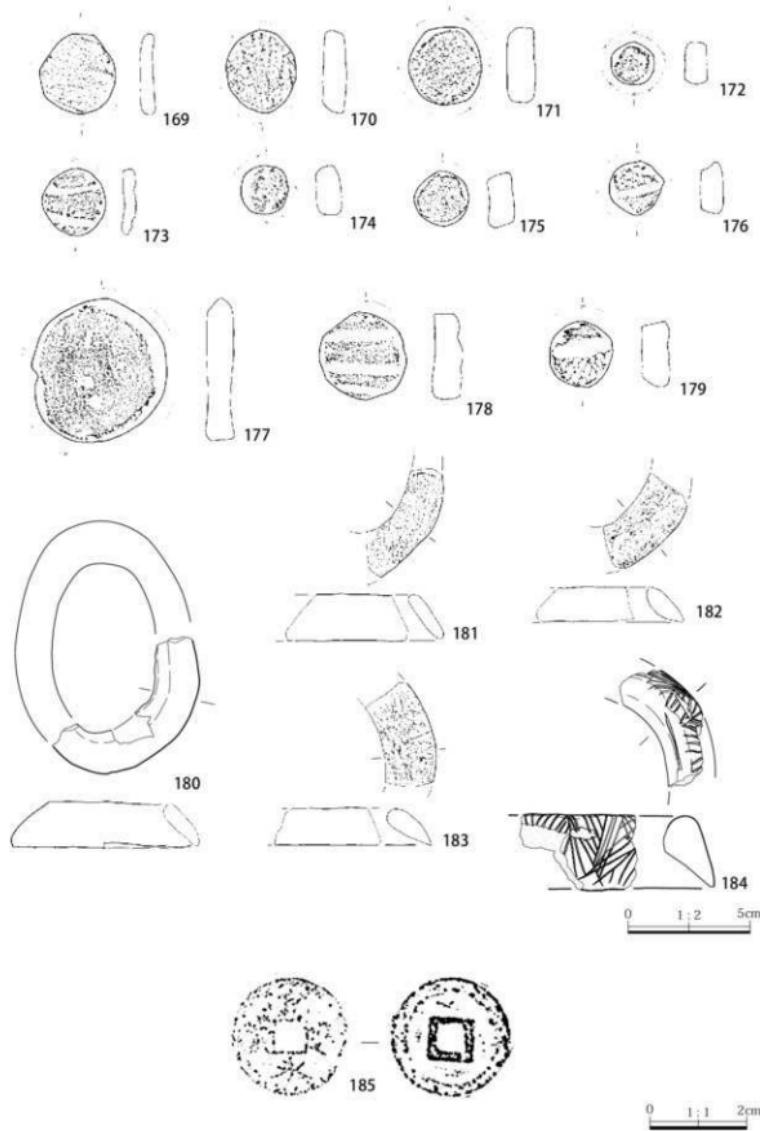
第 92 図 遺構外出土遺物実測図 15 (1/4)



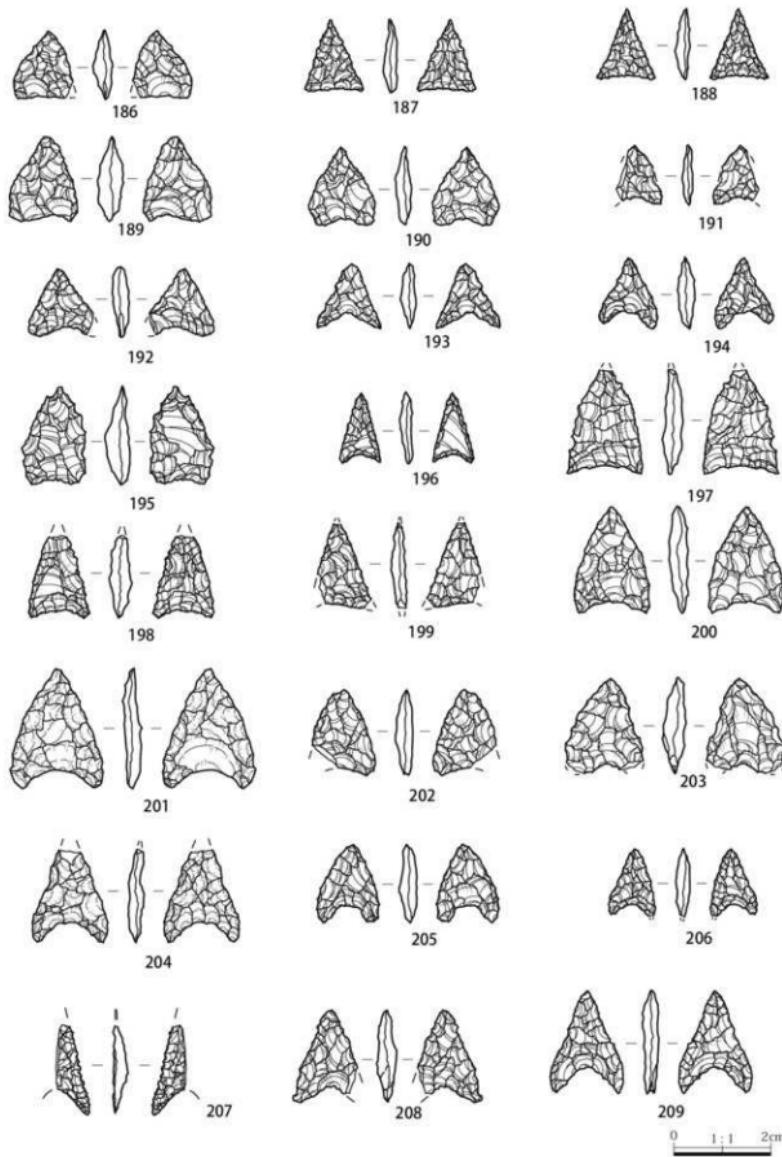
第93図 遺構外出土遺物実測図16 (1/4・1/3)



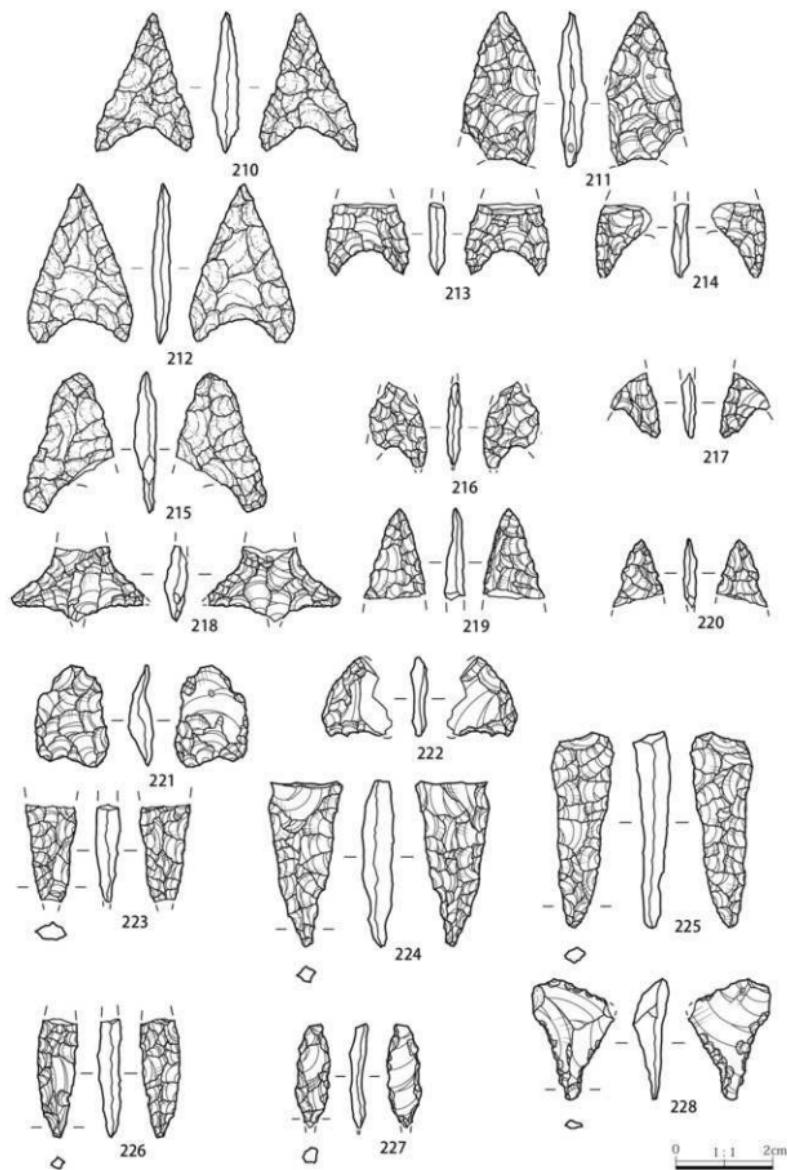
第94図 遺構外出土遺物実測図 17 (1/4・1/3・1/2)



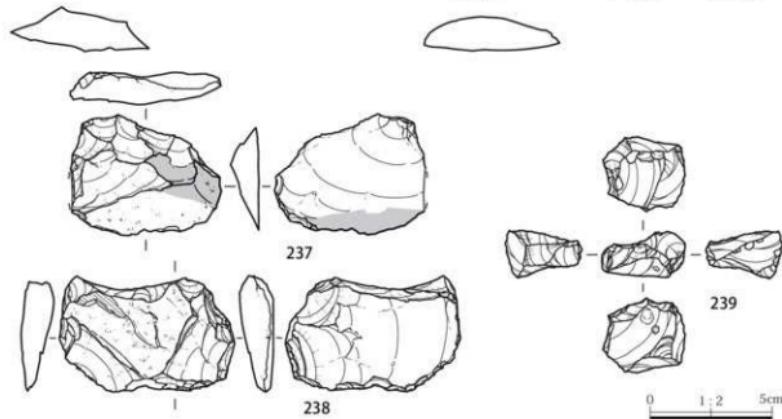
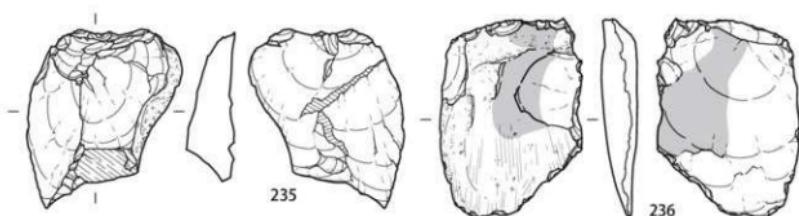
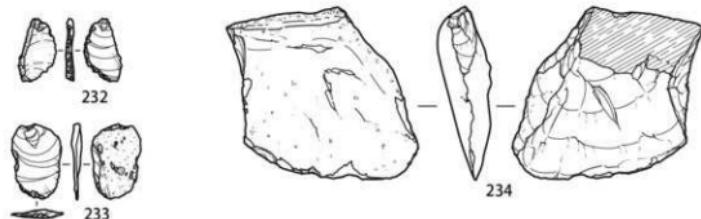
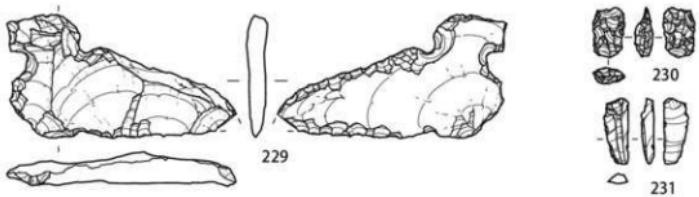
第95図 遺構外出土遺物実測図 18 (1/2・1/1)



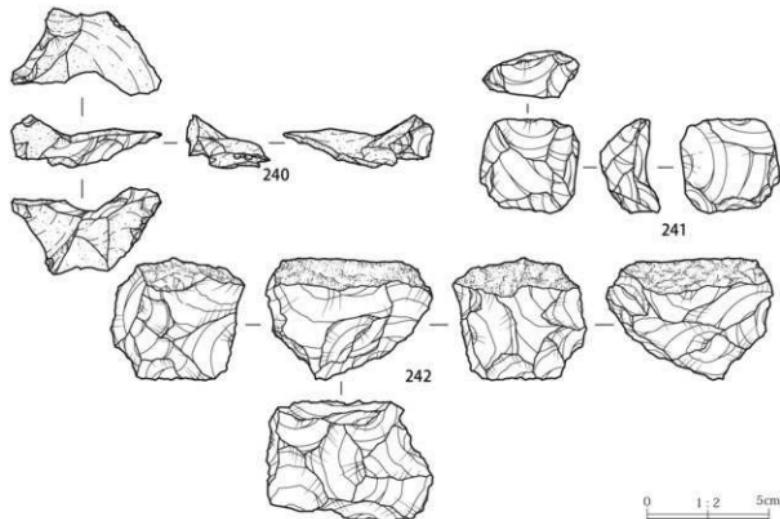
第96図 遺構外出土遺物実測図19 (1/1)



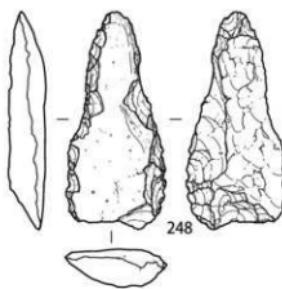
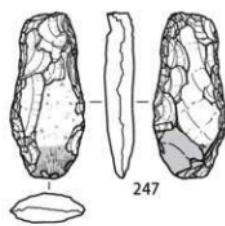
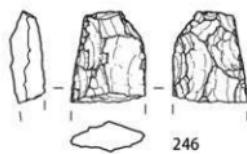
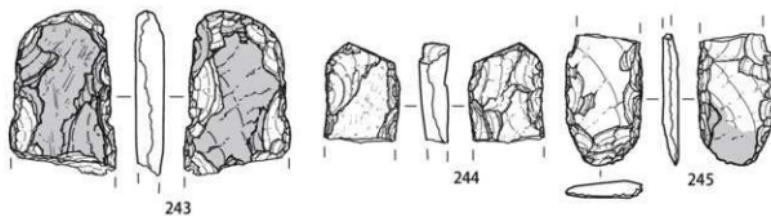
第97図 遺構外出土遺物実測図 20 (1/1)



第98図 遺構外出土遺物実測図 21 (1/2)

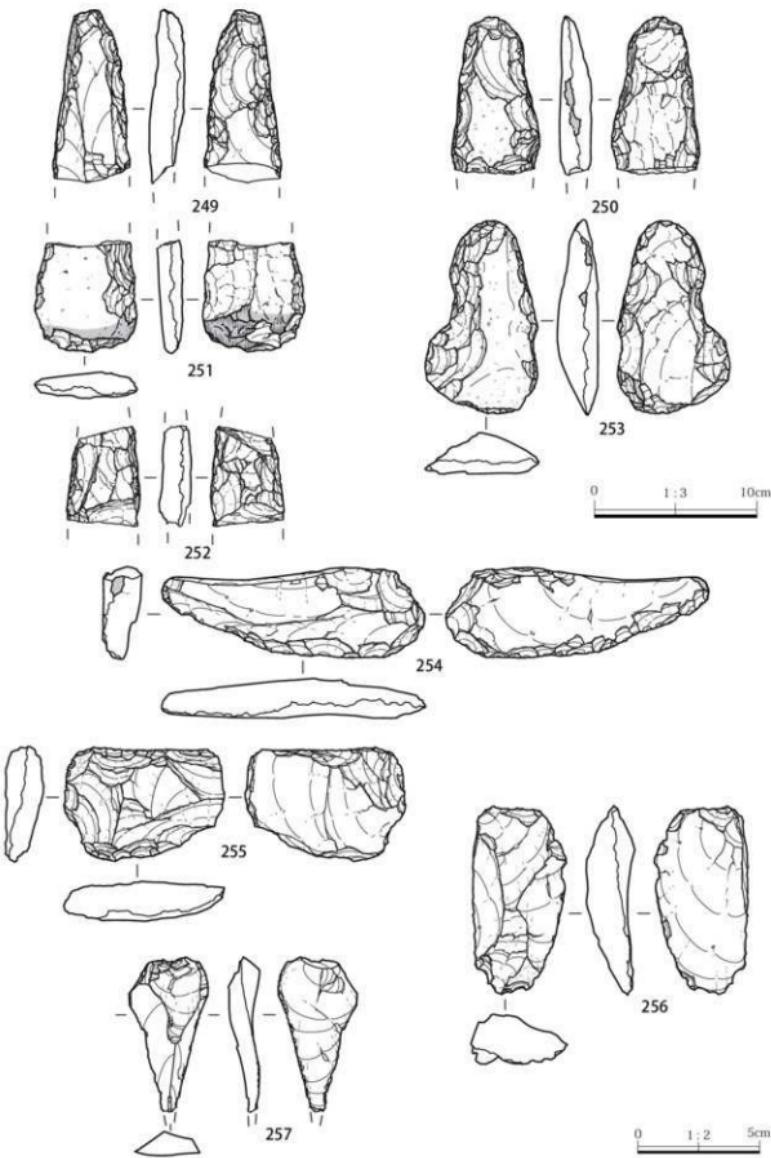


0 1:2 5cm

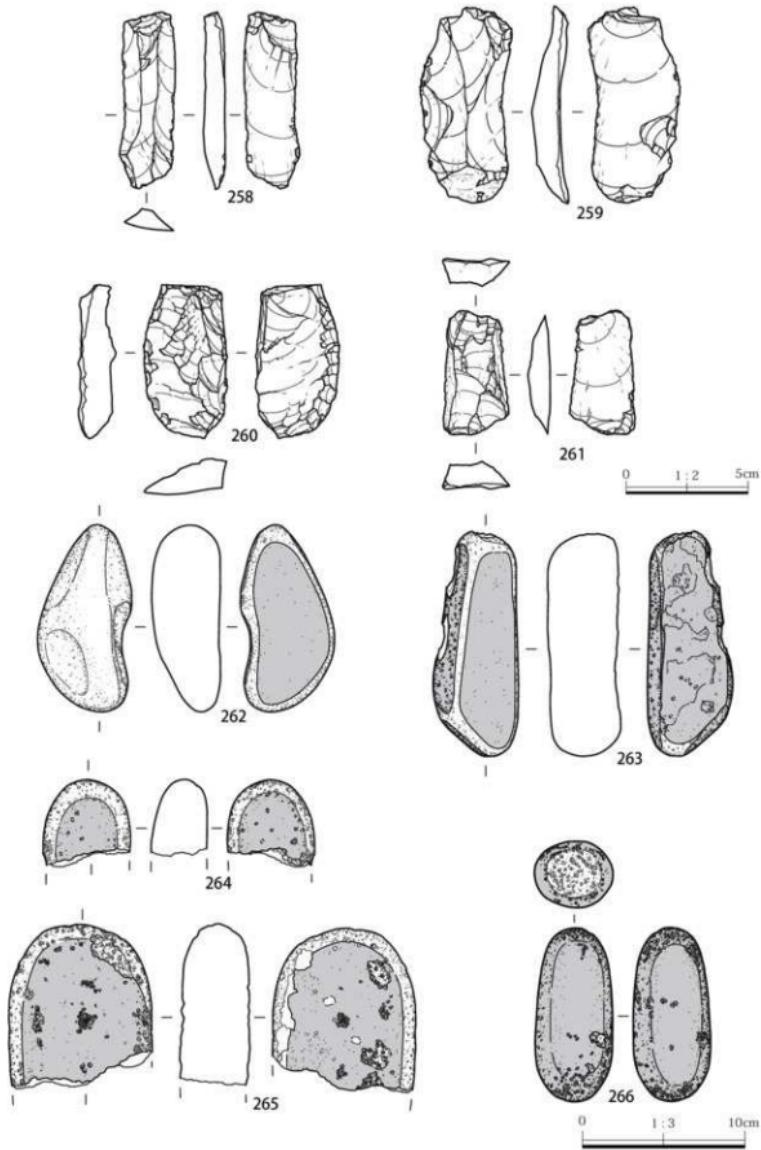


0 1:3 10cm

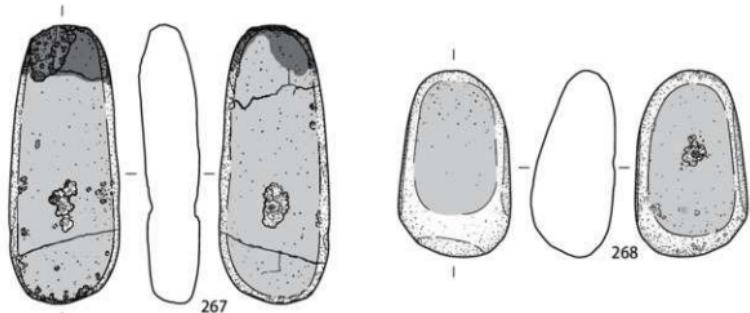
第99図 遺構外出土遺物実測図 22 (1/2・1/3)



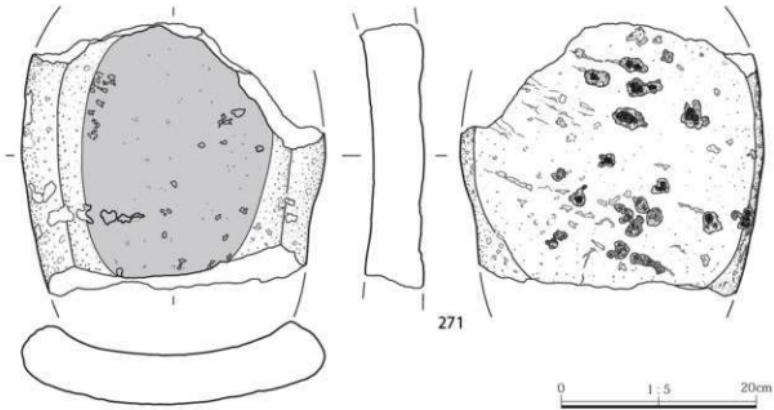
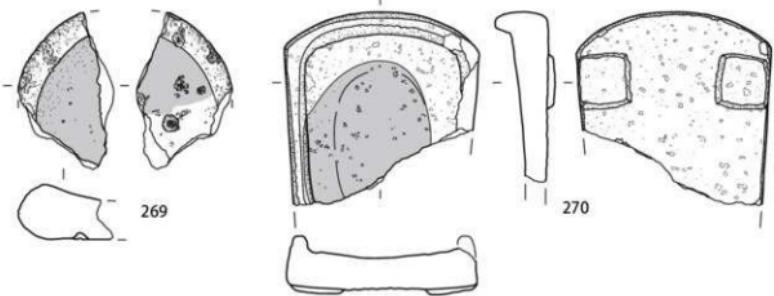
第 100 図 遺構外出土遺物実測図 23 (1/3・1/2)



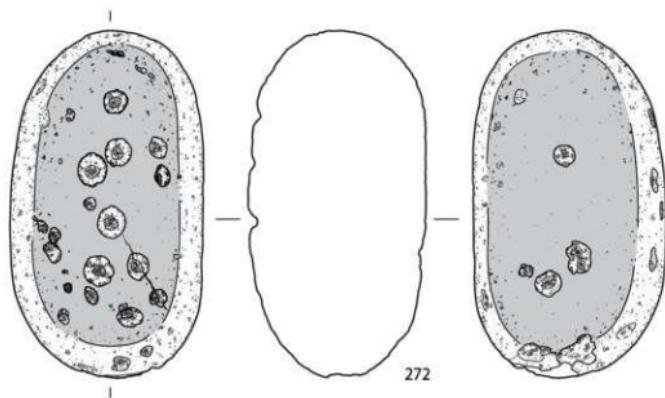
第101図 遺構外出土遺物実測図 24 (1/2・1/3)



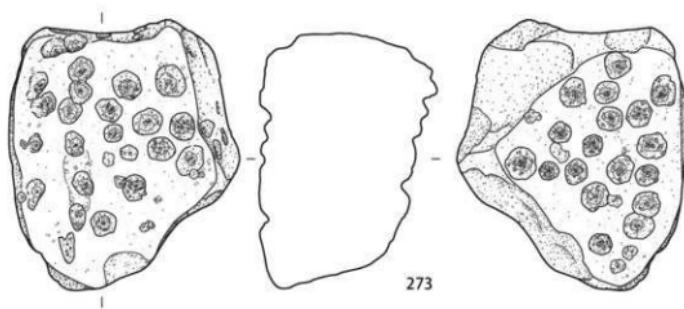
0 1 : 3 10cm



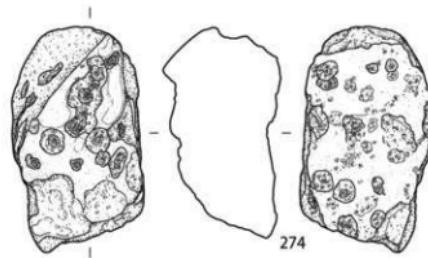
第 102 図 遺構外出土遺物実測図 25 (1/3・1/5)



272



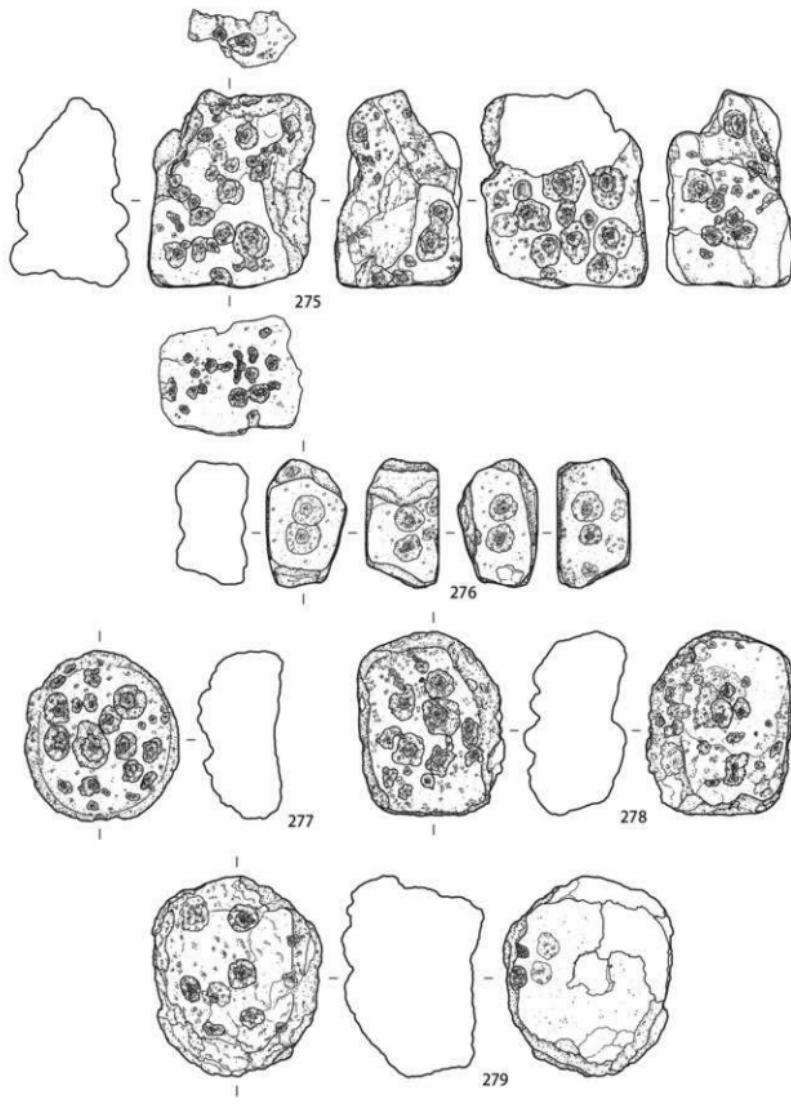
273



274

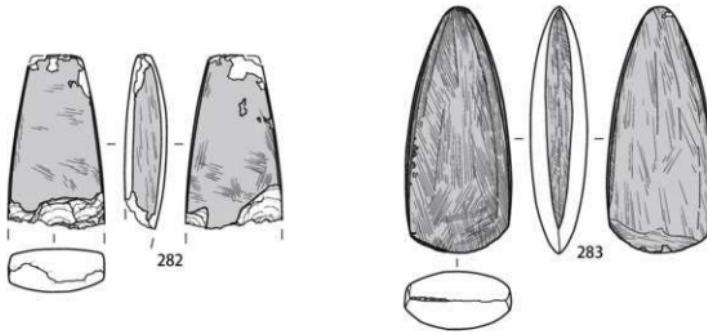
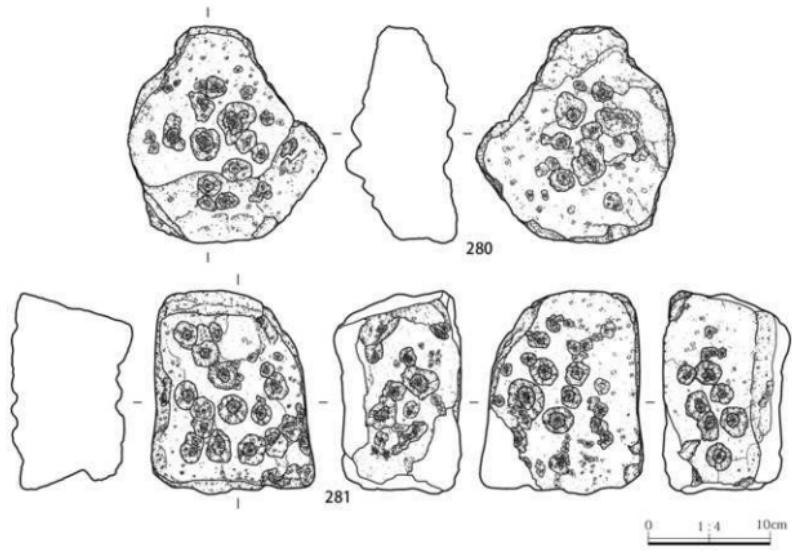
0 1:4 10cm

第 103 図 遺構外出土遺物実測図 26 (1/4)

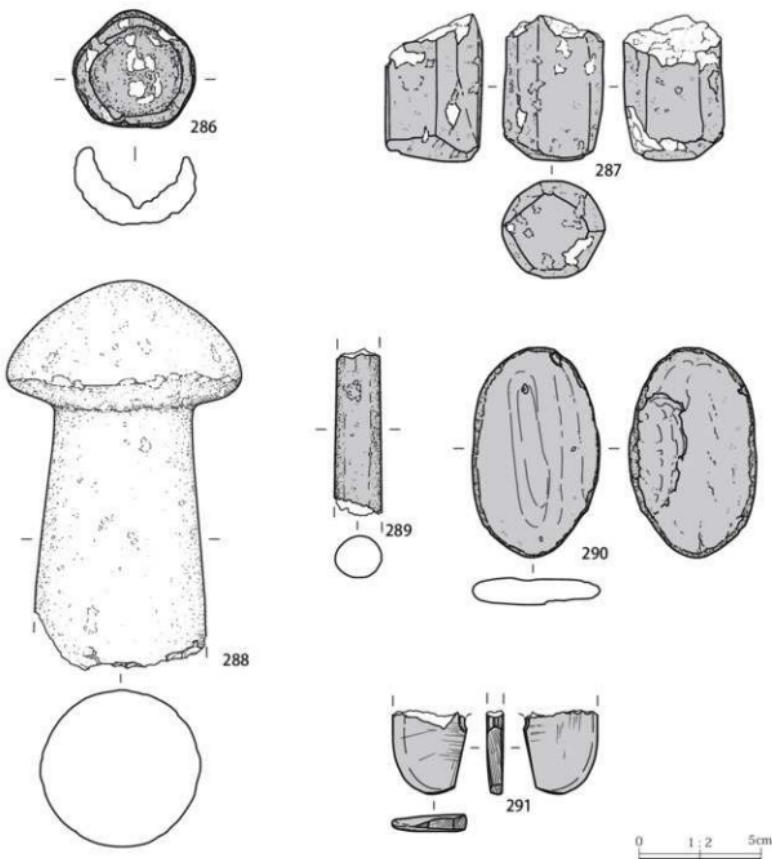


0 1:4 10cm

第 104 図 遺構外出土遺物実測図 27 (1/4)



第 105 図 遺構外出土遺物実測図 28 (1/4・1/3)



第106図 遺構外出土遺物実測図 29 (1/2・1/1)

第4章 自然科学分析

第1節 出土炭化材の樹種同定

小林克也（パレオ・ラボ）

1. はじめに

吾妻川の左岸段丘上に位置する林中原I遺跡の12次調査で、竪穴住居跡や土坑などから出土した炭化材の樹種同定を行なった。なお、同定試料の一部については、放射性炭素年代測定も行われている（放射性炭素年代測定の項参照）。

2. 試料と方法

試料は、竪穴住居跡であるSI01から1点、土坑であるSK15の埋甕内から1点、包含層の中中d採取の1点の、計3点の出土炭化材である。なお、放射性炭素年代測定の結果、SI01の試料No.11は縄文時代後期前葉、SK15の試料No.13は縄文時代後期初頭の年代値を示した（放射性炭素年代測定の項参照）。なお、包含層の時期は不明であった。

各試料について、残存半径と残存年輪数の計測を行なった。残存半径は試料に残存する半径を直接計測し、残存年輪数は残存半径内の年輪数を計測した。

炭化材の樹種同定では、まず試料を乾燥させ、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリと手で削断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後、イオンスバッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡（日本電子（株）製 JSM-5900LV）にて検鏡および写真撮影を行なった。

第4表 出土炭化材の樹種同定結果

試料No.	遺構名	場所	樹種	残存半径(cm)	残存年輪数	備考	年代測定番号
11	SI01	a	コナラ属コナラ節	0.7	6	縄文時代後期前葉	PLD-22229
13	SK15	埋甕内	クリ	0.3	3	縄文時代後期初頭	PLD-22230
14	包含層	中中d	クマノミズキ類	2.1	19		

3. 結果

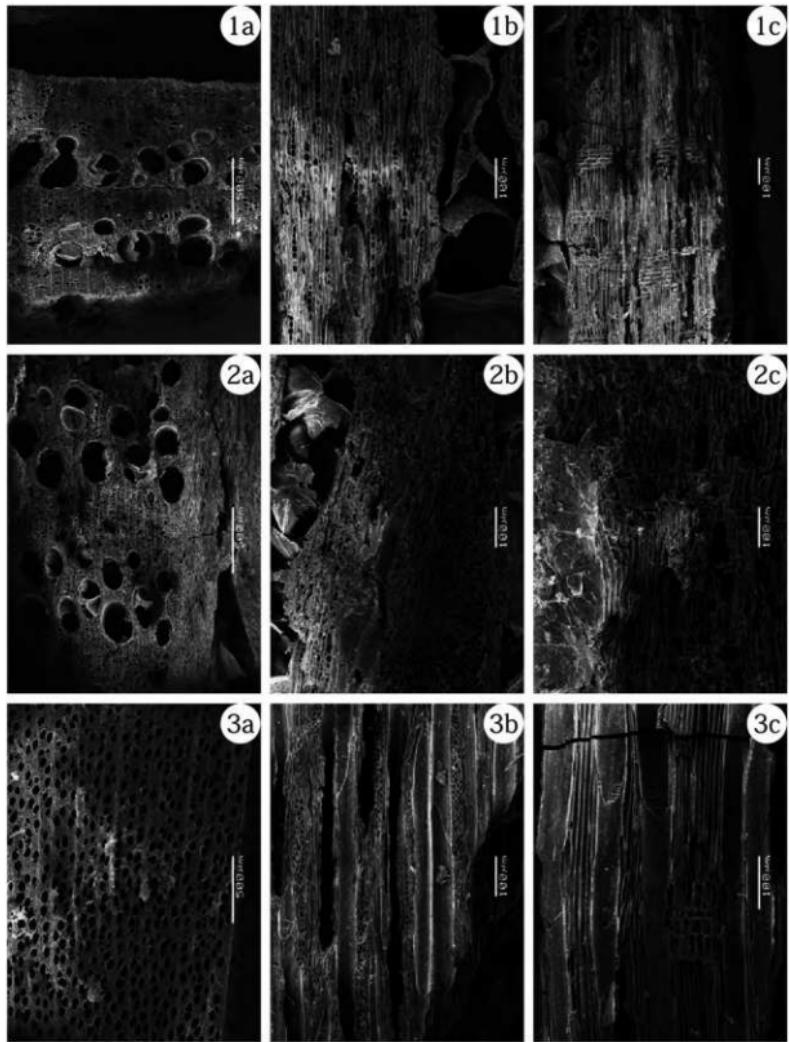
同定の結果、広葉樹のクリとコナラ属コナラ節（以下コナラ節と呼ぶ）、クマノミズキ類の3分類群が産出した。SI01の炭化材はコナラ節、SK15埋甕内の炭化材はクリ、包含層の中中dの炭化材はクマノミズキ類であった。年輪数の計測では、SI01からのコナラ節で残存半径0.7cm内に6年輪、SK15埋甕内からのクリで残存半径0.3cm内に3年輪、包含層の中中dからのクマノミズキ類で残存半径2.1cm内に19年輪がみられた。同定結果を第4表に示す。

次に、同定された材の特徴を記載し、第107図に走査型電子顕微鏡写真を示す。

（1）クリ Castanea crenata Siebold et Zucc. ブナ科 第107図 1a-1c (No.13)

年輪のはじめに大型の道管が1~2列並び、晩材部では徐々に径を減じた道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、單列である。

クリは北海道の石狩、日高以南の温帯から暖帯にかけての山林に分布する落葉中高木の広葉樹である。材は重硬で、耐朽性が高い。



1a-1c. クリ (No.13)、2a-2c. コナラ属コナラ節 (No.11)、3a-3c. クマノミズキ類 (No.14)
a: 横断面、b: 接線断面、c: 放射断面

第 107 図 出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

(2) コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Prinus* ブナ科 第107図 2a-2c (No.11)

年輪のはじめに大型の道管が1~2列並び、晩材部では急に径を減じた、薄壁で角張った道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は單穿孔を有する。放射組織は同性で、單列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属コナラ節にはコナラやミズナラなどがあり、温帯から暖帯にかけて広く分布する落葉高木の広葉樹である。代表的なミズナラの材は、やや重く強韌で、切削加工はやや難しい。

(3) クマノミズキ類 *Cornus cf. macrophylla* Wall. ミズキ科 第107図 3a-3c (No.14)

小型の道管がほぼ単独でやや密に散在する散孔材である。道管は20段程度の階段穿孔を有する。放射組織は上下端1~3列程度が直立する異性で、幅1~6列となる。

クマノミズキ類にはクマノミズキとヤマボウシが含まれるが、材組織が類似しており、区別が困難である。ここでは兩種を括り、クマノミズキ類とした。クマノミズキおよびヤマボウシは、温帯から暖帯に分布する落葉中高木である。材はやや硬いが、一般に加工は容易である。

4. 考察

同定の結果、縄文時代後期前葉の竪穴住居跡 S101の炭化材はコナラ節、縄文時代後期初頭の土坑 SK15の埋甕内の炭化材はクリ、包含層の中中dの炭化材はクマノミズキ類であった。S101の材は住居跡の建築材や燃料材の残渣などの可能性が、SK15の埋甕内の材は燃料材の残渣などの可能性が考えられるが、包含層出土の材を含めて、いずれも用途は不明であった。クリとクヌギ節は重硬で強韌な樹種であり、燃料材としては長時間燃焼するという材質をもつ（伊東ほか、2011）。

長野原町の長野原一本松遺跡では、縄文時代後期の住居跡から出土し、同定された炭化材61点中60点がクリで、1点がタケ亜科であった（植田、2008）。今回の林中原I遺跡の周辺でもクリが多く生育していたか、周辺森林からクリが選択伐採されていた、などの可能性が考えられる。

引用文献

- 伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和徳（2011）日本有用樹木誌、238p. 青海社。
植田弥生（2008）長野原一本松遺跡住居跡出土炭化材の樹種同定。群馬県埋蔵文化財調査事業団編「長野原一本松遺跡（4）」：269-275. 群馬県埋蔵文化財調査事業団。

第2節 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一

Zaur Lomtadidze・Ineza Jorjoliani・菊地有希子

1. はじめに

群馬県吾妻郡長野原町に位置する林中原I遺跡（12次）より検出された炭化材について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。なお、同一試料を用いて炭化材樹種同定も行われている（炭化材樹種同定の項参照）。

2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは第5表のとおりである。

第5表 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-22229	遺構 SI01 試料 No.11	種類: 炭化材 (コナラ属コナラ箇) 試料の性状: 最終形成年輪以外 樹皮に近い部分 採取位置: 最外年輪・2年輪 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N)
PLD-22230	遺構 SK15 位置: 墓壙内 試料 No.13	種類: 炭化材 (クリ) 試料の性状: 最終形成年輪以外 部位不明 採取位置: 最外年輪・3年輪 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N)

試料は、SI01から出土した炭化材 (PLD-22229) と SK15の埋葬内から出土した炭化材 (PLD-22230) の計2点である。SI01の炭化材は最終形成年輪を欠くものの、樹皮に近い部分が残る試料で、SK15の炭化材は最終形成年輪を欠く部位不明の炭化材である。

試料は調製後、加速器質量分析計 (パレオ・ラボ、コンパクト AMS : NEC 製 1.5SDH) を用いて測定した。得られた¹⁴C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C 年代、暦年代を算出した。

3. 結果

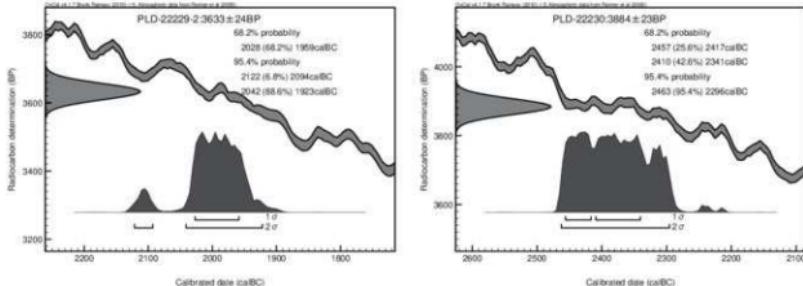
第6表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C 年代を、第108図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行なうために記載した。

¹⁴C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C 年代 (yrBP) の算出には、¹⁴C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した¹⁴C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C 年代がその¹⁴C 年代誤差内に入る確率が 68.2% であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

第6表 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	¹⁴ C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	¹⁴ C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-22229 SI01a 試料 No.11	-24.20 \pm 0.12	3633 \pm 24	3635 \pm 25	2028BC(68.2%)1959BC 2042BC(88.6%)1923BC	2122BC(6.8%)2094BC 2042BC(88.6%)1923BC
PLD-22230 SK15 試料 No.13	-26.88 \pm 0.15	3884 \pm 23	3885 \pm 25	2457BC(25.6%)2417BC 2410BC(42.6%)2341BC	2463BC(95.4%)2296BC



第108図 暦年較正結果

曆年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い（¹⁴Cの半減期5730±40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の曆年較正には OxCal4.1（較正曲線データ：IntCal09）を使用した。なお、 1σ 曆年年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の曆年年代範囲であり、同様に 2σ 曆年年代範囲は95.4%信頼限界の曆年年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に曆年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は曆年較正曲線を示す。

4. 考察

各試料の曆年較正結果のうち、 2σ 曆年年代範囲（95.4%の確率）に注目し、結果を整理する。なお、縄文時代の曆年代については小林（2008）による縄文土器編年と曆年代の対応関係を参照した。

SI01出土の炭化材（PLD-22229）は、2122-2094 cal BC (6.8%) および2042-1923 cal BC (88.6%) の曆年年代範囲を示した。これは、縄文時代後期前葉に相当する。

SK15埋甕内から出土した炭化材（PLD-22230）は、2463-2296 cal BC (95.4%) の曆年年代範囲を示した。これは、縄文時代後期初頭に相当する。木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。SI01出土の炭化材（PLD-22229）は、最終形成年輪を欠くものの、樹皮に近い部分が残る試料であり、枯死もしくは伐採年代に近い年代が得られていると考えられる。一方、SK15埋甕内から出土した炭化材（PLD-22230）は、最終形成年輪を欠く部位不明の炭化材であり、年代測定結果は古木効果の影響を受けて、実際に木材が枯死もしくは伐採された年代よりも古い年代を示している可能性がある。

引用・参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.
- 小林謙一 (2008) 縄文時代の曆年代. 小杉 康・谷口康浩・西田泰民・水ノ江和同・矢野健一編「縄文時代の考古学2 歴史のものさし」: 257-269, 同成社.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C年代」: 3-20, 日本第四紀学会.
- Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer, C.E. (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, 1111-1150.

第5章 調査の成果と課題

はじめに

今回の発掘調査は町道林線拡幅に伴う個人住宅移転に先立つもので調査面積は480m²である。検出された遺構は竪穴住居（敷石住居）2軒、配石遺構10基、土坑16基、焼土4箇所で、調査面積に比して低調であった。第3章第1節でも触れたが、調査地点は林中原1遺跡の中央や北寄りに位置し、第4・9・15・16次調査地点と隣接し、集落の中心地の一角を担っているといつてもいいであろう。調査区は2本の谷地（押手沢によって開析された自然流路か）が南北に走っており、遺構はその間の微高地である北西隅に集中して検出されたが、一方で遺物は調査区全域で出土し、その数量はテンバコ60箱を数えた。

注目される遺構としては、縄文時代後期前葉の柄鏡形敷石住居跡・配石墓が挙げられる。これらはお互いに切り合っているので若干の時間差があり、配石墓の方が新しい。敷石住居跡は全体が検出されていないが、注口土器や磨製石斧類など遺物が豊富に出土している。配石墓は深さを有する下部遺構と大きな河原石を用いて墓標のような立石状の石も確認されている上部構造で構成されている。遺物は少ないが、配石遺構の中で墓と断定できるものが少ないので、配石墓といえる条件が揃っており貴重な調査事例であろう。

遺物に関しては、まず、テンバコ60箱分の遺物量が注目される。決して広くはない調査区からこれだけの遺物が出土したことは、特異であることが指摘できるだろう。土器では深鉢に比して注口土器の個体数が目立ち、復元可能な個体が多く見られた。石器では多孔石が50個以上出土していることが特徴的である。礫石器類の他、黒曜石製などの剥片石器類、打製石斧類、呪術具、装身具も一通り揃って出土している。

ここでは、以下の2節について述べ、まとめとしたい。

第1節 遺構・遺物の分布と遺構間接合について

1. 遺構遺物の分布

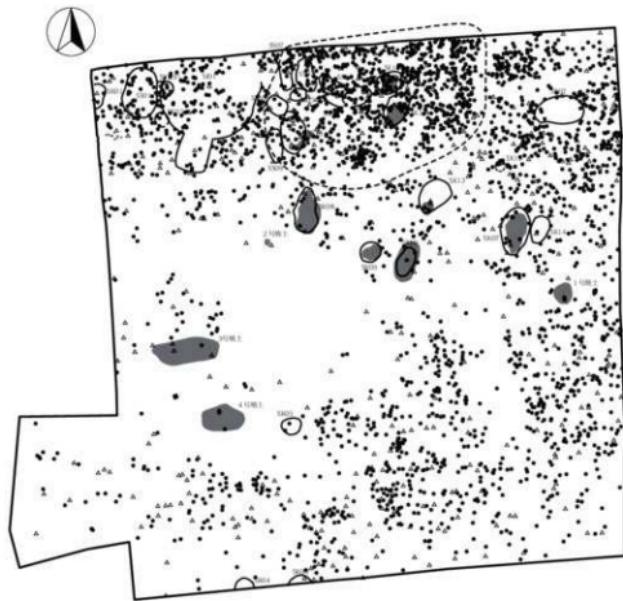
（1）遺構

縄文時代の遺構は中期後葉から後期前葉にかけて調査区の北側に集中している（第109・110図）。住居は北西隅から2軒重複して出土した。配石遺構はSS01のみがSI01西側から出土し、SS02～SS10はSI01の東側に密集している。土坑はSK01、03を除いて配石群の東側から南東側にかけて分布しているが、配石群ほど密集していない。縄文時代の土坑ではSK05のみ調査区の南寄りに位置する。調査区南端に位置するSK04、06は平安時代以降の陥し穴である。土坑の多くが焼土を伴っているが、焼土のみ検出された事例もあった。焼土のみの検出は、1号焼土、2号焼土が土坑群の縁辺に位置している。3、4号焼土はSK05付近の調査区中央西寄りに位置しており、配石群土坑群とは若干離れた位置にある。

（2）遺物

本調査区は調査区全体から遺物が出土した。そのうち約3200点の出土位置情報が記録されている（第109図）。包含層の厚さは約30cmである。配石群付近では特に遺物が密集して出土したのに対し、調査区中央付近は疎らである。2～4号焼土、SK05・08～10を囲んだ範囲からはほとんど遺物が出土していない。また、SK07・10・1号焼土を囲んだ範囲にも遺物の空白地帯がある。

更に、点上げ遺物を精査し、実測遺物や未実測遺物でも帰属時期がわかる遺物を型式ごとに振り分けたところ、時期毎でも分布に傾向があることが分かった（第110図）。



第109図 林中原I遺跡XII出土遺物分布図（1/200）

（3）時期別の遺構遺物の分布

加曾利E3式期は単独埋甕であるSK03と調査区中央付近のSK09が該期の遺構であるが、遺物の分布はそれとは関係なく調査区全体に分布している。特に密集しているのは調査区南東で、78図6など残存率の良い個体も出土している。

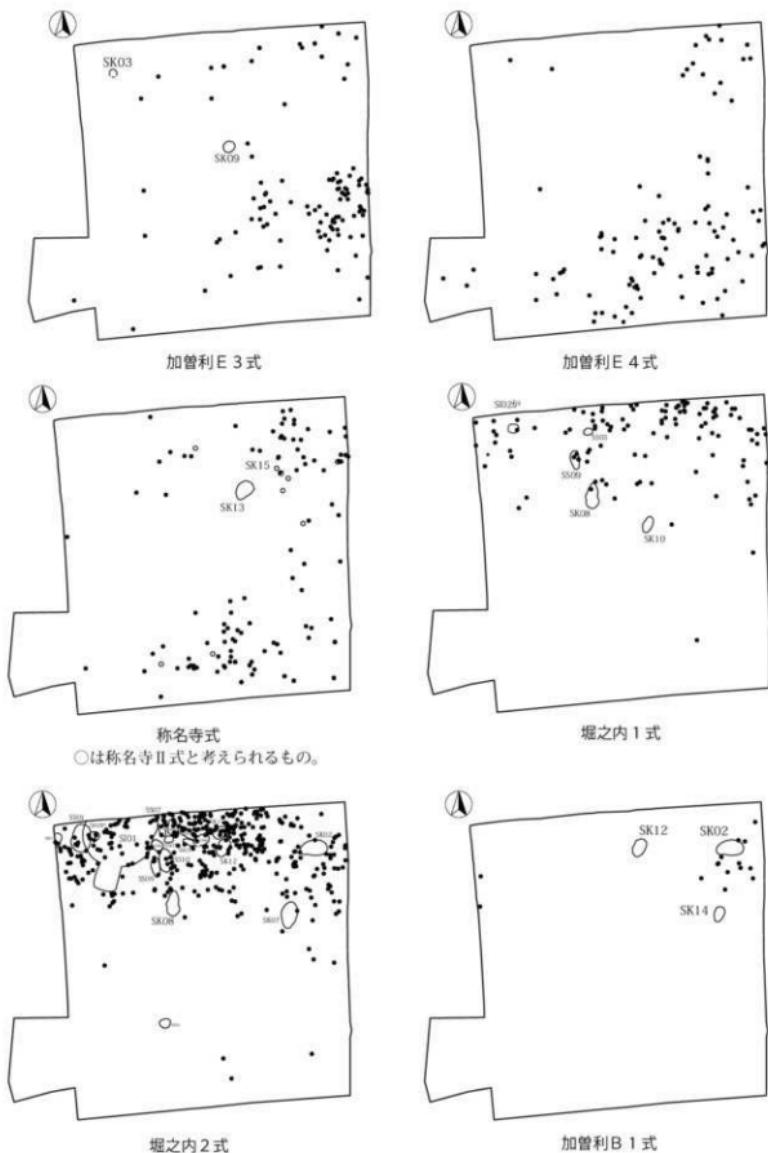
加曾利E4式期は調査区内からは帰属する遺構が出土していない。遺物は調査区北東隅から南側にかけて分布しており、E3式期より南側に広がる。調査区北東と南西で同一個体が出土した例（第80図20など）もあるため、調査区北東隅と南側は同じ遺物包含層であると考えられる。

称名寺期の遺構は調査区北東に単独埋甕のSK15と、称名寺I式の深鉢を伴うSK09が出土している。遺物の分布は加曾利E4期とほぼ重なる。遺物の大半が称名寺I式と比定され、称名寺II式と断定できる遺物もあったが、分布に差異は無いと判断した。

堀之内I式期以降、遺物の分布は調査区北側に偏る。堀之内I式期はSI02が調査区北西隅に構築され、堀之内2式期まで存続する。その東側にSS03、SS09、SK08、SK10が構築された。遺物は調査区北側に満遍なく分布している。南側からはほとんど出土しておらず、この傾向は一括で上げた遺物でも同じである。

堀之内2式期にはSI02を切ってSI01が構築され、さらにSI01を切ってSS01が構築される。SI01の東側には配石群、土坑群が構築され、遺構遺物とも本調査区では一番出土量が多い時期である。遺物は北側に偏重しており、特に調査区北側中央の配石群を覆うように出土した。対して南側は低調で、一括で上げた遺物でも同じ傾向である。

加曾利B1式期には遺構も遺物も調査区の北東を中心に出土している。南側の一括遺物の中にも該期の遺物があるが、決して多くはない。

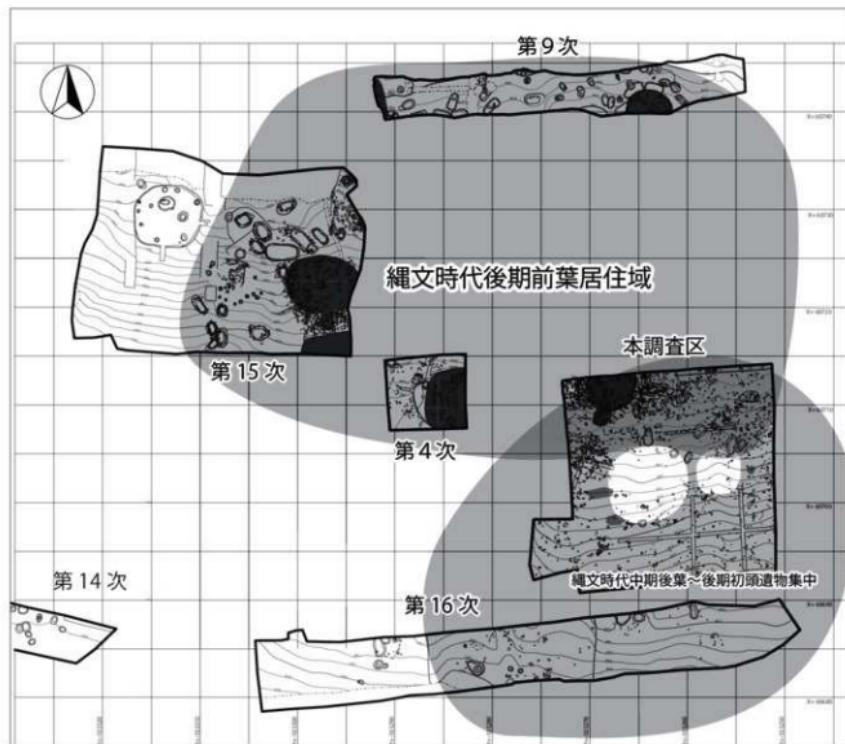


第110図 時期別遺物出土状況図

第7表 遺構間接合状況

●■=所属遺構 ○=遺構覆土中から出土 □=No上げのみ出土

測量No	器種	遺構数	SI01	SI02	SK03	SK11	SK12	SS02	SS03	SS04	SS05	SS06	SS07	SS08	SS09	SS10
28-2	小形深鉢	3		○	●											○
56-1	大形粗製	5						●	○	○		□				○
58-1	中形深鉢	3							●	○						
61-1	小形深鉢	3							○	●						○
61-2	大形粗製	3							□	○	●					
61-3	大形深鉢	2						□			■					
65-9	大形深鉢	2					□					■				
67-1	中形深鉢	3						□				■		□		
69-1	大形粗製	3							○				●	○		
72-1	中形深鉢	4						○	○					●	○	
72-2	小形深鉢	2											●		○	
75-1	小形深鉢	2	○													●
75-2	洼口土器	2										□				■
93-145	小形深鉢	3						○	○	○						



第111図 林中原I遺跡分布図 (1/500)

これらのことから、称名寺Ⅱ式期と堀之内Ⅰ式期の間で土地の利用が変わったことが窺える。特に堀之内Ⅱ式期では同じ場所に集中して配石や土坑が構築され、遺物が集中していた。

また、調査区中央やや西寄りの遺物の空白地帯は全時期において土器や石器の散布がなく、周囲を取り囲む土坑が後期に属することから、加曾利Ⅲ式期から遺物を散布しない広場として利用されていたか、土坑を構築した時期に前時代の遺物を片付けて広場にした可能性がある。この広場の大きさは、西側の大きいものが直径約7.5m、東側の小さいものが直径約5mである。

2. 遺構間接合

本調査区ではいくつかの土器が遺構間接合している。その状況を第7表にあらわした。No上げ(□)は遺構が確定する前にドットで上げられた遺物なので、遺構覆土中(○)より出土した遺物より標高が高いため、所属遺構の確度はやや下がる。遺構間接合した土器の大きさ、器種に傾向はない。SS02~04・SS09・10の遺物が遺構間接合している物が多く、これらの配石はSI01のすぐ東側に位置する。これらの配石がごく短期間に密集して覆土が混ざる状態で構築された様子が窺える。

3. 隣接調査区との関係

本調査区の北西方向には、第4次・第15次調査の調査区、北方向には第9次の調査区が位置している。これらの調査区からは、縄文時代後期前葉の住居址がそれぞれ出土しており、林中原Ⅰ遺跡の該期の居住域を形成していたと考えられる。この区域の大きさは、東西約65m、南北約45mほどの範囲で、本調査区はこの区域の東南隅に位置する。また、本調査区の南側には第16次調査の調査区が広がっており、接合はしないものの本調査区の第89図57と同一個体が第16次調査SK01から出土している。第16次調査区東側に位置する遺物集中(SU01・02)の北端が、本調査区南側であると考えられる。

第2節 「福田類型」注口土器について

今回の調査で縄文時代後期前葉(堀之内Ⅱ式期)の敷石住居であるSI01から極めて特徴的な注口土器が出土した。調査時には分からなかったが、出土遺物の整理作業を進めていく段階で、そのうち3点は底部から口縁部・注口部まで破片が80%以上も揃っており、土器の全体像を復原できる資料であることが判明した。3点の内訳は2点が大形注口土器(第13図8・第14図10)、1点が小形注口土器(第13図9)で、大形注口土器2点は専門業者によって修復がなされた(付録参照)。また上記3点の他、底部から注口部まで遺存のものが1点(第15図11)、口縁から体上部まで遺存のものが2点(第15図12・13)、破片資料が2点(第16図41・43)が認められ、合計8点の同系統注口土器が1軒の住居から出土したことになる。本住居跡は全体の4分の1が未調査であるが、確認された土器からすべて同一系統の注口土器で構成されている点は注目される。さらに遺構外で把手部を含む破片資料が1点(第90図115)確認されている。

1. 研究略史

この特徴的な注口土器は「福田類型」(秋田2006)と呼ばれるもので、明治27(1894)年に茨城県稻敷郡東村(現稲敷市東町)に所在する福田貝塚から出土した注口土器(山内1967)をもとに名付けられている。この「福田類型」注口土器は当該期住居出土遺物の中では客体的な存在で、時期的にも堀之内Ⅱ式の中段階～新段階と限定的であるがゆえに研究対象となることは少なかった。西田泰民は関東地方の後期前半期の注口土器を5つに分類してその変遷を述べる中で「頸部・張り出した胴部下半と作り出しの底部」という特徴を合わせもつ器形に主として列点文を施すタイプ」で、「3類 有頸底部張出し型 最大径が胴下半にある器形で高い頸部と意識的に作り出した底部をもつ。把手は頸部と胴部にまたがって付けられ、他の大部分のタイプとは異なり把手が必ずしも器体の最上部

に位置しない。文様は列点文と曲線文を特徴とする」とし、また同時期の浅鉢の内面文様との共通性、すなわち両者の結びつきが強かったことを指摘し、「福田類型」とその成立過程も含めた資料群の特徴を明らかにした（西田1992）。鈴木克彦は全国の注口土器を集成し、関東地方の地域相を示す中で西田の分類を踏襲して「冰川前型（福田）注口土器」とした（鈴木克2007）。鈴木徳雄は縄文時代中期後半～壠之内1式までの注口付浅鉢と注口土器の系統関係を検討し、①中期後葉～末葉以降の瓢形注口土器の変化の系列を見せる「千鳥窪類型」、②東北地方南部の中期後葉～末葉に見られる注口付浅鉢を基調に変化する「蕃神台類型」、③東北地方において壺形土器と親縁な「二屋敷類型」を設定した。これら諸類型は緩やかな系統的自立性をみせながら併存関係にあり、壠之内2式前半までには「蕃神台類型」に収斂していくことを明らかにした（鈴木徳1992・2000・2002）。また器種をめぐる形態や型式論的あるいは「器種行為論」的な問題の分析をする中で、「福田類型」注口土器についても触れ、「底部が円盤状に突出し平面に設置した状態で安定する形態に変化しているとともに体部は無紋化し、口端部には突起は突出せず平坦な口縁をもち、口部を被覆することのできる閉鎖性をもっている」とその特徴と、「形成には未だ不明の部分がある」としながら縦位橋状突起の垂下に着目した変遷觀を示した（鈴木徳2000・2020）。秋田かな子の壠之内2式から加曾利B2式土器を精力的に分析した一連の研究は注目される（秋田1994・1997・1999・2002b・2008b・2015など）。壠之内2式の注口土器の把手と口頭部の連続的変遷を模式化して「蕃神台類型」から有頸・無頸注口土器への系統的变化を辿ることができ、それらは並列的な分化であるとした。その有頸注口土器を「福田類型」、無頸注口土器を「椎塚類型」と提唱し、以後定着している。壠之内2式後半に「蕃神台類型」の変化の中から生じ、頸部が完全に分離し、平縁の口縁部を有するものを「福田類型」の完成形とし、そこに至る頸部伸長・胸部無文化の過程も同類型に含める」とした。また西田が指摘した張出底部の浅鉢との文様の共通性のほか、分割成形についても指摘して両器種の「共揃え関係」を再確認した。宮田忠洋は鈴木・秋田の研究成果を踏まえ、北関東の縄文時代後期注口土器のうち後期前葉から中葉の変遷觀を示し、「系統的变化は南関東と比べて大きな相違がない」こと、「蕃神台類型」から「福田類型」への変化を間断なく辿ることができること」を確認した（小川・宮田・向出2015）。

2. S101出土「福田類型」注口土器の特徴について

上述したとおり、S101出土の「福田類型」注口土器は8点出土しており、最初に遺存率が高く全形が分かる3点について観察所見を述べる。

第13図8は大形注口土器で法量は器高17.7cm、口径7.4cm、底径8.6cm、体部最大径18.8cmを測る。張出底部から下彫れの体部で頸部から内傾したまま口縁に至っており、口縁部と頸部の区分が不明瞭である。口唇部は玉縁状に仕上げている。略三角形の把手は注口の付設される注水軸の頸部から体上部にかけて付設され、基部上端は玉状突起を介して口縁部と連結される。把手正面には形をなぞるように略三角形の沈線を施している。注口部は把手下の体上部に付設され、注水口は先端が若干反り、把手基部上端の玉状突起とほぼ同じ高さである。外面文様は把手基部下端から横位隆線が巡り、口縁部～頸部と体部を分離する。把手両脇・下端、副軸正面に縱位・横位の長楕円形区画を規則的に配し、区画内には円形刺突列を充填している。特に副軸正面は中央の同区画の上下に瘤状突起を削り出し、区画間を微隆線としていることで立体感を演出している。注水軸の注口部と対する側には渦巻文を配し、施文域及び注口部を沈線区画の同刺突列で縁取っている。従って副軸の体部は無文部が広がっている。口縁部内面及び外面全体は丁寧なミガキ調整が施され、焼し焼きにより黒光りしている。底面には網代痕が残されており、内底面には円形の凹みを有している。接合前の観察で、体部最大径下端の輪積痕に刻み目が認められた。

同図9は小形注口土器で法量は器高9.0cm、口径5.4cm、底径6.0cm、体部最大径10.2cmを測る。ほぼ完形に近いが、被熱によると考えられる体部表面の剥離が顕著であった。器形は張出底部から下彫れの体部、頸部から内傾したまま口縁部に至るが口縁端部でやや立ち上がっている。口唇部は玉縁状に仕上げている。略三角形の把手は注口の付設される注水軸の口縁部から体上部にかけて付設され、基部上端は玉状突起を介して口縁部と連結される。玉状突起は2段となっており上段は横位円孔を有している。把手正面には形をなぞるように略三角形の沈線を施して

いる。注口部は把手下の体上部～体央部に付設され、注水口は先端が若干反り、把手基部上端の玉状突起とほぼ同じ高さである。外面文様は把手基部上端下位から横位隆線が巡り、口縁部と頸部～体部を分帯する。副軸正面には隆線を挟んで横位の長楕円形区画、その下の中央には渦巻文とそれを下囲むする同区画文を規則的に配し、区内には円形刺突列を充填している。注水軸の注口部と対する側には渦巻文を配し、施文域を沈線で縁取っている。口縁部内面及び外面全体は丁寧なミガキ調整が施され、焼し焼きにより黒光りしている。底面には網代痕が残されており、内底面には円形の段を有している。接合前の観察で、体部最大径下端の輪積痕に刻み目が認められた。

第14図10は大形注口土器で、前2個体と旁聞気が異なり頸部ではなく口縁部の伸長した事例で壺形を呈する。器壁が薄く精巧な作りである。法量は器高20.2cm、口径12.4～13.7cm、底径11.1cm、体部最大径23.6cmを測る。張出底部から大きく膨らむ体部と口縁部が分立しており、頸部～口縁部は大きく外反する。口唇部は玉縁状に一旦仕上げているが、把手の付設位置に渦巻状突起が貼付され、沈線・円形刺突列が施文されている。略三角形の把手は注口の付設される注水軸の口縁部下から体上部にかけて付設され、基部上端は玉状突起を介して口縁部と連結される。把手正面には形をなぞるように底線のない略三角形の沈線を施している。注口部は把手下の体上部～体央部に付設され、注水口は先端が若干反り、把手基部上端の玉状突起とほぼ同じ高さである。外面文様は体上部を施文範囲とし、口縁部は無文である。把手基部下端上位と体部・口縁部の分立する頸部から横位隆線が極狭い範囲で巡り、体部・頸部・口縁部を分帯している。隆帶間に円形刺突列を充填した長楕円形区画文、その隆帶下や把手には2段の同区画文を配し、施文域下端には同刺突列を充填した沈線区画文を巡らせている。同区画は他の土器と比べて区切ることなく横に長いこと、他の文様と組み合わせることがなく單一文様であることが特徴的である。口縁部内面及び外面全体は丁寧なミガキ調整が施され、焼し焼きにより光沢もあるが、炭素の吸着が甘いのか素地色の箇所も見られる。底面には網代痕が残されており、内底面には円形の凹みを有している。接合前の観察で、体部最大径下端の輪積痕に刻み目が認められた。

次に全形が分からぬもの5点について観察所見を述べる。

第15図11は大形注口土器の底部～体上部で実測している部分はほぼ遺存している。器壁は厚い。法量は残存高17.8cm（注口部）、底径9.0cm、体部最大径20.0cmを測る。体部は大きく2つに割れていたが接合部分で色調の違う箇所が見られ、割れてから被熱したことが窺われる。器形は張出底部から下彫れの体部で、頸部から内傾したまま口縁部へ至り、端部は立ち上がるであろう。外面文様は注口部基部周りに蕨手状沈線・隆線、その外側に渦巻文と長楕円形区画文を規則的に配置している。全体的にミガキ調整が施され、焼し焼きにより黒光りしている。底面は網代痕の形跡があるものの摩耗により不鮮明で、内底面には円形の凹みを有している。

同図12は大形注口土器で、口縁部～頸部部と体部片に分かれ、接合関係はないが胎土から同一個体と認められるものである。法量は残存高17.3cm、復元口径7.8cm、復元体部最大径24.0cmである。大きく膨らむ体部から頸部は内傾したまま口縁部へ至り、口縁部は直立する。口唇部は玉縁状に仕上げている。外面文様は口縁部～頸部に大柄渦巻文を中心配し、周間に円形刺突列を充填した横位の長楕円形区画文を重複して、施文域下端には同刺突列を充填した横位沈線区画文を巡らせている。長楕円形区画文の部分は素地を彫りくぼめてからその中に施文している。全体的にミガキ調整が施され、焼し焼きにより黒光りしている。

同図13は小形注口土器で、口縁部～頸部部と注口部を伴う体部片に分かれ、接合関係はないが胎土から同一個体と認められるものである。法量は残存高11.7cm、復元口径5.0cm、復元胴部最大径13.0cmである。器形は大きく膨らむ体部から頸部は内傾するが、比較的早く直立して口縁部に至っている。注口部の先端は若干反り、他の個体と比較して注水口の位置が低い。外面文様は横位沈線・長楕円形区画文の組み合わせで、同区画文は下向弧状にも重ねて施文され、区内には円形刺突列を充填している。施文域は注口部周囲まで及んでいる。

その他、第16図41は把手部片、同図43は口縁部～頸部片である。

以上、SI01出土の「福田類型」注口土器の観察所見から以下の特徴を抽出できる。

まず、器形は以下の通り3大別5細分される。

a1類：張出底部と下彫れの体部からそのまま内傾し、口縁部まで至るもの（第13図8）。

a2類：底部・体部はa1類と同様で、口縁端部は若干立ち上がるるもの（第13図9）。

b1類：張出底部と大きく膨らむ体部からそのまま内傾し、口縁端部は若干立ち上がるもの（第15図12）。

b2類：底部・体部はb1類と同様で、口頭部は直立し、若干外反して立ち上がるもの（第15図13）。

c類：底部・体部はb1・b2類と同様で、口縁部が体部と分離し、外反して立ち上がるもの（第14図10）。

法量は大形・小形に大別される。大形が器高17.0cm～20.0cm前後のもの、小形が器高10.0cm～13.0cm前後のものである。

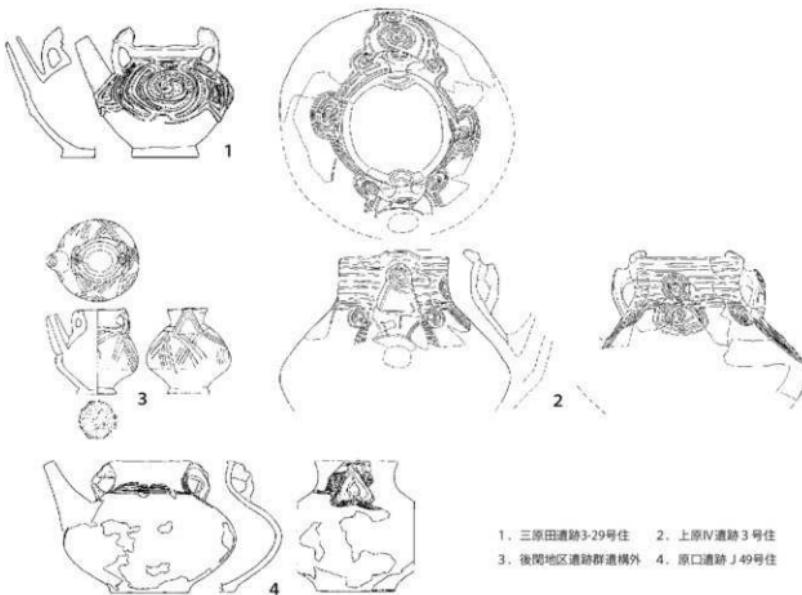
把手は略三角形を呈し注水軸方向に付設されるが、装着部位により、口縁部～体上部のもの（第13図9）、頭部～体上部のもの（第13図8）に分けられる。

文様は降線区画内に円形刺突列を充填した長楕円形区画文を縱位・横位に、把手周りは下向弧状に規則的に配置して、渦巻文と組み合わせ、施文域下端を同刺突列を充填した帶状文で縁取るものが多い。円形刺突列を充填しないもの（第15図11）や他の文様と組み合わせることなく單一文様のもの（第14図10）で降線を用いないもの（第15図13）も認められる。

施文域は口頭部から把手・注口部基部周りの体上部に集約され、注水軸と直交する副軸の体部が無文となるものがほとんどである。口頭部と片方の把手下・副軸体上部に施文し、注口部基部周りは無文のもの（第13図9）と頭部から体上部の把手周りに集約され、口縁部・注口部基部周りは無文のもの（第14図10）が例外的に認められる。

口唇部はそのほとんどが平坦で玉縁状に仕上げられているが、1点（第14図10）のみ突起が貼付され、沈線文と円形刺突列で装飾していることで例外的である。

底部は台状に張り出すことが特徴的で、内底面に円形の凹みを有している。これは破片でも確認できるが、同時期の浅鉢で同様な底部をもつものにも共通で底面には摩耗で不明瞭なもの以外は網代圧痕が残されている。



第112図 関連資料（1/6）

焼し焼きは遺構外の1点（第16図41）以外は焼し焼きにより光沢を有している。そのほとんどが炭の吸着により黒光りしているがその中で炭素の吸着が甘いのか素地色の箇所も見られるもの（第14図10）が認められた。

分割成形が行われていたと考えられる粘土組上の刻み目は遺存率の高い3点（第13図8・9・第14図10）でいずれも確認されている。部位はいずれも体部最大径下端の輪積痕で、製作の休止を示している。

3. 口縁部分立の「福田類型」注口土器について

これまでSI01の「福田類型」注口土器の観察所見から各要素の特徴を抽出してきた。SI01はSI02や配石遺構などの重複関係があるが、出土土器は床面に近い覆土からの出土で一括性が高いと考えられる。系統的変化で自己同一性を高めていく方向性の中で共通要素が多い反面、器形・文様・施文域・口唇部装飾で特異性が認められたのが第14図10である。口縁部と体部が分立し、文様は長楕円形区画文というよりかは帯状文のように横に長く用いられ、他の文様との組み合わせがない單一文様で、施文域は頸部から体上部の把手周りに集約されて口縁部・注口部基部周りは無文である。口唇部は一旦玉縁状に仕上げているが、溝巻状突起が貼付され、沈線文と円形刺突列で装飾している。この土器を理解する上で参考になる事例を第112図に示した。同図1は群馬県前橋市三原田遺跡3-29号住居跡出土例（群馬県企業局1992）で堀之内2式中段階前半の「蕃神台類型」注口土器である⁽¹⁾。古段階と比べて体部が丸く膨らみ、把手間を連携する襟部が伸長し、外反する口縁部となっている。把手上位には溝巻文が施され、体部文様は隆線と沈線を用いて溝巻文を中心配して隆帶間やその周囲を長楕円形区画文で埋めていく構図が第16図42などに繋がっていくと考えられ、区画文を帯状文のように長く用いている点にも注目したい。区画内に円形刺突列を充填し、施文域は体央部下端まで広がっている。第112図2は鈴木氏が「福田類型」の古相に位置づける（鈴木2020）、本遺跡と隣接する上原IV遺跡3号住居跡出土例（(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2008）である。屈曲する体部から口縁部は直立気味に立ち上がっている。把手は略三角形を呈し、上位に溝巻文が付され、その上の口縁部には楕円形区画文が描かれた半円形の突起が貼付されている。把手基部は口縁と分立てて口縁部下に装着されている。文様は口縫部が溝巻文と横位沈線で構成され、把手および注口部基部周りへの集約、施文域の縁取りが認められる。同図3は群馬県利根郡みなかみ町後閑地区遺跡群遺構外出土例（月夜野町教育委員会2002）、同図4は神奈川県平塚市原口遺跡J49号住居跡出土例（かながわ考古財団2002）である。前者は加曾利B2式で報告されているが、張出底部、屈曲をもつ体部、略三角形の把手基部上端が口縁部と同じ高さに付設されており、堀之内2式中段階の「福田類型」の形成過程に係る資料と捉えられるであろう。把手基部上端に溝巻文、体部と分立した外反する無文の口縁部をもつ事例として捉えられる。同図1の三原田例と比べると口縁部が伸長していることは注目してよいであろう。後者は副軸の口縁部が欠損しているが、体部から口縫部は分立して丸く外反して立ち上がっている。文様は円形刺突列を充填した長楕円形区画文を縱横密に配しているが、施文域は把手基部周りと頸部に集約され、外反する口縁部は無文である。この両者は共に單一文様であることも重要である。

以上、第14図10は直前段階の「蕃神台類型」からの系統的変化の中で辿ることが可能で、特異性と思われた諸要素は既存の「福田類型」に類例を認めるができるようである。

4.まとめにかえて

今回の調査は平成19年度に発掘調査が実施された。ちょうどこの頃から八ッ場ダム建設関連の諸事業に伴う発掘調査が本格的に平成31年度まで継続して続けられ、整理調査は複数遺跡の調査と併行して進められてきた。調査時に注口土器と多孔石の出土量の多さを感じていたが、整理段階では多くの縄文土器研究者に出土土器を実見していただいた際に、必ずといってよいほど注口土器に視点が留まり、驚きとともにこれらの土器の希少性について語られていたことを記憶している。遺存度が80%以上で美術工芸的觀点からも優れた2個体については専門業者に修復を委託して実施したものこのような経緯があったからである。

その当時は福田貝塚出土の注口土器と酷似していて、同系統だが口縁部形態が異なるのは同一住居の一括遺物ではあるが新旧関係にあるのか否か判断がつかなかった。その後、菅見の報告書でこの注口土器の特徴の一つである

台状に張り出した底部をもつものを調べた結果、形態や文様に多様性があり、いわゆる「福田類型」注口土器の希少性が実感として理解できたと同時に、本地域でこの系統が安定的かつ主体的に出土していること、福田貝塚出土の注口土器も本地域からもたらされた可能性があることが明らかとなってきた。本報告書を作成するにあたって、当初は関東地方を中心とした「福田類型」注口土器の分布とそこから導き出される交易論などができればと考えていたが、時間や紙幅に限りがあり、住居一括土器の特徴を抽出するに留まった。

最後に「福田類型」注口土器を研究する基礎作業として、長野原町を含む吾妻川流域の遺跡で「福田類型」注口土器が出土している遺跡と遺構を調べ、集成了した。その結果、本町域に所在する8遺跡、56点が確認された（第113～121図／第8表）。これらは破片資料も含み、報告書掲載遺物（写真含む）に限った数字である。遺跡では本遺跡が16点（28.6%）と最も多く出土しており、遺構では住居跡からの出土が32点（57.1%）と多いことが分かった。集成に際し、遺構出土のもので一括性に富む場合はその時期が判断できる土器となるべく掲載したが、時期幅が大きく一括性に乏しい場合はその中でランダムに選択した。該当する「福田類型」は数字を○で囲い、図版の縮尺は注口土器と破片資料を1/6、その他の復元土器を1/8を基本とし、その都度記してある。

註

(1) 本資料を「福田類型」注口土器と記載していたが（長野原町教育委員会2010）、ここで訂正したい。

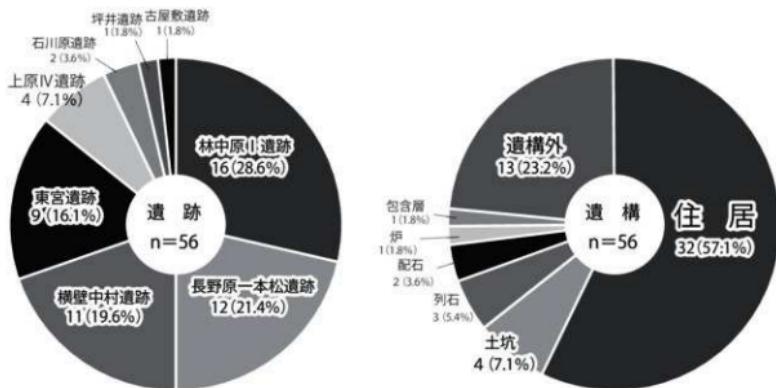
引用・参考文献

- 赤山裕造 1988 「三原田遺跡」「群馬県史 資料編Ⅰ 原始・古代Ⅰ」群馬県史編さん会
- 秋田かな子 1994 「加賀利B1式注口土器の成立（予察）－王子ノ台遺跡出土の注口土器から－」「東海大学校地内遺跡調査田報告」4
- 1996 「南関東部の加賀利B式土器－構造の理解に向けて－」「第9回縄文セミナー後期中葉の諸相」・「回記録集」 縄文セミナーの会
- 1997 「石神類型『見え書き』」「東海大学校地内遺跡調査田報告」7
- 1998a 「伊勢原市三ノ宮・下谷戸遺跡の注口土器－『石神類型』と注口土器の問題－」「東海大学校地内遺跡調査田報告」8
- 1998b 「加賀利B1式土器の構造変化とシステム－南関東西部における様相をふまえて－」「東海史学」第32号
- 1999 「注口土器の系統変化」「季刊考古学」69号 横山龍
- 2002a 「加賀利B2式鉢形土器の性質－型内位相による諸現象から－」「日々の考古学」東海大学考古学教室開設20周年記念論文集編集委員会
- 2002b 「後期中葉 注口土器の社会的機能の解明に向けて－注口土器・注口土器関係から－」「土器から探る縄文社会」山梨県考古学協会
- 2005 「瓶之内2式期『加熱系土器』製作の一面像－関東西部における『表示性希薄土器』の存在形態」「土曜考古」第29号
- 2006 「関東地方後期・中葉にみる土器文化の展開－型式の変化と維持をめぐって－」「縄文社会をめぐるシンポジウムIV－土器型式をめぐる諸問題－予稿集」縄文社会研究会・早稲田大学先史考古学研究所
- 2008a 「加賀利B式土器」「縄文 縄文土器」アム・プロモーション
- 2008b 「注口土器と注口土器－器種間の関係性と『器種文様』からみたシステム－」「縄文時代の考古学7 土器を読み取る 縄文土器の情報」同成社
- 2015 「南関東における後期注口土器の様相」「第28回縄文セミナー縄文後期注口土器の諸様相」 縄文セミナーの会
- 阿部勇郎 1999 「村東山手遺跡出土の瓶之内2式土器の型式学的検討」「上信越自動車道沿線文化財発掘調査報告書8－長野市内その6－村東山手遺跡」長野県埋蔵文化財センター
- 池谷征之 1990 「縄文・瓶之内型注口土器」「縄文時代」第1号 縄文時代文化研究会
- 石井 寛 1984 「瓶之内2式土器の研究（予察）」「調査研究集録」第5冊
- 1993 「瓶之内1式土器群に関する問題」「牛ヶ谷遺跡・草坂台南遺跡」「横浜市ふるさと歴史財团
- 1995 「原出山遺跡20号住居址出土土器群をめぐって」「川和向原遺跡・原出山遺跡」「横浜市ふるさと歴史財团
- 上野利也・西田泰民他 1983 「経井沢・茂沢古石堂遺跡」「縄文屋」「経井沢町教育委員会
- 宇佐美利也 2004 「竪穴住居出土遺物の一一般的なあり方」「多摩のあゆみ116号」
- 岡間俊明 2008 「土器の発見」「縄文 縄文土器」アム・プロモーション
- 小川卓也・宮田忠洋・向出博之 2015 「北関東における後期注口土器の様相」「第28回縄文セミナー縄文後期注口土器の諸様相」 縄文セミナーの会

- かなかわ考古財団 2002「原山遺跡Ⅲ」
- 金元 元 2015「新潟県の後期前葉土器研究の展望」『第25回縄文セミナー縄文後期土器研究の現状と課題』 縄文セミナーの会
- 加納 実 2002「南関東における埴之内式の様相」『第15回縄文セミナー後期前半の再検討』 縄文セミナーの会
- 2008「埴之内式土器」『縄文 縄文土器』アム・プロモーション
- 群馬県企業局 2002「三原山遺跡第3巻」
- 小寺哲夫 1999「第25回企画展 群馬の出土土器」笠懸野谷宿文化資料館
- 小林達雄 1965「遺物埋没状況及びそれに派生する問題（土器腐食過分の問題）」『米島貝塚』庄和町教育委員会
- 1974「縄文世界における土器の発展について」『歴史学』93号
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2009「山根原遺跡（2）土原N遺跡 幸神遺跡」
- 品田高志 2002「新潟県における縄文後期前葉土器群－柏崎市十三木塚北遺跡を中心にして－」『第15回縄文セミナー後期前半の再検討』 縄文セミナーの会
- 鈴木克彦 1983「注口土器の集成研究」雄山閣
- 鈴木雄雄 1983「関東山東部」『シンボジウム縄之内式土器』市立市川考古博物館
- 1992「縄文後期注口土器の成立」『縄文時代』第3号 縄文時代文化研究会
- 1999「称名寺式開闢型類の後裔－埴之内式期における小仙塚型類の形成－」『縄文土器論集－縄文セミナー10周年記念論文集－』
- 2000a「称名寺式土器」『埴之内式土器』『縄文時代』第10号 縄文時代文化研究会
- 2000b「称名寺式終末期と装饰帶の変化」『群馬考古手帳』第10号 群馬土器研究会
- 2002「北関東における埴之内式の様相」『第15回縄文セミナー後期前半の再検討』 縄文セミナーの会
- 2012「埴之内式土器研究の諸問題－埴之内式の概観と貞刃型式』『第25回縄文セミナー縄文後期土器研究の現状と課題』 縄文セミナーの会
- 2020「縄文後期注口土器の形態形成と器種行為－器種製作過程と器種行為論への展望－」『地域考古学』5号 地域考古学研究会
- 丹野雅人 1985「注口土器 小考－縄文時代中期終末期における様相－」『東京都埋蔵文化財センター研究紀要』3
- 2008「土器片加工凹板・鍾」「縄文 縄文土器」アム・プロモーション
- 谷藤保彦 1990「群馬県・後期前葉の土器群」「第4回縄文セミナー縄文後期の諸問題」
- 月夜野町教育委員会 2002「後園地区遺跡群」
- 中島庄一 2008「称名寺式土器」『縄文 縄文土器』アム・プロモーション
- 中島庄一 1994「筑道中野豊野線バイパス志賀中野有料道路埋蔵文化財発掘調査報告書－長野県中野市内－栗林遺跡・七瀬遺跡」長野県埋蔵文化財センター
- 長野原町教育委員会 2009「林中原I遺跡Ⅲ」『町内遺跡Ⅲ』
- 2010「林中原I遺跡Ⅳ」
- 2012「林中原I遺跡Ⅴ」
- 西田泰民 1989「埴之内・加曾利B式土器様式」『縄文土器大観』4
- 1992「縄文土瓶」『古代学研究所研究紀要』2
- 花岡弘・綿田弘実他 1994「石神遺跡群 石神」小渚市教育委員会
- 藤本秀城 1980「那珂川下流の石器時代研究Ⅱ」
- 藤谷幸男 2009「後期土器の時期区分と概要」『横嶺中村遺跡（8）－縄文時代後期住居編Ⅰ－』 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 諸田康成 2001「まとめ」『長野原一本松遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 山内清男 1940「埴之内式」日本先史学調査 第VI輯 先史考古学会
- 綿田弘実 1985「小朝倉東御町和中原遺跡出土の後期縄文土器」「上小考古」No18 上小考古学研究会
- 1990「長野原の縄文後期前葉の土器群」『第4回縄文セミナー縄文後期の諸問題』 縄文セミナーの会
- 1997「縄文土器について」『鹿沼遺跡』御代田町教育委員会
- 2001「縄文土器 中期末葉から後期」『湯賀洞窟』高山村教育委員会
- 2002「長野原の縄文後期前葉の土器群Ⅱ」『第15回縄文セミナー後期前半の再検討』 縄文セミナーの会
- 2015「長野原における縄文時代後期注口土器の様相」『第28回縄文セミナー縄文後期注口土器の諸相』 縄文セミナーの会



第113図 吾妻川中流域における「福田類型」注口土器出土遺跡位置図 (1/100,000)



第114図 遺跡・遺構ごとの割合

第8表 吾妻川中流域における「福田類型」注口土器出土遺跡一覧（遺跡Noは第113図と対応）

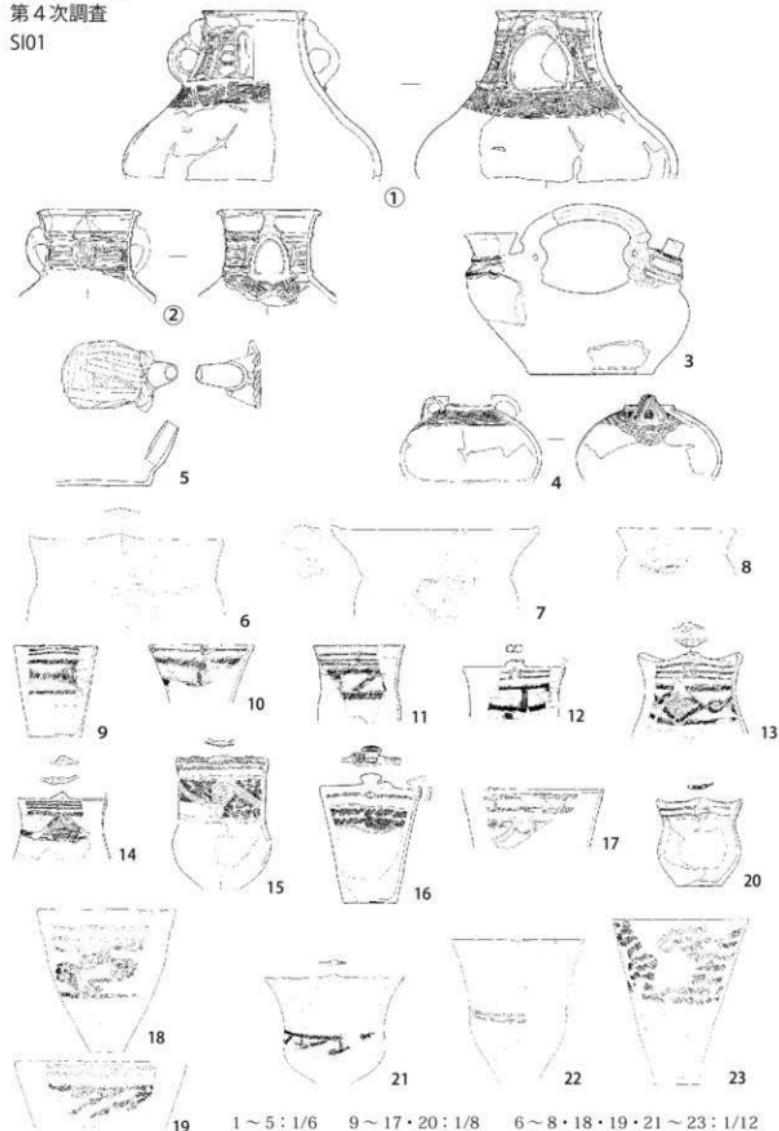
法量：<>復元値 ○推定値

No.	遺跡名	碑②No.	遺構種別	遺構名	法量（器高／口径／底径）(cm)	色 調	焼 き	出 典
1	林中原Ⅰ遺跡	114-2	住居跡	S01	(10.2) / < 11.3 > / -	黒褐／灰黄褐	○	長野原町教育委員会 2010「林中原Ⅰ遺跡Ⅳ」
		114-1	住居跡	S01	(17.8) / < 11.3 > / -	暗灰褐／褐灰	○	
		115-1	配石	SS16	(6.1) / - / -	にぶい褐色／にぶい黃褐色	○	長野原町教育委員会 2022「林中原Ⅰ遺跡Ⅴ」
		115-9	遺構外		(6.1) / - / -	黒褐／灰褐	○	
		13-8	住居跡	S01	17.7 / 7.4 / 8.6	オリーブ黒	○	本報告
		13-9	住居跡	S01	9.0 / 5.4 / 6.0	黒	○	
		14-10	住居跡	S01	20.2 / 12.4 - 13.7 / 11.1	にぶい、黄褐～黒にぶい黄褐色～褐灰	○	
		15-11	住居跡	S01	(17.8) / - / 9.0	黒にぶい黄褐色	○	
		15-12	住居跡	S01	(17.8) / < 7.8 > / -	黒褐／褐	○	
		15-13	住居跡	S01	(8.5) / < 5.0 > / -	黒褐／極暗褐	○	
		16-41	住居跡	S01	(7.0) / - / -	にぶい赤褐	△	
2	上原IV遺跡	15-43	住居跡	S01	(5.5) / - / -	極暗褐色／にぶい赤褐	○	
		90-115	遺構外		(8.2) / - / -	暗にぶい褐色	×	
		115-9	住居跡	SP04	(5.6) / < 8.8 > / -	黒褐／灰黄褐	○	長野原町教育委員会 2022「林中原Ⅰ遺跡Ⅴ」
		115-10	住居跡	SP04	(4.1) / - / -	暗赤褐色／黒褐	○	
		115-21	遺構外		(5.1) / - / -	暗赤褐色／にぶい褐色	○	
		115-22	住居跡	1号住	(9.8) / < 4.0 > / -	暗赤褐	○	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2008「山根Ⅲ遺跡(2) 上原IV 遺跡 幸神道路」
		115-30	住居跡	3号住	(16.5) / < 11.6 > / -	灰赤	○	
		115-31	住居跡	3号住	(4.1) / - / -	黒	○	
		116-1	列石	1号列	(16.4) / < 8.3 > / -	にぶい赤褐	○	
		116-15	住居跡	V区3建	(5.8) / - / -	黒	○	(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2021「東宮遺跡(5)」
3	東宮遺跡	115-30	住居跡	V区4建	(4.8) / - / -	黒	○	
		115-31	住居跡	V区4建	(3.2) / - / -	深黒	○	
		117-1	住居跡	V区16建	(3.5) / - / -	灰黒	○	
		117-2	住居跡	V区16建	(3.2) / - / -	灰黒	○	
		117-6	住居跡	V区21建	(9.4) / - / -	暗赤褐	○	
		117-16	土坑	V区166土	(5.2) / - / -	灰黒	○	
		117-21	住居跡	V区2建	(4.8) / - / -	明赤褐	○	(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2021「東宮遺跡(6)」
		117-22	住居跡	V区2建	(12.6) / - / -	淡黄褐	○	
		117-28	住居跡	11建	(14.6) / < 7.2 > / -	黒褐／灰褐	○	(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2021「石川原遺跡(3)」
		118-1	住居跡	140建	(23.2) / < 10.4 > / 10.0	暗赤褐	○	
4	石川原遺跡	118-8	住居跡	19K 55住	- / (8.9) / -	にぶい赤褐	○	
		118-9	住居跡	19K 55住	(5.8) / - / -	にぶい褐色	○	
		119-1	住居跡	30K 33住	(6.0) / - / -	灰褐	○	
		119-13	住居跡	30K 35住	(8.4) / - / -	黒褐／柏	○	
		119-14	住居跡	30K 35住	(5.8) / - / -	黒褐	○	
		119-31	土坑	20K 368土	(3.1) / - / -	陶灰	○	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2008「横壁中村遺跡(6)」
		119-33	土坑	20K 400土	(3.2) / - / -	にぶい柏	○	
		119-40	列石	29K 4列	(2.1) / - / -	黒褐	○	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2010「横壁中村遺跡(11)」
		119-51	列石	29K 5列	(3.2) / - / -	暗赤褐	○	
		119-54	包含物	29K 3-5列	(5.4) / - / -	暗赤褐	○	
5	横壁中村遺跡	119-55	遺構外	20K	(6.3) / - / -	にぶい赤褐	○	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2013「横壁中村遺跡(13)」
		120-1	住居跡	5区 60号	(3.5) / - / -	黒褐	○	
		120-16	砂跡	5区 10砂	(4.5) / - / -	にぶい黄	○	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2008「長野原一本松遺跡(4)」
		120-23	遺構外	5区	(5.4) / - / -	明赤褐	○	
		120-24	遺構外	5区	(9.5) / - / -	黒褐	○	
		120-25	配石	5区 212配	(6.2) / < 10.4 > / -	灰褐	○	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002「長野原一本松遺跡(1)」
		120-26	遺構外	5区	(5.1) / - / -	にぶい黄褐	△	
		120-27	遺構外	5区	(4.7) / - / -	黒褐	○	
		120-29	遺構外	5区	(3.4) / - / -	灰褐	○	
		120-30	遺構外	5区	(4.0) / - / -	灰褐	×	
6	長野原一本松遺跡	120-31	遺構外	5区	(3.4) / - / -	暗赤褐	○	
		120-28	遺構外	5区	(4.0) / - / -	灰褐	○	
		120-32	遺構外	95区	(7.2) / - / -	にぶい黄褐	△	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2008「長野原一本松遺跡(3)」
		120-33	土坑	SK13	(7.1) / - / 9.3	黒褐／灰黄	○	長野原町教育委員会 2000「坪井遺跡II」
		120-35	住居跡		17.0 / 6.8 / -	黄褐	?	長野原町 1976「長野原町誌上巻」
7	坪井遺跡							
8	古屋敷遺跡							

林中原 I 遺跡

第4次調査

SI01



第115図 1. 林中原 I 遺跡①

林中原 I 遺跡

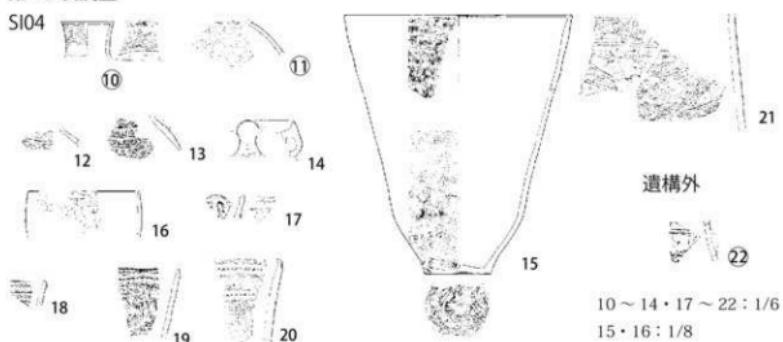
第9次調査

SS16



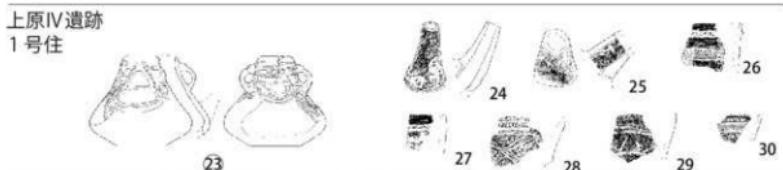
第15次調査

SI04

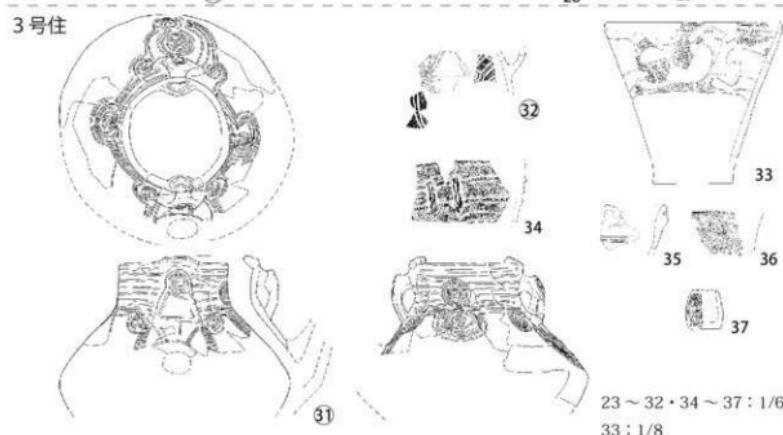


上原IV遺跡

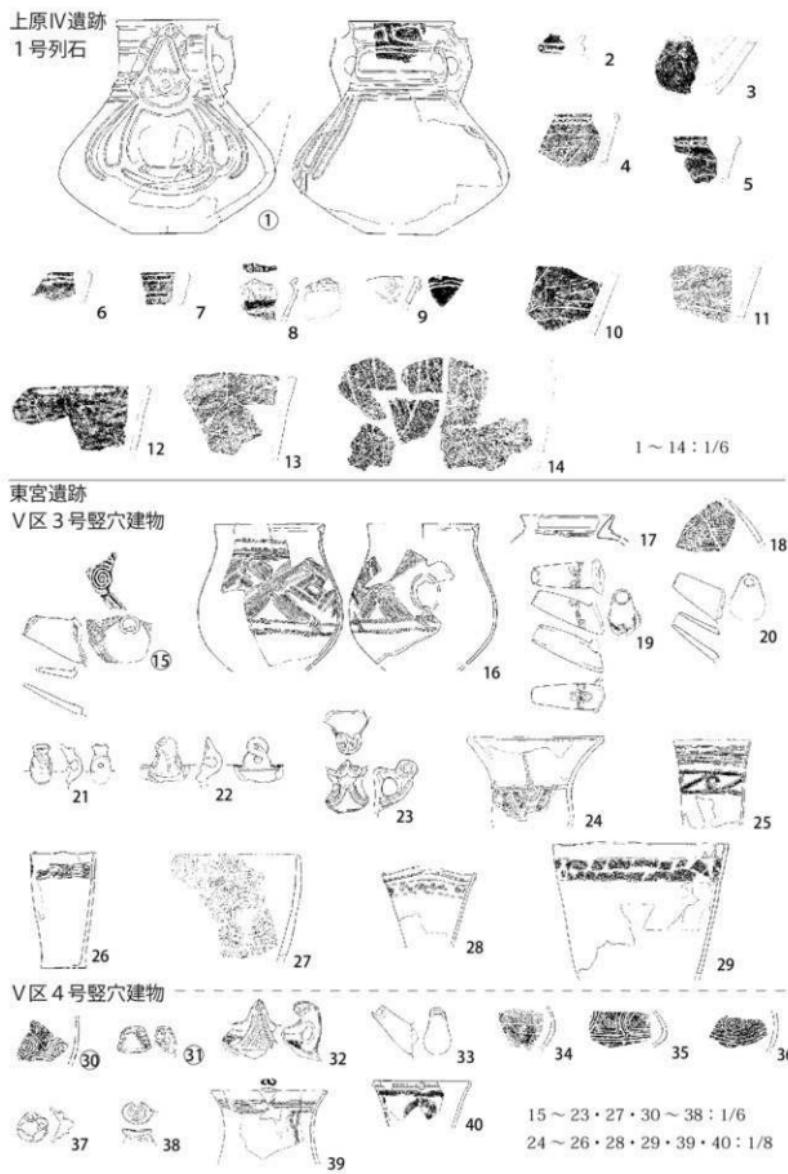
1号住



3号住



第116図 1.林中原 I 遺跡②・2.上原IV遺跡①



第117図 2. 上原IV遺跡②・3. 東宮遺跡①

V区 16号竪穴建物



3

4



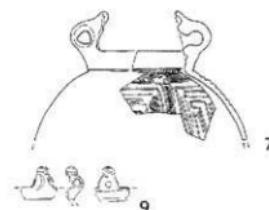
5

V区 21号竪穴建物



6

8



7



東宮遺跡(5)
V区 166号土坑



16



17



18



19



20



16~20:1/6

東宮遺跡(6)

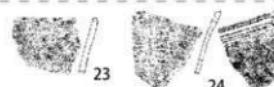
VII区 2号竪穴建物



21



22



23



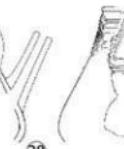
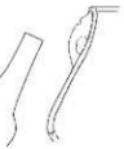
24



25

21~27:1/6

石川原遺跡
11号竪穴建物



29



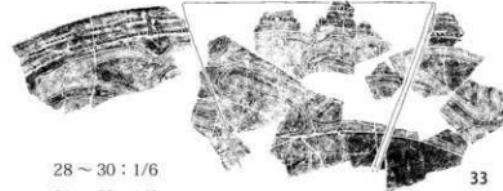
30



31



32



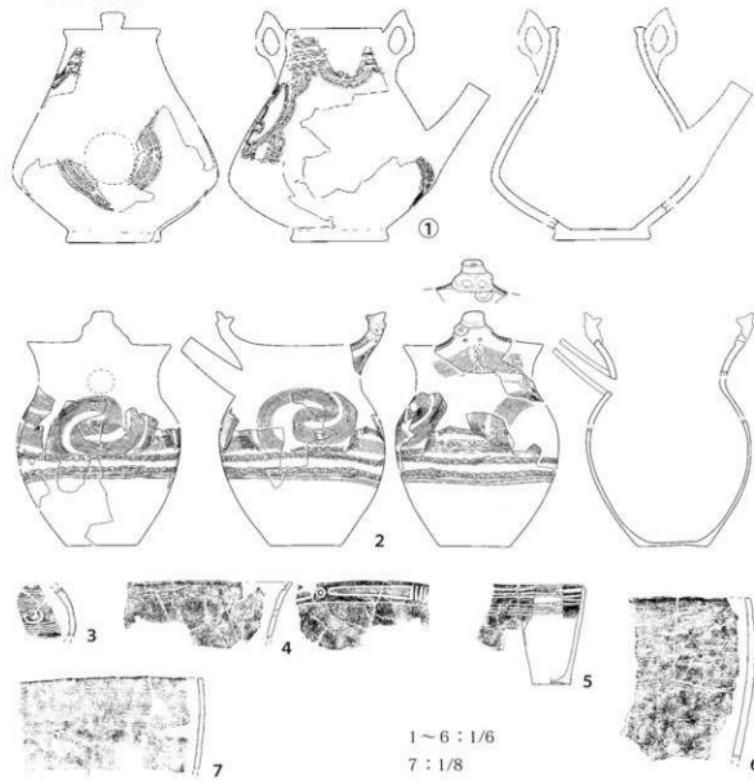
33

28~30:1/6

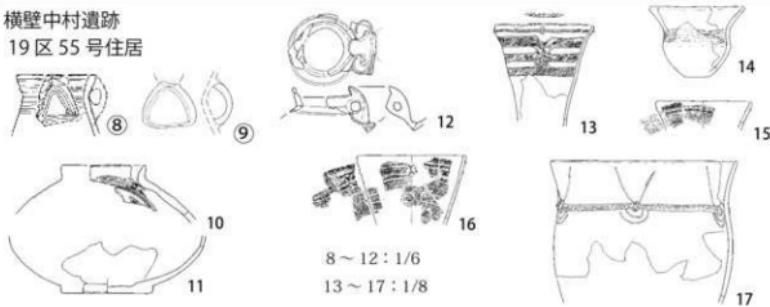
31~33:1/8

第118図 3. 東宮遺跡②・4. 石川原遺跡①

石川原遺跡
140号竪穴建物

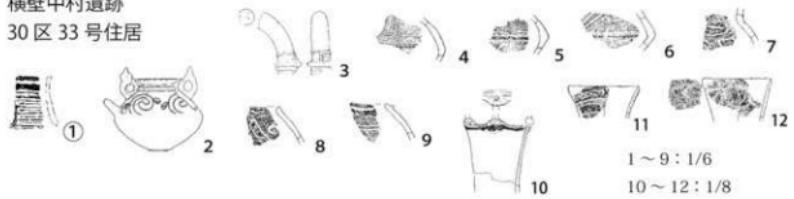


横壁中村遺跡
19区55号住居

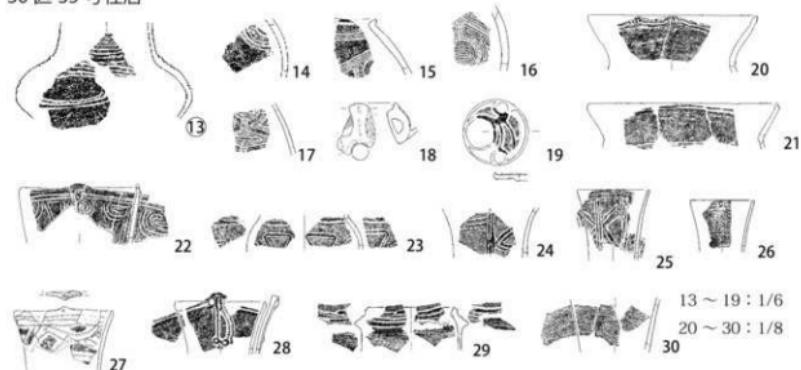


第119図 4. 石川原遺跡②・5. 横壁中村遺跡①

横壁中村遺跡
30区33号住居



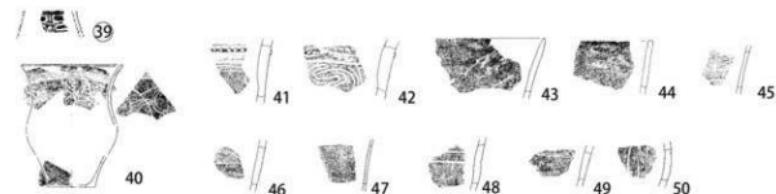
30区35号住居



20区368号土坑



29区4号列石

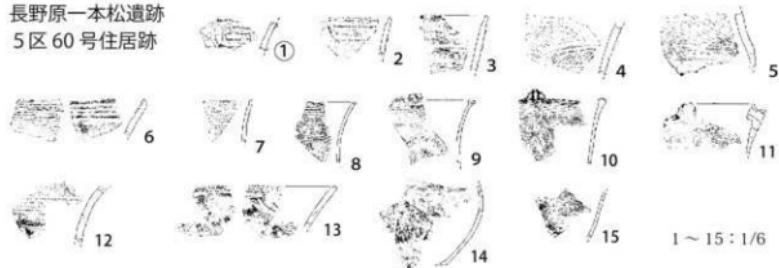


29区5号列石

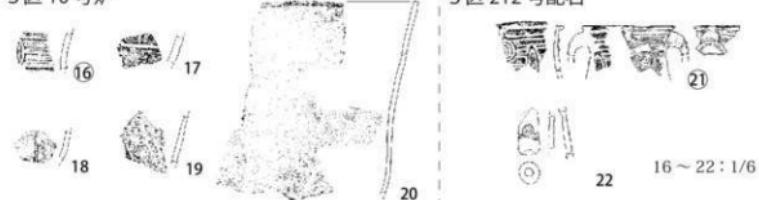


第120図 5. 横壁中村遺跡②

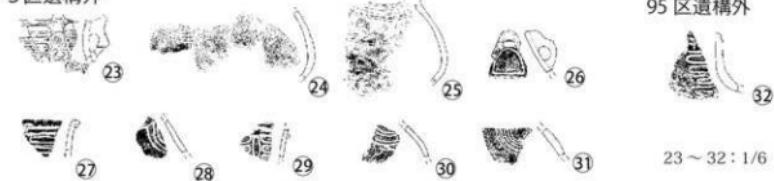
長野原一本松遺跡
5区 60号住居跡



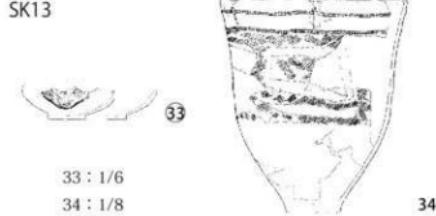
5区 10号炉



5区 遺構外



坪井遺跡第2次調査
SK13



33 : 1/6

34 : 1/8

5区 212号配石



16 ~ 22 : 1/6

95区 遺構外



23 ~ 32 : 1/6

古屋敷遺跡
住居址出土



第121図 6.長野原一本松遺跡・7.坪井遺跡・8.古屋敷遺跡

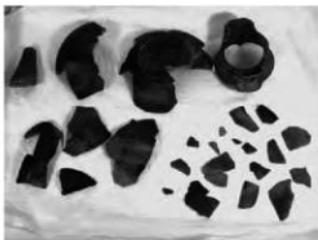
付編 注口土器の修復工程

株式会社文化財ユニオン

① 修復前



土器1 <第13図8>
(うち別個体1点)



土器2 <第14図10>
(うち別個体6点)

② 解体

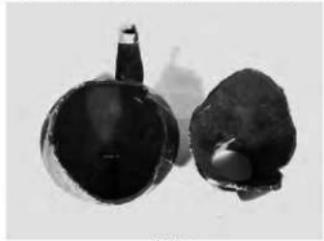


土器1



土器2

- ③ 破断面にパラロイドB-72（10%溶液）を塗付して強化。
- ④ パラロイドB-72（50%溶液）にて接着、組み上げ。
- ⑤ エポキシ樹脂AD1264にて充填。
(上部、下部を外して内部を充填仕上げして、再び接着し、充填した。)



土器1



土器2

第122図 注口土器修復工程1

⑥ 充填完了、着彩前。



土器 1



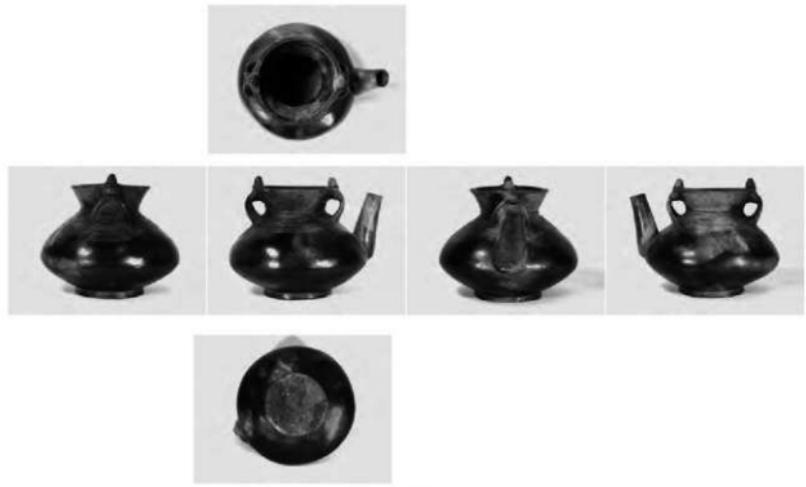
土器 2

第 123 図 注口土器修復工程 2

⑦ 充填箇所にアクリル絵の具にて古色付けを施し、完成。



土器 1



土器 2

第 124 図 注口土器修復工程 3

第9表 林中原1遺跡刈出土遺物観察表

件名	測定値	測定方法	測定範囲	測定結果		測定者
				外側	内側	
13.1 20 稲文・茎 茎部	11.5 / < 14.2 / < 6.5	口縫幅・口幅・壁厚 (11.5) / < 24.0 / < 1.0	口縫幅・口幅・壁厚 (11.5) / < 24.0 / < 1.0	良好	内側石 角閃石・白長石 原石	d 石・bc 砂岩 a+c・d 砂岩 b 砂・d 砂
13.2 20 稲文・茎 茎部	< 10.8 / < 10.4 / < 3.8	口縫幅・口幅・壁厚 (10.8) / < 24.0 / < 1.0	口縫幅・口幅・壁厚 (10.8) / < 24.0 / < 1.0	良好	内側石・白長石 角閃石	b 砂・d 砂
13.3 20 稲文・茎 茎部	(6.1) / < < 0.0	外側石 口縫幅・口幅・壁厚 (6.1) / < 24.4 / < 1.0	口縫幅・口幅・壁厚 内側は斜面	良好	白色石・赤色石 角閃石・白長石 原石	に赤・黒 に赤・白・黒 b 砂
13.4 20 稲文・茎 茎部	(15.6) / < 24.4 / < 1.0	外側石 口縫幅・口幅・壁厚 (15.6) / < 24.4 / < 1.0	口縫幅・口幅・壁厚 内側は斜面	良好	白色石・白長石 角閃石・白長石 原石	に赤・白・黒 に赤・白・黒 b 砂
13.5 20 稲文・茎 茎部	(3.9) / < 6.8 / < 1.0	外側石 口縫幅・口幅・壁厚 (3.9) / < 6.8 / < 1.0	外側石 口縫幅・口幅・壁厚 内側は斜面	良好	白色石・白長石 角閃石・白長石 原石	に赤・白・黒 に赤・白・黒 b 砂
13.6 20 稲文・茎 茎部	(4.9) / < 6.8 / < 1.0	外側石 口縫幅・口幅・壁厚 (4.9) / < 6.8 / < 1.0	外側石 口縫幅・口幅・壁厚 内側は斜面	良好	白色石・白長石 角閃石・白長石 原石	に赤・白・黒 に赤・白・黒 b 砂
13.7 20 稲文・茎 茎部	(17.7) / 7.4 / 8.6	外側石 口縫幅・口幅・壁厚 (17.7) / 7.4 / 8.6	外側石 口縫幅・口幅・壁厚 内側は斜面	良好	白色石 カリーブ珪 原石	に赤・白・黒 に赤・白・黒 b 砂
13.8 20 稲文・茎 茎部	9.0 / 5.4 / 6.0	外側石 口縫幅・口幅・壁厚 (9.0) / 5.4 / 6.0	外側石 口縫幅・口幅・壁厚 内側は斜面	良好	内側石 角閃石	はばね石 砂岩 b 砂
13.9 20 稲文・茎 茎部	20.2 / 12.4 ~ 13.7 / 11.1	外側石 口縫幅・口幅・壁厚 (20.2) / 12.4 ~ 13.7 / 11.1	外側石 口縫幅・口幅・壁厚 内側は斜面	良好	内側石・白・赤 色岩	はばね石・砂岩 b 砂
14.10 21 稲文・茎 茎部	20.2 / 12.4 ~ 13.7 / 11.1	外側石 口縫幅・口幅・壁厚 (20.2) / 12.4 ~ 13.7 / 11.1	外側石 口縫幅・口幅・壁厚 内側は斜面	良好	内側石・白・赤 色岩	はばね石・砂岩 b 砂

地図 No.	地図 No.	地図	地図	地図	地図	地図	地図	地図	地図	地図
外縁は3～4条筋のひびきにより墨色を呈する。内面は墨色ミガキ。										
16-35	22	獨立上部	(6.1) /-/	外縁は3～4条筋のひびきにより墨色を呈する。内面は墨色ミガキ。	良好	角閃石・斜長石・白に混じる緑色	緑片岩質料(体形)	b		
16-36	22	獨立上部	(7.3) /-/	外縁はJRと宮文安像・宮文安像文等により墨色を呈する。内面は墨色ミガキ。	良好	角閃石・斜長石・雲母質	緑片岩質料(体形)	b		
16-37	22	獨立上部	(5.3) /-/	外縁は独立の墨色を呈する。内面は墨色ミガキ。	良好	角閃石・斜長石・白	緑片岩質料(体形)	b		
16-38	22	獨立上部	(9.3) /-/	外縁は、比較的墨色を呈する。内面は墨色ミガキ。	良好	角閃石・斜長石・白に混じる緑色	緑片岩質料(体形)	b		
16-39	22	獨立上部	(8.1) /-/	外縁は比較的のJRと宮文安像文等により墨色を呈する。内面は墨色ミガキ。	良好	角閃石・斜長石・白	緑片岩質料(体形)	b		
16-40	22	獨立上部	(8.7) /-/	外縁は比較的のJRと宮文安像文等により墨色を呈する。内面は墨色ミガキ。	良好	角閃石・斜長石・白	緑片岩質料(体形)	c 延方		
16-41	22	獨立上部	(7.0) /-/	外縁は比較的のJRと宮文安像文等により墨色を呈する。内面は墨色ミガキ。	良好	角閃石・斜長石・白	緑片岩質料(体形)	b		
16-42	22	獨立上部	(5.8) /-/	外縁は比較的墨色を呈する。内面は墨色ミガキ。	良好	角閃石・斜長石・白	緑片岩質料(体形)	b		
16-43	22	獨立上部	(5.5) /-/	外縁は比較的墨色を呈する。内面は墨色ミガキ。	良好	角閃石・斜長石・白	緑片岩質料(体形)	b		
16-44	22	獨立上部	(12.0) /-/	外縁は比較的墨色を呈する。内面は墨色ミガキ。	良好	角閃石・斜長石・白	緑片岩質料(体形)	b		
16-45	22	獨立上部	(3.7) /-/	外縁は比較的墨色を呈する。内面は墨色ミガキ。	良好	角閃石・斜長石・白	緑片岩質料(体形)	b		
17-6	22	獨立右端部	長(26) /幅(20) /厚(3.3)	新鮮 1.2g。四隅が崩れ、内面は墨色ミガキ。	良好	角閃石・斜長石・白	緑片岩質料(体形)	b		
17-7	22	打削右端部	長(3.7) /幅(3.9) /厚(0.9)	新鮮 1.3g。断面がくぼ状の凹凸を有する。表面は墨色の河原石。	—	黒雲母石	—	b		
17-8	22	打削右端部	長(6.4) /幅(3.9) /厚(1.8)	新鮮 4.9g。角閃石・菱雲母等の斑晶を含む。表面は墨色の河原石。	—	黒雲母石	—	30% 磷灰		
17-9	22	打削右端部	長(9.8) /幅(7.3) /厚(3.1)	新鮮 2.0g。表面は墨色の河原石。	—	黒雲母石	—	50% 磷灰		
17-10	23	獨立右端部	長(9.1) /幅(7.3) /厚(3.2)	新鮮 2.0g。表面は墨色の河原石。	—	黒雲母石	—	50% 磷灰		
17-11	23	獨立右端部	長(11.6) /幅(8.2) /厚(4.7)	新鮮 5.6g。表面は墨色の河原石。	—	黒雲母石	—	50% 磷灰		
17-12	23	獨立右端部	長(19.7) /幅(6.6) /厚(5.5)	新鮮 9.8g。表面は墨色の河原石。	—	黒雲母石	—	50% 磷灰		
17-13	23	獨立右端部	長(12.0) /幅(10.5) /厚(5.8)	新鮮 11.0g。表面は墨色の河原石。	—	黒雲母石	—	50% 磷灰		
17-14	23	獨立右端部	長(10.6) /幅(6.3) /厚(2.8)	新鮮 2.9g。表面は墨色の河原石。	—	鈍角石	—	完形		
18-55	23	獨立右端部	長(9.1) /幅(7.0) /厚(2.2)	新鮮 20.6g。平面。	—	黒雲母石	—	完形		
18-56	23	獨立右端部	長(8.1) /幅(6.7) /厚(3.6)	新鮮 30.4g。平面。	—	黒雲母石	—	完形		
18-57	23	獨立右端部	長(9.8) /幅(7.0) /厚(4.1)	新鮮 4.9g。平面。	—	黒雲母石	—	50% 磷灰		
18-58	23	獨立右端部	長(8.5) /幅(7.5) /厚(2.4)	新鮮 2.9g。平面。	—	黒雲母石	—	50% 磷灰		
18-59	23	獨立右端部	長(8.9) /幅(8.1) /厚(4.8)	新鮮 38.9g。平面。	—	菱鐵矿石	—	完形		
18-60	23	獨立右端部	長(8.8) /幅(7.2) /厚(6.4)	新鮮 5.0g。平面。	—	黒雲母石	—	完形		
18-61	23	獨立右端部	長(17.7) /幅(16.3) /厚(10.5)	新鮮 27.4g。小面は内凹状の窪み等、表面には薄かな墨色の河原石。	—	黒雲母石	—	完形		
18-62	23	獨立右端部	長(3.6) /幅(3.3) /厚(0.9)	新鮮 17.5g。小面は内凹状の窪み等、表面には薄かな墨色の河原石。	—	菱鐵矿石	—	60% 磷灰		
18-63	23	獨立右端部	長(7.4) /幅(5.6) /厚(2.2)	新鮮 31.4g。平面。	—	軽石	—	50% 磷灰		
19-64	24	獨立右端部	長(38.5) /幅(20.3) /厚(9.5)	新鮮 9700g。	—	黒雲母石	—	70% 磷灰		
19-65	24	獨立右端部	長(18.0) /幅(13.6) /厚(11.4)	新鮮 2790g。	—	黒雲母石	—	完形		

測定No.	測定No.	地名	測量	測定	測量	測定	測量
S002 出土遺物観察表							
測定No.	測定No.	地名	測量	測定	測量	測定	測量
21-1	25	明文土器	(4.0) /-/-	[1]内面に「施」の文字と刻印。外側は斜位 1/4キ。内面は斜位 1/4キ。内面は斜位 1/4キ。	良好	石英・白白色 石英	施土・斜位 施
21-2	25	明文土器	(5.5) /-/-	[1]内面外斜面。内面と外斜位 1/4キ。	良好	石英 石英	施土・斜位 施
21-3	25	明文土器	(3.4) /-/-	[1]四面部外斜面。外側は斜位 1/4キ。	良好	白白色 白白色	施土・斜位 施
21-4	25	明文土器	(4.7) /-/-	外側は底の施位が施位。内面は斜位 1/4キ。	良好	白白色・白色 白白色	施土・斜位 施
21-5	25	明文土器	(5.1) /-/-	外側は 2・3 斜面の面下する状態。内面は斜位 1/4キ。	良好	白白色・白色 白白色	施土・斜位 施
21-6	25	明文土器	(5.6) /-/-	外側は石文強。内面は斜位 1/4キ。	良好	角閃石・赤紫色 角閃石・赤紫色	施土・斜位 施
21-7	25	明文土器	(3.7) /-/-	外側は施位は斜位。内面は斜位 1/4キ。底面は斜位 1/4キ。	良好	白色・石英 石英	施土・斜位 施
S001 出土遺物観察表							
測定No.	測定No.	地名	測量	測定	測量	測定	測量
23-1	25	明文土器	(2.0) /-/-	[1]内面外斜面。底面は強文強。底面は斜位 1/4キ。	良好	白色・白色 白色	施土・斜位 施
23-2	25	碧石茶碗	長 5.5・幅 4.3・厚 2.2 重 70g. 平打形。	[1]内面外斜面。底面は強文強。外側は斜位 1/4キを出し。外側は強文強。外側は斜位 1/4キを出し。内面は斜位 1/4キ。	良好	白色・白色 白色	施土・斜位 施
S002 出土遺物観察表							
測定No.	測定No.	地名	測量	測定	測量	測定	測量
25-1	25	明文土器	(6.9) < 20.5 > /-	3 斜位と出される施位。上斜位は部分が施位。外側は LR 斜面で施位に斜位 1/4キとの 文字を組み。内面は斜位 1/4キに 3 斜位の施位が施位。外側は強文強。外側は強文強。	良好	白色・石英・白 白色	施土・斜位 施
25-2	25	明文土器	(3.5) /-/-< 6.2 >	外側は強位 1/4キ。内面は斜位 1/4キ。底面は強位 1/4キ。	良好	角閃石・白 角閃石・白	施土・斜位 施
25-3	25	明文土器	(9.3) /-/-	底面は強位。底面は強位で強位の三側文字を出し。内面は斜位 1/4 キ。	良好	石英・白色 石英・白色	施土・斜位 施
25-4	25	明文土器	(4.7) /-/-	[1]内面外斜面。口斜位は強位の強位を施す。以下は強位と強位の強位を施す。 [2]強位 1/4キと強位 1/4キ。	良好	角閃石・白色 角閃石・白色	施土・斜位 施
25-5	25	明文土器	(4.9) /-/-	[1]強位 1/4キ。外側は強位の強位を強位とし、強位と文字強。内面は強位 1/4キ。	良好	白色・白色 白色・白色	施土・斜位 施
26-6	25	明文土器	(8.1) /-/-	強制強。外側は強位を強位。内面は強位 1/4キ。	良好	白色 白色	施土・斜位 施
26-7	25	明文土器	(3.7) /-/-	内面は 2 斜位の強位と強位を施す。以下は強位と強位を施す。内面は強位 1/4キ。	良好	角閃石・白色 角閃石・白色	施土・斜位 施
26-8	25	明文土器	(3.2) /-/-	内面は 2 斜位強位と強位の強位。内面は強位 1/4キ。	良好	石英・白色 石英・白色	施土・斜位 施
26-9	25	明文土器	(10.1) /-/-	外側は LR 斜面と強文強。強文強と強位を強位とし、強位と強文強。	良好	白色 白色	施土・斜位 施
26-10	25	明文土器	(8.2) /-/-	強位 1/4キの強位に強位と強位。内面は強位 1/4キを強位する。内面は強 位。	良好	角閃石・白 角閃石・白	施土・斜位 施
26-11	25	碧石茶碗	長 9.4・幅 4.7・厚 2.3 重 143g. 平打形。	-	-	粗面碧石茶碗	-
26-12	25	碧石茶碗	長 11.0・幅 6.4・厚 3.4 重 508g. 平打形。	-	-	粗面碧石茶碗	-
26-13	25	碧石茶碗	長 21.2・幅 19.4・厚 12.2 重 4700g.	-	-	粗面碧石茶碗	-
S003 出土遺物観察表							
測定No.	測定No.	地名	測量	測定	測量	測定	測量
28-1	26	明文土器	(12.6) /-/-	[1]内面は強位と強位。内面は強位と強位の強位。体強位 1/4キの強位。強位 と強位。	良好	石英・白色 石英	施土・斜位 施
28-2	26	明文土器	(11.9) /-/-< 15.9 > /-	[1]内面は強位と強位。内面は強位と強位。強位と強位。強位と強位。強位と強 位。	良好	角閃石 角閃石	施土・斜位 施

SK04出土遺物觀察表

編號 NO.	2006.02.29	地點	遺物	測量 (厘米) : 120 / 103 / 30	備註	外函上にもロゴロゴア。底面は磨き面。	11	測量 (厘米) : 120 / 103 / 30	備註	底面・側面	年号
29.1	205	遺物	灰陶	(1.8) /--/ < 0.6 >							
30.2	26	遺物	陶文上層	(3.0) /--/-	外面は茶褐色の磨き面を有する。内函は墨色土手方手。						
30.2	26	遺物	陶文上層	(3.3) /--/-	外面は茶褐色、内部を墨色。内函は斜方ナ。						

SK05出土遺物觀察表

編號 NO.	2006.02.	地點	遺物	測量 (厘米) : 120 / 103 / 30	備註	外函は茶褐色の磨き面を有する。内函は墨色土手方手。	11	測量 (厘米) : 120 / 103 / 30	備註	底面・側面	年号
29.1	26	遺物	陶文上層	(3.0) /--/-							
30.2	26	遺物	陶文上層	(3.3) /--/-	外面は茶褐色、内部を墨色。内函は斜方ナ。						
30.7	出土遺物	遺物	陶文上層	(4.9) /--/ < 0.6 >	張り出した底部が少しあらがむ。外函と内函は斜方ナ。	底面に磨き面 (2枚)	測量	底面	測量	底面	年号
33.1	26	遺物	陶文上層	(3.0) /--/ < 0.6 >	底面と内函は斜方ナ。	底面に磨き面 (2枚)	測量	底面	測量	底面	年号
33.2	26	遺物	陶文上層	(3.0) /--/ < 4.4 >	底面と内函は斜方ナ。	底面に磨き面 (2枚)	測量	底面	測量	底面	年号
33.2	26	遺物	陶文上層	< 14.7 > / < 7.0 > / < 8.8 >	表面は茶褐色の磨き面を有する。底面は墨色土手方手。	底面は墨色土手方手。	測量	底面	測量	底面	年号
33.3	26	遺物	陶文上層	< 14.7 > / < 7.0 > / < 8.8 >	表面は茶褐色の磨き面を有する。底面は墨色土手方手。	底面は墨色土手方手。	測量	底面	測量	底面	年号
33.4	26	遺物	陶文上層	(6.2) /--/-	底面は茶褐色の磨き面を有する。内函はLR文を有する。	底面は茶褐色の磨き面を有する。内函はLR文を有する。	測量	底面	測量	底面	年号
33.5	26	遺物	陶文上層	(4.9) /--/-	底面は茶褐色の磨き面を有する。外函は斜方ナ。	底面は茶褐色の磨き面を有する。外函は斜方ナ。	測量	底面	測量	底面	年号
33.6	26	遺物	陶文上層	(2.4) /--/-	口内部のみ墨色土手方手。	口内部のみ墨色土手方手。	測量	底面	測量	底面	年号
33.7	26	遺物	陶文上層	(5.7) /--/-	外函は～4.3cm位の底面に8字窓文。口内部は墨色ミガキ。	外函は～4.3cm位の底面に8字窓文。口内部は墨色ミガキ。	測量	底面	測量	底面	年号
33.8	26	遺物	陶文上層	(4.5) /--/-	底面は茶褐色の磨き面を有する。内函は斜方ナ。	底面は茶褐色の磨き面を有する。内函は斜方ナ。	測量	底面	測量	底面	年号
33.9	26	遺物	陶文上層	(5.1) /--/-	外面は茶褐色を施す。内函は斜方ナ。	外面は茶褐色を施す。内函は斜方ナ。	測量	底面	測量	底面	年号
33.10	26	遺物	陶文上層	長 1.6 / 幅 1.2 / 厚 0.3	重積 0.36。四脚底用。	—	—	黒墨石	—	元青石	年号

SK06出土遺物觀察表

編號 NO.	2006.02.	地點	遺物	測量 (厘米) : 120 / 103 / 30	備註	底面	測量	底面	測量	底面	年号
35.1	26	遺物	陶文上層	(57.7) /--/ < 44.6 > /--	底面が少し茶褐色の磨き面で底面は、口内部は外側から白色。口内部は墨色土手方手。	底面	測量	底面	測量	底面	年号
35.2	27	遺物	陶文上層	(9.4) /--/-	底面は茶褐色の磨き面を有する。内函は墨色土手方手。	底面	測量	底面	測量	底面	年号
35.3	27	遺物	陶文上層	長 11.2 / 幅 9.2 / 厚 8.2	重積 10.80g。不整形。	—	—	粗粒黑石空心管	—	元青石	年号

SK07出土遺物觀察表

編號 NO.	2006.02.	地點	遺物	測量 (厘米) : 120 / 103 / 30	備註	底面	測量	底面	測量	底面	年号
36.1	27	遺物	陶文上層	(16.7) /--/-	斜面は茶褐色の磨き面を有する。内函は墨色土手方手。	底面	測量	底面	測量	底面	年号
36.2	27	遺物	陶文上層	(3.4) /--/-	斜面は茶褐色の磨き面を有する。内函は墨色土手方手。	底面	測量	底面	測量	底面	年号
36.3	27	遺物	陶文上層	(6.0) /--/-	斜面は茶褐色の磨き面を有する。内函は墨色土手方手。	底面	測量	底面	測量	底面	年号

SK11 出土遺物觀察表

140

種別	学名	分類	固有名	产地	特徴	栽培	生长期	花期	花色	株高	葉形・葉質	根系
40-1	ツバキ Camellia japonica L.	ツバキ科	ツバキ	日本	樹形：枝葉茂密で、冬に紅葉する。花は紅色で、葉は緑色。	日向地帯	1年生	1月～3月	赤	1m	楕円形・光澤	根状茎
40-2	ツバキ Camellia japonica L.	ツバキ科	ツバキ	日本	樹形：枝葉茂密で、冬に紅葉する。花は紅色で、葉は緑色。	日向地帯	1年生	1月～3月	赤	1m	楕円形・光澤	根状茎
40-3	ツバキ Camellia japonica L.	ツバキ科	ツバキ	日本	樹形：枝葉茂密で、冬に紅葉する。花は紅色で、葉は緑色。	日向地帯	1年生	1月～3月	赤	1m	楕円形・光澤	根状茎
41-1	ツバキ Camellia japonica L.	ツバキ科	ツバキ	日本	樹形：枝葉茂密で、冬に紅葉する。花は紅色で、葉は緑色。	日向地帯	1年生	1月～3月	赤	1m	楕円形・光澤	根状茎
41-2	ツバキ Camellia japonica L.	ツバキ科	ツバキ	日本	樹形：枝葉茂密で、冬に紅葉する。花は紅色で、葉は緑色。	日向地帯	1年生	1月～3月	赤	1m	楕円形・光澤	根状茎
41-3	ツバキ Camellia japonica L.	ツバキ科	ツバキ	日本	樹形：枝葉茂密で、冬に紅葉する。花は紅色で、葉は緑色。	日向地帯	1年生	1月～3月	赤	1m	楕円形・光澤	根状茎
41-4	ツバキ Camellia japonica L.	ツバキ科	ツバキ	日本	樹形：枝葉茂密で、冬に紅葉する。花は紅色で、葉は緑色。	日向地帯	1年生	1月～3月	赤	1m	楕円形・光澤	根状茎
41-5	ツバキ Camellia japonica L.	ツバキ科	ツバキ	日本	樹形：枝葉茂密で、冬に紅葉する。花は紅色で、葉は緑色。	日向地帯	1年生	1月～3月	赤	1m	楕円形・光澤	根状茎
41-6	ツバキ Camellia japonica L.	ツバキ科	ツバキ	日本	樹形：枝葉茂密で、冬に紅葉する。花は紅色で、葉は緑色。	日向地帯	1年生	1月～3月	赤	1m	楕円形・光澤	根状茎
41-7	ツバキ Camellia japonica L.	ツバキ科	ツバキ	日本	樹形：枝葉茂密で、冬に紅葉する。花は紅色で、葉は緑色。	日向地帯	1年生	1月～3月	赤	1m	楕円形・光澤	根状茎

SK12 4+ 激物語

標本番号	採取場所	採取日	採取者	種名	形態	測定	測定部位	測定値(%)	備考
43-1	岡文上層 土質	[41.3] < 26.6 > /-		ナガハラヒメノコモリ (ナガハラヒメノコモリ)	葉状・球状	葉状	葉状・球状	葉状 (95% / 球状 5%)	葉状
43-2	岡文上層 土質	[11.4] 26.0 / [6.6] /- /-		ナガハラヒメノコモリ (ナガハラヒメノコモリ)	葉状・球状	葉状	葉状・球状	葉状 (95% / 球状 5%)	葉状
43-3	岡文上層 土質	[7.4] /- 10.6		ナガハラヒメノコモリ (ナガハラヒメノコモリ)	葉状・球状	葉状	葉状・球状	葉状 (95% / 球状 5%)	葉状
43-4	岡文上層 土質	[0.6] /- 8.9		ナガハラヒメノコモリ (ナガハラヒメノコモリ)	葉状・球状	葉状	葉状・球状	葉状 (95% / 球状 5%)	葉状
43-5	岡文上層 土質	[2.4] /- < 9.4 >		ナガハラヒメノコモリ (ナガハラヒメノコモリ)	葉状・球状	葉状	葉状・球状	葉状 (95% / 球状 5%)	葉状
43-6	岡文上層 土質	[2.8] /- /-		ナガハラヒメノコモリ (ナガハラヒメノコモリ)	葉状・球状	葉状	葉状・球状	葉状 (95% / 球状 5%)	葉状
43-7	岡文上層 土質	[3.3] /- /-		ナガハラヒメノコモリ (ナガハラヒメノコモリ)	葉状・球状	葉状	葉状・球状	葉状 (95% / 球状 5%)	葉状
43-8	岡文上層 土質	[4.6] /- /-		ナガハラヒメノコモリ (ナガハラヒメノコモリ)	葉状・球状	葉状	葉状・球状	葉状 (95% / 球状 5%)	葉状
43-9	岡文上層 土質	[7.8] /- /-		ナガハラヒメノコモリ (ナガハラヒメノコモリ)	葉状・球状	葉状	葉状・球状	葉状 (95% / 球状 5%)	葉状
43-10	岡文上層 土質	[11.10] 8.7 9.7		ナガハラヒメノコモリ (ナガハラヒメノコモリ)	葉状・球状	葉状	葉状・球状	葉状 (95% / 球状 5%)	葉状
44-11	岡文上層 土質	[11.10] 8.7 9.7		ナガハラヒメノコモリ (ナガハラヒメノコモリ)	葉状・球状	葉状	葉状・球状	葉状 (95% / 球状 5%)	葉状

SK13 出土陶物調査表		SK14 出土陶物調査表	
測定値	測定値	測定値	測定値
高さ (mm) / 幅さ (mm) / 厚さ (mm)	高さ (mm) / 幅さ (mm) / 厚さ (mm)	高さ (mm) / 幅さ (mm) / 厚さ (mm)	高さ (mm) / 幅さ (mm) / 厚さ (mm)
46.1 / 28 / 4mm	高又上層 (22.5) / <31.2> /—	46.2 / 28 / 4mm	高又上層 (3.9) / — /—
46.2 / 28 / 4mm	高又上層 (3.9) / — /—	46.2 / 28 / 4mm	高又上層 (3.9) / — /—

編番 NO.	測量 NO.	測量	測量	測量	測量	測量	測量
Ⅲ				Ⅳ			
53-17	29	岡文上層 砂鉆	(3.2) /—/—	外側は黒い底面に、内側は白い底面。内側ともにも黒いミガキ。底面は鏡面で保たれています。	良好	角閃石 / 白雲石 / 日 小色斑・白雲石・ 長石・鈍閃石	にぶい 鏡面 (底面仕返)
53-18	29	岡文上層 砂鉆	大約 5.0 / 白雲石 5.2 / 白雲石 6.0 外側は黒い底面に、内側は白い底面。外側は鏡面で保たれています。	良好	角閃石 / 白雲石 / 長石・鈍閃石	にぶい 鏡面 (底面仕返)	
53-19	29	岡文上層 砂鉆	大約 4.3 / 白雲石 4.1 / 白雲石 10 外側は黒い底面、内側は鏡面で保たれています。	良好	角閃石 / 長石	にぶい 鏡面 (底面仕返)	
54-20	29	岡文上層 砂鉆	大約 30.5 / 白雲石 12 長 40.7 / 幅 29.5 / 厚 12 重さ 1650g。	—	鈍閃石 (底面)	—	
54-21	29	岡文上層 砂鉆	長 6.0 / 幅 3.4 / 厚 1.1 重さ 20.5g。	—	菱鐵礦 (底面)	—	
54-21	29	岡文上層 砂鉆	長 6.0 / 幅 3.4 / 厚 1.1 重さ 20.5g。	—	菱鐵礦 (底面)	—	

5502 出土遺物調査表

編番 NO.	測量 NO.	測量	測量	測量	測量	測量	測量
Ⅲ				Ⅳ			
56.1	30	岡文上層 砂鉆	<5.2>/<4.1>/<8.5> (2.7) /—/ <12.8>	外側は黒い底面に、内側は白い底面。外側は鏡面で保たれています。 内側は鏡面で保たれています。	良好	角閃石 / 白雲石 / 長石・鈍閃石・ 白色斑	にぶい 鏡面 (底面仕返)
56.2	30	岡文上層 砂鉆	(4.4) /—/—	底面は黒い底面で、外側は白い底面であります。	良好	角閃石 / 白雲石 / 長石・鈍閃石・ 白色斑	にぶい 鏡面 (底面仕返)
56.3	30	岡文上層 砂鉆	(6.1) /—/—	底面は黒い底面で、外側は白い底面であります。	良好	角閃石 / 白雲石 / 長石・鈍閃石・ 白色斑	にぶい 鏡面 (底面仕返)
56.4	30	岡文上層 砂鉆	(7.8) /—/—	底面は黒い底面で、外側は白い底面であります。	良好	角閃石 / 白雲石 / 長石・鈍閃石・ 白色斑	にぶい 鏡面 (底面仕返)
56.5	30	岡文上層 砂鉆	(4.1) /—/—	底面は黒い底面で、外側は白い底面であります。	良好	角閃石 / 白雲石 / 長石・鈍閃石・ 白色斑	にぶい 鏡面 (底面仕返)
57.6	30	岡文上層 砂鉆	(4.4) /—/—	底面は黒い底面で、外側は白い底面であります。	良好	角閃石 / 白雲石 / 長石・鈍閃石・ 白色斑	にぶい 鏡面 (底面仕返)
57.7	30	岡文上層 砂鉆	(8.0) /—/—	底面は黒い底面で、外側は白い底面であります。	良好	角閃石 / 長石	にぶい 鏡面 (底面仕返)
57.8	30	岡文上層 砂鉆	(10.8) /—/—	底面は黒い底面で、外側は白い底面であります。	良好	角閃石 / 長石	にぶい 鏡面 (底面仕返)
57.9	30	岡文上層 砂鉆	—	底面は黒い底面で、外側は白い底面であります。	良好	角閃石 / 長石	にぶい 鏡面 (底面仕返)

5503 出土遺物調査表

編番 NO.	測量 NO.	測量	測量	測量	測量	測量	測量
Ⅲ				Ⅳ			
58.1	30	岡文上層 砂鉆	(6.4) /<26.0>/—	中間に黒い底面、口縁部は白い底面であります。外側は黒い底面であります。	良好	角閃石 / 小窓 白色斑・白雲石	にぶい 鏡面 (底面仕返)
58.2	30	岡文上層 砂鉆	(5.3) /—/—	外側は黒い底面で、内側は白い底面であります。外側は鏡面で保たれています。	良好	角閃石 / 白雲石 / 長石・鈍閃石	にぶい 鏡面 (底面仕返)
58.3	30	岡文上層 砂鉆	(3.7) /—/—	外側は黒い底面で、内側は白い底面であります。外側は鏡面で保たれています。	良好	角閃石 / 白雲石 / 長石・鈍閃石	にぶい 鏡面 (底面仕返)
58.4	30	岡文上層 砂鉆	(6.5) /—/—	外側は黒い底面で、内側は白い底面であります。	良好	角閃石 / 白雲石 / 長石・鈍閃石	にぶい 鏡面 (底面仕返)
58.5	30	岡文上層 砂鉆	(3.8) /—/—	外側は黒い底面で、内側は白い底面であります。	良好	角閃石 / 白雲石 / 長石・鈍閃石	にぶい 鏡面 (底面仕返)
59.6	30	岡文上層 砂鉆	(4.2) /—/—	外側は黒い底面で、内側は白い底面であります。	良好	角閃石 / 長石	にぶい 鏡面 (底面仕返)
59.7	30	岡文上層 砂鉆	(6.1) /—/—	外側は黒い底面で、内側は白い底面であります。	良好	角閃石 / 長石	にぶい 鏡面 (底面仕返)
59.8	30	岡文上層 砂鉆	(3.3) /—/—	外側は黒い底面で、内側は白い底面であります。	良好	角閃石 / 長石	にぶい 鏡面 (底面仕返)
59.9	30	岡文上層 砂鉆	(4.4) /—/—	外側は黒い底面で、内側は白い底面であります。	良好	角閃石 / 長石	にぶい 鏡面 (底面仕返)
59.10	30	岡文上層 砂鉆	(4.0) /—/—	外側は黒い底面で、内側は白い底面であります。	良好	角閃石 / 長石	にぶい 鏡面 (底面仕返)
59.11	30	岡文上層 砂鉆	長 3.4 / 幅 1.9 / 厚 0.4	重さ 1kg。底面は白い底面であります。	—	菱鐵礦	—

55504 出土遺物觀察表

2506 出土遺物観察表									
品名	出土地点	地層	層位	形態	大きさ	材質	表面状況	特徴	説明
長	幅	高	厚	幅	厚	幅	厚	幅	厚
円筒形石器	63.1	32	圓文・圓	(3.8) /—/-	円筒形石器。外周は楕円形。中央部とも側面とも丸み有る。	直好	石英・白雲石・白	にふくらむ部分に穴が開いており、内部は空洞である。	石英・白雲石・白
円筒形石器	63.2	32	圓文・圓	(4.0) /—/-	外周は楕円形で、内部は直角形。外周には縦溝を複数有する。	直好	石英・白雲石・白	にふくらむ部分に穴が開いており、内部は空洞である。	石英・白雲石・白
円筒形石器	65.1	32	圓文・圓	(6.3) /—/-	円筒形石器。外周は楕円形。内周は直角形。(2周・2屈・1屈)を残す。	直好	白色石・砂岩・白	にふくらむ部分に穴が開いており、内部は空洞である。	白色石・砂岩・白
円筒形石器	65.2	32	圓文・圓	(6.9) /—/-	円筒形石器。外周は楕円形。内周は直角形。(2周・2屈・1屈)を残す。	直好	白色石・砂岩・白	にふくらむ部分に穴が開いており、内部は空洞である。	白色石・砂岩・白
円筒形石器	65.3	32	圓文・圓	(3.4) /—/-	円筒形石器。外周は楕円形。内周は直角形。全体は斜め丸み有る。	直好	白色石・砂岩・白	にふくらむ部分に穴が開いており、内部は空洞である。	白色石・砂岩・白
円筒形石器	65.4	32	圓文・圓	(6.5) /—/-	円筒形石器。外周は楕円形で斜め丸み有る。内周は直角形。全体は斜め丸み有る。	直好	白色石・砂岩・白	にふくらむ部分に穴が開いており、内部は空洞である。	白色石・砂岩・白
円筒形石器	65.5	32	圓文・圓	(3.7) /—/-	円筒形石器。外周は楕円形で斜め丸み有る。内周は直角形。全体は斜め丸み有る。	直好	白色石・砂岩・白	にふくらむ部分に穴が開いており、内部は空洞である。	白色石・砂岩・白
円筒形石器	65.6	32	圓文・圓	(4.8) /—/-	円筒形石器。外周は楕円形で斜め丸み有る。内周は直角形。全体は斜め丸み有る。	直好	白色石・砂岩・白	にふくらむ部分に穴が開いており、内部は空洞である。	白色石・砂岩・白
円筒形石器	65.7	32	圓文・圓	(4.2) /—/-	円筒形石器。外周は楕円形で斜め丸み有る。内周は直角形。全体は斜め丸み有る。	直好	白色石・砂岩・白	にふくらむ部分に穴が開いており、内部は空洞である。	白色石・砂岩・白
円筒形石器	65.8	32	圓文・圓	(6.1) /—/-	円筒形石器。外周は楕円形で斜め丸み有る。内周は直角形。全体は斜め丸み有る。	直好	白色石・砂岩・白	にふくらむ部分に穴が開いており、内部は空洞である。	白色石・砂岩・白
円筒形石器	65.9	32	圓文・圓						

発見 NO.	出土地名	時期	分類	長さ・幅さ・高さ	重さ	状態	備考
65-10	磯石塚周	銅文上層	長12.9/幅8.8/厚5.2	重890g. 平打。		一	無文磨石(?)
65-11	磯石塚周	鐵行	長10.4/幅6.4/厚4.3	重425g. 平打。		一	無文磨石(?)

SS07 出土遺物測量表

発見 NO.	出土地名	時期	分類	長さ	幅さ	高さ	測定者・寸法	測定者・寸法	測定者・寸法	備考
67.1	磯石塚周	銅文上層	(19.6) / - / -	下部は切削して打ち上げ。体部で強度を保つため、側面は斜めに削り落とす。表面は上部内面、外側は上部外側の直角部である。表面は褐色で、裏面は白色である。表面は褐色で、裏面は白色である。表面は褐色で、裏面は白色である。	良好	白色系	端・斜面	端・斜面	端・斜面	SS・F・T
67.2	磯石塚周	銅文上層	(7.3) / <15.0> / -	表面は褐色で、裏面は白色である。表面は褐色で、裏面は白色である。表面は褐色で、裏面は白色である。表面は褐色で、裏面は白色である。	良好	白色系	端・斜面	端・斜面	端・斜面	SS・F・T・SS01
67.3	磯石塚周	銅文上層	(15.6) / - / -	表面は褐色で、裏面は白色である。表面は褐色で、裏面は白色である。表面は褐色で、裏面は白色である。表面は褐色で、裏面は白色である。	良好	白色系	端・斜面	端・斜面	端・斜面	F・T
67.4	磯石塚周	銅文上層	(3.3) / - / -	上部は切削して打ち上げ。表面は褐色で、裏面は白色である。表面は褐色で、裏面は白色である。表面は褐色で、裏面は白色である。表面は褐色で、裏面は白色である。	良好	白色系	端・斜面	端・斜面	端・斜面	F・T
67.5	磯石塚周	銅文上層	(4.5) / - / -	上部は切削して打ち上げ。表面は褐色で、裏面は白色である。表面は褐色で、裏面は白色である。表面は褐色で、裏面は白色である。表面は褐色で、裏面は白色である。	良好	白色系	端・斜面	端・斜面	端・斜面	F・T
67.6	磯石塚周	銅文上層	(5.6) / - / -	表面は褐色で、裏面は白色である。表面は褐色で、裏面は白色である。表面は褐色で、裏面は白色である。表面は褐色で、裏面は白色である。	良好	白色系	端・斜面	端・斜面	端・斜面	F・T
67.7	磯石塚周	銅文上層	(7.6) / - / -	表面は褐色で、裏面は白色である。表面は褐色で、裏面は白色である。表面は褐色で、裏面は白色である。表面は褐色で、裏面は白色である。	良好	白色系	端・斜面	端・斜面	端・斜面	F・T
67.8	磯石塚周	銅文上層	(5.7) / - / -	表面は褐色で、裏面は白色である。表面は褐色で、裏面は白色である。表面は褐色で、裏面は白色である。表面は褐色で、裏面は白色である。	良好	白色系	端・斜面	端・斜面	端・斜面	F・T
67.9	磯石塚周	銅文上層	(4.4) / - / -	表面は3-4段切削された形状。表面は褐色で、裏面は白色である。	良好	白色系	端・斜面	端・斜面	端・斜面	F・T
67.10	磯石塚周	銅文上層	(4.5) / - / -	表面は3段切削された形状。表面は褐色で、裏面は白色である。	良好	白色系	端・斜面	端・斜面	端・斜面	F・T
67.11	磯石塚周	銅文上層	(6.0) / - / -	表面は褐色で、裏面は白色である。表面は褐色で、裏面は白色である。表面は褐色で、裏面は白色である。	良好	白色系	端・斜面	端・斜面	端・斜面	F・T
67.12	磯石塚周	鐵行	長11.3/幅6.6/厚4.7	重700g. 鉄行。	-	無文磨石(?)	-	-	-	70%残存

SS08 出土遺物測量表

発見 NO.	出土地名	時期	分類	長さ	幅さ	高さ	測定者・寸法	測定者・寸法	測定者・寸法	備考
69.1	磯石塚周	銅文上層	(27.7) / <3.0> / -	体部は斜めに削り落とす。体部で強度を保つため、側面は斜めに削り落とす。表面は黒褐色で、裏面は白色である。表面は黒褐色で、裏面は白色である。表面は黒褐色で、裏面は白色である。	良好	黒褐色	端・斜面	端・斜面	端・斜面	SS09
69.2	磯石塚周	銅文上層	(6.4) / - / <10.2>	表面は褐色で、裏面は白色である。表面は褐色で、裏面は白色である。表面は褐色で、裏面は白色である。表面は褐色で、裏面は白色である。	良好	黑色系	端・斜面	端・斜面	端・斜面	SS09
70.3	磯石塚周	銅文上層	(5.9) / - / -	表面は褐色で、裏面は白色である。表面は褐色で、裏面は白色である。表面は褐色で、裏面は白色である。表面は褐色で、裏面は白色である。	良好	黑色系	端・斜面	端・斜面	端・斜面	SS09
70.4	磯石塚周	銅文上層	(4.1) / - / -	表面は褐色で、裏面は白色である。表面は褐色で、裏面は白色である。表面は褐色で、裏面は白色である。表面は褐色で、裏面は白色である。	良好	黑色系	端・斜面	端・斜面	端・斜面	SS09
70.5	磯石塚周	上縁	(5.4) / - / -	表面は褐色で、裏面は白色である。表面は褐色で、裏面は白色である。表面は褐色で、裏面は白色である。表面は褐色で、裏面は白色である。	良好	黑色系	端・斜面	端・斜面	端・斜面	SS09
70.6	磯石塚周	上縁	長4.3/幅2.9/厚1.4	重19.2g. 左右をい子孫に傳り込G.	-	無文磨石(?)	-	-	-	完存
70.7	磯石塚周	鐵行	長13.7/幅9.0/厚5.0	重97g. 平打。	-	無文磨石(?)	-	-	-	完存
70.8	磯石塚周	鐵行	長8.2/幅4.6/厚3.0	重155g. 平打。	-	無文磨石(?)	-	-	-	完存

SS09 出土遺物測量表

発見 NO.	出土地名	時期	分類	長さ	幅さ	高さ	測定者・寸法	測定者・寸法	測定者・寸法	備考
72.1	磯石塚周	銅文上層	(30.4) / 43.6 / -	完全な形ではないが、全体的に丸みがある。表面は黒褐色で、裏面は白色である。表面は黒褐色で、裏面は白色である。表面は黒褐色で、裏面は白色である。	良好	黒褐色	端・斜面	端・斜面	端・斜面	SS・SS02・SS03・SS10・F

〔横底付左端〕

〔横底付右端〕

〔横底付左端〕

〔横底付右端〕

〔横底付左端〕

〔横底付右端〕

〔横底付左端〕

〔横底付右端〕

〔横底付左端〕

〔横底付右端〕

〔横底付左端〕

〔横底付右端〕

55510出土遺物觀察表									
編號	地點	層位	性質	形狀	尺寸	圖說	說明	出土・埋藏環境	年份
55510-33	周文上層 陶器	周文上層	陶器	直筒	16.8 / 26.0 / 8.1	直筒形有肩部的小耳，直口，腹圓而微鼓，底盤較淺。外側有三條斜溝，內側有三條斜溝，並有文字，外側有三條斜溝，內側有三條斜溝，並有文字，外側有三條斜溝，內側有三條斜溝，並有文字。	良好	側面・白色胎 底面・白色胎	1940-1950年 E中-下-0.6m Y-1.5m
72.2	33	周文上層 陶器	(6.1) / - / -	口微張，直筒形，外側面也有橫紋三道。	7.6 / - / -	口微張，直筒形，外側面也有橫紋三道。	良好	側面・白色胎 底面・白色胎	1940-1950年 E中-下-0.6m Y-1.5m
72.3	33	周文上層 陶器	(6.4) / - / -	口微張，直筒形，外側面也有橫紋三道。	7.6 / - / -	口微張，直筒形，外側面也有橫紋三道。	良好	側面・白色胎 底面・白色胎	1940-1950年 E中-下-0.6m Y-1.5m
72.4	33	周文上層 陶器	(6.4) / - / -	口微張，直筒形，外側面也有橫紋三道。	7.6 / - / -	口微張，直筒形，外側面也有橫紋三道。	良好	側面・白色胎 底面・白色胎	1940-1950年 E中-下-0.6m Y-1.5m
72.5	33	周文上層 陶器	(6.4) / - / -	口微張，直筒形，外側面也有橫紋三道。	7.6 / - / -	口微張，直筒形，外側面也有橫紋三道。	良好	側面・白色胎 底面・白色胎	1940-1950年 E中-下-0.6m Y-1.5m
72.6	33	周文上層 陶器	(6.4) / - / -	口微張，直筒形，外側面也有橫紋三道。	7.6 / - / -	口微張，直筒形，外側面也有橫紋三道。	良好	側面・白色胎 底面・白色胎	1940-1950年 E中-下-0.6m Y-1.5m
72.7	33	周文上層 陶器	(4.3) / - / -	口微張，直筒形，外側面也有橫紋三道。	7.6 / - / -	口微張，直筒形，外側面也有橫紋三道。	良好	側面・白色胎 底面・白色胎	1940-1950年 E中-下-0.6m Y-1.5m
72.8	33	周文上層 陶器	(4.2) / - / -	口微張，直筒形，外側面也有橫紋三道。	7.6 / - / -	口微張，直筒形，外側面也有橫紋三道。	良好	側面・白色胎 底面・白色胎	1940-1950年 E中-下-0.6m Y-1.5m
72.9	33	周文上層 陶器	(5.0) / - / -	口微張，直筒形，外側面也有橫紋三道。	7.6 / - / -	口微張，直筒形，外側面也有橫紋三道。	良好	側面・白色胎 底面・白色胎	1940-1950年 E中-下-0.6m Y-1.5m
72.10	33	周文上層 陶器	長4.0 幢3.4 / 7.04	直筒形，外側面也有橫紋三道。	7.1 / - / -	直筒形，外側面也有橫紋三道。	-	未定	1940-1950年 E中-下-0.6m Y-1.5m
72.11	34	周文上層 陶器	長1.1 幢3.2 / 7.04	直筒形，外側面也有橫紋三道。	7.1 / - / -	直筒形，外側面也有橫紋三道。	-	未定	1940-1950年 E中-下-0.6m Y-1.5m
73.12	34	周文上層 陶器	長9.4 幢4.2 / 7.9/3.2	直筒形，外側面也有橫紋三道。	7.6 / - / -	直筒形，外側面也有橫紋三道。	-	未定	1940-1950年 E中-下-0.6m Y-1.5m
73.13	34	周文上層 陶器	長11.0 幢10.3 / 7.6/6.6	直筒形，外側面也有橫紋三道。	7.6 / - / -	直筒形，外側面也有橫紋三道。	-	未定	1940-1950年 E中-下-0.6m Y-1.5m
75.1	34	周文上層 陶器	(9.0) / < 16.0 / - / -	直筒形，外側面也有橫紋三道。	7.6 / - / -	直筒形，外側面也有橫紋三道。	良好	側面・白色胎 底面・白色胎	1940-1950年 E中-下-0.6m Y-1.5m
75.2	34	周文上層 陶器	(8.4) / - / -	外側面也有橫紋三道。	7.6 / - / -	外側面也有橫紋三道。	良好	側面・白色胎 底面・白色胎	1940-1950年 E中-下-0.6m Y-1.5m
75.3	34	周文上層 陶器	(6.5) / - / < 20.0 >	外側面也有橫紋三道。	7.6 / - / -	外側面也有橫紋三道。	良好	側面・白色胎 底面・白色胎	1940-1950年 E中-下-0.6m Y-1.5m
75.4	34	周文上層 陶器	(16.7) / - / -	外側面也有橫紋三道。	7.6 / - / -	外側面也有橫紋三道。	良好	側面・白色胎 底面・白色胎	1940-1950年 E中-下-0.6m Y-1.5m
75.5	34	周文上層 陶器	(7.0) / - / -	外側面也有橫紋三道。	7.6 / - / -	外側面也有橫紋三道。	良好	側面・白色胎 底面・白色胎	1940-1950年 E中-下-0.6m Y-1.5m
75.6	34	周文上層 陶器	(4.5) / - / -	口微張，直筒形，外側面也有橫紋三道。	7.6 / - / -	口微張，直筒形，外側面也有橫紋三道。	良好	側面・白色胎 底面・白色胎	1940-1950年 E中-下-0.6m Y-1.5m
75.7	34	周文上層 陶器	(3.5) / - / -	口微張，直筒形，外側面也有橫紋三道。	7.6 / - / -	口微張，直筒形，外側面也有橫紋三道。	良好	側面・白色胎 底面・白色胎	1940-1950年 E中-下-0.6m Y-1.5m
75.8	34	周文上層 陶器	(3.6) / - / -	口微張，直筒形，外側面也有橫紋三道。	7.6 / - / -	口微張，直筒形，外側面也有橫紋三道。	良好	側面・白色胎 底面・白色胎	1940-1950年 E中-下-0.6m Y-1.5m
75.9	34	周文上層 陶器	(3.8) / - / -	口微張，直筒形，外側面也有橫紋三道。	7.6 / - / -	口微張，直筒形，外側面也有橫紋三道。	良好	側面・白色胎 底面・白色胎	1940-1950年 E中-下-0.6m Y-1.5m
75.10	34	周文上層 陶器	(3.6) / - / -	口微張，直筒形，外側面也有橫紋三道。	7.6 / - / -	口微張，直筒形，外側面也有橫紋三道。	良好	側面・白色胎 底面・白色胎	1940-1950年 E中-下-0.6m Y-1.5m
75.11	34	周文上層 陶器	(6.3) / - / -	口微張，直筒形，外側面也有橫紋三道。	7.6 / - / -	口微張，直筒形，外側面也有橫紋三道。	良好	側面・白色胎 底面・白色胎	1940-1950年 E中-下-0.6m Y-1.5m
75.12	34	周文上層 陶器	(7.3) / - / -	口微張，直筒形，外側面也有橫紋三道。	7.6 / - / -	口微張，直筒形，外側面也有橫紋三道。	良好	側面・白色胎 底面・白色胎	1940-1950年 E中-下-0.6m Y-1.5m
75.13	34	周文上層 陶器	長11.9 幢5.9 / 7.9/5.3	直筒形，外側面也有橫紋三道。	7.6 / - / -	直筒形，外側面也有橫紋三道。	-	未定	1940-1950年 E中-下-0.6m Y-1.5m
75.14	34	周文上層 陶器	長10.3 / 7.6 / 6.3	直筒形，外側面也有橫紋三道。	7.6 / - / -	直筒形，外側面也有橫紋三道。	-	未定	1940-1950年 E中-下-0.6m Y-1.5m
76.15	34	周文上層 陶器	長22.0 幢19.8 / 7.6/16.6	直筒形，外側面也有橫紋三道。	7.6 / - / -	直筒形，外側面也有橫紋三道。	-	未定	1940-1950年 E中-下-0.6m Y-1.5m

柿子遺跡出土遺物整理表

発見 NO.	発見日	部類	測量	測量	測量	測量	測量	測量	測量	測量	測量
77.1	2006.4.2	滑石	長 9.1 / 幅 5.4 / 厚 3.0	重 250g. 平面,	—	柱脚石(必須)	—	—	—	2.5m 地上	Y フト
77.2	35	滑石	長 13.7 / 幅 10.5 / 厚 3.3	重 1000g. 平面,	—	石質四脚石	—	—	—	3.5m 地上	Y フト
77.3	35	滑石	長 12.3 / 幅 9.8 / 厚 3.4	重 950g. 平面	—	柱脚石(必須)	—	—	—	4.5m 地上	H フト
78.1	35	陶文土器	(5.4) /—/—	—	—	角柱石(白色)	—	—	—	—	—
78.2	35	陶文土器	(6.0) /—/—	—	—	柱脚石(白色)	—	—	—	—	—
78.3	35	陶文土器	(12.0) /—/—	—	—	柱脚石(白色)	—	—	—	—	—
78.4	35	陶文土器	(23.0) /—/—	—	—	柱脚石(白色)	—	—	—	—	—
78.5	35	陶文土器	(9.3) /—/—	—	—	柱脚石(白色)	—	—	—	—	—
78.6	35	陶文土器	(47.8) / 43.0 /—	—	—	柱脚石(白色)	—	—	—	—	—
78.7	35	陶文土器	(19.1) / < 34.0 /—	—	—	柱脚石(白色)	—	—	—	—	—
79.8	35	陶文土器	(14.8) / < 36.0 /—	—	—	柱脚石(白色)	—	—	—	—	—
79.9	35	陶文土器	(17.2) /~ 9.6	—	—	柱脚石(白色)	—	—	—	—	—
79.10	35	陶文土器	(9.2) /—/—	—	—	柱脚石(白色)	—	—	—	—	—
79.11	35	陶文土器	(7.2) /—/—	—	—	柱脚石(白色)	—	—	—	—	—
79.12	36	陶文土器	< 24.8 /> / < 16.4 /—	—	—	柱脚石(白色)	—	—	—	—	—
79.13	36	陶文土器	(25.3) / 20.4 /—	—	—	柱脚石(白色)	—	—	—	—	—
79.14	36	陶文土器	(15.3) / < 37.8 /—	—	—	柱脚石(白色)	—	—	—	—	—
79.15	36	陶文土器	(13.0) / 16.0 /—	—	—	柱脚石(白色)	—	—	—	—	—
80.16	36	陶文土器	(26.0) / < 35.0 /—	—	—	柱脚石(白色)	—	—	—	—	—
80.17	36	陶文土器	(10.5) / < 18.0 /—	—	—	柱脚石(白色)	—	—	—	—	—
80.18	36	陶文土器	(0.6) / < 17.0 /—	—	—	柱脚石(白色)	—	—	—	—	—
80.19	36	陶文土器	(0.5) / < 36.0 /—	—	—	柱脚石(白色)	—	—	—	—	—
80.20	36	陶文土器	(29.7) / < 36.0 /—	—	—	柱脚石(白色)	—	—	—	—	—
80.21	36	陶文土器	(21.6) / < 33.4 /—	—	—	柱脚石(白色)	—	—	—	—	—
81.32	36	陶文土器	(7.2) /—/—	—	—	柱脚石(白色)	—	—	—	—	—

被験者番号	性別	年齢	学年	筆記用具	被験者属性		筆記時間	筆記内容	筆記方法	筆記用紙	筆記用具	筆記時間	筆記内容	筆記方法	筆記用紙			
					性別	年齢												
89-103	41	41	中2上級	8888	男	17歳	18:58~19:15	筆記	手書き	被験者属性	被験者属性	89-103	41	41	中2上級	8888		
89-104	41	41	中2上級	8888	男	17(1) /<--	89-104	41	41	中2上級	8888	男	17(1) /<--	89-104	41	41	中2上級	8888
89-105	41	41	中2上級	8888	男	17(4) /<--	89-105	41	41	中2上級	8888	男	17(4) /<--	89-105	41	41	中2上級	8888
89-106	41	41	中2上級	8888	男	17(5) /<--	89-106	41	41	中2上級	8888	男	17(5) /<--	89-106	41	41	中2上級	8888
89-107	41	41	中2上級	8888	男	17(6) /<--	89-107	41	41	中2上級	8888	男	17(6) /<--	89-107	41	41	中2上級	8888
89-108	41	41	中2上級	8888	男	17(10) /<--	89-108	41	41	中2上級	8888	男	17(10) /<--	89-108	41	41	中2上級	8888
89-109	42	42	中2上級	8888	男	17(14) /<--	89-109	42	42	中2上級	8888	男	17(14) /<--	89-109	42	42	中2上級	8888
89-110	42	42	中2上級	8888	男	17(18) /<--	89-110	42	42	中2上級	8888	男	17(18) /<--	89-110	42	42	中2上級	8888
89-111	42	42	中2上級	8888	男	17(25) /<--	89-111	42	42	中2上級	8888	男	17(25) /<--	89-111	42	42	中2上級	8888
89-112	42	42	中2上級	8888	男	17(31) /<--	89-112	42	42	中2上級	8888	男	17(31) /<--	89-112	42	42	中2上級	8888
90-113	42	42	中2上級	8888	男	17(34) /<--	90-113	42	42	中2上級	8888	男	17(34) /<--	90-113	42	42	中2上級	8888
90-114	42	42	中2上級	8888	男	17(38) /<--	90-114	42	42	中2上級	8888	男	17(38) /<--	90-114	42	42	中2上級	8888
90-115	42	42	中2上級	8888	男	17(82) /<--	90-115	42	42	中2上級	8888	男	17(82) /<--	90-115	42	42	中2上級	8888
90-116	42	42	中2上級	8888	男	17(37) /<--	90-116	42	42	中2上級	8888	男	17(37) /<--	90-116	42	42	中2上級	8888
90-117	42	42	中2上級	8888	男	17(42) /<--	90-117	42	42	中2上級	8888	男	17(42) /<--	90-117	42	42	中2上級	8888
90-118	42	42	中2上級	8888	男	17(50) /<--	90-118	42	42	中2上級	8888	男	17(50) /<--	90-118	42	42	中2上級	8888
90-119	42	42	中2上級	8888	男	17(41) /<--	90-119	42	42	中2上級	8888	男	17(41) /<--	90-119	42	42	中2上級	8888
90-120	42	42	中2上級	8888	男	17(31) /<--	90-120	42	42	中2上級	8888	男	17(31) /<--	90-120	42	42	中2上級	8888
90-121	42	42	中2上級	8888	男	17(78) /<--	90-121	42	42	中2上級	8888	男	17(78) /<--	90-121	42	42	中2上級	8888
90-122	42	42	中2上級	8888	男	17(24) /<--	90-122	42	42	中2上級	8888	男	17(24) /<--	90-122	42	42	中2上級	8888
90-123	42	42	中2上級	8888	男	17(65) /<--	90-123	42	42	中2上級	8888	男	17(65) /<--	90-123	42	42	中2上級	8888
90-124	42	42	中2上級	8888	男	17(43) /<--	90-124	42	42	中2上級	8888	男	17(43) /<--	90-124	42	42	中2上級	8888
90-125	42	42	中2上級	8888	男	17(38) /<--	90-125	42	42	中2上級	8888	男	17(38) /<--	90-125	42	42	中2上級	8888
90-126	42	42	中2上級	8888	男	17(87) /<--	90-126	42	42	中2上級	8888	男	17(87) /<--	90-126	42	42	中2上級	8888
90-127	42	42	中2上級	8888	男	17(5) /<--15.0 /<--	90-127	42	42	中2上級	8888	男	17(5) /<--15.0 /<--	90-127	42	42	中2上級	8888
90-128	42	42	中2上級	8888	男	17(11.0) /<--18.0 /<--	90-128	42	42	中2上級	8888	男	17(11.0) /<--18.0 /<--	90-128	42	42	中2上級	8888
90-129	42	42	中2上級	8888	男	17(10.1) /<--	90-129	42	42	中2上級	8888	男	17(10.1) /<--	90-129	42	42	中2上級	8888
90-130	42	42	中2上級	8888	男	17(14.5) /<--	90-130	42	42	中2上級	8888	男	17(14.5) /<--	90-130	42	42	中2上級	8888
91-131	42	42	中2上級	8888	男	17(6.2) /<--	91-131	42	42	中2上級	8888	男	17(6.2) /<--	91-131	42	42	中2上級	8888

番号	測定ID	測定日	測定場所	測定方法	測定結果	測定者
900-16	SD20-162	調査上層	透視	透視	透視・内面透視・外観	透視・内面透視・外観
91-132	42	調査上層	透視	(4.1) /</>/-	成反角縫、口唇部が斜めである。 内面は複数の歯の見込み。内面は内側に凹形となる。	良好 内面透視・外観
91-133	42	調査上層	透視	(2.2) /</>/-	[内面]右側、口唇部が斜めである。 [外面]左側、口唇部が斜めである。その上に複数の歯の見込みがある。	良好 内面透視・外観
91-134	42	調査上層	透視	(4.5) /</>/-	[内面]左側、外面は複数の歯の見込みである。 [外面]左側、口唇部が斜めである。その上に複数の歯の見込みがある。	良好 内面透視・外観
91-135	42	調査上層	透視	(5.3) /</>/-	内面は複数の歯の見込みである。 外面は複数の歯の見込みである。その下には複数の歯の見込みがある。	良好 内面透視・外観
91-136	42	調査上層	透視	(4.4) /</>/-	内面は複数の歯の見込みである。 外面は複数の歯の見込みである。その下には複数の歯の見込みがある。	良好 内面透視・外観
91-137	42	調査上層	透視	(5.0) /</>/-	内面は複数の歯の見込みである。 外面は複数の歯の見込みである。その下には複数の歯の見込みがある。	良好 内面透視・外観
91-138	42	調査上層	透視	(4.2) /</>/-	外面部は複数の歯の見込みである。 内面は複数の歯の見込みである。	良好 内面透視・外観
91-139	43	調査上層	透視	</>32.8 </>9.4></>39.0></>9.4>	内面は複数の歯の見込みである。 外面は複数の歯の見込みである。その下には複数の歯の見込みがある。	良好 内面透視・外観
92-140	43	調査上層	透視	(23.5) /</>30.6></>9.4>	内面は複数の歯の見込みである。 外面は複数の歯の見込みである。その下には複数の歯の見込みがある。	良好 内面透視・外観
92-141	43	調査上層	透視	(49.3) /</>40.6></>9.4>	内面は複数の歯の見込みである。 外面は複数の歯の見込みである。その下には複数の歯の見込みがある。	良好 内面透視・外観
93-142	43	調査上層	透視	(38.8) /</>35.2></>9.4>	内面は複数の歯の見込みである。 外面は複数の歯の見込みである。その下には複数の歯の見込みがある。	良好 内面透視・外観
93-143	43	調査上層	透視	(12.5) /</>/-	内面は複数の歯の見込みである。 外面は複数の歯の見込みである。	良好 内面透視・外観
93-144	44	調査上層	透視	(18.6) /</>/-	内面は複数の歯の見込みである。	良好 内面透視・外観
93-145	44	調査上層	透視	(5.1) /</>8.0	内面はLR側が複数の歯の見込みである。 外面は複数の歯の見込みである。その下には複数の歯の見込みがある。	良好 内面透視・外観
93-146	44	調査上層	透視	(4.0) /</>5.8	内面は複数の歯の見込みである。 外面は複数の歯の見込みである。その下には複数の歯の見込みがある。	良好 内面透視・外観
93-147	44	調査上層	透視	(1.3) /</>4.2>	内面は複数の歯の見込みである。 外面は複数の歯の見込みである。その下には複数の歯の見込みがある。	良好 内面透視・外観
93-148	44	調査上層	透視	(1.7) /</>-6.2	内面は複数の歯の見込みである。 外面は複数の歯の見込みである。その下には複数の歯の見込みがある。	良好 内面透視・外観
94-149	44	調査上層	透視	(5.6) /</>-9.0>	内面は複数の歯の見込みである。 外面は複数の歯の見込みである。その下には複数の歯の見込みがある。	良好 内面透視・外観
94-150	44	調査上層	透視	(0.6) /</>-8.2>	内面は複数の歯の見込みである。 外面は複数の歯の見込みである。その下には複数の歯の見込みがある。	良好 内面透視・外観
94-151	44	調査上層	透視	(2.4) /</>-7.0>	内面は複数の歯の見込みである。 外面は複数の歯の見込みである。その下には複数の歯の見込みがある。	良好 内面透視・外観
94-152	44	調査上層	透視	(1.3) /</>/-	内面は複数の歯の見込みである。 外面は複数の歯の見込みである。その下には複数の歯の見込みがある。	良好 内面透視・外観
94-153	44	外生上層	透視	(14.0) /</>-10.3></>/-	内面は複数の歯の見込みである。 外面は複数の歯の見込みである。その下には複数の歯の見込みがある。	良好 内面透視・外観
94-154	44	外生上層	透視	(5.2) /</>/-	内面は複数の歯の見込みである。 外面は複数の歯の見込みである。その下には複数の歯の見込みがある。	良好 内面透視・外観
94-155	44	外生上層	透視	(5.5) /</>/-	内面は複数の歯の見込みである。 外面は複数の歯の見込みである。その下には複数の歯の見込みがある。	良好 内面透視・外観
94-156	44	外生上層	透視	(2.1) /</>-4.8>	内面は複数の歯の見込みである。 外面は複数の歯の見込みである。その下には複数の歯の見込みがある。	良好 内面透視・外観
94-157	44	外生上層	透視	(2.9) /</>-8.4>	内面は複数の歯の見込みである。 外面は複数の歯の見込みである。その下には複数の歯の見込みがある。	良好 内面透視・外観
94-158	44	外生上層	透視	(1.5) /</>-3.0>	内面は複数の歯の見込みである。 外面は複数の歯の見込みである。その下には複数の歯の見込みがある。	良好 内面透視・外観
94-159	44	外生上層	透視	(2.7) /</>/-	内面は複数の歯の見込みである。 外面は複数の歯の見込みである。その下には複数の歯の見込みがある。	良好 内面透視・外観

番号	地名	層位	特徴	測定値 （%）							
900-162-320-162	南原	底層	褐色 （5.3）	1.9	1.9	1.9	1.9	1.9	1.9	1.9	1.9
94-160-44	南原	中層	褐色 （6.3）	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4
94-161-44	南原	上層	褐色 （3.1）	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4
99-162-44	南原	中層	褐色 （2.5）	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4
94-163-44	南原	上層	褐色 （2.0）	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4
94-164-44	南原	中層	褐色 （1.4）	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4
94-165-44	南原	下層	褐色 （3.3）	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4
94-166-44	南原	上層	褐色 （2.5）	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4
94-167-44	南原	中層	褐色 （3.0）	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4
94-168-44	南原	下層	褐色 （3.3）	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4
95-169-44	南原	上層	褐色 （3.4）	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4
95-170-44	南原	中層	褐色 （3.2）	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4
95-171-44	南原	下層	褐色 （1.6）	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4
95-172-44	南原	上層	褐色 （1.8）	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4
95-173-44	南原	中層	褐色 （2.8）	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4
95-174-44	南原	下層	褐色 （2.0）	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4
95-175-44	南原	上層	褐色 （2.3）	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4
95-176-44	南原	中層	褐色 （2.2）	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4
95-177-44	南原	下層	褐色 （5.9）	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4
95-178-44	南原	上層	褐色 （3.6）	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4
95-179-44	南原	中層	褐色 （2.7）	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4
95-180-45	南原	下層	褐色 （1.8）	< 1.0	> / -	> / -	> / -	> / -	> / -	> / -	> / -
95-181-45	南原	上層	褐色 （1.4）	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4
95-182-45	南原	中層	褐色 （1.5）	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4
95-183-45	南原	下層	褐色 （1.4）	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4
95-184-45	南原	上層	褐色 （2.9）	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4
95-185-45	金城尾山	上層	褐色 （2.5）	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4
95-186-45	金城尾山	中層	褐色 （1.4）	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4
96-187-45	金城尾山	下層	褐色 （1.5）	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4
96-188-45	金城尾山	上層	褐色 （1.4）	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4
96-189-45	金城尾山	中層	褐色 （1.7）	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4

番号	地名	標高	岩相	特徴	測定	測定	測定	測定
					地質・堆積物	地質・堆積物	地質・堆積物	地質・堆積物
9601-N	山頂	3200.14	新田 石頭	新田 石頭	長1.6-幅1.4-厚0.3 新田 石頭	長1.6-幅0.5g-巴基-θ。	-	黒曜石
96-190	45	新田 石頭	新田 石頭	長1.2-幅0.9-厚0.2 新田 石頭	新田 石頭	-	黒曜石	-
96-191	45	新田 石頭	新田 石頭	長1.4-幅1.0-厚0.3 新田 石頭	新田 石頭	-	黒曜石	-
96-192	45	新田 石頭	新田 石頭	長1.4-幅1.0-厚0.3 新田 石頭	新田 石頭	-	黒曜石	-
96-193	45	新田 石頭	新田 石頭	長1.4-幅1.3-厚0.3 新田 石頭	新田 石頭	-	新田 石頭	-
96-194	45	新田 石頭	新田 石頭	長1.5-幅1.2-厚0.4 新田 石頭	新田 石頭	-	新田 石頭	-
96-195	45	新田 石頭	新田 石頭	長2.1-幅1.3-厚0.5 新田 石頭	新田 石頭	-	新田 石頭	-
96-196	45	新田 石頭	新田 石頭	長1.5-幅0.9-厚0.3 新田 石頭	新田 石頭	-	黒曜石	-
96-197	45	新田 石頭	新田 石頭	長(2.2)-幅1.6-厚0.4 新田 石頭	新田 石頭	-	新田 石頭	-
96-198	45	新田 石頭	新田 石頭	長(1.7)-幅1.2-厚0.4 新田 石頭	新田 石頭	-	赤玉玉	-
96-199	45	新田 石頭	新田 石頭	長(1.7)-幅1.1-厚0.3 新田 石頭	新田 石頭	-	黒曜石	-
96-200	45	新田 石頭	新田 石頭	長2.2-幅1.0-厚0.4 新田 石頭	新田 石頭	-	新田 石頭	-
96-201	45	新田 石頭	新田 石頭	長2.5-幅1.9-厚0.4 新田 石頭	新田 石頭	-	新田 石頭	-
96-202	45	新田 石頭	新田 石頭	長1.7-幅1.0-厚0.4 新田 石頭	新田 石頭	-	黒曜石	-
96-203	45	新田 石頭	新田 石頭	長1.9-幅1.6-厚0.4 新田 石頭	新田 石頭	-	黒曜石	-
96-204	45	新田 石頭	新田 石頭	長(1.9)-幅1.5-厚0.3 新田 石頭	新田 石頭	-	新田 石頭	-
96-205	45	新田 石頭	新田 石頭	長1.6-幅1.3-厚0.4 新田 石頭	新田 石頭	-	黒曜石	-
96-206	45	新田 石頭	新田 石頭	長(1.4)-幅0.8-厚0.3 新田 石頭	新田 石頭	-	新田 石頭	-
96-207	45	新田 石頭	新田 石頭	長(1.8)-幅0.8-厚0.3 新田 石頭	新田 石頭	-	新田 石頭	-
96-208	45	新田 石頭	新田 石頭	長1.9-幅1.2-厚0.4 新田 石頭	新田 石頭	-	黒曜石	-
96-209	45	新田 石頭	新田 石頭	長2.1-幅1.5-厚0.4 新田 石頭	新田 石頭	-	黒曜石	-
97-210	45	新田 石頭	新田 石頭	長2.9-幅2.0-厚0.5 新田 石頭	新田 石頭	-	新田 石頭	-
97-211	45	新田 石頭	新田 石頭	長(3.2)-幅1.5-厚0.6 新田 石頭	新田 石頭	-	黒曜石	-
97-212	45	新田 石頭	新田 石頭	長3.3-幅2.2-厚0.3 新田 石頭	新田 石頭	-	(新田 石頭)	-
97-213	46	新田 石頭	新田 石頭	長(1.5)-幅1.8-厚0.3 新田 石頭	新田 石頭	-	黒曜石	-
97-214	46	新田 石頭	新田 石頭	長(1.5)-幅1.2-厚0.3 新田 石頭	新田 石頭	-	新田 石頭	-
97-215	46	新田 石頭	新田 石頭	長2.9-幅1.8-厚0.4 新田 石頭	新田 石頭	-	新田 石頭	-
97-216	46	新田 石頭	新田 石頭	長(1.7)-幅1.3-厚0.3 新田 石頭	新田 石頭	-	新田 石頭	-
97-217	46	新田 石頭	新田 石頭	長(1.1)-幅1.2-厚0.3 新田 石頭	新田 石頭	-	新田 石頭	-
97-218	46	新田 石頭	新田 石頭	長(1.3)-幅(2.7)-厚0.5 新田 石頭	新田 石頭	-	黒曜石	-
97-219	46	新田 石頭	新田 石頭	長(1.9)-幅1.2-厚0.4 新田 石頭	新田 石頭	-	黒曜石	-

				地質	地質・堆積物	地質	地質・堆積物	
3601-1C	3230-142	3636	砂岩	無	-	無	-	無
97-220	46	砂岩	砂岩	長1.4-幅1.0-厚0.2 長形。	無	0.2-長形。	-	無
97-221	46	砂岩	砂岩	長2.0-幅1.5-厚0.5 無	無	1.0g-人頭大、四角形、四面、表面は凹凸不平、表面が若干不平。表面は中央に浅い谷を有す。	-	無
97-222	46	砂岩	砂岩	長1.0-幅1.0-厚0.3 無	無	0.3g-平底、-R。 長12.0-幅1.0-厚0.5 無	-	無
97-223	46	砂岩	砂岩	長3.4-幅1.5-厚0.6 無	無	0.6g-扇形、-底面不規則。	-	無
97-224	46	砂岩	砂岩	長4.0-幅1.3-厚0.7 無	無	0.7g-底面不規則。	-	無
97-225	46	砂岩	砂岩	長1.2-幅0.8-厚0.4 無	無	0.4g-底面は圓形から少しがたげで凹形、X形。 長(2.4)-幅1.0-厚0.5 無	-	無
97-226	46	砂岩	砂岩	長(2.4)-幅0.8-厚0.4 無	無	0.4g-底面は圓形から少しがたげで凹形、X形。 長(2.4)-幅1.0-厚0.5 無	-	無
97-227	46	砂岩	砂岩	長2.5-幅1.7-厚0.7 無	無	1.7g-表面は凹凸不平で、表面は中央に浅い谷を有す。	-	無
97-228	46	砂岩	砂岩	長5.0-幅9.4-厚7.3 子の刃状断面が施されている。表面は斜めで、傾斜には斜面が施されている。	無	40.6g-無	-	無
98-229	46	砂岩	砂岩	長2.1-幅1.3-厚0.7 無	無	1.3g-表面は斜めで、傾斜には斜面が施されている。	-	無
98-230	46	砂岩	砂岩	長2.7-幅1.1-厚0.5 無	無	1.1g-表面は斜めで、傾斜には斜面が施されている。	-	無
98-231	46	砂岩	砂岩	長2.6-幅1.5-厚0.3 無	無	1.5g-表面は斜めで、傾斜には斜面が施されている。	-	無
98-232	46	砂岩	砂岩	長3.2-幅2.0-厚0.4 無	無	2.0g-表面は斜めで、傾斜には斜面が施されている。	-	無
98-233	46	砂岩	砂岩	長7.1-幅8.0-厚2.2 無	無	11.6g-表面は斜めで、傾斜には斜面が施されている。	-	無
98-234	46	砂岩	砂岩	長7.3-幅6.4-厚2.0 無	無	7.3g-表面は斜めで、傾斜には斜面が施されている。	-	無
98-235	46	砂岩	砂岩	長8.1-幅5.9-厚1.5 無	無	5.9g-表面は斜めで、傾斜には斜面が施されている。	-	無
98-236	46	砂岩	砂岩	長5.0-幅6.2-厚1.3 無	無	6.2g-表面は斜めで、傾斜には斜面が施されている。	-	無
98-237	46	砂岩	砂岩	長4.7-幅7.2-厚1.4 無	無	7.2g-表面は斜めで、傾斜には斜面が施されている。	-	無
98-238	46	砂岩	砂岩	長3.0-幅3.4-厚1.9 無	無	3.4g-表面は斜めで、傾斜には斜面が施されている。	-	無
99-229	47	砂岩	砂岩	長2.7-幅6.1-厚2.1 無	無	21.8g-表面は斜めで、傾斜には斜面が施されている。	-	無
99-240	47	砂岩	砂岩	長3.9-幅4.0-厚2.5 無	無	32.0g-表面は斜めで、傾斜には斜面が施されている。	-	無
99-241	47	砂岩	砂岩	長5.0-幅6.9-厚5.4 無	無	21.0g-表面は斜めで、傾斜には斜面が施されている。	-	無
99-242	47	砂岩	砂岩	長(10.1)-幅6.0-厚9.1 無	無	17.2g-表面は斜めで、傾斜には斜面が施されている。	-	無
99-243	47	砂岩	砂岩	長(6.1)-幅(4.7)-厚9.1 無	無	7.5g-表面は斜めで、傾斜には斜面が施されている。	-	無
99-244	47	打痕	打痕	長(18.1)-幅(4.7)-厚9.1 無	無	4.7g-表面は斜めで、傾斜には斜面が施されている。	-	無
99-245	47	打痕	打痕	長(6.1)-幅(6.0)-厚9.1 無	無	5.0g-表面は斜めで、傾斜には斜面が施されている。	-	無
99-246	47	打痕	打痕	長(6.1)-幅(5.0)-厚9.1 無	無	5.0g-表面は斜めで、傾斜には斜面が施されている。	-	無
99-247	47	打痕	打痕	長10.2-幅4.6-厚1.8 無	無	8.9g-表面は斜めで、傾斜には斜面が施されている。	-	無
99-248	47	打痕	打痕	長13.3-幅6.2-厚2.3 無	無	17.5g-表面は斜めで、傾斜には斜面が施されている。	-	無
						4.6g-表面は斜めで、傾斜には斜面が施されている。	-	無

番号	名前	種類	形態	基準	測定	測定	測定	測定	測定	測定	測定
3001-102	320-82	308	打割石	長 110cm、太さ 1.5cm、幅 1cm。表面に一筋の溝がある。表面は滑らかで、左側面には溝がある。右側面はやや凹凸がある。	—	黒色目付	—	実行	—	—	ドット
100-249	47	打割石	打割石	長 10.6 / 幅 6.7 / 厚 2.2	重量 1.9kg。表面は滑らかで、左側面には溝がある。右側面はやや凹凸がある。	—	黒色目付	—	実行	—	—
100-250	47	打割石	打割石	長 9.7 / 幅 5.5 / 厚 2.0	表面は滑らかで、左側面には溝がある。右側面はやや凹凸がある。	—	黒色目付	—	実行	—	—
100-251	47	打割石	打割石	長 10.0 / 幅 6.6 / 厚 1.8	表面は滑らかで、左側面には溝がある。右側面はやや凹凸がある。	—	黒色目付	—	実行	—	—
100-252	47	打割石	打割石	長 16.2 / 幅 4.5 / 厚 2.0	表面は滑らかで、左側面には溝がある。右側面はやや凹凸がある。	—	黒色目付	—	実行	—	—
100-253	47	打割石	打割石	長 11.9 / 幅 7.0 / 厚 2.5	表面は滑らかで、左側面には溝がある。右側面はやや凹凸がある。	—	黒色目付	—	実行	—	—
100-254	47	打割石	打割石	長 3.7 / 幅 10.8 / 厚 1.5	表面は滑らかで、左側面には溝がある。右側面はやや凹凸がある。	—	黒色目付	—	実行	—	—
100-255	47	打割石	打割石	長 4.6 / 幅 6.6 / 厚 1.6	表面は滑らかで、左側面には溝がある。右側面はやや凹凸がある。	—	黒色目付	—	実行	—	—
100-260	47	打割石	打割石	長 7.7 / 幅 3.9 / 厚 2.0	表面は滑らかで、左側面には溝がある。右側面はやや凹凸がある。	—	黒色目付	—	実行	—	—
100-257	47	打割石	打割石	長 16.3 / 幅 6.3 / 厚 3.1	表面は滑らかで、左側面には溝がある。右側面はやや凹凸がある。	—	黒色目付	—	実行	—	—
101-258	48	打割石	打割石	長 8.0 / 幅 3.8 / 厚 1.5	表面は滑らかで、左側面には溝がある。右側面はやや凹凸がある。	—	黒色目付	—	実行	—	—
101-259	48	打割石	打割石	長 6.3 / 幅 3.4 / 厚 1.5	表面は滑らかで、左側面には溝がある。右側面はやや凹凸がある。	—	黒色目付	—	実行	—	—
101-260	48	打割石	打割石	長 7.2 / 幅 2.2 / 厚 0.9	表面は滑らかで、左側面には溝がある。右側面はやや凹凸がある。	—	黒色目付	—	実行	—	—
101-261	48	打割石	打割石	長 5.1 / 幅 2.7 / 厚 1.2	表面は滑らかで、左側面には溝がある。右側面はやや凹凸がある。	—	黒色目付	—	実行	—	—
101-262	48	打割石	打割石	長 11.4 / 幅 5.8 / 厚 4.3	表面は滑らかで、左側面には溝がある。右側面はやや凹凸がある。	—	ひんが	—	実行	—	—
101-263	48	打割石	打割石	長 13.8 / 幅 5.3 / 厚 4.5	表面は滑らかで、左側面には溝がある。右側面はやや凹凸がある。	—	黒色目付	—	実行	—	—
101-264	48	打割石	打割石	長 5.4 / 幅 5.4 / 厚 3.5	表面は滑らかで、左側面には溝がある。右側面はやや凹凸がある。	—	黒色目付	—	実行	—	—
101-265	48	打割石	打割石	長 10.1 / 幅 5.8 / 厚 4.3	表面は滑らかで、左側面には溝がある。右側面はやや凹凸がある。	—	黒色目付	—	実行	—	—
101-266	48	打割石	打割石	長 10.7 / 幅 4.8 / 厚 4.1	表面は滑らかで、左側面には溝がある。右側面はやや凹凸がある。	—	黒色目付	—	実行	—	—
102-267	48	打割石	打割石	長 11.7 / 幅 6.8 / 厚 3.7	表面は滑らかで、左側面には溝がある。右側面はやや凹凸がある。	—	黒色目付	—	実行	—	—
102-268	48	打割石	打割石	長 11.5 / 幅 6.9 / 厚 5.2	表面は滑らかで、左側面には溝がある。右側面はやや凹凸がある。	—	黒色目付	—	実行	—	—
102-269	48	打割石	打割石	長 11.0 / 幅 9.8 / 厚 5.6	表面は滑らかで、左側面には溝がある。右側面はやや凹凸がある。	—	黒色目付	—	実行	—	—
102-270	48	打割石	打割石	長 12.0 / 幅 20.1 / 厚 6.1	表面は滑らかで、左側面には溝がある。右側面はやや凹凸がある。	—	黒色目付	—	実行	—	—
102-271	49	打割石	打割石	長 27.4 / 幅 3.2 / 厚 8.5	表面は滑らかで、左側面には溝がある。右側面はやや凹凸がある。	—	黒色目付	—	実行	—	—
103-272	49	打割石	打割石	長 28.6 / 幅 15.8 / 厚 14.5	表面は滑らかで、左側面には溝がある。右側面はやや凹凸がある。	—	黒色目付	—	実行	—	—
103-273	49	打割石	打割石	長 22.1 / 幅 18.9 / 厚 15.0	表面は滑らかで、左側面には溝がある。右側面はやや凹凸がある。	—	黒色目付	—	実行	—	—
103-274	49	打割石	打割石	長 18.4 / 幅 10.9 / 厚 9.7	表面は滑らかで、左側面には溝がある。右側面はやや凹凸がある。	—	黒色目付	—	実行	—	—
104-275	50	多孔石	多孔石	長 16.2 / 幅 13.7 / 厚 9.9	表面は滑らかで、左側面には溝がある。右側面はやや凹凸がある。	—	黒色目付	—	実行	—	—
104-276	49	多孔石	多孔石	長 10.5 / 幅 6.5 / 厚 6.0	表面は滑らかで、左側面には溝がある。右側面はやや凹凸がある。	—	黒色目付	—	実行	—	—
104-277	49	多孔石	多孔石	長 13.9 / 幅 12.7 / 厚 7.0	表面は滑らかで、左側面には溝がある。右側面はやや凹凸がある。	—	黒色目付	—	実行	—	—

番号	名前	岩種	性質	測定値	測定者	測定日	測定場所	地質
100-102	320-162	滑石	滑石	無	無	無	無	無
104-276	49	多孔石	長 15.0 幅 12.1 / 厚 8.4	重量 1820g.	-	新井理石弘之	-	完好
104-279	50	滑石	長 16.4 幅 14.0 / 厚 11.7	重量 2990g.	-	新井理石弘之	-	完好
105-280	50	滑石	長 17.7 幅 16.3 / 厚 9.2	重量 2820g.	-	新井理石弘之	-	完好
105-281	50	滑石	長 16.0 幅 13.4 / 厚 10.4	重量 2920g.	-	新井理石弘之	-	完好
105-282	50	滑石	長 10.7 幅 9.2 厚 2.4g.	重量 1460g.	新井は、主に中空穴隙や空洞から割れ目から漏れる。刃面は欠損している。刃面は欠損している。刃面は欠損している。	新井理石弘之	-	完好
105-283	50	滑石	長 15.4 幅 6.6 厚 3.5	重量 4720g.	新井は、主に中空穴隙や空洞から割れ目から漏れる。刃面は欠損している。刃面は欠損している。刃面は欠損している。	新井理石弘之	-	完好
105-284	50	滑石	長 16.0 幅 12.0 厚 0.9	重量 1098g.	新井は、主に中空穴隙や空洞から割れ目から漏れる。刃面は欠損している。刃面は欠損している。刃面は欠損している。	新井理石弘之	-	完好
105-285	50	滑石	長 7.6 幅 3.8 厚 1.7	重量 636g.	新井は、主に中空穴隙や空洞から割れ目から漏れる。刃面は欠損している。	新井理石弘之	-	完好
106-286	51	その他の滑石	長 4.8 幅 5.0 厚 3.2	重量 13.5g.	新井は、主に中空穴隙や空洞から割れ目から漏れる。刃面は欠損している。	新井理石弘之	-	完好
106-287	51	滑石	長 6.0 幅 4.1 厚 4.0	重量 4.3g.	新井は、主に中空穴隙や空洞から割れ目から漏れる。刃面は欠損している。	新井理石弘之	-	完好
106-288	51	滑石	長 115.9 幅 5.6 厚 1.1	重量 1098g.	-	新井理石弘之	-	完好
106-289	51	その他の滑石	長 6.8 幅 5.2 厚 1.7	重量 43.1g.	新井は、主に中空穴隙や空洞から割れ目から漏れる。刃面は欠損している。	新井理石弘之	-	完好
106-290	51	その他の滑石	長 8.6 幅 5.2 厚 1.1	重量 86.4g.	新井は、主に中空穴隙や空洞から割れ目から漏れる。刃面は欠損している。	新井理石弘之	-	完好
106-291	51	その他の滑石	長 6.4 幅 3.0 厚 0.7	重量 12.4g.	-	新井理石弘之	-	完好
106-292	51	その他の滑石	長 1.6 幅 1.6 厚 0.9	重量 3.4g.	-	新井理石弘之	-	完好
106-293	51	その他の滑石	長 1.2 幅 0.8 厚 0.3	重量 0.4g.	-	新井理石弘之	-	完好

写 真 図 版



1. 調査区遠景①（東から）



1. 調査区遠景②（南から）



1. 調査区全景（真上南から）



2. 調査区北側近景（東から）



3. 調査区南側近景（南東から）



4. 調査区西側近景（南から）



5. 調査区北東隅近景（南西から）



1. SI01 (南西から)



2. SI01 南ベルト (南東から)



3. SI01 北ベルト (南東から)



4. SI01 西ベルト (南西から)



5. SI01 東ベルト (南西から)



1. SI01 堀り方 (南西から)



2. SI01 堀り方南ベルト (南東から)



3. SI01 堀り方北ベルト (南東から)



4. SI01 堀り方西ベルト (南西から)



5. SI01 堀り方東ベルト (南西から)



1. SI01 炉跡 (南東から)



2. SI01 炉跡半截状況 (南東から)



3. SI01 遺物出土状況<第13図8> (南から)



4. SI01 遺物出土状況<第13図1・第15図17> (南から)



5. SI01 遺物出土状況<第15図11>



6. SI01 遺物出土状況<第17図46>



7. SI02 (南から)



8. SI02 炉跡 (南から)



1. SI02 炉跡半截状況（南から）



2. SI02 炉跡掘り方（南から）



3. SK01 (東から)



4. SK02 ① (南から)



5. SK02 ② (東から)



6. SK02 半截状況（南から）



7. SK03 (南から)



8. SK03 棟出状況（南から）



1. SK03 半截状況（南から）



2. SK03 埋甕<第 28 図 1>埋設状況（南西から）



3. SK04・SK06（東から）



4. SK04（北から）



5. SK05（東から）



6. SK05 半截状況（東から）



7. SK06（北から）



8. SK07（南から）



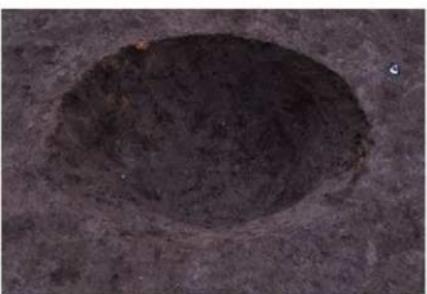
1. SK07 半截状況（東から）



2. SK08 (南から)



3. SK08 半截状況（東から）



4. SK09 (南東から)



5. SK09 半截状況（南東から）



6. SK10 (東から)



7. SK10 半截状況（東から）



8. SK11 (南東から)



1. SK11 半截状況（南東から）



2. SK12 (東から)



3. SK12 半截状況（東から）



4. SK13 (南東から)



5. SK13 半截状況（南東から）



6. SK14 (南東から)



7. SK14 半截状況（南東から）



8. SK15 (南から)



1. SK15 埋甕<第 50 図 1>埋設状況①（南から）



2. SK15 埋甕<第 50 図 1>埋設状況②（南から）



3. SK15 半截状況（南から）



4. SS01（南から）



1. SS01 検出状況（南東から）



2. SS01 上部遺構半截状況（東から）



3. SS01 下部遺構検出状況（南から）



4. SS01 下部遺構東西断ち割り状況（南から）



5. SS01 下部遺構南側断ち割り状況（東から）



6. SS01 下部遺構北側断ち割り状況（東から）



7. SS01 下部遺構（南から）



8. SS01 下部遺構半截状況（東から）



1. SS01 遺物出土状況<第 53 図 1>



2. SS02 (南から)



3. SS02 断ち割り状況（西から）



4. SS03 (南から)



5. SS03 断ち割り状況（南から）



6. SS04 (北から)



7. SS04 断ち割り状況（北から）



8. SS04 遺物出土状況<第 62 図 10>



1. SS02 ~ SS10 (南から)



2. SS02 ~ SS10 検出状況 (南から)



1. SS05 (南から)



2. SS05 断ち割り状況 (南から)



3. SS06 (南東から)



4. SS06 断ち割り状況 (南西から)



5. SS06 遺物検出状況<第 65 図 1>



6. SS07 (南西から)



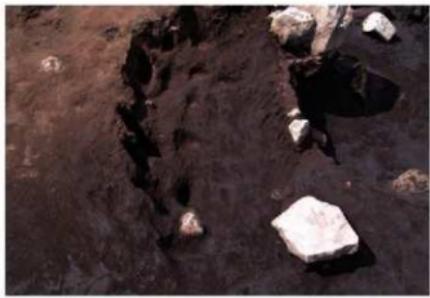
7. SS07 断ち割り状況 (西から)



8. SS08 (南西から)



1. SS08～SS10 棟出状況（南から）



2. SS09（南から）



3. SS10（南から）



4. SS10 遺物出土状況<全体>（南から）



5. SS10 遺物出土状況<第 28 図 2 >



1. 谷部セクション（南から）



2. 調査区西侧集石（南東から）



3. 調査区南側遺物出土状況（南から）



4. 遺構外遺物出土状況<第 78 図 6 >



5. 遺構外遺物出土状況<第 87 図 83 >



6. 遺構外遺物出土状況<第 85 図 70 他>



7. 遺構外遺物出土状況<第 85 図 64 >



8. 遺構外遺物出土状況<第 93 図 143 >



1. 遺構外遺物出土状況<第 86 図 78 >



2. 遺構外遺物出土状況<第 86 図 78 他>



3. 遺構外遺物出土状況<第 102 図 270 >



4. 遺構外遺物出土状況<第 102 図 271 >



5. SS01 遺物出土状況<第 54 図 21 >



6. 遺構外遺物出土状況<第 106 図 288 >



7. 遺構外遺物出土状況<第 105 図 282 >



8. 遺構外遺物出土状況<第 105 図 283 >



1. 遺構外遺物出土状況<第 106 図 290 >



2. 遺構外遺物出土状況<第 106 図 291 >



3. 遺構外遺物出土状況<第 106 図 292 >



4. 調査風景①（東から）



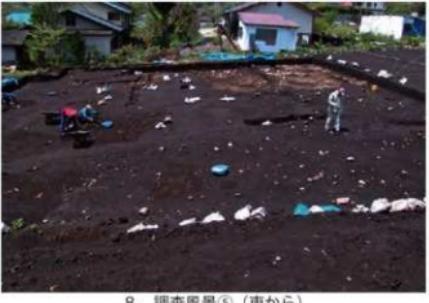
5. 調査風景②（南東から）



6. 調査風景③（東から）



7. 調査風景④（東から）



8. 調査風景⑤（東から）

SI01



刻み目



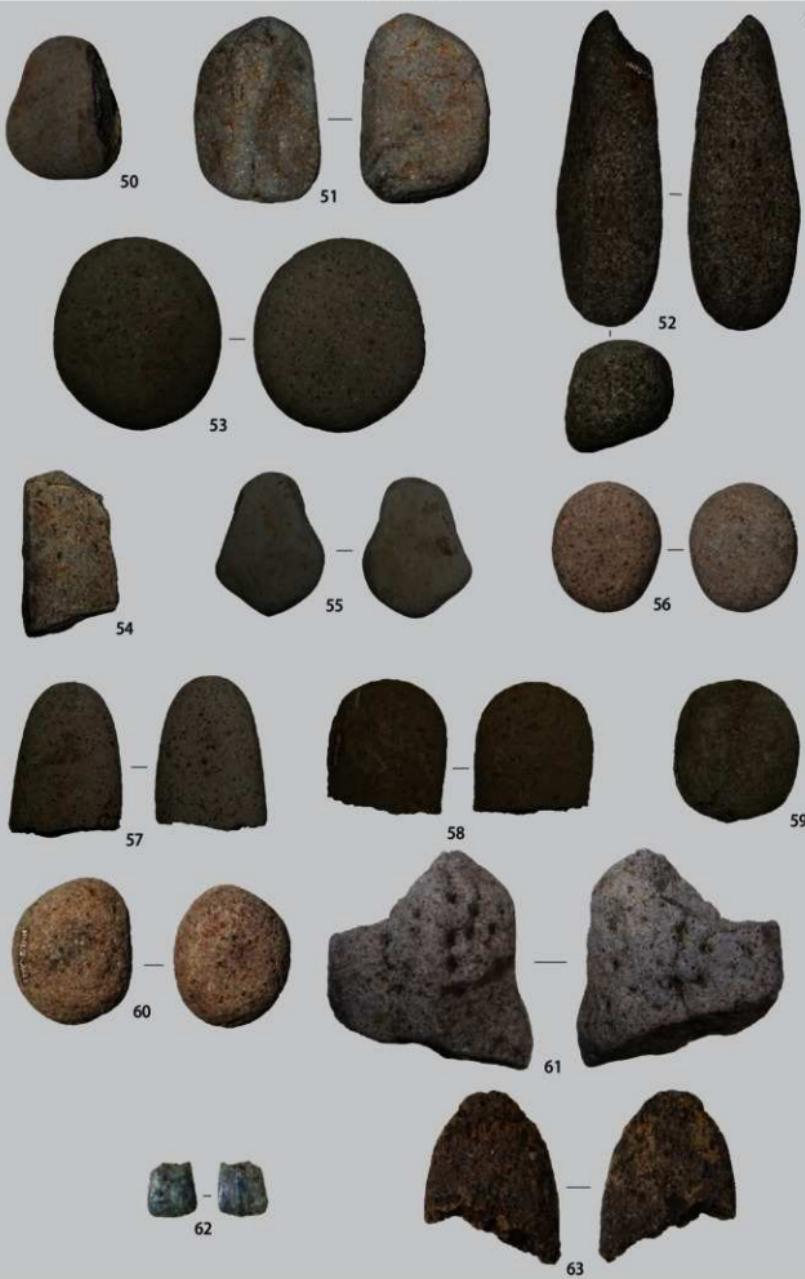
刻み目





SI01





SI01



64

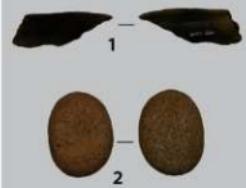


65





SK01



SK02



SK03



1



2

SK04



1



2

SK07



1



2

SK05



1



2



3



7



5



6



4



8



9



10

SK08



1

SK08



2

3

SK09



1



2

SK10



1



2

SK11



1



2



3



5



4



6



7

SK12

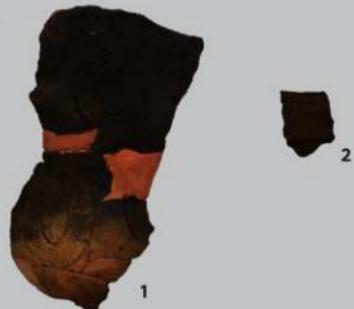


1

SK12



SK13

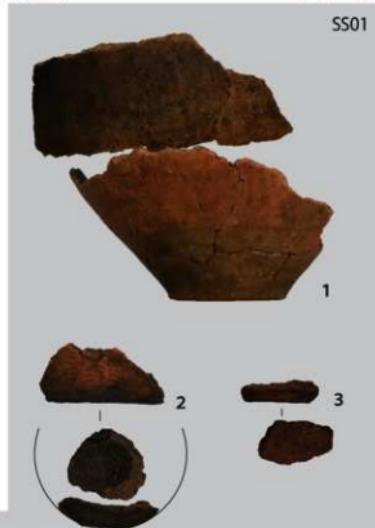


SK14



SK15





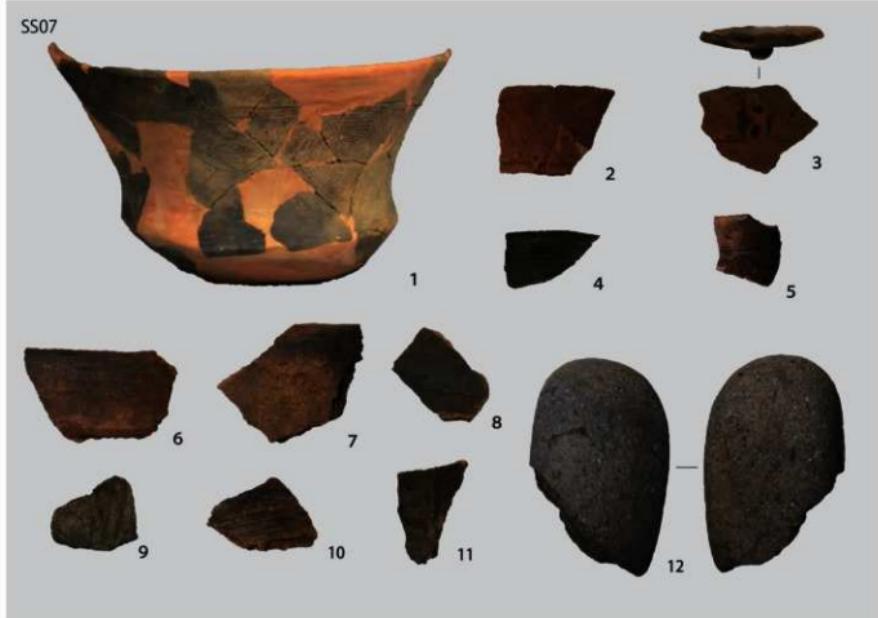
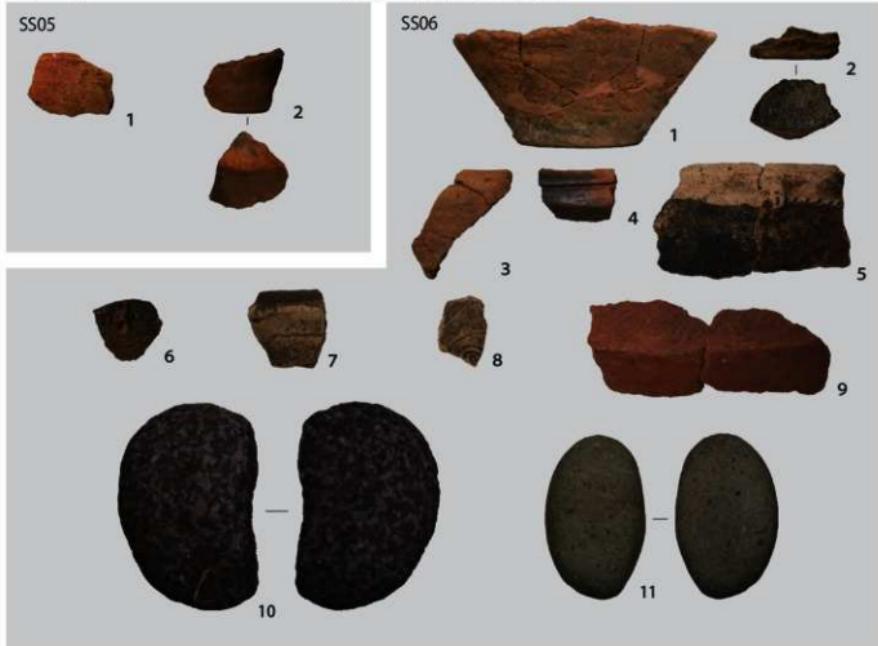
SS02



SS03







SS08



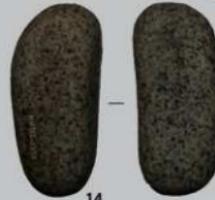
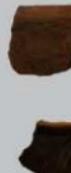
SS09



SS09



SS10



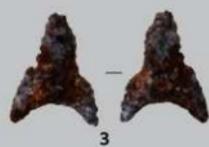
2号焼土



3号焼土



4号焼土



遺構外



遺構外



12



13



14



15



16



17



18



19



20



21



23



22



24



25



26



27



28



29



30



31



32



33



34



35



36



37



38



39

遺構外





62



63



65



64



66



67



68



69



70



71



72



73



74



75



76



77



78

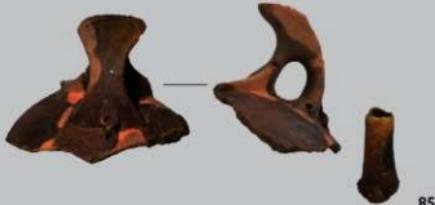


80



81

遺構外



遺構外



90



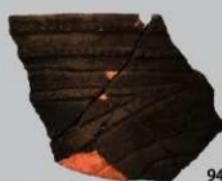
91



92



93



94



95



96



97



98



99



100



101



102



103



104



105



106



107



108

遺構外





139



140



141



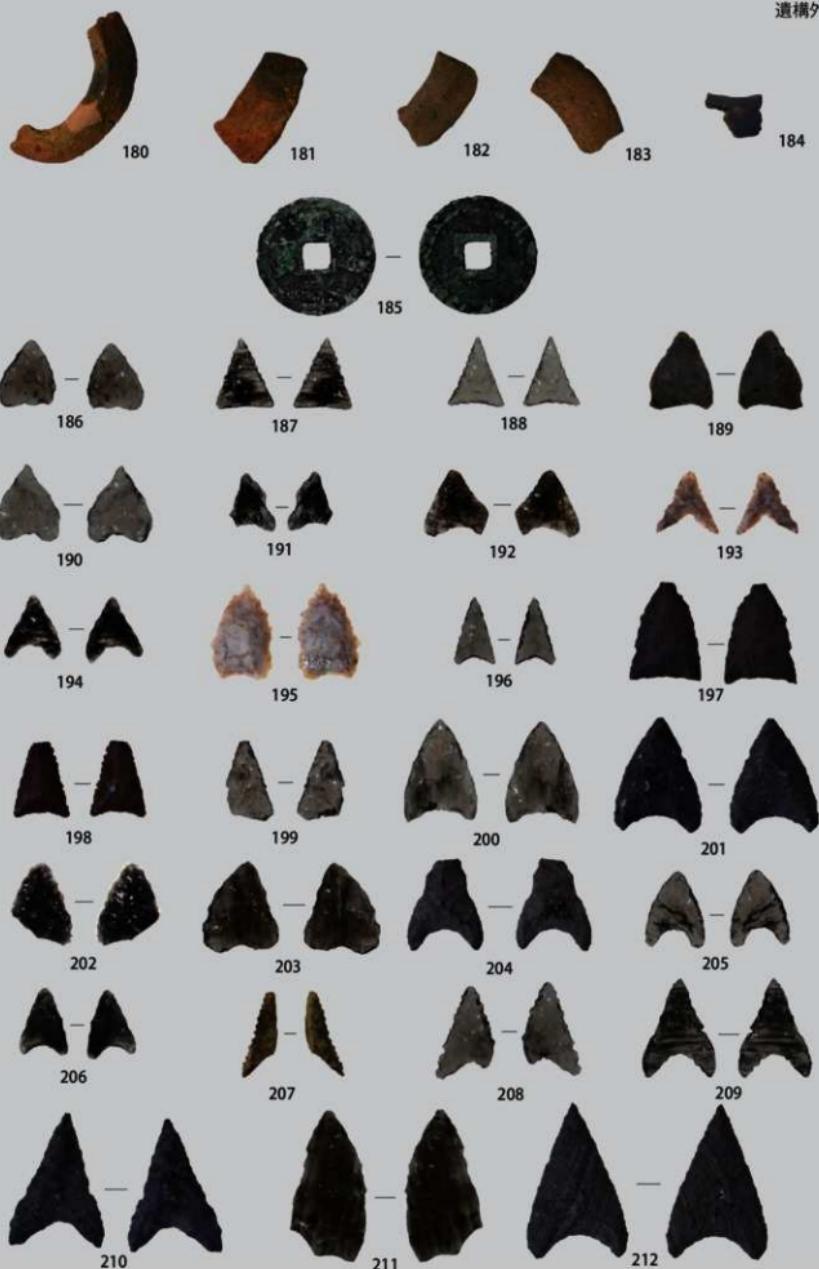
142



143

遺構外





遺構外



遺構外



239



240



241



242



243



244



245



246



247



248



249



250



251



252



253



254



255

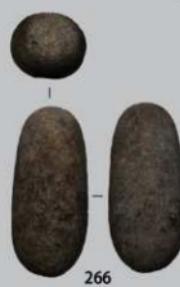


256



257

遺構外





271



272



274



273



277



276



278



遺構外



275



279



280



281



282



283



284



285



286



287



288



289



290



291



292



293

報 告 書 抄 錄

林中原 I 遺跡 XII

—個人住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

令和5年3月7日 印刷

令和5年3月10日 発行

発行 群馬県吾妻郡長野原町教育委員会

〒377-1392 群馬県吾妻郡長野原町大字長野原1340-1

TEL 0279(82)4517 FAX 0279(82)3115

印刷 朝日印刷工業株式会社